

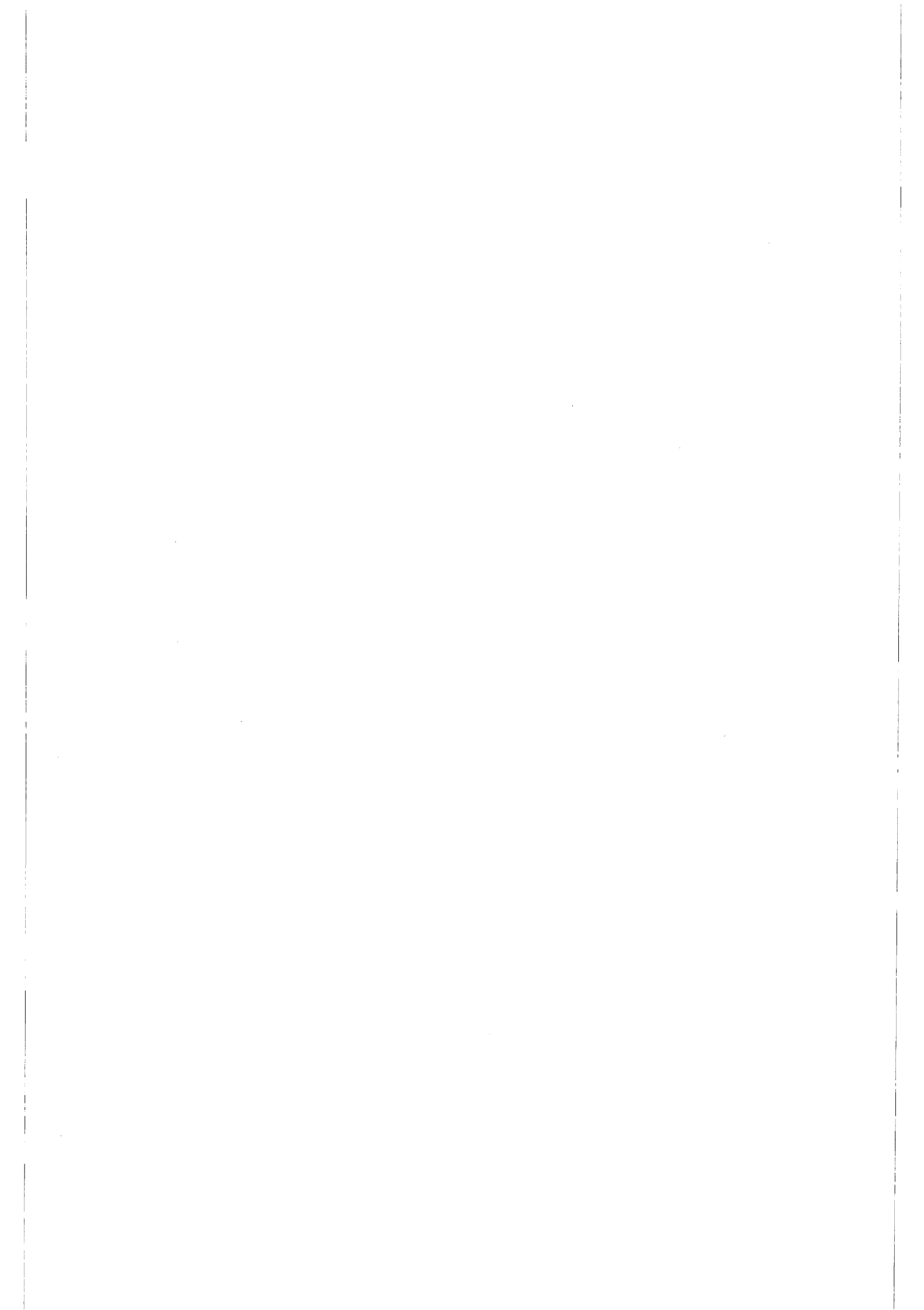
恵庭市

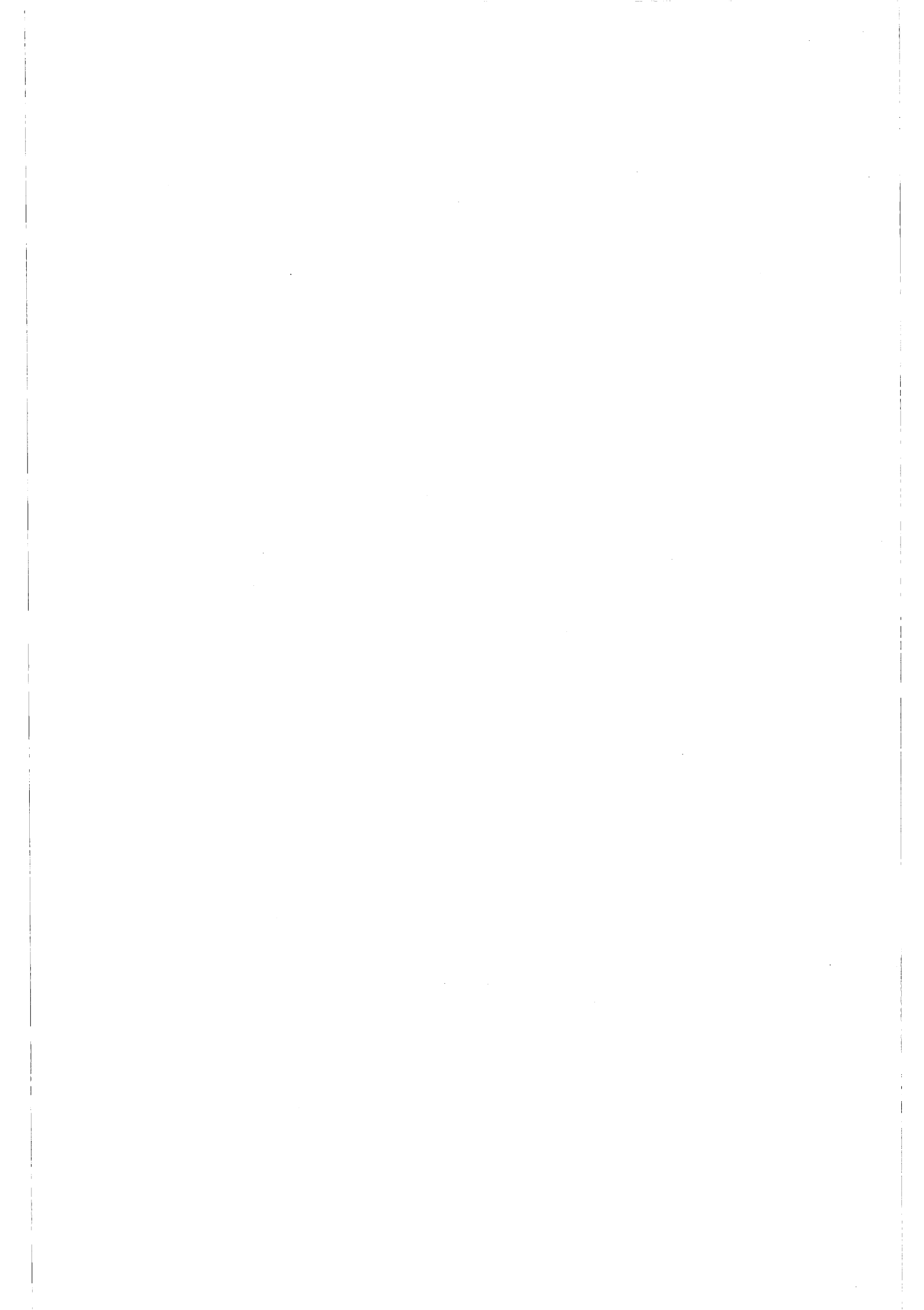
ユカンボシE4遺跡

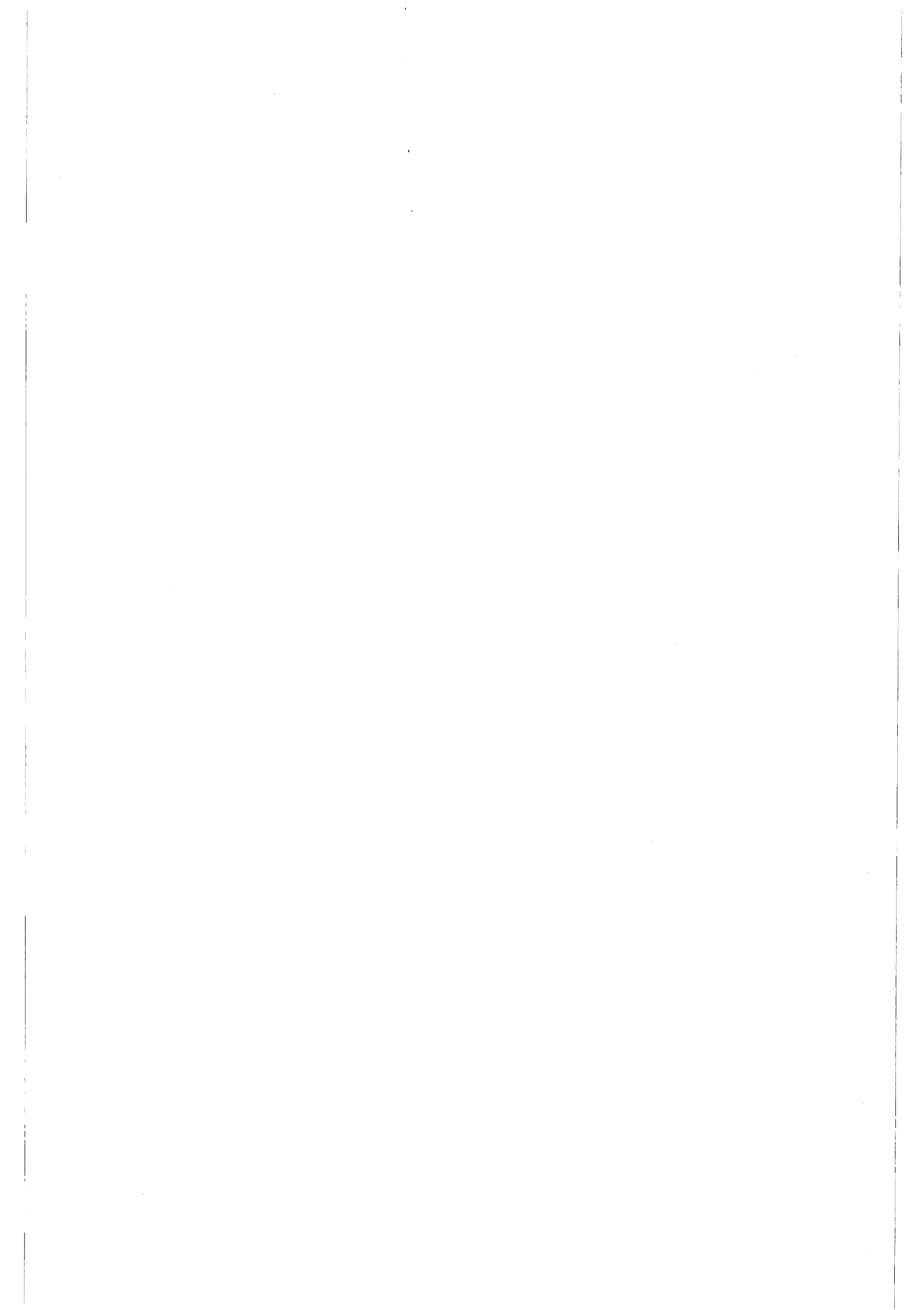
一般国道36号恵庭バイパス建設工事及びユカンボシ川小規模改修工事用地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成3年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

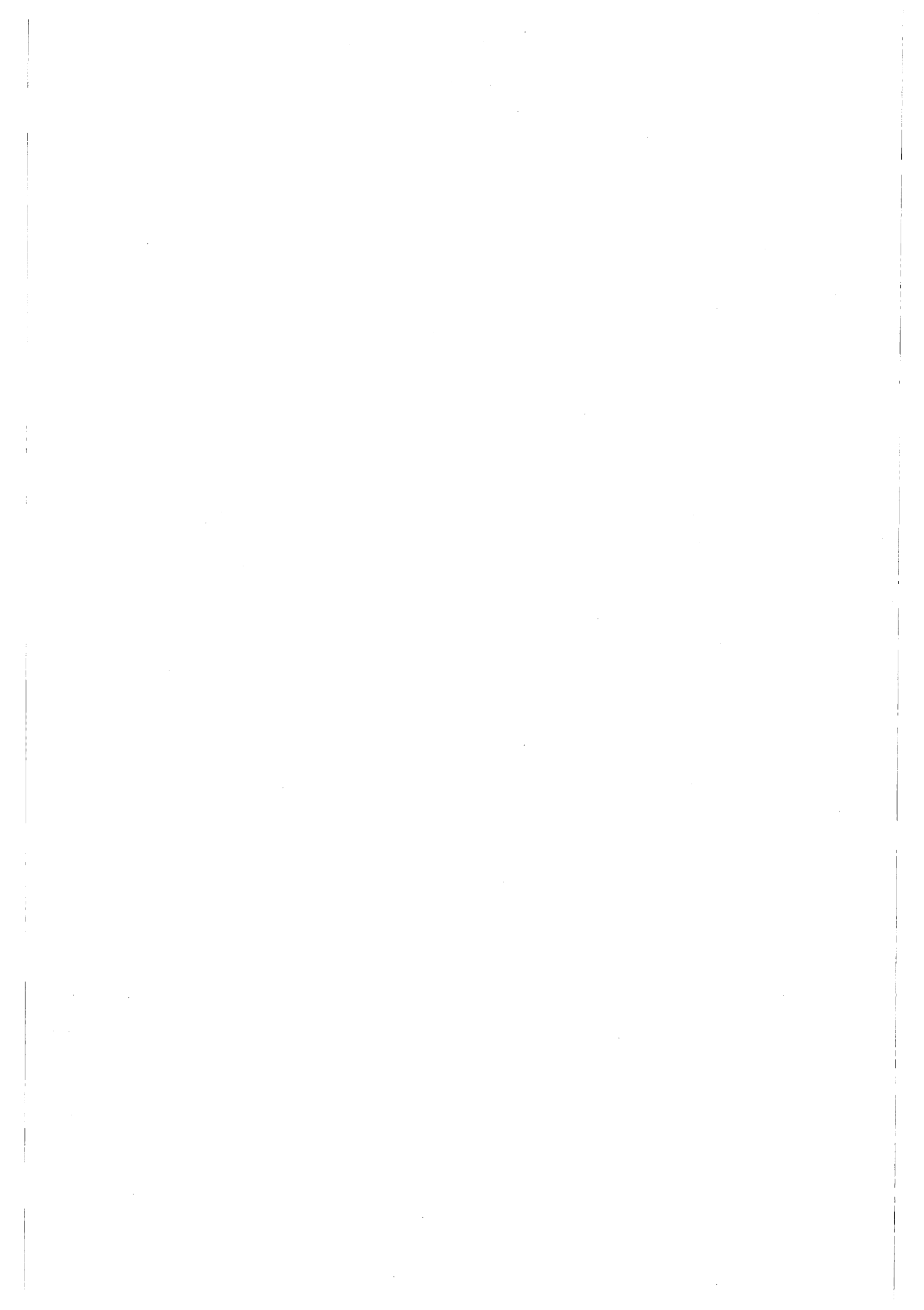






例 言

- 1 本書は、一般国道36号恵庭バイパス建設工事及びユカンボシ川小規模改修工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが調査を実施した、恵庭市ユカンボシE 4 遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書の編集は、発掘調査を担当した調査第1課の鬼柳 彰、田才雅彦、鎌田 望、倉橋直孝が行った。文責者は、次のとおりである。鬼柳 彰 I・II・VII、鎌田 望 III-4-1)の1群~5群、IV-2-1)、V-1-1)のTP-1・5、V-2-1)、倉橋直孝 V-1-1)のTP-4。
III-3は調査第2課の花岡正光が執筆した。
焼成実験については木村哲朗氏に執筆を依頼した。
植物遺体については吉崎昌一氏に執筆を依頼した。
上記以外については、田才雅彦が執筆した。
- 3 整理後の遺物写真撮影は、調査第1課の越田雅司が担当した。火山灰の分析については、調査第2課の花岡正光が担当した。
- 4 実測図の縮尺は、次のとおりである。竪穴 1:40、Tピット(TP)・土壇(P)・焼土(FP) 1:20、復元土器 1:4、土器拓本 1:3、剥片石器 1:2、礫石器 1:3
- 5 写真図版のうち、遺物に付した番号は次のとおりである。番号のみのものは実測図及び拓本の図番号に同じ。No.は、一覧表の番号に同じ。()は、遺物取り上げ番号。
- 6 植物種子等の同定は、道南文化財研究所に委託した。
- 7 焼成実験については、木村哲朗氏の協力を得た。
- 8 調査にあたっては、下記の機関及び人々の助言と協力を受けた。(順不同、敬称略)
恵庭市教育委員会、恵庭市郷土資料館、広島町教育委員会、小樽市教育委員会、余市町教育委員会
上屋真一、松谷純一、佐藤幾子、清水雅男、木村哲朗、石橋孝夫、工藤義衛、中島孝幸、乾 哲也、大谷敏三、田村俊之、高橋 理、豊田宏良、土屋周三、石神 敏、大島秀俊、宮 宏明、菊池徹夫、大塚和義、梅原達治、Mikhail-Mikhailovich-Prokofiev、平川善祥、山田悟郎、小林幸雄、出利葉浩二、右代啓視、手塚 薫、野中一宏、北沢 実、佐藤一夫、宮夫靖夫、工藤 肇、鈴木祥栄、加藤邦雄、上野秀一、羽賀憲二、仙庭伸久、吉崎昌一、椿坂恭代、工藤利幸、高橋與右衛門、中川繁紀、横山英介、宮田栄二、雨宮龍太郎、澤田廣政、村本良男、富樫哲夫、寺久保喬一



目次

I	調査の概要	1
1	調査要項	1
2	調査体制	1
3	調査に至る経緯	1
4	調査結果の要旨	2
II	遺跡の環境	3
1	遺跡の立地と歴史的環境	3
2	周辺の遺跡	6
III	調査の方法	10
1	発掘区の設定	10
2	層序	10
3	IV層とV層について	12
4	遺物の分類	16
1)	土器の分類	16
2)	石器類の分類	17
IV	縄文時代早期・前期の遺構と遺物	20
1	遺構	21
1)	土壌	21
2)	焼土	21
2	包含層出土の遺物	25
1)	土器	25
2)	石器類	31
V	縄文時代中期～晩期の遺構と遺物	61
1	遺構	63
1)	Tピット	63
2)	焼土	68
2	包含層出土の遺物	71
1)	土器	71
2)	石器類	81
VI	続縄文・擦文時代の遺構と遺物	85
1	遺構	87
1)	竪穴	87
2)	焼土	91
2	包含層出土の遺物	92
1)	VI群b類土器	92
2)	VII群a類土器	93
3)	石器類	95

VII 近代	101
1 掘立柱建物跡	102
VIII 成果と問題点	103
1 縄文時代早期の遺物集中地点について	103
1) 第一地点	104
2) 第二地点	104
2 縄文時代前期の遺物集中地点について	105
1) 第三地点	105
3 擦文時代の竪穴について	105
4 擦文時代の遺物集中地点について	105
1) 1・1区	105
2) 2・3区	106
焼成実験について (木村哲朗)	109
ユカンボシE 4 遺跡出土の植物遺体 (吉崎昌一)	111
引用・参考文献	114
写真図版	115

I 調査の概要

1. 調査要項

遺跡名 ユカンボンE4遺跡（北海道教育委員会登録番号 A-04-5）

この調査は、以下に示すとおり2件の事業に伴い実施されたものである。

- 1) 事業名 一般国道36号恵庭バイパス建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査
事業委託者 北海道開発局札幌開発建設部
所在地 恵庭市戸磯401-24ほか
調査面積 4,268㎡
調査期間 平成3年4月16日～平成4年3月27日（発掘 平成3年5月7日～7月31日）
- 2) 事業名 ユカンボンシ川小規模改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
事業委託者 北海道札幌土木現業所
所在地 恵庭市戸磯401-25
調査面積 102㎡
調査期間 平成3年4月16日～平成4年3月27日（発掘 平成3年8月1日～8月10日）

2. 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター	理事長	寺山 敏保
	専務理事	永田 春男
	常務理事	中村 福彦（平成3年6月1日から）
	業務部長	伊藤 庄吉
	調査部長	森田 知忠
	調査第一課長	鬼柳 彰（発掘担当者）
	主任	田才 雅彦（ ” ）
	嘱託	鎌田 望
	”	倉橋 直孝（平成3年7月1日から）

3. 調査に至る経緯

恵庭市の市街中心部を通過する国道36号は、これにほぼ平行して走るJR千歳線や北海道縦貫自動車道とともに、道央部の主要交通路の一つであるが、年々交通渋滞が激しくなり、事故も多発するなどの問題が顕著になっている。このため札幌開発建設部は市街地を迂回するバイパスを計画、実施調査を行ってきたが、昭和61年度に北柏木町と戸磯町の間を結ぶ総延長8,240mの恵庭バイパスを事業化、翌62年度には工事に入った。一部はすでに完成し、供用されている。

昭和62年1月、恵庭バイパス建設に伴う埋蔵文化財保護のための事前協議を受けた北海道教育委員会は、同年5月から工事用地内全域について埋蔵文化財包蔵地所在確認調査を実施した。工事用地にかかる周知の遺跡は隣接するものを含めて、西島松1・2、柏木川9・11、漁川1、カリンバ4、ユカンボンE4・E5の8カ所であったが、所在確認調査の結果から、西島松2と柏木川9を除く6遺跡について範囲確認調査（試掘調査）が行われた。これらの確認調査を経て、柏木川11、ユカンボンE4・E5の3遺跡が記録保存のための発掘調査の対象になったものである。柏木川11遺跡の発掘調査は平成元年度、恵庭市教育委員会が実施している。

I 調査の概要

ユカンボシE4遺跡の主体部は、昭和57年5月に行われた恵庭市教育委員会による分布調査で、今回調査したバイパス建設用地から200mほど南西側にあることが判明していた。しかし、所在確認調査の結果、本遺跡はユカンボシ川に沿って北東側へ大きく広がっている可能性が強いことから、平成2年5月、工事用地内の範囲確認調査が行われた。この調査により、縄文時代早期から中期及び擦文時代の土器片と落とし穴（Tピット）が検出されたことから、本遺跡の広がりが明らかになり、今回の発掘調査が実施されることに決定した。

一方、札幌土木現業所は、平成元年度よりユカンボシ川の洪水防御工事を下流の千歳市側において実施している。この工事に伴う所在確認及び範囲確認調査は昭和61年度、千歳市に所在する8カ所の遺跡について実施された。千歳市教育委員会は昭和63年度から今年度にかけて、5カ所の遺跡の発掘調査を順次進めてきたが、来年度を以て、この工事に関わる一連の調査を終了する予定である。ユカンボシ川洪水防御工事は今後、上流の恵庭市側（国道36号まで）でも進められる計画であるが、恵庭バイパスと交差する部分については、あらかじめ工事を実施する必要があることから、札幌土木現業所は、札幌開発建設部と同時に洪水防御工事にかかわる部分の発掘調査を当センターに委託した。

以上のように、今回の調査は2件の工事原因に関わるものであるが、同一遺跡であることから、発掘調査は連続して行った。本書では、両調査区を図示（図Ⅲ-1）する以外、本文中では区分していない。

今年度は対岸のユカンボシE5遺跡B地区の一部についても発掘調査を実施したが、これについての報告は、来年度に計画されている最終調査後に行う予定である。

4. 調査結果の要旨

今回のユカンボシE4遺跡における発掘調査では、縄文時代から擦文時代に及ぶ各時期の資料が検出された。ほかに、明治期のものとみられる掘立柱建物跡が発見されている。遺構・遺物の数量をみると、縄文時代早期から後期と擦文時代のものが多くを占めている。

検出された焼土のなかには、焼けた黒曜石の剥片類を含んでいることなどから、石器製作に関連するものと推定される例がある。6基のTピットのうち、南北方向に列をなす4基は長円形で、墳底に杭跡がみられる。床面から5個体の擦文土器が出土した竪穴は、平面形が通例と異なり、柱穴やカマドをもたないことから、住居とは異なる目的で掘りこまれたものと推定される。また、遺物包含層中からは擦文土器に伴い、50個あまりのラウンドスクレイパーが出土している。

調査区北部には、ユカンボシ川にほぼ平行して走る大小の地割れが検出されており、一部は遺構と重複している。

表I-1

遺構・遺物点数一覧

	土器（破片）	剥片石器	礫石器	剥片	礫	遺構
縄文時代早期	2,041	195	315	6610	332	土壇4基、焼土16カ所
前期	320					
中期	4,062	47	28	118	1	落とし穴（Tピット）6基、 焼土18カ所
後期	1,525					
晩期	42					
続縄文時代	284					
擦文時代	1,648	71	3	389	5	竪穴1基、焼土17カ所
不明	509	8		6295		
計	10,431	321	346	13,412	338	

この他に礫の接合資料が59個体ある。掘立柱建物跡2棟とこれに関する遺物は除く。

II 遺跡の環境

1. 遺跡の立地と歴史的環境

本遺跡は恵庭市の南部から千歳市北部を流れるユカンボシ川の両岸に連続して分布する遺跡の一つである。ユカンボシ川は恵庭市の市街地南方に今も原始林の景観を残す恵庭公園内の湧水を源とし、国道36号・JR千歳線を越え、恵庭市戸磯町から千歳市長都町にかけて広がる田園地帯を東流、千歳川の支流の長都川に注ぐ。流路6.2km、川幅は2～4mほどの小河川である。ユカンボシE4遺跡は水源から約2.5km下流の右岸に位置している。本遺跡付近を含む上流部は、まだ改修工事が行われていないことから、流路は自然のまま、小さく蛇行をくりかえしている。

本遺跡の範囲はユカンボシ川右岸沿いに南北約400m、東西100～200mの広がりをもっている。今回の発掘調査区はこのうち最も下流の地点にあたる。調査区を含む周辺は主に畑として利用されている。地表にはわずかに起伏があるが、全体的にはほぼ平坦である。調査区の標高は約20m、北側に南26号、東側には東2線道路が走り、ここより約0.6km東の東3線道路からは千歳市に入る。遺跡は市街地や国道、鉄道からも数kmはなれており、田園風景が広がっている。西方には恵庭岳、漁岳、空沼岳などの山並みを望み、東方には馬追丘陵や夕張山地が眺望できる。

ユカンボシ川は調査区のところで、わずかに北側へ屈曲しており右岸は水流で削られて、急傾斜の崖になっている。遺跡が立地する畑は水面から約3mの比高がある。これに対して左岸沿いは幅40mほどの氾濫原低地で、右岸より2mほど低くなっている。両岸にはヤチダモ、ハンノキ、ヤナギなどの灌木が生い茂っている。左岸から約200mはなれて国有保安林が開拓以前の原始林の姿を残し、その隣には「美人湯温泉キリマンジャロ」の大鳥居がある。

恵庭市の地形は北側の広島町や南隣する千歳市とともに、西部は支笏湖の北側にそびえる恵庭岳(1,320m)や空沼岳(1,254m)、漁岳(1,318m)などから続く山地、東部は石狩平野の南端部にあたる平地からなっている。山地からはママチ川、長都川、漁川、島松川などの急流がそれぞれ支流をあつめて東流し、石狩平野の中央部を北流する千歳川に注いでいる。千歳川は支笏湖東岸に源を発し、千歳市を東流したのち石狩平野に出て、恵庭市と長沼町の境を北流、広島町・南幌町を経て江別市で石狩川に合流する。流路延長108km、石狩平野南部では最大の支流である。

平野の西端部を山裾に沿って国道36号とJR千歳線が縦断し、丘陵部にはこれにほぼ平行して北海道縦貫自動車走っている。市街地は丘陵裾部に発達しており、千歳川左岸に至る平野部には畑や水田など耕地が広がっている。北海道内では温暖な気候の地域であるが、夏の気温は30℃前後、冬は-14℃から-25℃まで下がり、積雪量は70～90cmをはかる。

この地方の地質は、第三紀層を覆う火山性の堆積物からなっている。これらは支笏湖を含む周辺の火山群の噴出物である。地表近くには支笏湖の南側にある樽前山(1,103m)を噴出源とする降下火山灰層が3層みられる。上層から1739年に降下したTa-a層、1667年のTa-b層、西暦紀元前後ころに降下したと推定されているTa-c層である。これらの火山灰層は遺跡の調査において、遺構・遺物の年代決定の指標の一つになっている。今回の発掘調査区では、このうちTa-a層が耕作土に混って遺物包含層の上に厚く堆積しているものの、b・c層はほとんどみられない。

この地域には、旧石器時代から擦文時代・中近世に至る各時期の遺跡が多数分布しており、古くから人間の足跡がうかがえるが、文献史料として具体的にあらわれるのは、江戸期の交易場所としてである。当時、大平洋側の勇払川、厚真川、鶴川流域と千歳川上流域には「シコツ十六場所」と総称さ

II 遺跡の環境



図II-1 ユカンボシE4遺跡の位置(O印)と周辺の地形

(この地図は、国土地理院発行5万分1図「恵庭」・「千歳」を複製したものである。)

れる各場所があり、アイヌの人たちと場所請負人との間で諸産物の交易が行われていた。千歳川には今も多量の鮭が溯上するが、当時の主たる交易品も鮭を干したものであった。今の恵庭市島松、茂漁、^{いざり}漁と千歳市北部の長都にはそれぞれ場所があって、場所請負人によって支配されていた。江戸末期には一時、幕府の直掬制を経て場所請負制は明治初年まで続いた。

当時の交通路は場所請負人によって開削された道路と千歳川を利用した水上交通であった。明治6年、函館と札幌を結ぶ洋式馬車道、札幌本道が開通した。今の戸磯町には明治19年、山口県から7戸が入ったという。ユカンボシE4遺跡付近を含む戸磯町の大半は当時長都村に属していた。明治29年の仮製5万分の1図によると、号線道路はまだなく、札幌本道とこれから千歳川岸の釜加へ通ずる道や、この道から分かれてユカンボシ川を越え札幌本道のボンオサツへ続く道が見える。戸磯町内会発行の『戸磯百年のあゆみ』によると、前者は「カマカ街道」、後者は「ボンオサツ里道」と呼ばれていたらしい。さらに、ユカンボシ川、長都川のほか、カリンバ川、ユカンボシ川の支流トイソ川や無名の小川など、今は明瞭な河道がみられない川も描かれており、これらの川沿いや千歳川左岸近くには、いたるところに湿地があったらしい。明治26年、千歳原野植民地区画割が設定されているが、同42年発行の修正仮製5万分の1図には、大まかな号線道路が描かれている。この地図によれば、基線と南26号道路が交差するあたりには「イカンボシ」という地名が見える。

明治31年、長都村と漁村の間でそれまでの村界、カリンバ川から東3線に境界が変更され、ユカンボシ川上流部は漁村の管轄下に入った。明治39年には、漁村と島松村は合併して恵庭村となり、長都村は大正4年に千歳村の一部となった。

千歳川は元来、大きく蛇行しながら北上しており、とくに恵庭市付近は常に洪水に襲われるところであった。長都川と千歳川の合流地点には、かつて長都沼^{オサツト}があり、周辺にも湿地が広がっていた。長都沼は昭和26年から44年にかけて灌漑排水工事が進められ、同時に千歳川の河道も新しくなった。

旧トイソ川は現在、水流をみることはできないが、今回、本遺跡に続いて調査したユカンボシE5遺跡付近では、幅50mほどの低地になって残されており、その痕跡をたどることができる。前述の地図や地表からの観察、空中写真等から、この川は今の恵庭駅付近に源をもち、ほぼ東流してユカンボシE4遺跡から約0.5km下流でユカンボシ川に注いでいたものと推定される。近くに住む人たちの話によれば、昭和初期にはほとんど埋め立てられ、水田になっていたという。

この付近の地名はその大部分がアイヌ語に由来している。安政4年(1857)とその翌年この地域を調査した松浦武四郎は、アイヌの人たちの集落の様子や川の名称について多くの記録を残している。本遺跡付近については『戊午日誌』に次のように述べられている。「トウシヤウ 小石川急流也。此川上土の滝が有る故に此名有と。トイは土也、シヤウは滝のことを云り。此川より南の方皆ヲサツ川すじえ落て、ヲサシ沼え達する也。平地木立原を過て イカンブシ 小川にして皆礁砂也。急流。其名義、久敷振にて対面して喜びしと云儀、イカンフの訛りなるよし。ヲサツ 川巾五六間、是も砂川也。此川すじの大河也と。其名義川巾はひろけれども、川口は乾て舟が入れがたしと云儀のよし也。本名はヲサツテの由なり。」ここにみえるトイシヤウは旧トイソ川、イカンブシはユカンボシ川、ヲサツは長都川をあらわしていることはまちがいない。『戊午日誌』の絵図ではトイソ川は今と同じ「トイソ」だが、ユカンボシ川は「イカンボシ」に、『丁巳日誌』では「イカンフレ」^(シ)となっている。ユカンボシ川と旧トイソ川はその後も様々に表記されている。明治29年の仮製5万分の1図では、「エカンブウシ」、「トーウイソ」、同42年の修正図では「イカンボシ」となっており、旧トイソ川の名称はなくなっている。長見義三著『ちとせ地名散歩』によると、ユカンボシ川は「yuk-ampa-usi シカ・がたくさんいる・所」と説明されている。

2. 周辺の遺跡

石狩平野南部に位置する恵庭市・千歳市とその周辺には、平野を囲む丘陵部や河川流域に多くの遺跡が分布している。道内最古とされる石器が発見された祝梅三角山遺跡（祝梅下層遺跡）や縄文時代後期の墓地として知られるキウス周堤墓群は千歳川右岸の丘陵裾部に位置している。

平野を流れる河川流域における遺跡の分布には著しい片寄りがみられる。千歳川本流では千歳市北部の左岸に数カ所の遺跡が分布しているが、これより下流では支流の河口付近以外にはみられない。この地域で最も大きい千歳川の支流、漁川流域にも遺跡は数カ所しかない。これに対して、島松川に合流する柏木川やルルマップ川、漁川に入る茂漁川、さらに長都川とその支流両岸には、それぞれまとまって遺跡が分布している。とくに、柏木川両岸には恵庭市にある遺跡の半数以上を占める61カ所がある。河川改修工事等で消滅したのも多いと推定されるが、このような遺跡のあり方は、千歳川両岸や漁川下流域が本来低湿地で居住に適さず、小さな支流沿いの微高地に集落が営まれたことによるものと考えられよう。

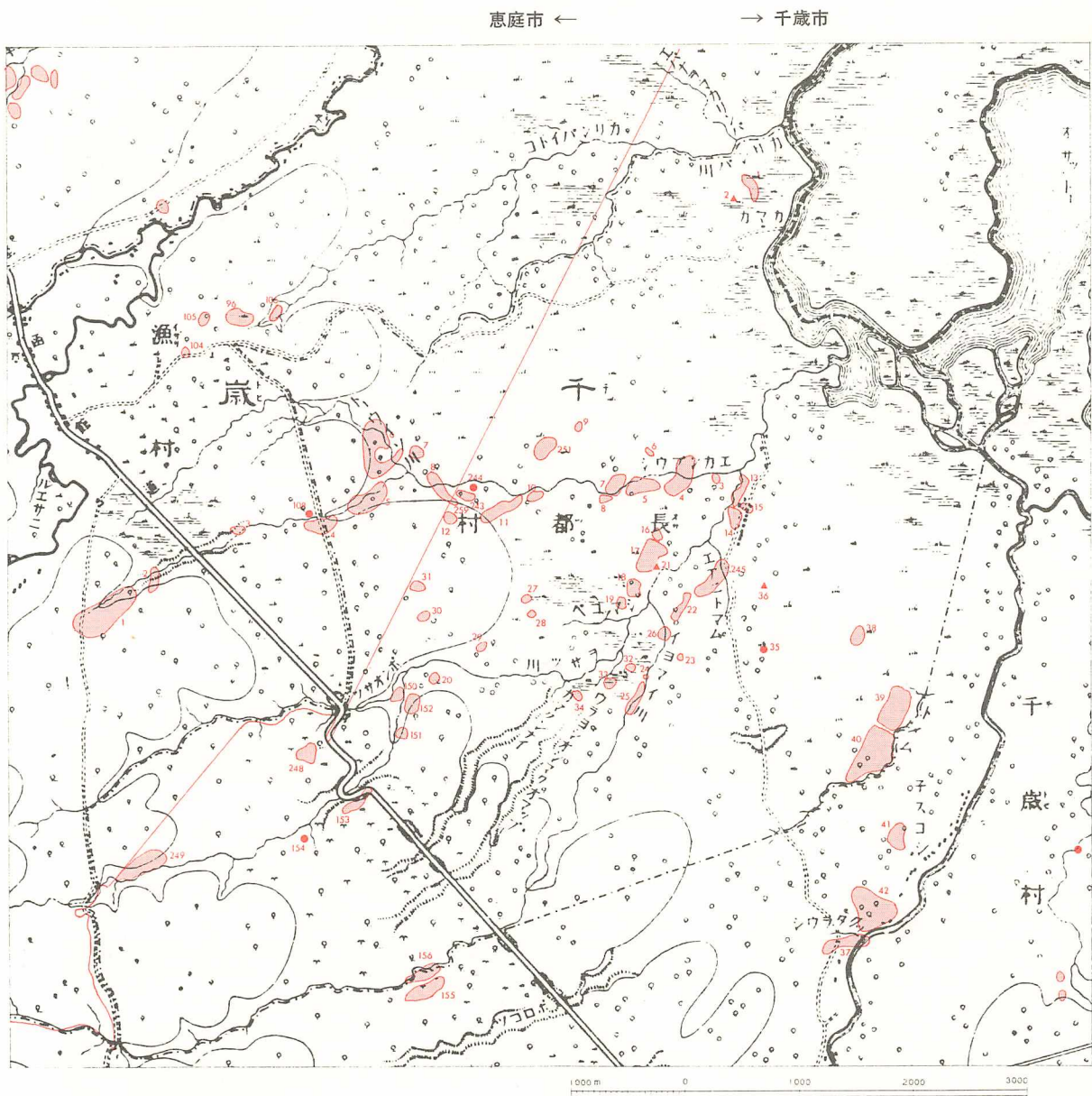
大正11年、この付近を実地調査した河野常吉は、釜加遺跡、長都チャシ、キウス周堤墓群などについての記録を残している（宇田川 1981）。昭和に入ると、曾根原武保と後藤寿一が茂漁川付近の「古墳様墳墓」（北海道式古墳）についての報告を『考古学雑誌』に発表している。（曾根原・後藤 1934）。昭和30年代には千歳と恵庭の遺跡を多数調査した大場利夫、石川徹が、その結果を『千歳遺跡』と『恵庭遺跡』にまとめている。昭和40年代からは、各種の開発に伴う発掘調査が増加する。恵庭市では縄文時代晩期や擦文時代初めの墓が調査された柏木川1遺跡（道文化財保護協会 1969）や周堤墓5基が発掘された柏木B遺跡（木村英明 1981）など大きな成果をみている。

長都川とその支流沿いには、57カ所の遺跡が所在している。このうち、ユカンボシ川両岸には、上流の恵庭市に9カ所、下流の千歳市に14カ所の遺跡が並んでいる。水源付近にある恵庭公園遺跡は両岸に計30数墓の竪穴住居跡がみられる擦文時代の集落跡である。昭和38年、大場利夫、石川徹はこの遺跡の竪穴住居跡1基を調査して甕形土器や黒曜石のスクレイパーを検出している。水源より約2km下流左岸のユカンボシE8遺跡は、昭和63年度恵庭市教育委員会によって調査が行われ、縄文時代早期のコッタロ式土器や、後期の手稲式土器が多量に出土、竪穴住居跡も多数みついている。この遺跡は平成2・3年度にも、対岸のユカンボシE3遺跡とともに調査が行われた。今回、当センターが調査したユカンボシE4・E5遺跡は、ここからさらに0.5～1kmほど下流に位置している。

千歳市長都町を東流するユカンボシ川の下流部では、昭和63年度から平成3年度にかけて、千歳市教育委員会により、ユカンボシC2・C3・C5・C6・C8・C13の6カ所の遺跡の調査が行われ、縄文時代後期・続縄文・擦文・中近世に及ぶ各時期の遺跡・遺物が発掘された。このうちユカンボシC2遺跡では、昭和44年にも石川徹が擦文時代の竪穴住居跡1基を発掘している。

ユカンボシ川以外の長都川支流では、湧舞川右岸のイヨマイ6遺跡の調査が平成1・2年度、千歳市教育委員会によって行われ、縄文時代から擦文時代の遺物が検出されている。旧カリンバ川沿いのカリンバ2遺跡では昭和61年度の恵庭市教育委員会による調査で、北大式土器を伴う土壌基45基が発掘された。翌62年度の調査区では、トコロ6類式土器を伴う竪穴住居跡がみついている。この遺跡の東側にあるカリンバ3遺跡は昭和51年から札幌大学により継続して学術調査が実施されており、続縄文時代の竪穴住居跡や溝状遺構が発見されている。千歳市街北部にある千歳川左岸段丘上の末広遺跡では昭和55年度から3次にわたる調査により周堤墓や擦文時代・アイヌ文化期の集落跡が発掘されている。

図I-2は、明治29年製版の仮製5万分の1図「長都」の一部に北海道教育委員会の埋蔵文化財包蔵地分布図(2.5万分の1)「恵庭」・「長都」のうち該当する部分を同縮尺で重ね、遺跡の位置と範囲をトレースしたものである。この図から本来の地形における各遺跡の立地条件がよみとれる。しかし、河川と各遺跡の位置関係を、この図と道教委の分布図で比較してみると、多少のくいちがいがある。これは、河川流路の変遷が大きく影響しているものと考えられる。明治29年の図と同42年の修正図でも、小河川の流路はかなり変っている所がある。また、明治時代における小河川流路の測量精度に原因する部分もあるものと考えられる。



図I-2 旧長都村と周辺の遺跡 (この地図は国土地理院発行の明治29年製版「仮製5万分の1図・長都」を複製したものである。)

各遺跡に付した数字は、P8・9の一覧表にある恵庭市と千歳市それぞれの登載番号のうち遺跡番号である。

II 遺跡の環境

表Ⅱ-1 周辺の遺跡一覧（北海道教育委員会の埋蔵文化財包蔵地調査カードによる）

ユカンボシ川筋 [エカンプウシ]

[] 内は仮製5万分1図にある川名

登載番号	名 称	種 別	時 代	発 掘 調 査	文 献
A-04-1	恵庭公園	集 落 跡	擦 文	S38 大場利夫・石川徹	大場・石川 (S41)「恵庭遺跡」
2	ユカンボシE1	遺物包含地	縄文・擦文		
3	ユカンボシE2	〃	縄文・統縄文		
4	ユカンボシE3	〃	縄 文	H3 恵庭市教委	
5	ユカンボシE4	〃	統縄文・縄文	H3 道埋文センター	道埋文センター (H4) 『ユカンボシE4遺跡』
6	ユカンボシE5	〃	縄 文	〃	
7	ユカンボシE6	〃	〃		
8	ユカンボシE7	〃	〃		
108	ユカンボシE8	〃	〃	S63, H2. 3 恵庭市教委	恵庭市教委 (H1) 『ユカンボシE3遺跡』
A-03-3	ユカンボシC1	墳 基	縄文・(アイヌ)	S22 頃 河野広道	
4	ユカンボシC2	集 落 址	縄文・擦文	S44 石川徹 S63 千歳市教委 H1 千歳市教委	石川 (S54)『統千歳遺跡』 千歳市教委 (S63)『ユカンボシ2 遺跡発掘調査概報』 千歳市教委 (H3)『ユカンボシ2 遺跡発掘調査概要報告』
5	ユカンボシC3	〃	縄 文	H2 千歳市教委	千歳市教委 (H3)『ユカンボシ3・ 5・6遺跡発掘調査概要報告』
6	ユカンボシC4	〃	〃		
7	ユカンボシC5	〃	〃	H2, 3 千歳市教委	千歳市教委 (H3)『ユカンボシ3・ 5・6遺跡発掘調査概要報告』
8	ユカンボシC6	遺物包含地	縄文・擦文・(アイヌ)	H2 千歳市教委	〃
9	ユカンボシC7	住 居 址	擦 文		
10	ユカンボシC8	遺物包含地	縄文・擦文	H3 千歳市教委	
11	ユカンボシC9	集 落 址	擦 文		
12	ユカンボシC10	墳 基 ?	縄文・擦文・(アイヌ)		
243	ユカンボシC11	遺物包含地	縄 文		
244	ユカンボシC12	〃	〃		
251	ユカンボシC13	〃	縄文・(アイヌ)	H3 千歳市教委	
259	ユカンボシC14	〃	縄 文		

長都川筋 [ヲサツ川]

登載番号	名 称	種 別	時 代	発 掘 調 査	文 献
A-03-13	オサツ1	墳基・集落址	擦文・(アイヌ)		
14	オサツ2	集 落 址	擦 文		
15	オサツ3	〃	〃		
16	オサツ4	遺物包含地	縄 文		
17	オサツ5	住 居 址	縄文・擦文・(アイヌ)		大場・石川 (S42)『千歳遺跡』
18	オサツ6	遺物包含地	縄 文		
19	オサツ7	〃	擦 文		
20	オサツ8	〃	〃		
21	長都チャシ	チャシ跡	(アイヌ)	S40 千歳市教委(測量調査)	宇田川洋 (S56) 『河野常吉ノート考古篇1』
35	都	遺物包含地	縄 文		
36	都のチャシ	チャシ跡	(アイヌ)	S41 大場利夫・石川徹	大場・石川 (S41)『千歳遺跡』
150	オサツ9	集 落 跡	擦 文		
151	オサツ10	〃	〃		
152	オサツ11	〃	〃		
153	オサツ12	遺物包含地	縄文・擦文		千歳市教委 (S52) 『ウサクマイ遺跡群II』
154	オサツ13	〃	縄 文		
245	オサツ17	〃	〃		
248	オサツ15	集 落 址	擦 文		
249	オサツ16	遺物包含地	縄 文		

イヨマイ川筋 [イヨマイ川]

登載番号	名称	種別	時代	発掘調査	文献
A-03-22	イヨマイ1	集落址	擦文		
23	イヨマイ2	遺物包含地	縄文		
24	イヨマイ3	集落址	擦文		
25	イヨマイ4	"	縄文・擦文		
26	長都田中	"	擦文	S28 マクコード	マクコード (S35) 「Cultural Sequences in Hokkaido」
155	イヨマイ5	遺物包含地	縄文・擦文	S48 吉崎昌一	
156	イヨマイ6	"	"	S63 千歳市教委	千歳市教委 (H1) 『イヨマイ6遺跡における考古学的調査 (1) (2)』

ウラヨシオシマクオマップ川筋 [ウラヨシオシマクオマップ]

登載番号	名称	種別	時代	発掘調査	文献
A-03-32	ウラヨシオシマクオマップ1	集落址	擦文		
32	ウラヨシオシマクオマップ2	"	"		

シマコツナイ川筋 [シマッコベ]

登載番号	名称	種別	時代	発掘調査	文献
A-03-27	シマコツナイ1	遺物包含地	縄文		
28	シマコツナイ2	"	"		
29	シマコツナイ3	"	縄文・擦文		
30	シマコツナイ4	集落址	擦文		
31	シマコツナイ5	遺物包含地	縄文		

カマクンナイ川筋 [カマクンナイ]

登載番号	名称	種別	時代	発掘調査	文献
A-03-34	カマクンナイ	住居址	擦文		

カリンバ川筋 [カリンバイトコ]

登載番号	名称	種別	時代	発掘調査	文献
A-04-96	カリンバ3	集落址	縄文・統縄文・擦文	S51, 57, 59 木村英明	
104	カリンバ1	遺物包含地	縄文・擦文		
105	カリンバ2	"	統縄文	S61 恵庭市教委 S62 "	恵庭市教委 (S62) 『カリンバ2遺跡』 恵庭市教委 (H1) 『カリンバ2遺跡第1地点における調査』
106	カリンバ4	遺物包含地	縄文・統縄文		
A-03-1	カリンバー	集落址	擦文		大場・石川 (S42) 『千歳遺跡』
2	釜加のチャシ	チャシ跡	(アイヌ)	S40 大場利夫・石川徹	大場・石川 (S42) 『千歳遺跡』

トメト川筋 [トメム]

登載番号	名称	種別	時代	発掘調査	文献
A-03-38	トメト川1	集落址	擦文		
39	トメト川2	"	統縄文・擦文		
40	トメト川3	"	擦文		

千歳川左岸

登載番号	名称	種別	時代	発掘調査	文献
A-03-37	末広	集落跡	縄文・統縄文・擦文	S55, 56, 59 千歳市教委	千歳市教委 (S56, 57, 59) 『末広遺跡における考古学的調査 (上) (下) (統)』
41	根志越1	集落址	擦文		
42	根志越2	"	縄文・擦文		石川 (S42) 『千歳遺跡』

Ⅲ 調査の方法

1. 発掘区の設定

発掘区は、道路建設予定地の用地境界杭を基準として設定した(図Ⅲ-1)。測量基点としたのはR72杭で、この点を $X=0$, $Y=1$ とし、L72杭方向(東)をX軸の正方向、R71杭方向(北)をY軸の正方向とする座標を設定した。

グリッドは(X・Y)で表示する10m×10mの大グリッドを基本とし、各々の大グリッドを1m×1mの小グリッド(xy)100個に分割した。各グリッドの表示は、大グリッドの場合、1・0区、2・4区、4・10区などとし、小グリッドを指す場合には、1・0-00区、4・10-55区などとした。

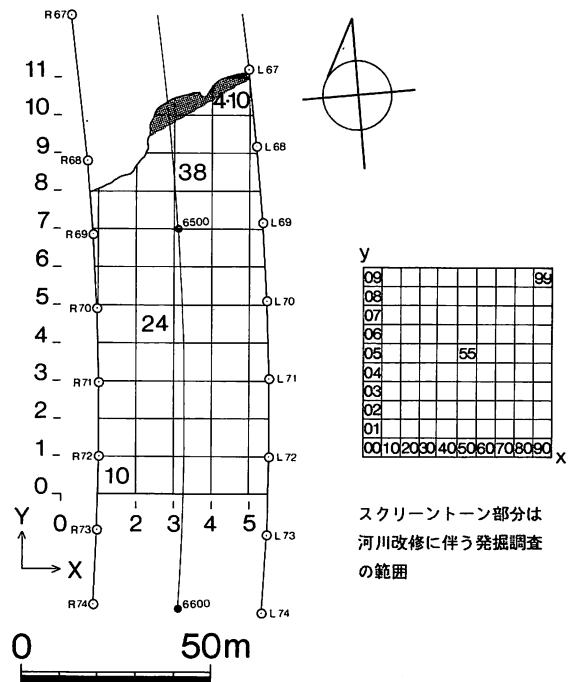
なお、Y軸の方位は、 $N-5^{\circ}E$ である。

各基準杭の座標は以下の通りである。

R72杭： $X=-125,000.822$ 、 $Y=-52,142.765$

L72杭： $X=-125,005.280$ 、 $Y=-52,097.986$

R71杭： $X=-124,981.458$ 、 $Y=-52,141.082$



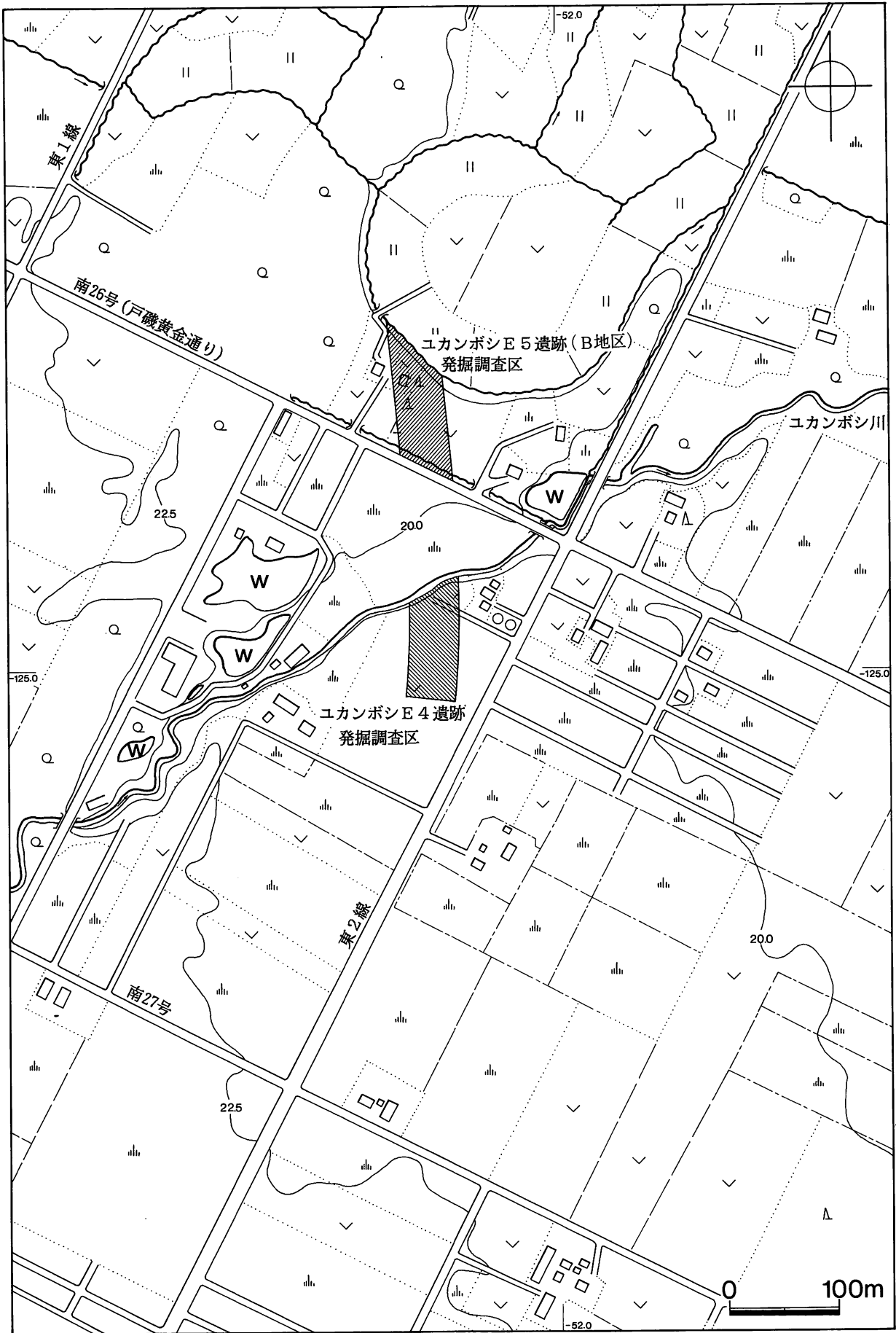
図Ⅲ-1 発掘区の表示

2 層序

調査区の土層図は西側壁面でとった(図Ⅲ-3・4)。基本層序は以下の通りである。

- I 層：表土(耕作土)。耕作機械によりほぼ南北方向に溝状の攪乱が走る。明治開拓期の掘立柱遺構が確認されている。
- I' 層：表土。ユカンボシ川への落ち際部分に残る崩落土。
- a 層：白色火山灰。樽前a降下軽石層(Ta-a、1739年降灰)。
- II 層：黒色(図Ⅲ-4の細い破線より上の部分)ないし黒褐色土。上面が擦文時代及び縄文時代の遺物包含層。半ばが縄文時代中・後期の遺物包含層。下面が縄文時代早・前期の遺物包含層。
- II' 層：橙褐色土、樽前a降下軽石層の影響を受けたと思われるII層で、部分的にみられる。
- II'' 層：褐色土、地割れ中に部分的にみられる。
- III 層：暗褐色ないし黄褐色土(漸移層)。上面が縄文時代初期の遺物包含層。
- IV 層：黄褐色土。なお、IV・V層の詳細については次項を参照されたい。
- V a 層：黄褐色大粒軽石。
- V b 層：灰白色砂。
- V c 層：青灰色細粒砂。

地割れ：発掘調査区の北側部分で、ユカンボシ川の流れと平行する方向に何条かの地割れが確認されている(図Ⅲ-5)。確認面は地表面・II層・III層と様々であるが、もっとも川に近い部分では地表面で上幅が5m以上にも達している。これらの地割れが起こった時期は一時期ではなく、縄文時代以降何度か起こっていることが遺構などとの関係から判明している。



図Ⅲ-2 発掘区の位置と周辺の地形

3 IV層とV層について

縄文時代早期の遺物包含層の下位には、IV層とした黄褐色土とV層とした軽石礫を含む砂層が認められる。IV層とV層の層界は漸移的である。IV層は岩相がEn-ローム（北海道火山灰命名委員会、1982）に、V層の軽石は色調がEn-a（恵庭a降下軽石堆積物、曾屋・佐藤、1980）によく似ている。En-ロームは千歳周辺地域でEn-a層の直上に発達する褐色土で、En-aを母材とする残積土のようにみえる。En-aは恵庭岳からほぼ東西方向に分布軸を有し、十勝平野にまで分布するテフラで、噴出年代はほぼ13,000年から15,000年前に相当すると考えられている（曾屋・佐藤、1980）。

ここでは、IV層がV層の風化生成物であるか否か、IV層とV層の成因、さらにIV層とV層の軽石がそれぞれEn-ロームとEn-aの軽石に対比されるか否かを予察的に報告する。IV層とV層の特徴を明らかにするために、TP5（図V-5）の地質断面試料から得られた細粒砂分以上の粒子について実体顕微鏡下で検鏡し、粒子の種類・形状・量比を観察した。また、模式地附近（苫小牧市美沢11遺跡、北海道埋蔵文化財センター、1988；p.16, 図8）で採取したEn-ロームとEn-aを、IV層とV層の比較試料とした。

1) 構成粒子の特徴（表1）

IV層：中粒—細粒砂混じり粘土。単粒結晶は長石と輝石が多い。繊維状発泡の火山ガラスも多い。角閃石を少量含む。石英がまれに認められる。その他、白色・灰白色の岩片、暗灰色・赤褐色のスコリアを含む。粒子はほとんどがangularであるが、roundedな岩片も少量認められる。粒径1—3cmのsub-roundedな軽石礫を含んでいる。この軽石は黄橙色で、斑晶として長石・輝石を含む。気泡は繊維状発泡で、かなり明瞭な定方向性がある。軽石はIV層上部に比較的多い。

V層：重鉱物がやや多く集積した砂の薄層（Vb層）と軽石礫が密集した層（Va層）との互層から成る。Vb層は細礫混じり極粗粒—粗粒砂である。単粒結晶は長石と輝石が多い。他に、石英・角閃石・繊維状発泡の火山ガラスを僅量含む。灰色・暗灰色の岩片を多く含み、絹状光沢の発泡の良い白色軽石、赤褐色のスコリアが認められる。単粒結晶・軽石・スコリアはangularであるが、岩片はroundedないし、well-roundedである。軽石は黄橙色で、斑晶として長石・輝石を含む。気泡は繊維状発泡で、部分的に網目模様をなす。気泡は弱い定方向性がある。Va層の軽石礫はroundedで、最大粒径15cmに達する。

En-ローム：軽石混じり褐色粘土。砂粒の単粒結晶は長石・輝石が多い。石英・角閃石・火山ガラスをまれに含む。白色・灰白色の岩片を含む。単粒結晶、軽石、岩片ともangularである。軽石は黄橙色で粒径1cm以下、やや軟い。

En-a軽石：堅硬な淡黄色の軽石で、斑晶として長石と輝石を含む。長石は外形が不明瞭で量が少なく、輝石は量が多い。発泡度は良く、微細な球形状気泡が密集する中に、大きな球形状気泡が散在する。

2) IV層とV層の関係と成因

V層の軽石礫はroundedであること、このような軽石礫を挟んでVb層がラミナ状に発達し、Vb層中の岩片もroundedからwell-roundedを示すことから、V層は水成堆積物である。IV層はV層と比較して、火山ガラスが著しく多いこと、軽石の発泡形態にやや差があること、軽石の粒径に著しい差があることから、V層の風化生成物（残積土）ではないと考えられる。IV層中の岩片にはroundedなものが含まれることから、IV層も水成堆積物と考えられる。細粒物質から成る点で、flood loam（氾濫原土）であろう。IV層上部に比重の小さな軽石が多いのも、flood loamのような浮流による運搬物質であることを示すものであろう。V層は漁川の扇状地堆積物、IV層はユカンボシ川の氾濫堆積

物に相当すると思われる。

3) IV層とEn-ローム、及びEn-a軽石とV層の軽石との関係

IV層には火山ガラスが多いのに対して、En-ロームにはほとんど含まれない。また、上述のようにIV層は水成堆積物と考えられるので、IV層はEn-ロームには対比されない。En-a軽石とV層の軽石とでは、発泡形態に差が認められる。したがって、V層の軽石の起源はEn-aではないであろう。

なお、En-ローム中にはまれに角閃石が認められる。En-a軽石には角閃石が含まれないことから、En-ロームはEn-aの単純な風化生成物ではないと思われる。この点について今後の検討が必要である。

引用文献

曾屋龍典・佐藤博之 (1980) : 千歳地域の地質. 地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 地質調査所, 92pp.
 北海道火山灰命名委員会 (1982) : 北海道の火山灰. 23pp.
 北海道埋蔵文化財センター (1988) : 新千歳空港用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 (第1分冊). 26pp.

表III-1 IV層とV層の構成粒子の量比と特徴

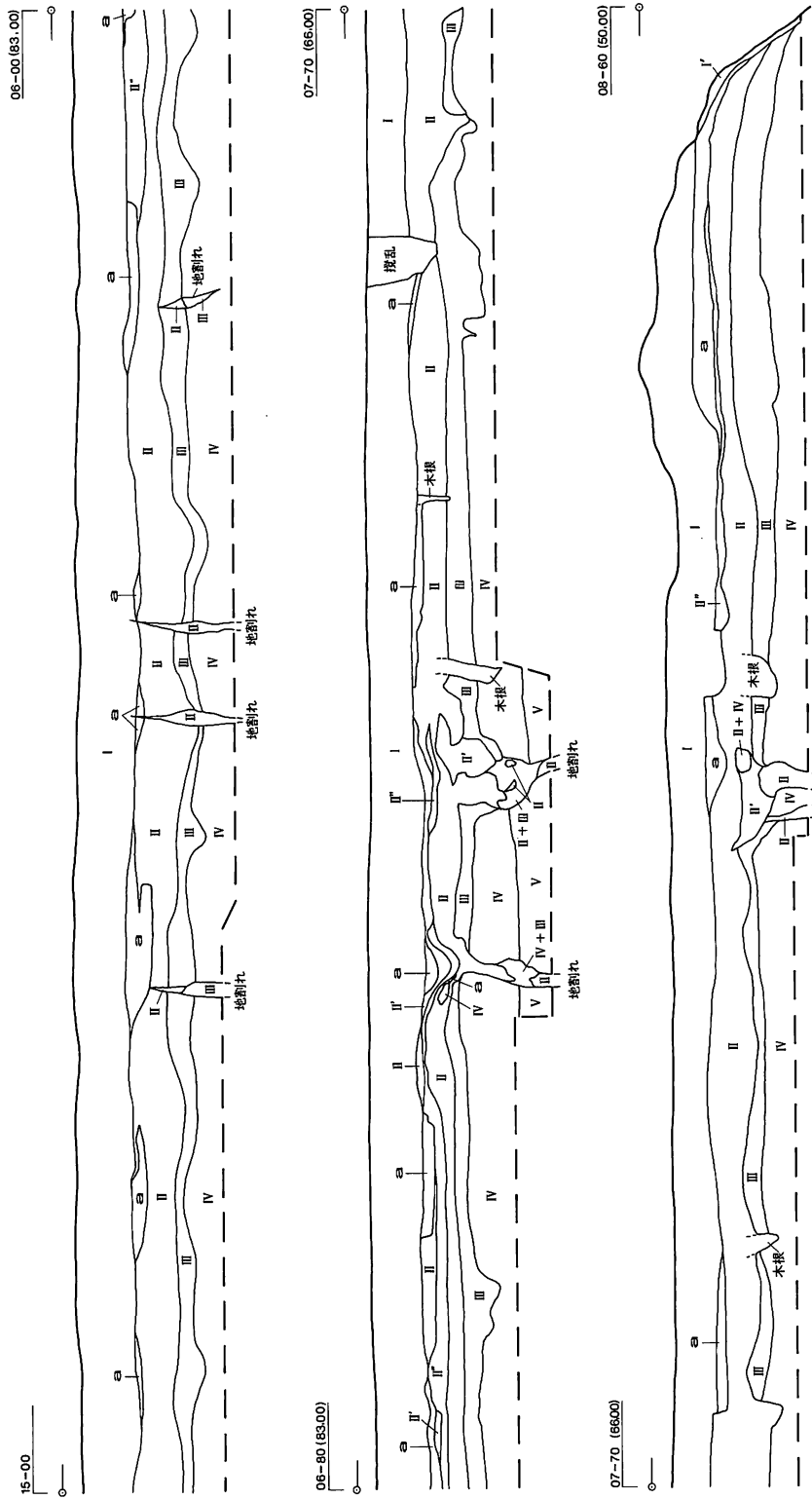
試料	単粒結晶				火山 ガラス	岩片	軽石	スコリア	軽石の特徴・その他
	石英	長石	角閃石	輝石					
IV層	--	+++	+	++	+++	+	+	+	円磨度 { 単粒結晶・火山ガラス: angular 岩片・スコリア: angular, rounded
IV層軽石		+		++					色調: 黄橙色 円磨度: sub-rounded 気泡形態: 繊維状, かなり明瞭な定方向性あり
Vb層	-	+++	-	++	-	++	+	+	円磨度 { 単粒結晶・火山ガラス・ 軽石・スコリア: angular 岩片: rounded, well-rounded
V層軽石		+		++					色調: 黄橙色 円磨度: rounded 気泡形態: 繊維状, 部分的に網目様, 弱い定方向性あり
En-ローム **	--	++	--	++	--	+	+		円磨度: angular 軽石: 黄橙色, 粒径1cm>, angular, 長石・輝石斑晶, 微細球状気泡
En-a軽石 **		+		++					色調: 淡黄色 円磨度: angular 気泡形態: 球形状

* : 細粒砂以上 ** : 苫小牧市美沢11遺跡の試料 +++ : 頗る多い ++ : 多い + : 少ない
 - : 僅量 -- : まれ

III 調査の方法



図III-3 土層断面(1)



図III-4 土層断面(2)

4. 遺物の分類

1) 土器の分類

今回の調査で出土した土器片は、縄文時代のもの8,499点（早期2,041点、前期320点、中期4,062点、後期1,525点、晩期42点、時期不明509点）、続縄文時代のもの284点（後北式195点、赤穴式89点）、擦文時代のもの1,684点の計10,431点である。

当埋蔵文化財センターでは、昭和51年以来修正を加えながら時期毎の区分を行ってきている。ここでは基本的に従来分類を踏襲し、本年度の調査結果及び近年の調査結果を考えあわせて以下のように分類した。

I群 縄文時代早期に属する土器を本群とする。大きく二つに分類される。

a類：貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。今年度の調査では出土していない。

b類：縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文のある土器群。更に四者に分けられる。

b1類：東釧路Ⅱ・Ⅲ式に相当するもの。今年度の調査では出土していない。

b2類：コッタロ式に相当するもの。

b3類：中茶路式に相当するもの。

b4類：東釧路Ⅳ式に相当するもの。

Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器を本群とする。大きく二つに分類される。

a類：胎土に繊維を含む、厚手で縄文の施された円底・尖底の土器群。更に二者に分けられる。

a1類：網文土器に相当するもの。今年度の調査では出土していない。

a2類：静内中野式に相当するもの。

b類：円筒土器下層式、大麻Ⅴ式に相当する土器群。

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器を本群とする。大きく二つに分類される。

a類：円筒土器上層式、萩ヶ岡1・2式に相当するもの。

b類：天神山式、柏木川式、北筒式等に相当するもの。更に三者に分かれる。

b1類：天神山式、萩ヶ岡3式に相当するもの。

b2類：柏木川式、萩ヶ岡4式に相当するもの。

b3類：北筒式に相当するもの。

Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器を本群とする。大きく三つに分類される。

a類：前葉の土器。余市式、手稲砂山式、入江式に相当するもの。

b類：中葉の土器。手稲式、鮎瀬式、エリモB式に相当するもの。

c類：後葉の土器。堂林式、三ッ谷式、御殿山式に相当するもの。

Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器を本群とする。大きく三つに分類される。

a類：大洞B・BC式に相当するもの。今年度の調査では出土していない。

b類：大洞C₁・C₂式、幣舞式に相当するもの。

c類：大洞A式、タンネットウL式に相当するもの。

Ⅵ群 続縄文時代に属する土器を本群とする。大きく三つに分類される。

a類：大狩部式、恵山式及びそれに平行するもの。今年度の調査では出土していない。

b類：後北式及びそれに平行するもの。今年度の調査では後北C₂・D式と東北地方の弥生時代後期に属する赤穴式が出土している。

c類：北大Ⅰ・Ⅱ式に平行するもの。今年度ユカンボシE5遺跡で北大Ⅱ式に属する土墳墓1基が確認されているが、ユカンボシE4遺跡ではこの時期の資料は出土していない。

VII群 擦文時代に属する土器を本群とする。大きく四つに分類される。

a類：早期の土器群。北大Ⅲ式及び石附編年（1984）の擦文0・Iに相当する。甕の口頸部に段状沈線あるいは横走沈線を廻らすもので、肩部が明瞭に張り出す。今年度の調査で確認された竪穴はこの時期に属するものである。

b類：前期の土器群。甕の口頸部に横走沈線を廻らせ、縦あるいは斜めの沈線を組合わせるもので、横走沈線より下側にも施文されるものがある。石附編集年の擦文Ⅱに相当する。今年度の調査では出土していない。

c類：中期の土器群。甕の口縁部が受け口になり刻みが多様される。頸部の沈線文は綾杉分化し、貼付圍繞帯（豊田 1987）などがみられる。石附編年の擦文Ⅲ～Ⅴに相当する。今年度の調査では1個体が出土している。

d類：後期の土器群。石附編年の擦文Ⅵに相当する。今年度の調査では出土していない。

2) 石器等の分類

今回の調査で出土した石器等は、総数14,416点と方割礫接合資料59個体である。このうち縄文時代早期・前期に属する遺物は、剥片石器類195点、礫石器類315点、方割礫接合資料58個体、方割礫・礫332点、剥片6,610点の計7,452点と58個体、縄文時代中期・後期に属する遺物は剥片石器類47点、礫石器類28点、礫1点、剥片118点の計194点、擦文時代早期に属する遺物は、剥片石器類71点、礫石器類3点、方割礫接合資料1個体、方割礫3点、礫2点、剥片389点の計468点と1個体である。又、時期の特定できない遺物として、石鏃片3点、削・搔器1点、R・F4点、剥片6,295点がある。

出土器種は、石鏃、石槍、彫器、楔形石器、石錐、ラウンドスクレイパー、つまみ付きナイフ、削・搔器、R・F、U・F、石核、原石、スポール、剥片、碎片、石斧、すり石、砥石、たたき石、石皿、台石、板状礫、石製品、方割礫、礫がある。以下特徴的なものあるいは略語について個々に記す。

石槍：尖頭器類のうち重量が5g以上のもの。石銛との区分はしていない。

彫器：スポールとともに旧石器時代に属する可能性もあるが、今回は縄文時代早期に含めて報告する。

ラウンドスクレイパー：肉厚で礫皮を残し円形を呈するものが一般的であるが、刃部が一部にしか作出されていないエンドスクレイパー状のものや、薄手ものなどもあり、一括して扱う。

削・搔器：つまみ付きナイフ、ラウンドスクレイパーを除いた削器・搔器を一括している。

R・F (retouched flake)：二次加工 (retouch) のある剥片。器種の特定できない各種石器類の未製品・破損品を含む。

U・F (utilized flake)：使用痕 (肉眼での識別による) のある剥片。

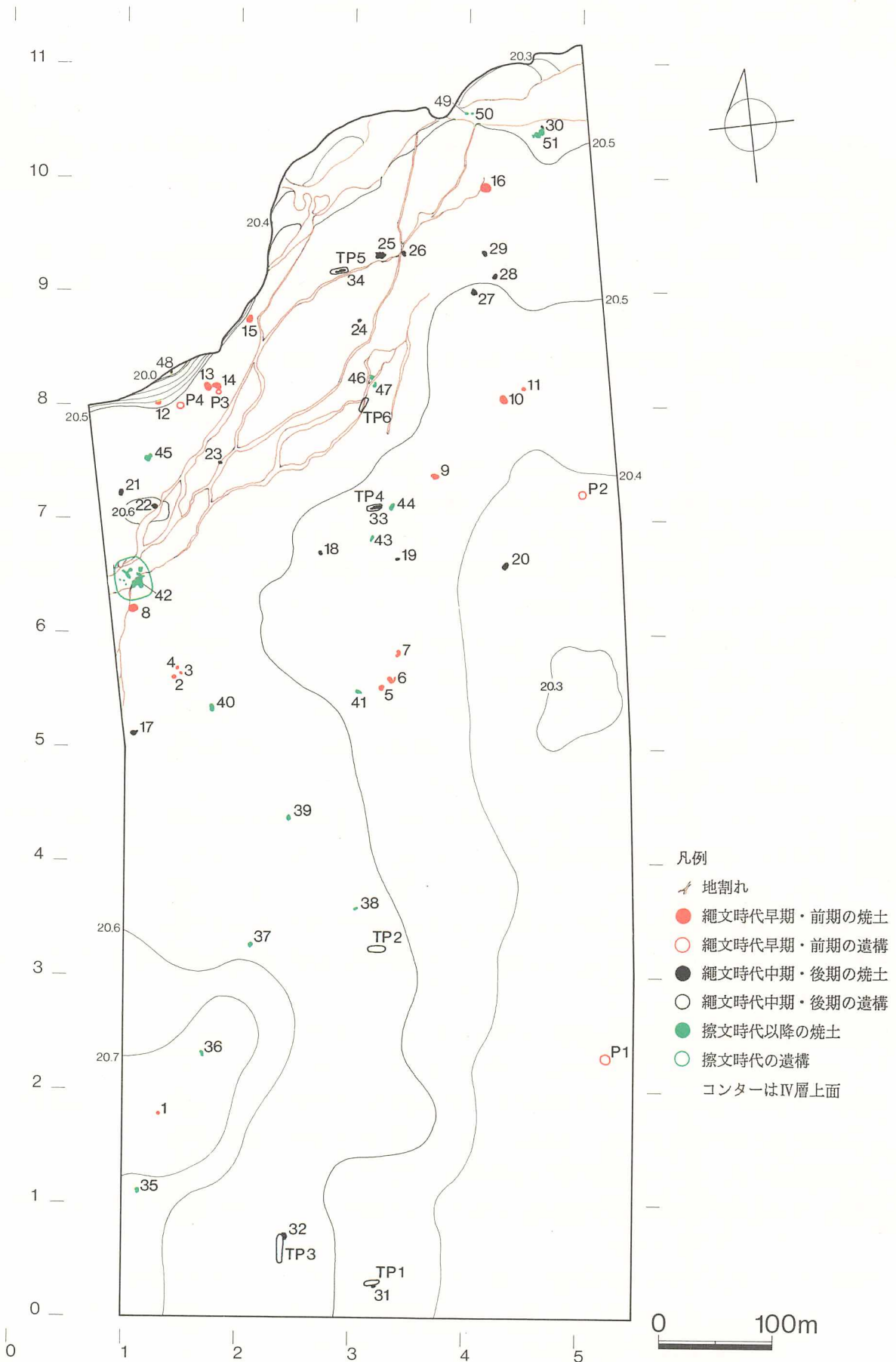
F・C 集中：剥片 (flake) ・ 碎片 (chip) が集中して出土した地点。

縞頁岩：木目状の白い縞がみられる珪質の頁岩で、珪化木の可能性がある。一般の頁岩・珪質頁岩と区別するために縞頁岩とした。なおこの原石は、現在でも漁川上流部で採取できることを、札幌市埋蔵文かセンターの羽賀憲二氏から御教示いただいた。

板状礫：厚さ6cm未満の板状を呈する礫。石皿・台石の素材として、あるいはそのまま台石的に用いられたものと考えている。

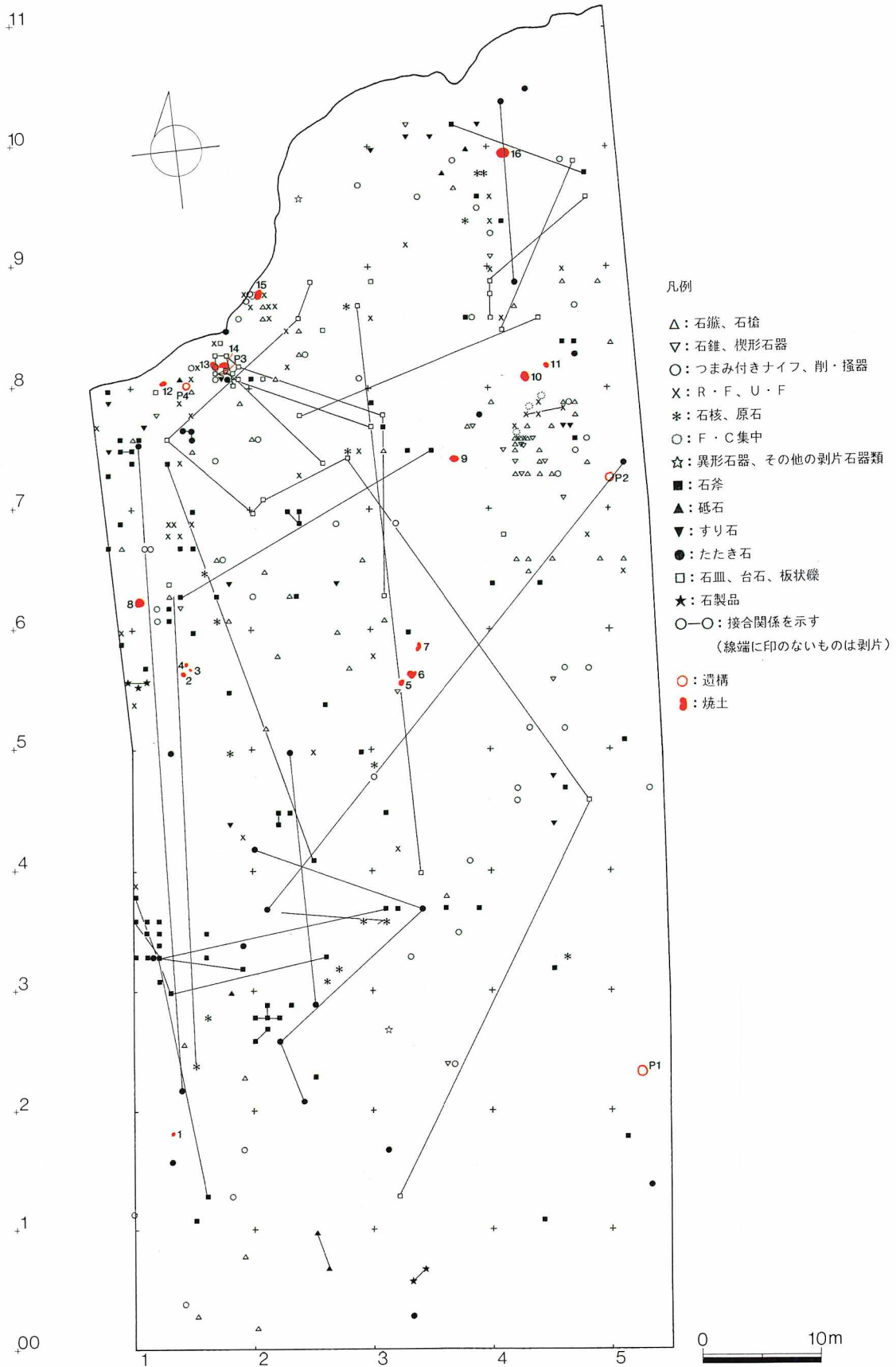
方割礫：様々に割られた (割れた) 礫で、焼けているものが目立つ。ワッカオイ遺跡の報告 (1977) で、鮑津が注目した「方割石」ほど割れ方に方向性はみられないが、「方割石」の細分に準じ、破断面の数によってB型 (1面) D型～ (4面) とその他の破片に細分した。なお破断面0のA型は、礫として扱っている。

Ⅲ 調査の方法



図Ⅲ-5 発掘区の地形と遺構の位置

IV 縄文時代早期・前期の遺構と遺物



図IV-1 遺構の位置と石器の分布



復元土器(中茶路式・中野式)



方割礫接合資料

1 遺構

縄文時代早期・前期の遺構としたものは、Ⅲ層上面及びⅡ層下面で確認されたもので、土壌4基、焼土16ヶ所がある(図Ⅳ-1)。

1) 土壌(図Ⅳ-2)

4基の土壌はいずれもⅢ層上面で確認されたもので、ほぼ円形のプランを呈し、小型で浅い。覆土はⅡ層とⅢ層が入り混じった土である。遺物はP3の覆土中に方割礫が含まれていたのみで、土壌自体の時期を決定することは出来ない。しかし、周辺の遺物、確認レベル等からP3・4とFP12~15は互いに関連する遺構と考えられ、FP12内から得られた土器片が東釧路Ⅳ式土器であることから、P3・4は東釧路Ⅳ式期の土壌と判断し、P1・2についても一応同時期のものとしておく。なお、これらの土壌及び焼土と遺物との関係については第Ⅷ章で詳述する。

2) 焼土(図Ⅳ-2~5)

焼土は16ヶ所が確認されており、FP1以外は調査区北半部に位置する。確認面はFP12と16の一部がⅡ層中にあるほかは全てⅢ層上面である。なお、焼土の土は攪乱部分を除き全て採取し、フローテーションを実施して、微細遺物の検出に努めた。以下、個々にその知見を記す。

FP1 比較的良く焼けており炭化物を含んでいる。ほかに遺物はない。

FP2 FP3・4と近接し、ほぼ同一レベルで確認されている。中央部分は比較的良く焼けており、フローテーションで炭化したクルミの内果皮片が確認されているほか、黒曜石剥片1点がある。

FP3 最も小さな焼土で、焼けはあまり良くない。遺物は確認されていない。

FP4 焼けは弱く、遺物も確認されていない。

FP5 FP6と近接し、ほぼ同一レベルで確認されている。焼けは弱く、遺物も確認されていない。

FP6 比較的良く焼けており、フローテーションで炭化したクルミの内果皮片が確認されている。

FP7 焼けはあまり良くない。遺物は黒曜石剥片1点がある。

FP8 最も良く焼けている焼土で、厚さも20cm以上ある。遺物は焼けた石斧片2点、黒曜石の剥片14点(うち13点が焼けている)、縞頁岩の剥片27点(うち23点が焼けている)がある。

FP9 比較的良く焼けており炭化材がみられる。ほかに遺物はない。

FP10 比較的良く焼けており、フローテーションで炭化したクルミの内果皮片が確認されている。

FP11 焼けは弱く、遺物も確認されていない。

FP12 土壌の項で触れたように、ユカンボシ川への落ち際近くで確認されたFP12~15及びP3・4は同一時期のものと考えられる。FP12の焼けはあまり良くない。焼土中からは東釧路Ⅳ式土器2片(接合、図Ⅳ-5)が、焼土上からは方割礫3点(接合、図Ⅳ-5)が出土している。

FP13 良く焼けて締まっており、厚さも25cm以上ある。黒曜石剥片4点が出土している。

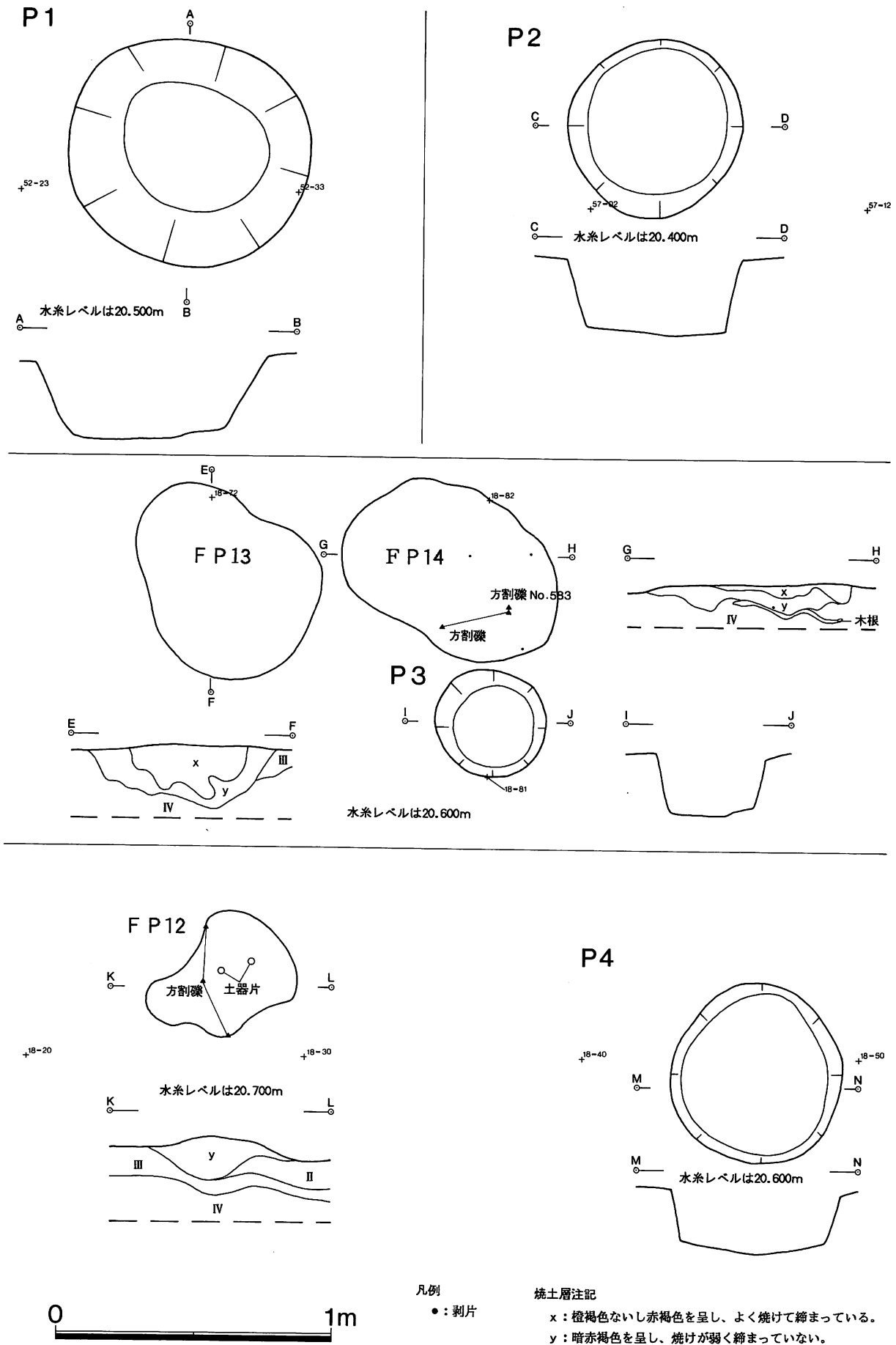
FP14 良く焼けて締まっている。厚さは10cm程であるが、焼土中及び焼土上から方割礫3点(うち2点が接合、図Ⅳ-5)、焼けた頁岩の剥片3点、黒曜石剥片17点(うち5点が焼けている)が出土しているほか、周辺にも方割礫、たたき石、すり石などが分布している。

FP15 良く焼けて締まっており、厚さは15cmである。焼土中からの出土遺物は焼けた黒曜石剥片1点であるが、すぐ南側にF・C集中があり、周辺には剥片石器類が多くみられる。

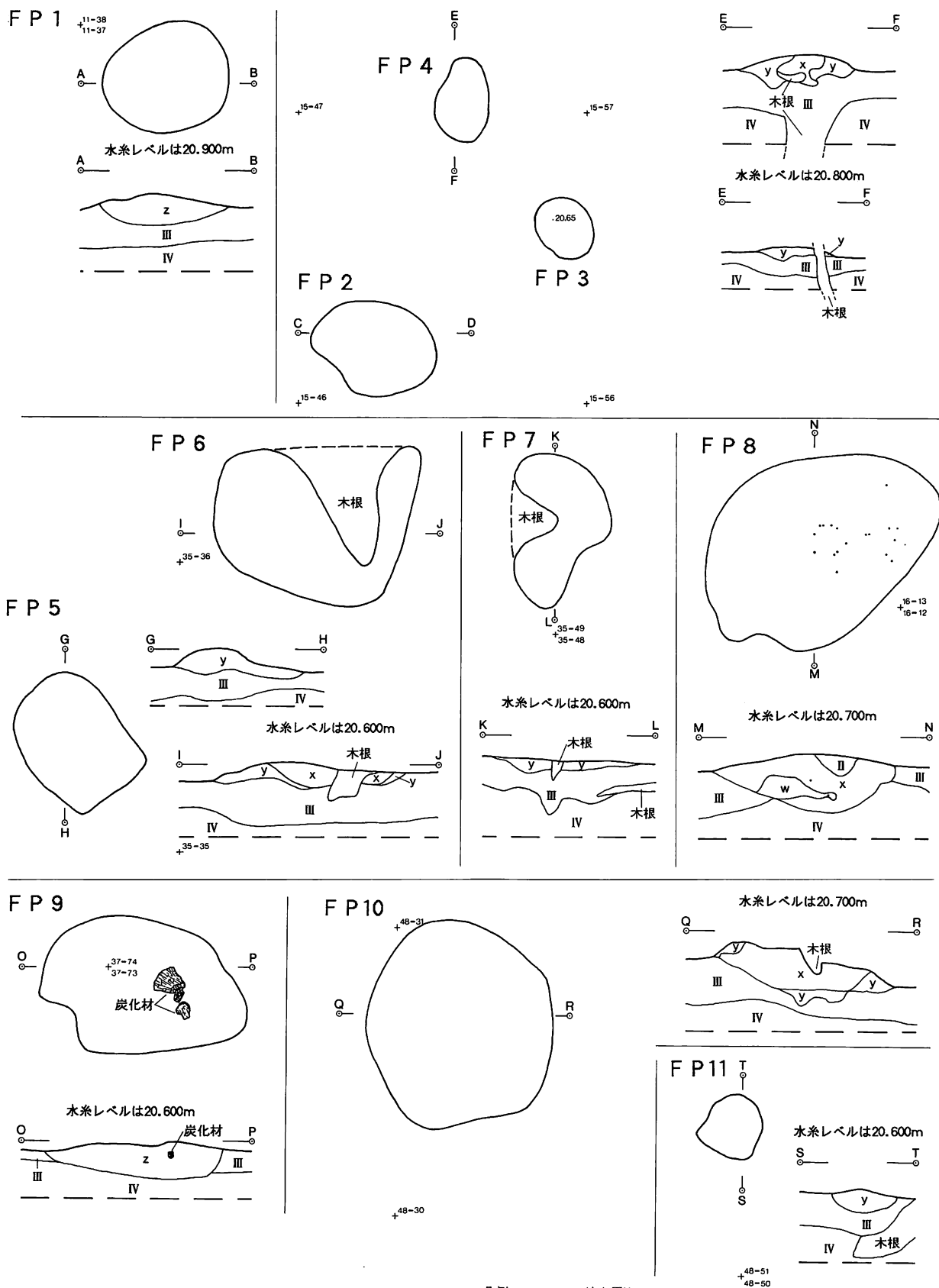
FP16 最も大きな焼土であるが、焼けは弱く締まっていない。地割れにより開いた部分に木の根が入り込み攪乱が著しい。遺物は焼けた黒曜石剥片2点がある。

焼土のうち、遺物が全く確認されていないのはFP3・4・5・11の4ヶ所で、他は何らかの遺物が含まれている。以下に整理すると、FP1・9は炭化材ないし炭化物のみが確認されているもの。

IV 縄文時代早期・前期の遺構と遺物



図IV-2 土壌・焼土平面及び断面 (1)



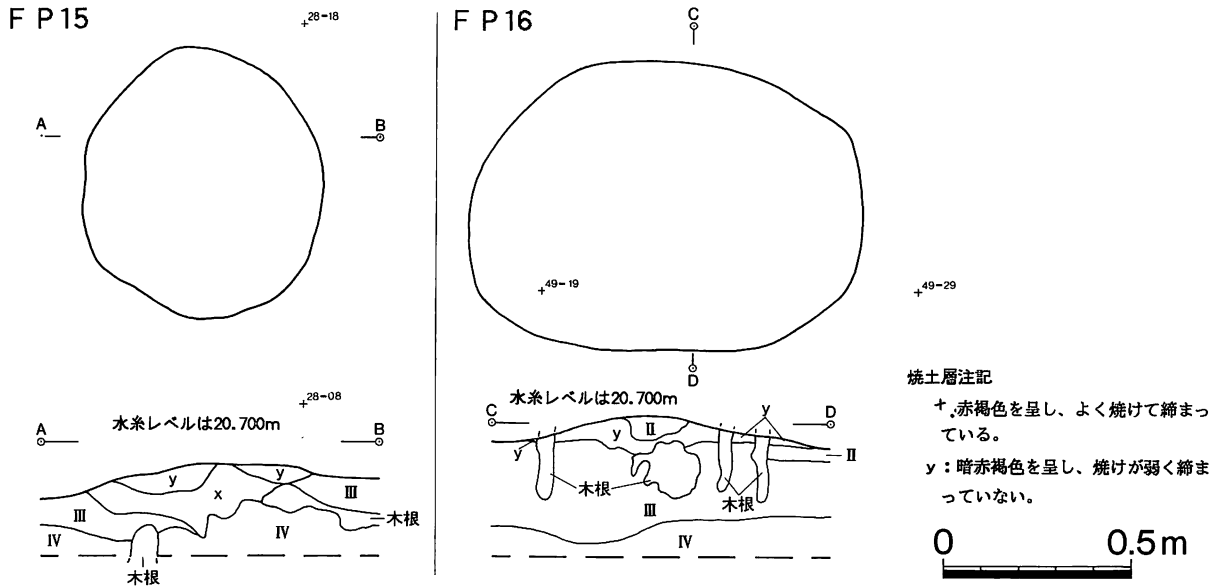
凡例
●: 剥片

焼土層注記

- w: 赤褐色を呈し、非常によく焼けて締まっている。
- x: 橙褐色ないし赤褐色を呈し、よく焼けて締まっている。
- y: 暗赤褐色を呈し、焼けが弱く締まっていない。
- z: 暗赤褐色を呈し、炭化材・炭化物を含む。



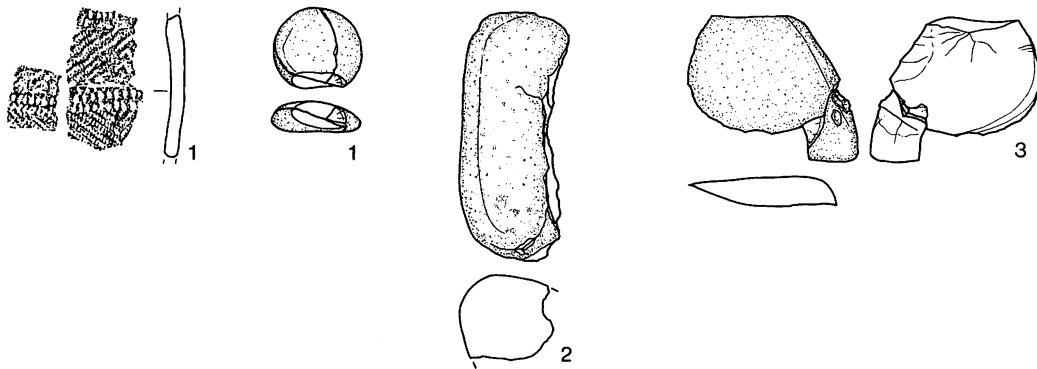
図IV-3 焼土平面及び断面 (2)



図IV-4 焼土平面及び断面(3)

表IV-1 焼土出土石器等一覧

焼土No.	種別	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	図番	遺物No.	備考
FP8	石斧片	片岩	-	-	-	0.2		446,447	重さは2点一括
FP12	方割礫B	泥岩	34.1	31.4	11.7	16.5	1	490,497,498	接合(扁平円礫)、焼けている
FP14	方割礫C	安山岩	96.0	47.2	33.0	158.8	2	583	
FP14	方割礫破片	泥岩	57.8	52.4	12.9	40.6	3	584,593	接合、焼けている



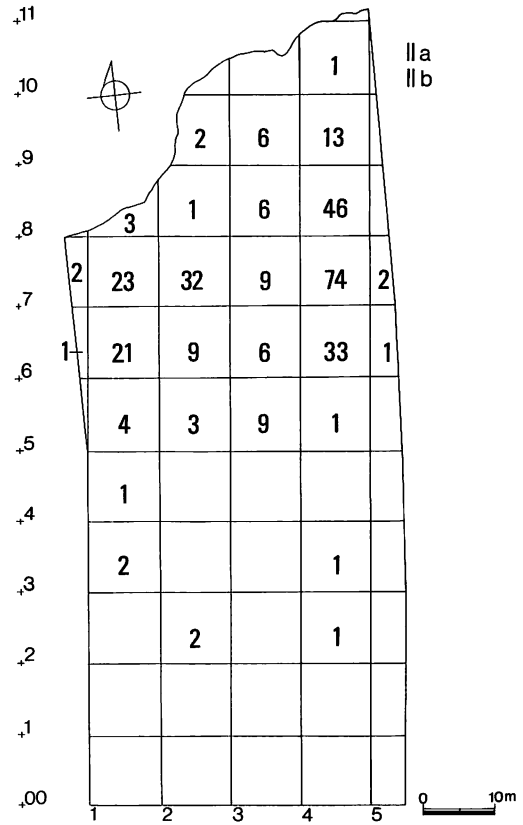
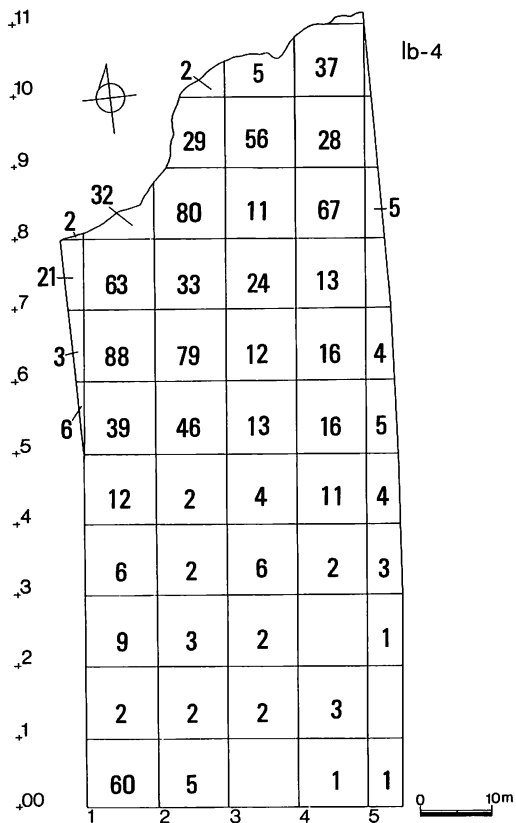
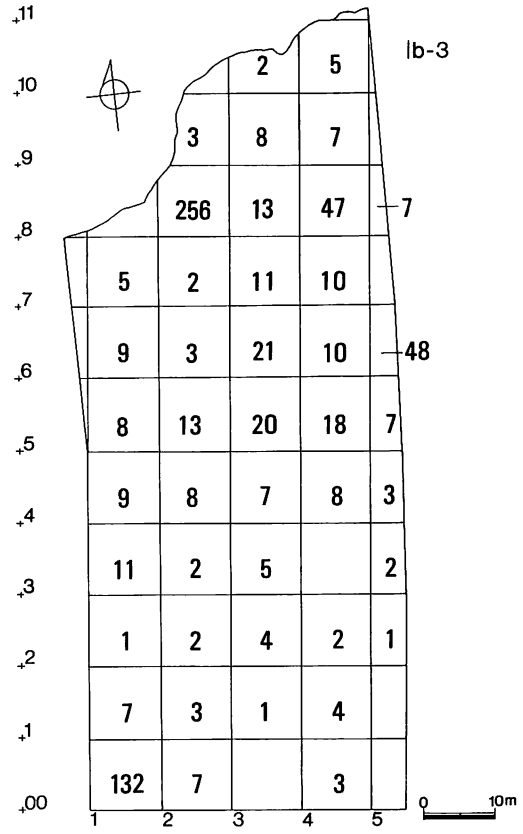
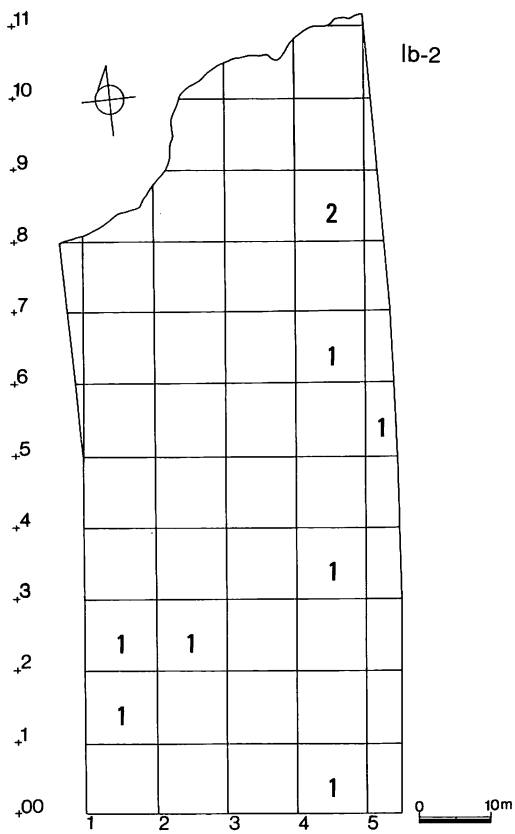
図IV-5 焼土出土の石器類

FP 2・6・10は炭化したクルミの内果皮片が確認されているもの。FP 7・8・13~16は黒曜石や縞頁岩の剥片(焼けているものを含む)が出土しているもので、この他、FP 8からは焼けた石斧破片が、FP 12からは土器片が、FP 12・14からは焼けた方割礫が出土している。焼土の状態をみると、もっともよく焼けているものはFP 8で、良く焼けて締まっているものに、FP 1・2・6・9・10・13~15があり、焼けの弱いものにはFP 3~5・7・11・12・16がある。焼けが良くクルミの内果皮片が出土しているFP 2、6、10と、焼けの弱いFP 3・4、5・7、11はそれぞれが近接しており、焼けの良いものを中心とし、それから派生ないし廃棄されたひとまとめの焼土と考えられる。FP 8は、多くの焼けた剥片類が出土しており、中に石斧片も含まれていることから石器製作に関する焼土と考えられる。残念ながら図III-5に示したように、直ぐ北側部分に擦文期の竪穴が彫り込まれており、地割れも走っているため周辺の遺物との関係が十分に捉えられていない。

なお、FP 12~15をはじめ、焼土個々の時期や遺物との関係については第VIII章で詳述する。

2 包含層の遺物

1) 土器



図IV-6 早・前期の土器分布図 (Ib-2, Ib-3, Ib-4, IIa・IIb)

I 群 b 2 類土器 (図IV-8-1~8)

コッタロ式は9点出土している。調査区の東側と南側に散在する。絡条体圧痕文の施されたもの(1~6)と結束のみられるもの(7・8)がある。1・2は丸い軸に細い2本の紐を交互に右巻と左巻に交差させて巻いた原体によるもの、3~6は丸い軸に細い紐を巻いた原体によるものである。

I 群 b 3 類土器 (図IV-7-1~3、図IV-8-9~35)

中茶路式は714点出土している。調査区北半の西側と中央部東側、南西端に分布する。調査区外の東と南西にさらに広がると思われる。1・0区、2・8区、4・8区、5・6区に集中がみられる。

図IV-7-1は間隔の広い扁平な貼付帯の間にRL+LRとLR+RLの結束羽状縄文が施され、貼付帯の上下が擦り消されている。器面には黄褐色の部分と黒褐色の部分がある。内面は、なで調整され暗褐色で、部分的に炭化物が付着している。2・8-31区より出土した。2は2つの頂部をもつ上面観楕円形の深鉢形土器である。口縁には小突起が並んでいる。横環する貼付帯を縦の短い貼付でつないでいる。縦、斜めの貼付も施されている。横環する貼付帯の間には、短縄文、2段のRLの圧痕、細い軸に2本の紐を交互に右巻と左巻にした原体による絡条体圧痕文が施されている。口縁にも同様の絡条体圧痕文が施されている。底部付近にはRLの斜行縄文が施されている。器面は茶褐色で口縁の一部は黒褐色。内面は、なで調整され黒褐色、底部は暗褐色である。内面の口縁部から底部付近まで炭化物が付着している。2・8-52区より出土した。3は口縁に2つの頂部をもち、上面観と底面が楕円形の土器である。間隔の狭い扁平な貼付帯の間にR原体の短縄文を施し、底部付近にRLの結束による綾絡文をめぐるさせている。器面には燈褐色の部分と黒褐色の部分がある。内面は、なで調整され褐色で部分的に炭化物が付着している。2・8-41区より出土した。



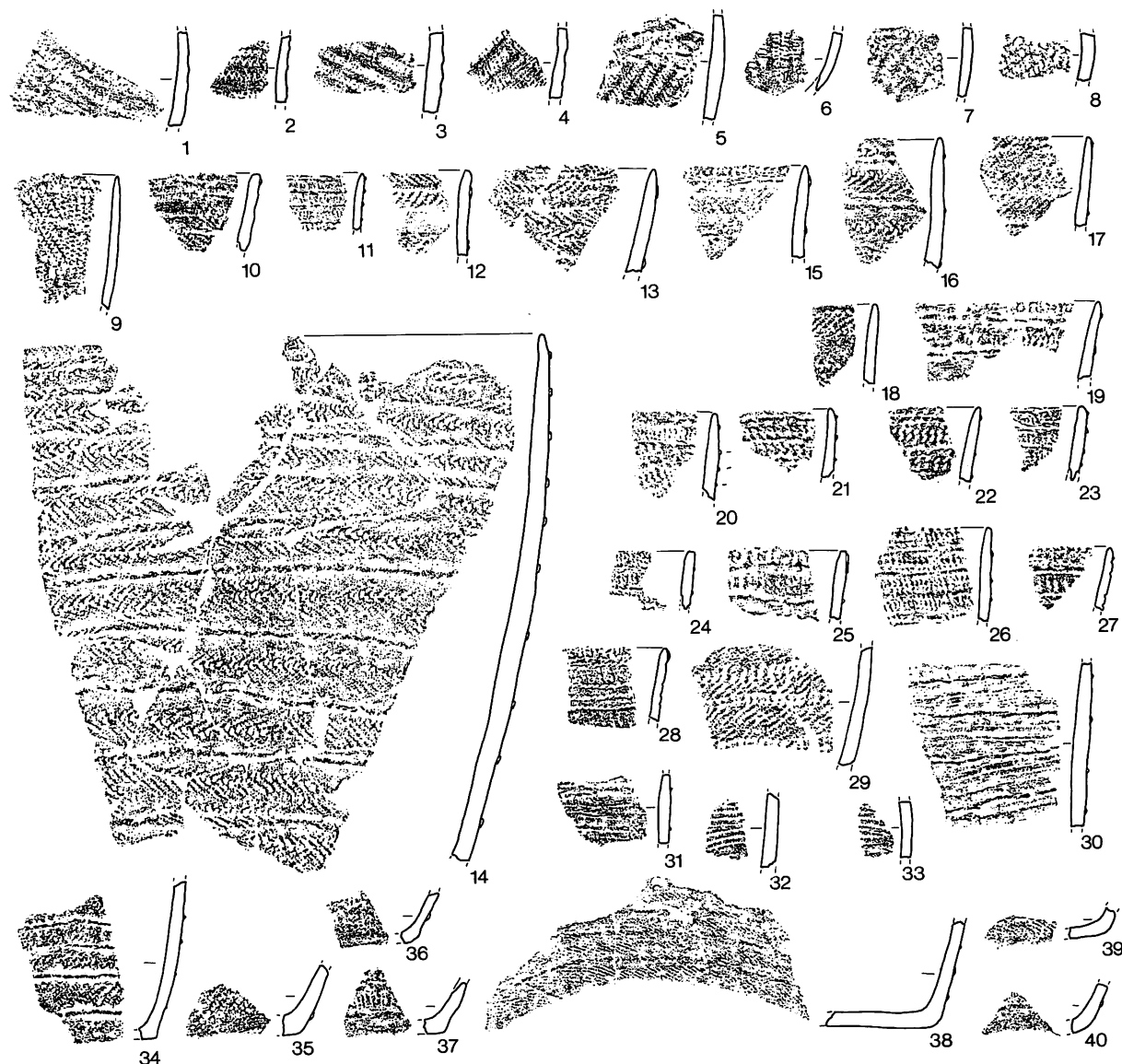
図IV-7 包含層出土の土器 1 (I b-3, II a)

図IV-8-9~11は絡条体圧痕文が施されているものである。9は口縁がゆるい山形をなす。丸い軸に細い2本の紐を交互に右巻と左巻にした原体による鋸歯状の絡条体圧痕文が施されている。10は口縁貼付帯の下に丸い軸に細い紐を巻いた原体による絡条体圧痕文を横環させている。口縁と内面に炭化物が付着している。11は貼付帯の間に、細い絡条体による押し引き風の圧痕が施されている。

12~16は結束羽状縄文が施されているものである。貼付帯に施文されているもの(12)、貼付帯の間から貼付帯に施文されているもの(13・14)、貼付帯の間に施文されているもの(15・16)がある。12は扁平な貼付帯にRL+LRの結束羽状縄文が施され、貼付帯の間が擦り消されている。13~16は羽状縄文を施してから貼付帯の上下を擦り消している。13・14・16はRL+LR結束羽状縄文が口縁まで及んでいる。13・14の貼付帯は扁平で施文によりつぶれている。内面はいずれもなで調整されている。14は内面に炭化物が付着している。2・8-22区から出土した。15はLR+RLの結束羽状縄文が施され、口縁に縄端の圧痕が2列施されている。16は内面がなで調整されている。

17・18は斜行縄文が施されているものである。17は断面三角形の貼付帯の上からLRの斜行縄文が施されている。18はLRの斜行縄文を施した後で、口縁のやや下を帯状に擦り消している。

19~26は貼付帯の間に短縄文が施されているものである。19は口縁にも短縄文が施され、貼付帯の



図IV-8 包含層出土の土器 2 (Ib-2, Ib-3)

上下が擦り消されている。20・21の口縁には条の細いRLの斜行縄文が施されている。20には斜めの貼付もみられる。器面は暗灰褐色。内面がなで調整されている。22は口縁にも短縄文が施されている。貼付帯の断面は三角形である。内面は、なで調整され炭化物が付着する。23は貼付帯が微隆起線状になり間隔が狭い。24は間隔の狭い扁平な貼付帯にまで施文が及んでいる。口唇断面は角形である。器面・内面とも磨かれている。25は断面三角形の貼付帯と口縁を短い縦の貼付でつないでいる。口唇には小突起が並んでいる。26は器壁が薄く、間隔の狭い扁平な貼付帯の間に短縄文を密に施している。

27・28は縄線文が施されているものである。口縁に短縄文を施し、縄線文の間を同じ原体による短縄文で埋めている。縄線文は27が2段の縄による2条単位、28が2段の縄による1条と3条単位である。28の内面には部分的に炭化物が付着している。

29～33は胴部である。29は縄端による刺突が施されている。器面は暗燈褐色、内面は黒褐色で部分的に炭化物が付着している。30～33は魚骨回転文が施されている。30・31には断面が丸みを帯びた貼付帯が横環する。30の器面は黒褐色、内面は暗黄褐色である。1・6-96区より出土した。31の器面は燈褐色、内面は暗褐色で部分的に炭化物が付着している。2・2-43区より出土した。32・33は同一個体と思われる。器面、内面ともに薄茶褐色である。32は3・5-54区、33は3・5-60区より出土した。

34～40は底部である。角形のもの(34～37)と丸みを帯びたもの(38～40)がある。37はやや張り出す。34の器面には一部に炭化物が付着する。内面は黒褐色で部分的に暗黄褐色。38の外表面は暗褐色、内面は黒色で炭化物が付着する。内面の底は褐色である。2・8-52区より出土した。

I群b4類土器(図IV-9-1～32)

東釧路IV式は1020点出土している。調査区北半と南西端に分布する。1・0区、1・6、2・6区、1・7、1・8区、2・8区、3・9区、4・8区、の6カ所に集中がみられる。ユカンボシ川に近づくにつれて新しい段階のものが多くなる傾向がある。

1～9は比較的薄手で古い段階のものである。1は細い原体による2条単位の綾絡文と自縄自巻の原体によるRL+LRの羽状縄文が交互に施されている。口唇は薄く尖り気味で体部に向かって厚みを増す。器面は黒褐色の部分と暗茶褐色の部分があり、内面は暗褐色である。1・6-80、1・6-92、2・5-12、2・6-12区より出土している。2は口唇がやや内傾し、自縄自巻の原体によるRL+LRの羽状縄文が施される。器面は黒褐色、内面がなで調整され暗褐色である。3は口縁部にLRの短縄文が施されている。器面、内面ともに燈褐色。4は口縁にRLの短縄文が施されている。口唇は同じ原体による圧痕で刻まれている。器面、内面ともに暗灰褐色である。5・6・8は口縁に太めの自縄自巻の原体によるRL+LR羽状縄文が施される。7は自縄自巻の原体によるRL+LR羽状縄文とみられる縄文が施され、口縁に短縄文が加えられている。9には条の太いRLの縄文が施されている。

10～18は比較的厚手で新しい段階のものである。10は自縄自巻の原体による撚糸文風のRL+LR羽状縄文が施されている。口唇はやや厚く、断面は丸みを帯びた角形である。器面は暗褐色、内面は黒褐色で部分的に炭化物が付着している。11・12は口唇が角ばり、自縄自巻のLR+RL羽状縄文が施されている。11の器面は暗茶褐色、内面は暗黄褐色。12の器面は茶褐色、内面は暗茶褐色で部分的に炭化物が付着している。1・6-92、2・6-44、2・6-52、2・6-54区より出土した。13～15は内面にも施文されている。13・14は口縁にRLの短縄文と横走気味のRL+LR羽状縄文と思われる施文が認められる。内面にも縄文が認められる。15は13・14より薄手で口唇は丸みを帯びる。器面には自縄自巻の原体による横走気味のLR+RL羽状縄文が施されている。内面にはRLの斜行縄文が施されている。16・17は同一個体である。口縁部が薄く体部がやや厚手で、器面に自縄自巻RRLL+LLRの原体による2条単位の撚糸文風の縄文が施されている。口唇・口縁には同じ原体の縄端による圧痕が施され

ている。16は1・7-19区、17は1・7-39区より出土した。18は器壁が厚く胎土に砂粒を多く含む。器面にはRL斜行縄文が間隔をあけて施されている。2次焼成を受けており、器面は暗褐色で炭化物が付着している。内面は、なで調整され褐色である。3・9-59区より出土した。

19~28は胴部である。19・20には綾絡文が施されている。19は自縄自巻の原体によるRLの斜行縄文が施されている。20は綾絡文の間にRLの短縄文が施されている。19は2・5-77区、20は2・5-09区より出土した。21は自縄自巻のRL+LR羽状縄文が施されており、LRの方が撚糸文風になっている。内面は、なで調整され部分的に炭化物が付着する。22は自縄自巻のRL+LR羽状縄文が施されており、同じ原体の縄端による刺突が加えられている。1・7-89、1・8-71、2・7-06区より出土した。同様のものが0・5、1・6、1・8、2・7区に出土している。23は太めの自縄自巻RL+LR羽状縄文が間隔をあけて施される。24・25には条の太いLRの縄文が施されている。26・27は同一個体と思われる。器壁は厚く器面は黄褐色、内面は暗褐色である。2条単位の縄の圧痕と自縄自巻RL原体の縄端による圧痕が施されている。27には自縄自巻RRL+LLRの原体による2条単位の撚糸文風の縄文が施されている。26は1・7-29、1・7-38、1・7-48、1・8-30から、27は0・7-96、0・7-97区より出土している。28の器面には自縄自巻LRの原体による圧痕が2条単位で横環する。その間を2・3本単位で斜めにつないで三角形に区画し、中に短縄文が施されている。器面は暗褐色、内面は黒褐色で部分的に炭化物が付着する。19・20は古い段階のもの、21~28は比較的新しい段階のものである。

29~32は底部である。29はやや角ばり、自縄自巻RLの縄文が施されている。30は丸みを帯び、自縄自巻LRの縄文が施されている。31・32の底には自縄自巻RL原体による縄端刺突が施されている。

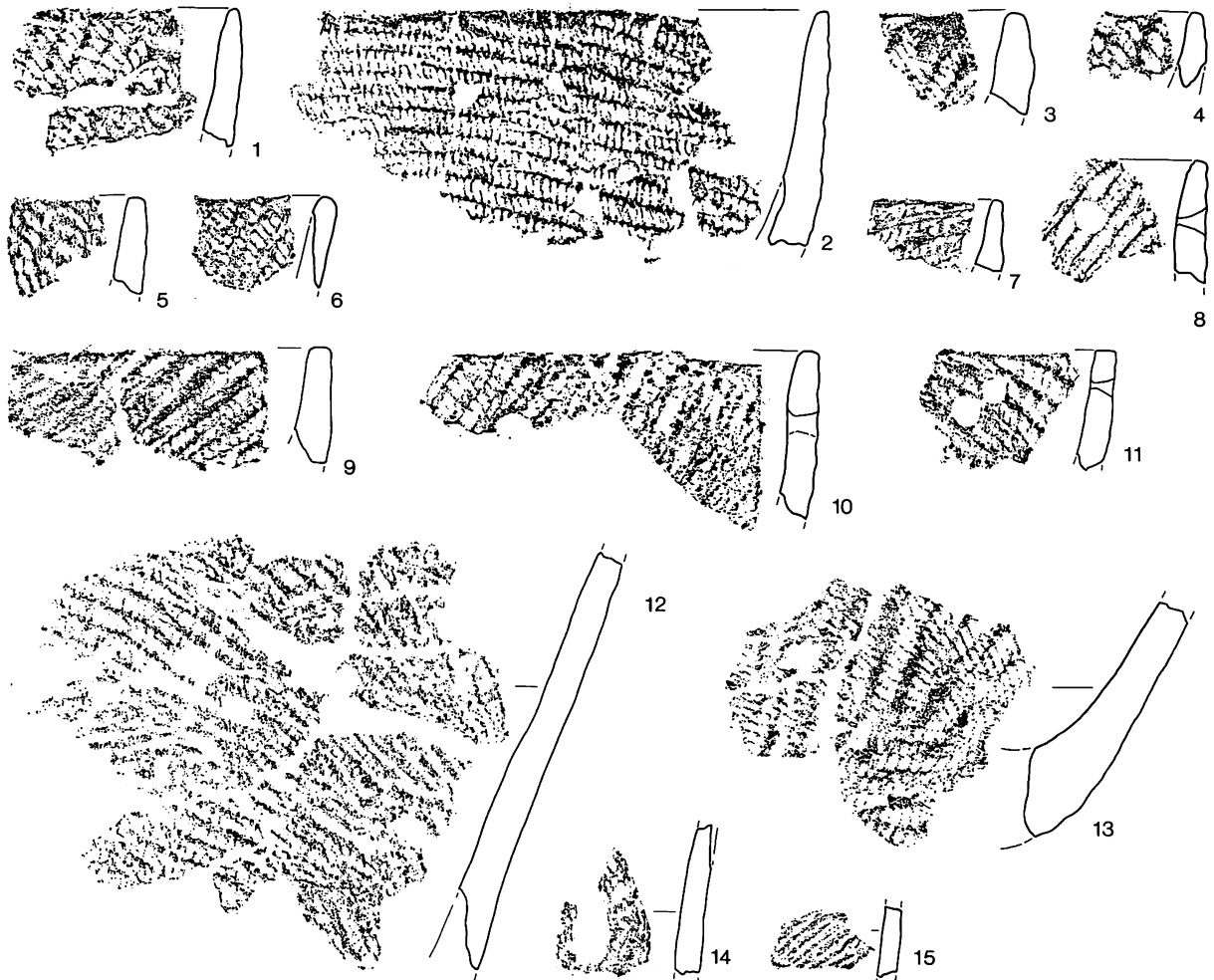


図IV-9 包含層出土の土器 3 (I b-4)

II群 a・b類土器 (図IV-7-4、図IV-10-1~15)

中野式は318点出土している。調査区北半に分布する。1・6、1・7区、2・7区、4・6、4・7区、4・8区の4カ所に集中がみられる。器壁が厚く、胎土には繊維が混入している。図IV-7の4は上面観が楕円形の深鉢形土器である。口唇は製作途中のものか、あるいは輪積みがはずれたような状態の土器である。器面は黄褐色でLRの斜行縄文が施されている。内面は黒色で口唇半ばまで炭化物が付着している。4・7-26区から出土した。図IV-10の1~6は口唇断面が丸みを帯びたものである。1はLRの斜行縄文が施されている。器面口縁部には炭化物が付着している。2は太いRLの縄文が横走気味に施されている。胎土に小礫を含む。4・7-26区より出土した。3~6はLRの斜行縄文が施されている。7・8は口唇が薄くなるものである。内面がなで調整されている。7は器面がなめらかで褐色、8は器面と内面が黒色である。穿孔されている。4・7-62区より出土した。9~11は口唇断面が四角形のものである。10は焼成がよく堅い。器面には一面に炭化物が付着している。口唇と内面がなで調整されている。7~10には、いずれもLRの斜行縄文が施されている。11は胎土に砂粒が多く風化している。補修孔が斜めに2つあけられている。12は胴部である。内面には底部付近に炭化物が付着している。いずれもRLの斜行縄文が施されている。13は底部である。尖底で底が部厚い。器面には横位に、底の部分には縦位に太いLRの縄文を施している。2・7-83区より出土した。

大麻V式は2点出土している。条の細いLRの縄文が施されている。焼成がよく堅い。14は3・6-07区、15は4・9-27区より出土した。



図IV-10 包含層出土の土器 4 (IIa・IIb)

2) 石器類 (表IV-2~33、図IV-1・11~20、写真図版31~40)

早期・前期に属する石器類としては、剥片石器類が石鏃57点、石槍5点、彫器1点、楔形石器3点、石錐14点、つまみ付きナイフ31点、削・搔器17点、R・F41点、U・F9点、石核11点、原石5点、スポール1点の計195点で、礫石器類が石斧(破片を含む)273点、すり15点、砥石5点、たたき石12点、石皿2点、板状礫5点、石製品3点の計315点ある。剥片類は黒曜石・縞頁岩・頁岩・メノウ合わせて6,610点、方割礫229点、礫103点で、総計7,452点と他に方割礫の接合資料58個体がある。

石器類の分布をみると、特徴的な地点が大きく3ヵ所ある。一つは1・3、2・2区周辺の石斧片集中区域で、二つ目は遺構の項でも触れたF P 12~15周辺、今一つは4・7区のF・C集中南側である。これらを順に第一地点~第三地点とすると、第一・第二地点は東釧路IV式期に、第三地点は静内中野式期に属するものと思われる。なお焼土の項でも述べたように、1・6区のF P 8周辺にも遺物の集中区域が存在した可能性が強いが、擦文期の竪穴が掘り込まれたために把握できない。また、ユカンボン川沿いの大きな地割れ南側にも、遺物が並ぶ傾向が認められる(図III-5、IV-1参照)が、地割れ北側部分は川に向かって傾いており、遺物もほとんど残されていないことから、地割れによって集中地点が破壊されている可能性もある。

以下、器種毎に主な点を記す。

石鏃 形態別の内訳は、柳葉形17点、無柄平基11点、無柄凹基7点、木葉形4点、スベード型3点、五角形1点、菱形1点と破片12点で、総数56点のうち11点が焼けている。素材は全て黒曜石で、花十勝が2点みられる。

出土位置をみると、第三地点及びその周辺がもっとも多く、他はまばらである。

図番1・18は、焼けが酷く剥離が不明瞭である。この他にも7・11・13・19等焼けているものが目立つ。2・7・8・14・24~26のように、無柄凹基あるいは平基で両端を折り取ったような形のものは、静内中野式に伴うものと思われる。また、スベード型とした9・12・13は基部の両側縁に抉りを入れた形態のもので、これらも静内中野式に伴うものであろう。3は大型の三角鏃で、続縄文時代の後北期に属す可能性もある。5・20は削・搔器の可能性もある。14・25は習作と思われるもので、14は背面、25は両面の縁辺にのみ加工がみられ、25は肉厚で反りとねじれがある。15・16・22などの五角形を呈するものは東釧路IV式に伴うものである。29は典型的な柳葉形鏃で、中茶路式土器に伴うものであろうか。

石槍 5点のうち4点までが基部片である。これら基部片は、いずれも前記第二地点の周辺から出土している。図番31は基部に抉りのあるもので、12の石鏃とほぼ同様の形態であり、やはり静内中野式に伴うものであろう。出土したのは第三地点の真ん中である。

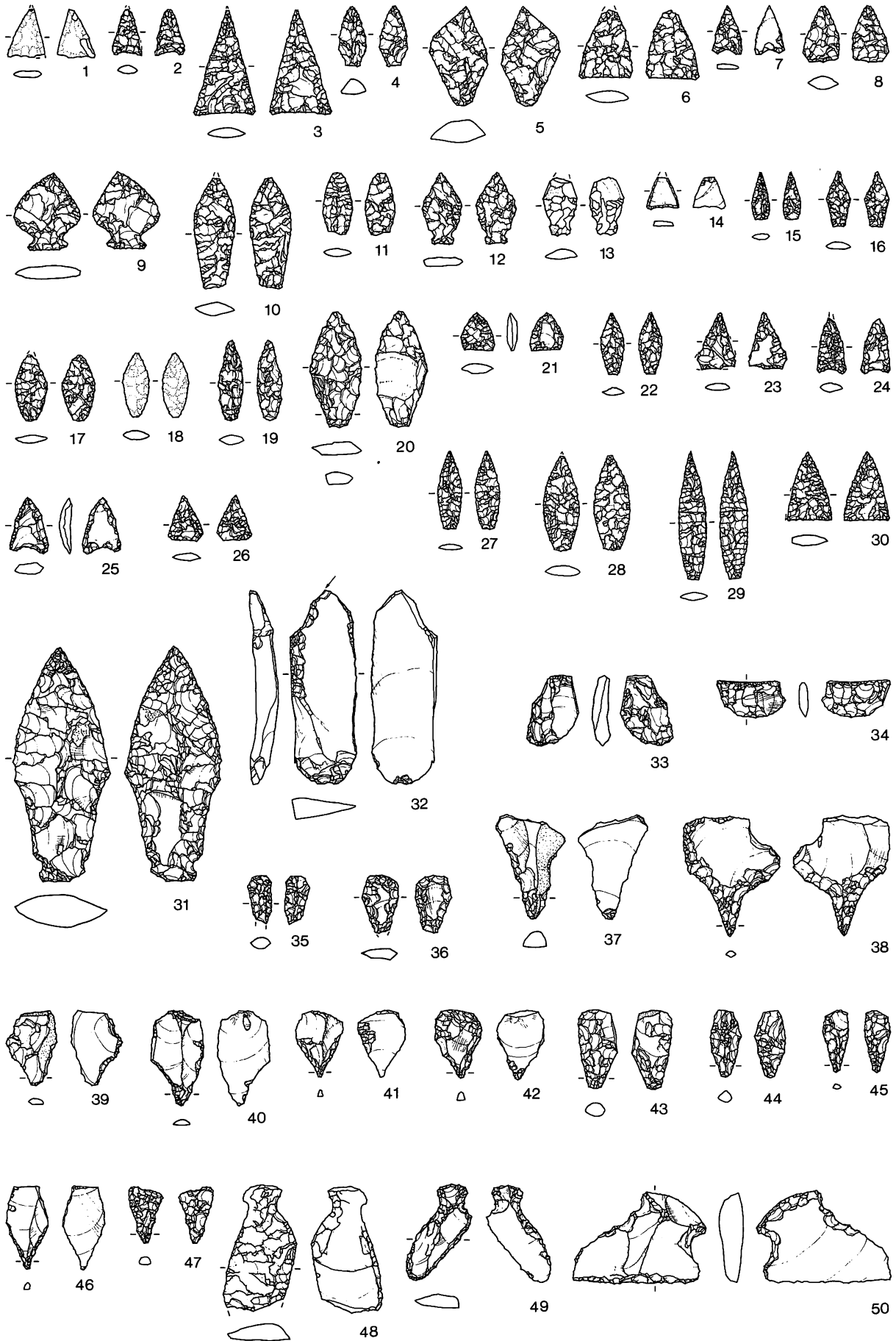
彫器 III層下面からの出土で、旧石器時代の可能性もある。灰褐色を呈する珪質頁岩製で、彫刀面はほぼ直角を呈す。交差刃型とも思われる。周辺をIV層下面まで掘開したが、石器類は縄文も含め全く得られなかった。

楔形石器 第三地点から黒曜石製のもの2点が出土している。

石錐 14点のうち6点が第三地点からの出土である。形態は有柄10点、棒状4点である。素材は黒曜石が12点で、メノウと頁岩が各1点ある。刃部先端を欠いているものがほとんどで、刃部のつぶれているものも目立つ。図番39は腹面、40・41・46は背面からのみの刃部加工で、39は折れた先端を再調整している。なお、40はその製作技法と形態が、カリンバ2遺跡の報告(上屋 1989)に述べられている石錐の特徴と良く合致するが、カリンバ2遺跡例は縄文中期トコロ6類に伴うもので、石材は珪岩ないし珪質頁岩である。

表IV-2 石鏃一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	形態	備考
1	0・6-96	16.6	13.2	1.8	0.4	黒曜石	1	321	無柄平基	一側端わずかに欠損、焼けている
2	1・0-52	19.3	12.1	2.3	0.6	黒曜石		24	木葉形	先端欠損、焼けている
3	97	14.9	10.3	2.8	0.4	黒曜石	2	301	無柄凹基	一側端わずかに欠損
4	1・2-46	14.1	13.8	1.8	0.4	黒曜石		21	無柄凹基	先端欠損、両面に主利鈍面を残す
5	92	36.7	22.7	3.8	2.0	黒曜石	3	40	無柄平基	一面に主利鈍面を残す
6	1・6-32	20.7	9.5	6.4	1.1	黒曜石	4	326	柳葉形?	肉厚、基部欠損、両側縁つぶれ、ドリルか
7	75	35.5	20.4	7.8	4.2	黒曜石	5	216	木葉形?	凸状部あり、ナイフか
8	80	23.9	18.7	3.8	1.5	黒曜石	6	233	無柄平基	先端・一側端わずかに欠損
9	1・7-05	16.9	10.3	2.2	0.3	黒曜石	7	289	無柄凹基	腹面・一側縁先端側無調整、焼けている
10	54	19.7	12.8	8.9	0.9	黒曜石	8	279	無柄平基	肉厚、一側縁つぶれ、一側端わずかに欠損
11	98	27.1	23.7	4.2	2.1	黒曜石	9	283	スベード	ナイフか
12	2・0-01	24.2	12.0	2.8	0.8	黒曜石		61	柳葉形	先端欠損
13	2・5-11	49.4	14.7	4.8	2.4	黒曜石	10	219	柳葉形	先端わずかに欠損
14	27	14.9	15.7	4.1	1.1	黒曜石		222	無柄平基	肉厚、先端わずかに欠損
15	79	21.9	10.3	2.7	0.6	黒曜石	11	221	柳葉形	先端欠損、焼けている
16	86	17.9	8.8	2.9	0.4	黒曜石		226	—	先端部片
17	2・6-14	25.3	14.4	3.0	0.8	黒曜石	12	225	スベード	ナイフか
18	32	20.6	12.1	3.6	0.8	黒曜石	13	223	スベード	先端欠損、焼けている、ナイフか
19	95	11.1	7.6	1.7	0.2	黒曜石		511	柳葉形	先端欠損、折れてから焼けている
20	2・7-05	10.5	11.4	1.9	0.2	黒曜石	14	267	無柄凹基	先端欠損、習作か
21	2・8-16	16.7	6.0	1.8	0.2	黒曜石	15	380	柳葉形	
22	20	9.9	12.8	1.7	0.3	黒曜石		469	—	基部片、焼けてから折れている
23	3・3-67	19.5	7.5	2.3	0.2	黒曜石	16	64	五角形	
24	3・6-10	23.6	11.4	2.6	0.6	黒曜石	17	270	柳葉形	先端わずかに欠損
25	3・7-14	22.8	9.4	3.2	0.6	黒曜石	18	286	柳葉形	焼けている
26	86	16.4	14.4	2.8	0.7	黒曜石		472	木葉形?	基部部片、一面に原石面を残す
27	3・9-77	10.0	9.0	1.0	0.1	花十勝		461	—	先端片
28	4・6-25	17.0	12.1	3.7	0.7	黒曜石		329	木葉形	未製品、先端欠損、焼けている
29	34	13.8	12.0	3.0	0.4	黒曜石		330	—	先端片
30	35	28.5	9.1	3.0	0.7	黒曜石	19	272	柳葉形	焼けている
31	55	18.8	9.7	3.0	0.4	黒曜石		280	—	先端部片
32	95	41.3	18.5	6.9	4.8	黒曜石	20	277	柳葉形	一側縁基部側無調整、ナイフか
33	4・7-08	15.4	13.7	4.0	0.5	黒曜石		307	—	先端部片
34	22	12.9	11.9	3.4	0.5	黒曜石	21	367	無柄平基	肉厚、先端わずかに欠損
35	24	21.9	7.9	2.4	0.3	黒曜石	22	308	柳葉形	
36	25	15.3	14.3	4.2	0.9	黒曜石		331	無柄凹基	先端・一側端わずかに欠損
37	25	17.9	12.0	1.4	0.3	黒曜石		343	—	先端部片、両面に主利鈍面を残す
38	25	19.0	13.0	2.4	0.6	花十勝		354	—	先端部片、両面に主利鈍面を残す、習作か
39	32	19.7	13.5	2.2	0.5	黒曜石	23	323	無柄平基	両面に主利鈍面を残す、習作か
40	35	14.3	12.5	2.1	0.4	黒曜石		332	—	先端部片
41	36	12.1	12.3	2.0	0.4	黒曜石		366	—	未製品片
42	42	15.2	17.2	3.6	1.0	黒曜石		350	無柄平基	先端欠損、一面に主利鈍面を残す
43	43	17.8	10.2	2.7	0.5	黒曜石	24	349	無柄凹基	一面に主利鈍面を残す
44	44	19.6	13.5	3.0	0.8	黒曜石	25	348	無柄凹基	反り・ねじれあり、両面に主利鈍面を残す、習作か
45	52	16.2	9.0	2.5	0.5	黒曜石		361	—	中央部片
46	68	19.7	19.1	4.3	1.8	黒曜石		314	無柄平基	先端欠損
47	77	15.3	12.3	2.4	0.4	黒曜石	26	312	無柄平基	両側端わずかに欠損
48	78	16.9	17.5	3.9	1.3	黒曜石		344	—	未製品片
49	83	27.3	8.8	1.6	0.4	黒曜石	27	345	柳葉形	
50	4・8-26	19.8	8.8	1.9	0.5	黒曜石		408	柳葉形	先端欠損
51	68	33.2	12.6	3.6	1.4	黒曜石	28	432	柳葉形	一面に主利鈍面を残す
52	98	44.9	10.2	2.6	1.0	黒曜石	29	410	柳葉形	
53	5・6-15	23.8	16.0	3.3	1.0	黒曜石	30	281	無柄平基	
54	5・8-03	19.4	10.8	2.7	0.6	黒曜石		411	柳葉形	先端欠損、焼けている
55	表採	17.0	7.2	1.8	0.2	黒曜石		483	柳葉形	先端わずかに欠損
56	表採	40.6	18.3	6.0	2.9	黒曜石		487	菱形	



図IV-11 包含層出土の石器(1)

表IV-3 石槍一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺No	形態	備考
1	1・7-59	20.9	21.9	8.4	3.4	黒曜石		282		基部
2	2・8-15	12.0	12.7	4.7	0.8	黒曜石		377		基部
3	42	20.2	16.4	5.0	1.6	黒曜石		415		基部
4	44	13.7	11.9	5.5	0.6	黒曜石		360		基部
5	4・7-56	83.9	34.1	11.4	25.8	黒曜石	31	346	有柄凸基	基部わずかに欠損、基部両側縁にスベード形石鏃と同様の抉りあり

表IV-4 彫器

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺No	刃部	備考
1	3・2-16	69.1	22.3	8.1	12.9	珪質頁岩	32	43	1	

表IV-5 楔形石器一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺No	形態	備考
1	4・7-14	24.1	17.8	5.1	2.2	黒曜石	33	306	凸状	両端つぶれ
2	25	24.6	13.0	3.8	1.2	黒曜石	34	353	楔形	両端つぶれ

表IV-6 石錐一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺No	形態	備考
1	1・6-41	16.7	8.1	3.7	0.6	黒曜石	35	297	棒状	先端欠損
2	1・7-27	22.7	13.3	4.2	1.2	黒曜石	36	320	有柄	先端欠損
3	3・2-63	36.5	23.7	10.8	5.1	黒曜石	37	45	有柄	先端欠損、刃部つぶれ
4	3・5-24	26.8	10.7	6.1	1.8	メノウ		230	棒状	先端欠損
5	3・7-86	43.2	33.4	6.5	6.4	黒曜石	38	373	有柄	刃部つぶれ、若干磨耗
6	3・10-31	26.4	17.9	5.2	2.2	黒曜石	39	464	有柄	先端再生、刃部つぶれ
7	4・5-55	34.1	18.9	6.1	2.2	黒曜石	40	263	有柄	先端欠損
8	4・7-22	23.1	17.0	4.5	1.5	黒曜石	41	368	有柄	刃部つぶれ
9	23	24.2	16.6	6.3	2.5	黒曜石	42	351	有柄	刃部・基部つぶれ
10	25	28.1	14.5	6.6	2.9	黒曜石	43	362	有柄	先端欠損、刃部つぶれ
11	35	23.2	10.3	6.7	1.6	黒曜石	44	365	棒状	先端欠損、刃部つぶれ
12	43	21.6	9.7	3.6	0.7	頁岩	45	453	棒状	先端欠損、刃部つぶれ
13	60	29.2	15.1	3.5	1.5	黒曜石	46	310	有柄	先端欠損、刃部つぶれ、反っている
14	4・9-00	18.8	11.8	4.3	0.8	黒曜石	47	471	有柄	先端欠損、刃部つぶれ

つまみ付きナイフ 31点のうち珪質頁岩製が13点、黒曜石製が18点（うち2点が花十勝）である。形態は縦長もしくは斜めで、横長の形態をとるものはわずか1点（図番50）である。図番53～56が第二地点、同69・70が第三地点出土である。

51・56・64・65は習作と思われる。53は長さ10cmを超える大型のもので、二つに折れた状態で出土した。72は肉厚で、先端部の加工をみると石錐的な用途も考えられる。

削・搔器 エンドスクレイパー（図番75）や木葉形（同76）などがある。図番81・82が第三地点出土である。84は基部から刃部に沿ってタール（スクリーン・トーン部分）が付着している。

R・F 36点がある。No.12～14と17～21が第二地点、No.28～32が第三地点出土である。図番85は、穴が開いた菱形を呈する剥片の二辺に調整を施したもので、装飾品の可能性もある。86はつまみ付きナイフの未製品の可能性が高い。

U・F 9点あり、No.4が第二地点、No.7が第三地点出土である。

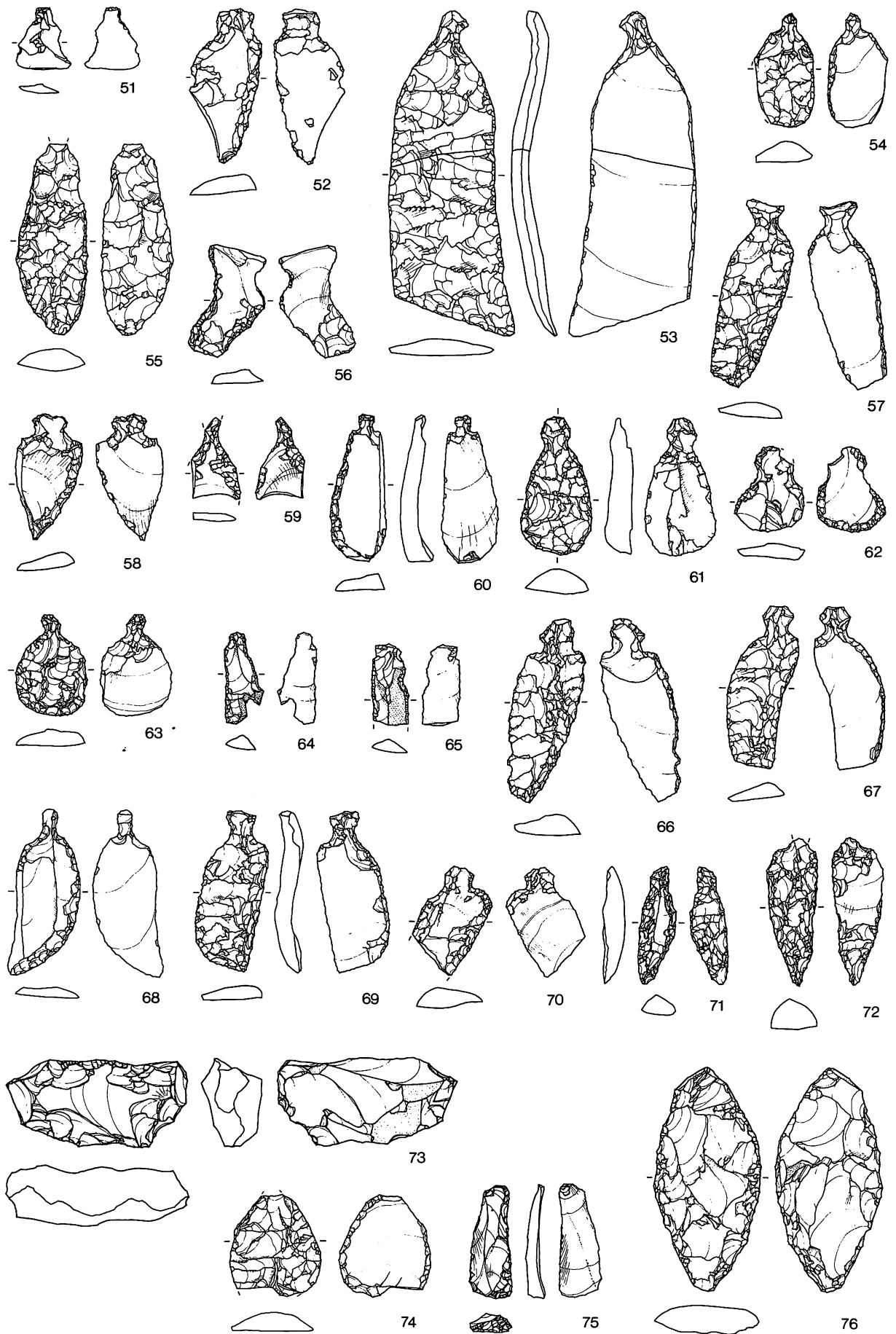
石核 11点出土しているが、石器の集中地点からの出土はない。石材別には、黒曜石・縞頁岩が各4点、珪質頁岩が2点、メノウが1点である。このうち図番87と91（図版組の都合で横向き）の縞頁岩は、それぞれかなり離れた地点から出土した剥片と接合した。89はかなり摩耗した石核で剥離面のリングがほとんど見えなくなっている。黒曜石は92・94が円礫を素材とした物で、他は板状原石を素材としている。

表IV-7 つまみ付ナイフ一覧

No.	グリッド	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	石質	図番	遺物No	形態	備考
1	0・1-91	32.6	21.2	5.7	3.3	珪質頁岩		25	縦長	先端欠損
2	1・0-43	45.3	22.3	7.1	8.2	珪質頁岩	48	4	斜め	先端欠損
3	1・1-96	20.6	30.1	7.5	4.0	珪質頁岩		60	縦長?	つまみ部片
4	1・6-16	38.0	12.8	4.5	2.6	黒曜石	49	295	斜め	一側縁背面・一側縁基部側面加工
5	16	32.5	45.1	10.0	11.3	珪質頁岩	50	296	横長	一側縁背面・一側縁基部側面加工
6	21	22.2	19.4	3.3	1.0	黒曜石	51	298	縦長	未製品、習作か
7	75	56.3	25.0	9.6	9.1	黒曜石	52	204	縦長	先端欠損
8	1・8-51	118.1	38.8	6.5	33.3	珪質頁岩	53	438	縦長	両側縁背面加工、切り出し状
9	70	40.2	21.2	7.2	6.0	珪質頁岩	54	466	縦長	一側縁欠損、一側縁面加工
10	95	68.4	26.0	8.6	9.8	珪質頁岩	55	428	縦長	つまみ折れ、両側縁面加工
11	97	39.2	23.7	5.8	4.8	黒曜石	56	387	斜め	焼けた剥片使用、習作か
12	2・6-02	66.4	22.8	4.9	9.7	珪質頁岩	57	224	斜め	一側縁背面・一側縁面加工
13	78	28.9	29.5	7.4	5.4	黒曜石		234	縦長?	先端欠損、摩耗著
14	2・7-05	45.0	24.0	7.4	5.9	花十勝	58	266	縦長	一側縁背面加工、切り出し状
15	2・8-07	28.8	17.4	3.2	1.4	黒曜石	59	456	縦長	基部剥片
16	90	53.0	20.1	6.9	7.4	珪質頁岩	60	269	縦長	一側縁背面加工
17	3・3-74	49.8	25.4	9.8	10.8	黒曜石	61	59	縦長	一側縁背面・一側縁基部側面加工
18	3・4-80	29.9	25.2	5.3	3.5	黒曜石	62	185	縦長	両側縁面加工、焼けている、つまみ部欠損
19	3・8-86	25.6	19.0	6.1	2.5	黒曜石		510	—	つまみ部片、折れてから焼けている
20	3・9-45	35.0	25.6	5.4	4.8	花十勝	63	462	縦長	一側縁背面・一側縁基部側面加工
21	4・4-25	32.5	14.0	6.5	1.8	黒曜石	64	186	縦長	習作か
22	26	29.2	13.2	4.2	1.8	黒曜石	65	187	縦長	先端欠損、習作か
23	4・5-31	66.6	23.7	7.7	12.5	珪質頁岩	66	274	斜め	一側縁背面・一側縁面加工
24	66	59.9	19.8	5.6	8.2	珪質頁岩	67	247	斜め	一側縁背面・一側縁面加工
25	86	55.5	22.6	6.2	9.6	珪質頁岩	68	248	縦長	一側縁背面・一側縁面加工
26	4・7-52	38.9	26.6	5.1	5.3	黒曜石	69	347	縦長	先端欠損
27	85	52.6	18.1	11.1	10.0	黒曜石	70	370	斜め	両側縁背面加工、切り出し状、折れ
28	4・9-02	42.0	13.0	7.2	3.8	黒曜石	71	458	縦長	両側縁背面加工、切り出し状
29	68	60.2	23.4	4.2	6.3	珪質頁岩	72	449	縦長	一側縁背面加工、切り出し状、つまみ部折れ
30	表採	61.0	38.8	6.8	12.8	黒曜石		478	縦長	両側縁背面加工、先端欠損
31	表採	24.6	17.0	5.1	2.4	黒曜石		481	縦長?	つまみ部片

表IV-8 削・搔器一覧

No.	グリッド	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	石質	図番	遺物No	形態	備考
1	1・1-82	65.7	34.3	21.4	45.9	珪質頁岩	73	180	横長	三辺面から削り加工
2	1・6-20	36.7	32.8	8.5	10.5	珪質頁岩	74	299	縦長	先端欠損、つまみ付か
3	1・7-73	41.2	15.7	6.3	3.3	珪質頁岩	75	276	縦長	エンド・スクレイパー
4	71	80.2	37.8	11.2	32.4	黒曜石	76	450	木葉	両端未調整、石槍未製品か
5	2・8-42	49.8	23.2	10.6	12.4	珪質頁岩		440	縦長	両端欠損、一側縁背面加工
6	2・9-96	31.1	43.8	11.9	16.2	黒曜石		412	木葉	全周に削り加工
7	3・2-63	38.9	16.9	12.4	5.8	黒曜石	77	44	縦長	先端欠損、つまみ付か
8	3・3-32	30.0	26.2	6.7	3.8	黒曜石	78	208	縦長	基部欠損、つまみ付か、若干摩耗
9	3・4-07	41.1	33.8	16.8	13.6	黒曜石	79	218	縦長	一側縁背面加工
10	3・6-28	28.5	20.6	7.7	4.4	黒曜石		414	縦長	両端欠損、両側縁背面加工
11	3・9-78	33.3	35.6	9.8	9.6	花十勝		447	縦長?	先端欠損
12	94	34.4	33.0	14.2	11.8	黒曜石		444	木葉	全周に削り加工
13	4・5-61	70.2	30.2	12.5	26.1	珪質頁岩	80	275	縦長	両側縁背面加工、切り出し状
14	4・7-68	35.6	22.4	9.0	6.4	黒曜石	81	313	縦長	一側縁背面加工、先端欠損、切り出し状
15	74	49.9	32.2	10.0	14.9	黒曜石	82	369	縦長	両端欠損、一側縁背面加工、つまみ付か
16	4・8-76	68.3	29.4	11.3	25.9	黒曜石	83	409	縦長	両側縁背面加工、摩耗、基部欠損?
17	5・4-36	40.3	21.1	7.0	3.7	珪質頁岩	84	177	縦長	側縁部片、タール付着



図IV-12 包含層出土の石器(2)

表IV-9 R・F一覧

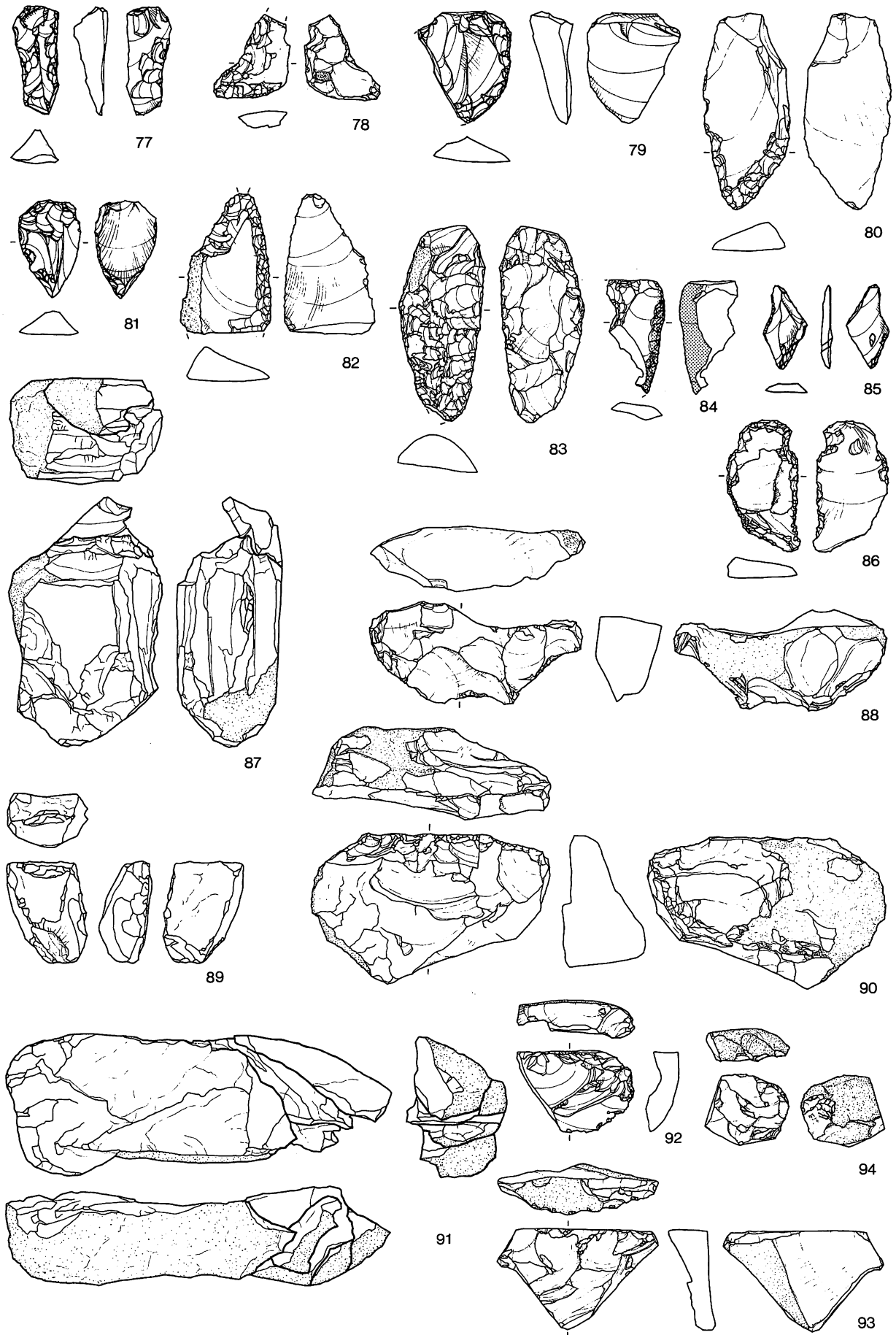
No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	形態	備考
1	0・5-89	60.5	22.9	10.7	14.2	黒曜石		36	楔形?	礫皮片使用、一側縁面に粗い加工
2	1・3-08	48.3	44.9	11.3	21.0	黒曜石		23		礫皮片使用、一側縁背面加工
3	1・6-37	16.7	13.6	2.4	0.5	黒曜石		293	石鏃末?	両側縁背面加工の先端部片
4	38	26.2	12.0	2.8	0.7	花十勝		292	石鏃?	両面加工の側縁部片
5	38	13.3	6.9	1.5	0.2	黒曜石		423	石鏃?	両面加工の側縁部片
6	47	16.1	14.7	3.1	0.6	花十勝		294	削器?	先端部片
7	58	14.1	13.7	1.8	0.4	黒曜石		424	石鏃末?	背面加工の基部片
8	1・7-43	29.7	16.4	3.2	1.3	黒曜石	85	442	垂飾?	穴のあいた削片使用
9	48	33.6	14.0	5.8	2.9	珪質頁岩		426	石鏃?	一側縁背面加工、先端欠損
10	57	23.8	8.1	4.2	0.8	黒曜石		468		礫皮片使用、背面加工の先端部片
11	75	23.4	16.4	5.4	1.7	黒曜石		430		一側縁背面・一側縁腹面加工
12	1・8-50	29.2	19.0	5.0	2.4	黒曜石		431	削器?	一側縁背面・一側縁背面加工、折れ
13	51	36.0	16.4	7.4	3.1	黒曜石		465		両側縁背面加工
14	97	20.4	28.3	6.4	3.8	黒曜石		400		一側縁腹面加工、折れ
15	2・4-59	26.8	16.0	6.1	2.2	黒曜石		227		一側縁背面加工、折れ
16	2・7-94	47.3	25.5	8.5	9.4	黒曜石	86	260	つまみ?	礫皮片使用、先端・一側縁背面加工
17	2・8-06	31.5	16.6	5.4	3.0	黒曜石		419		礫皮片使用、両側縁背面加工、折れ
18	15	18.4	26.0	17.4	3.1	黒曜石		378		礫皮片使用、一側縁背面加工、折れ
19	16	26.2	13.9	4.1	1.7	黒曜石		358		礫皮片使用、一側縁背面加工、折れ
20	17	22.6	28.7	7.5	4.2	黒曜石		375	楔形?	礫皮片使用、先端つぶれ、折れ
21	26	30.7	20.6	4.7	2.8	黒曜石		357		礫皮片使用、一側縁腹面加工、摩耗
22	31	12.7	22.6	3.5	0.9	黒曜石		393		両面加工の先端部片、焼けている
23	34	18.9	18.7	4.6	2.9	黒曜石		379	石鏃?	礫皮片使用、両側縁背面加工、先端欠損
24	3・4-21	17.0	10.5	3.6	0.6	黒曜石		182		背面加工の側縁部片
25	3・5-07	17.5	17.1	2.9	0.6	黒曜石		324	石鏃末?	背面加工の先端部片
26	3・8-05	18.2	11.8	3.0	0.9	珪質頁岩		390		両面加工の側縁部片
27	3・9-31	17.2	18.6	3.0	1.0	黒曜石		448		腹面加工の側縁部片、焼けている
28	4・7-25	13.8	23.7	2.2	0.9	黒曜石		352		背面加工の側縁部片
29	25	17.6	14.7	6.9	1.4	黒曜石		363	石鏃?	両面加工の側縁部片
30	26	16.0	19.8	2.6	0.8	黒曜石		364	石鏃末?	一側縁背面・一側縁腹面加工
31	47	19.2	15.8	4.3	1.4	黒曜石		337		一側縁背面・一側縁腹面加工、折れ
32	48	34.8	11.8	13.3	4.3	黒曜石		338		両面加工の側縁部片、焼けている、摩耗
33	4・8-09	13.9	11.0	2.2	0.7	黒曜石		470		背面加工の先端部片、先端つぶれ
34	15	23.2	13.2	6.1	1.9	黒曜石		422		背面加工の先端部片、焼けている
35	69	36.0	17.6	5.6	2.3	黒曜石		433		礫皮片使用、一側縁背面加工、折れ
36	4・9-05	36.2	29.8	10.2	11.5	黒曜石		443		礫皮片使用、一側縁背面加工、摩耗

表IV-10 U・F一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	形態	備考
1	0・7-76	32.5	21.2	7.8	6.0	花十勝		325		礫皮片使用、一側縁に使用痕
2	1・4-92	51.6	29.1	9.2	12.3	珪質頁岩		34		礫皮片使用、一側縁に使用痕
3	1・5-03	26.5	35.1	4.4	3.2	黒曜石		35		先端・両側縁に使用痕
4	1・8-73	41.2	17.0	7.2	4.7	黒曜石		427		礫皮片使用、両側縁に使用痕
5	2・7-42	34.9	21.2	6.3	3.4	珪質頁岩		268		先端・両側縁に使用痕
6	4・6-87	24.7	13.6	4.4	1.2	黒曜石		278		一側縁に使用痕、折れ
7	4・7-37	36.4	26.1	7.2	5.4	花十勝		339		先端部片、311(47-68)と接合
8	4・9-03	18.0	19.4	4.8	2.1	黒曜石		382		側縁部片
9	5・6-14	25.5	22.2	4.1	1.6	黒曜石		309		両側縁に使用痕、先端欠損

原石 5点あるが、遺物集中地点からの出土はなく、黒曜石もみられない。

スポール 彫器とよく似た珪質頁岩を素材としたスポールで、ユカンボシ川沿いの大きな地割れの縁から出土している。



図IV-13 包含層出土の石器(3)

表IV-11 石核一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺No	形態	備考
1	1・2-53	74.4	55.1	36.1	208.4	縞頁岩	87	33		剥片(16-33)と接合
2	67	33.1	59.5	22.8	53.0	珪質頁岩	88	181		一面に原石面を残す
3	1・4-89	40.2	25.9	14.3	20.4	縞頁岩	89	32		磨
4	1・6-64	39.6	21.0	11.8	8.6	黒曜石		194		二面に原石面を残す
5	1・6-70	29.1	23.7	19.3	18.4	メノウ		195		一面に原石面を残す
6	2・3-60	48.4	40.0	34.0	95.4	縞頁岩		183		一面に原石面を残す
7	2・8-86	55.6	85.0	27.6	140.8	珪質頁岩	90	451		二面に原石面を残す
8	3・3-15	99.6	49.2	27.1	174.6	縞頁岩	91	316		剥片(23-26, 33-05・15)と接合
9	3・9-97	33.0	40.4	10.4	13.0	黒曜石	92	445		二面に原石面を残す
10	97	39.0	58.0	11.8	22.0	黒曜石	93	446		三面に原石面を残す
11	4・3-62	25.1	26.4	11.4	9.4	黒曜石	94	231		二面に原石面を残す

表IV-12 原石一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺No	形態	備考
1	2・3-71	70.6	51.9	35.1	149.8	メノウ		178		
2	95	58.3	50.1	34.7	174.1	縞頁岩		184		
3	2・7-84	47.1	44.3	38.4	81.3	珪質頁岩		261		磨
4	3・4-08	77.0	66.4	50.3	375.7	メノウ		317		磨けている
5	3・9-83	37.0	72.0	37.0	169.3	珪質頁岩		452		

表IV-13 スポール

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺No	形態	備考
1	2・9-45	81.2	16.8	9.2	14.2	珪質頁岩		376		

表IV-14 F・C集中一覧

No.	グリッド	総点数	総重量(g)	黒曜石		花十勝		その他
				点数	重量	点数	重量	
1	2・8-07	1,222	96.4	1,221	96.4	1	+	
2	2・8-15	211	1.3	206	1.1	4	0.2	加工痕のある黒曜石剥片4点(下表参照)、メノウ破片1点(重量+)が含まれている
3	4・7-26	2,047	22.6	1,718	16.3	326	5.2	加工痕のある黒曜石剥片3点(下表参照)が含まれている
4	4・7-38	1,613	14.8	1,546	13.4	67	1.4	
5	4・7-49	1,447	9.0	1,109	6.0	138	3.0	

表IV-15 F・C集中2内出土石器一覧

No.	種別	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	形態	備考
1	楔形石器	19.0	26.6	8.1	3.6	黒曜石	凸状	基部つぶれ、先端欠損
2	R・F	8.5	12.8	2.6	0.2	黒曜石	—	両面加工の端部片
3	R・F	14.5	14.5	2.0	0.5	黒曜石	—	背面加工の端部片、石盤未製破損品か
4	R・F	18.2	9.1	2.6	0.3	黒曜石	—	腹面加工の側部片

表IV-16 F・C集中3内出土石器一覧

No.	種別	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	形態	備考
1	石鏃	14.9	9.3	2.8	0.3	黒曜石	柳葉形	基部片
2	R・F	13.7	9.5	2.4	0.3	黒曜石	—	両面加工の側部片
3	R・F	22.0	10.5	2.9	0.5	黒曜石	—	背面加工の側部片

F・C集中 5ヵ所で確認されている。集中が確認された時点で、その範囲の土ごと採取しフルイで剥片類を取り出した。No.1は小さな範囲に集中的に確認されており、比較的大きな剥片類も含まれている。No.2～5は、いずれも極めて微細な破片が主で、その範囲もNo.1に比して広がりがある。剥片・破片は黒曜石が圧倒的で、いずれの例にも花十勝が若干含まれている。それ以外のものでは、No.2にメノウの破片1点がみられたのみである。出土地点から、No.1・2は早期の東釧路IV式に、No.3～5は前記中野式に伴うものと思われる。詳細は第VIII章に記す。

石斧 破片を含み総点数273点が出土している。このうち完形もしくはほぼ完形のものとは図示した11点（図番99を除く）に過ぎず、他は全て破片である。石材別にみると、泥岩が圧倒的に多く、次いで片岩、凝灰岩の順で、他に珪質岩1点（図番105）がある。これらを母岩毎にまとめたものが表IV-17・18で、表採資料も含め44個体になった。その分布をみるともっとも集中しているのは、第一地点とした1・3区、2・2区周辺で、No.7～9、18～21がある。

形態的には基部が細く、両刃で刃部の幅が広いものが中心である。製作技法は、母岩の礫皮面を剥いだ後、敲打剥離で成形し磨きあげるもの（103）と、すり切り磨製（97・98）がある。

No.7は緑色泥岩の破片で、1・3-23区を中心に190点以上が四方に広がっている。図番99は、この中でもっとも良く接合できた資料であるが、原石の礫皮を剥ぐ段階の剥片類と思われる、この地点で石斧生産が行われていたことが窺われる。また、この母岩の資料には遺物No.507・568のすり切り残片なども含まれているが、これらはユカンボシ川に近い3・9、3・10区からの出土である。なお、すり切りに用いたような石鋸類は出土していない。100は、基部片が1・6-42区から、中央部片が3・7-54区から出土したもので、基部と中央部片の破断面には敲打痕がみられる。中央部片は単独で、たたき石もしくは楔形石器のように用いられていたものと思われる。103は破損した刃部を再生し片刃としている。

すり石 15点が出土している。素材は安山岩が主で砂岩が3点、珪岩1点（No.9）がある。No.9を除き全て断面が三角形に近い形を呈する。出土位置は、第二地点内に1点（No.6）とその西南部に3点（No.1・2・4）、第三地点内に2点（図番115・116）、ユカンボシ川沿いの大きな地割れ南側に4点（No.8～11、図番111・112）が並んでいる他はまばらである。

砥石 5点全てが砂岩で、出土位置は、第一地点内に1点（No.1）、第三地点に1点（No.2）、川沿いの地割れ南側に2点（No.4・5）でNo.3のみが単独の出土である。No.2が比較的明瞭な溝状の使用痕を残す他は、いずれも浅く不明瞭である。

たたき石 表IV-21に示した12点と、方割礫接合資料中（表IV-25～27）に6点の計13点がある。素材は安山岩、凝灰岩と砂岩がある。使用痕はいずれも凹状を呈し、いわゆる「トチむき石」状の例はみられない。出土位置は第一地点周辺に6点（図番117・118、No.4と方割礫接合資料のNo.21、図番12・13）、第二地点及びその西南部に3点（図番119と方割礫接合資料の図番3・11）、第三地点周辺に2点（図番122・123）、川沿い部分から2点（図番124と方割礫接合資料の図番18）がある。なお、図番117は第一地点南側と第二地点西南部、方割礫接合資料の図番13は第一地点東側と第三地点東側から出土した破片がそれぞれ接合している。

図番118は、両端を欠いてからたたき石として使用されているものと思われる。

石皿 表IV-22に示した2点、方割礫接合資料中（表IV-25～27）に5点の計7点がある。図番125は砂岩を素材としたものの破片で、側縁も横方向に磨かれている。出土位置は第三地点の南側である。図番126は安山岩を素材としたもので、一面・両端・一側縁に敲打痕がみられ、たたき石としても使用されていることがわかる。出土位置は擦文期の竪穴東側である。方割礫接合資料の図番5・6・No.20は、いずれもその破片が第二地点（図番5・6はP3内）から出土している。素材は安山岩で焼けており、一面に敲打剥離やすりくぼみがみられる。なお図番6の一面には黒色付着物もみられる。また、方割礫接合資料の図番2・No.33も焼けており、直接第二地点から出土していないが同一時期のものと思われる。

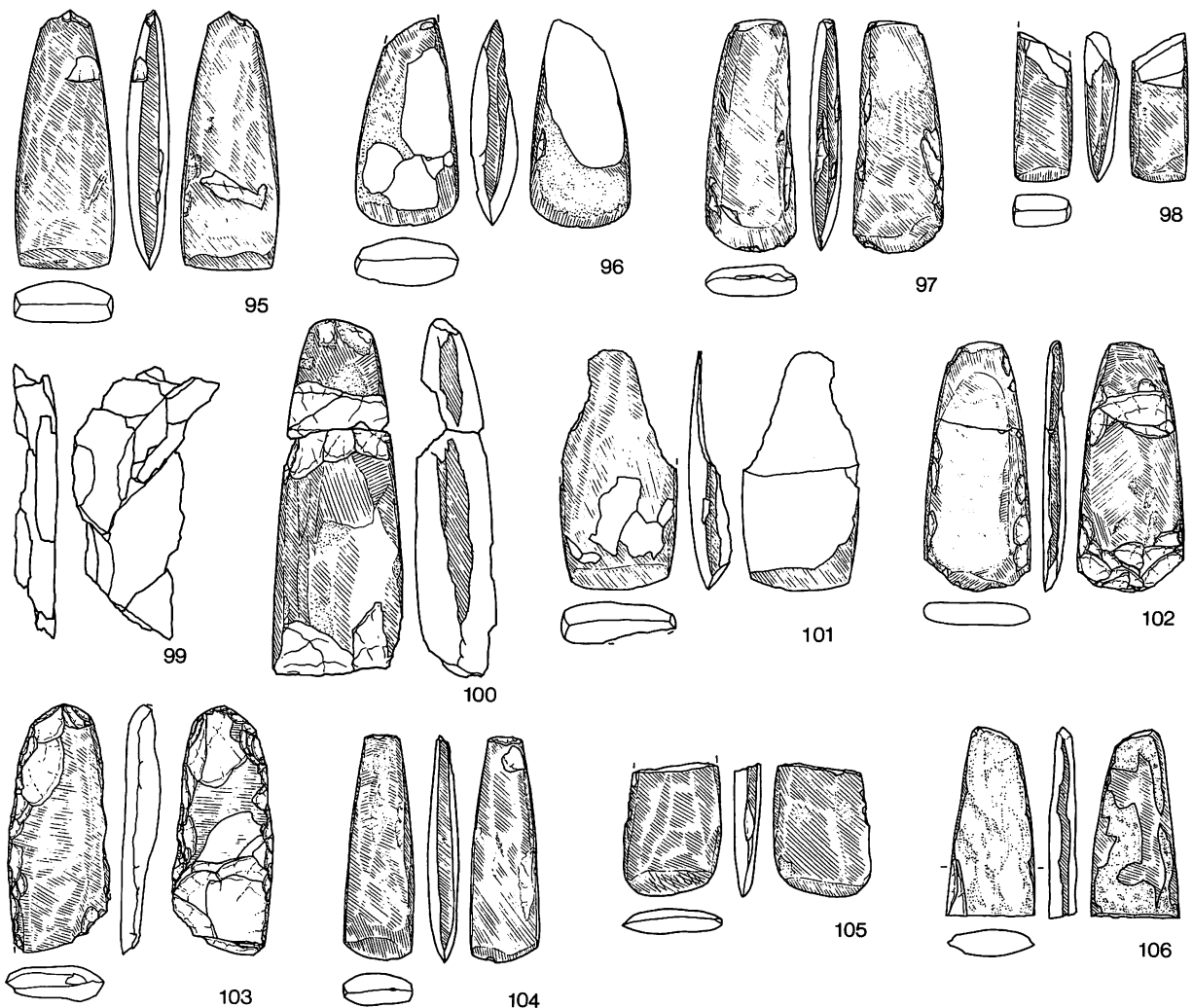
板状礫 第二地点周辺から5点が出土しており、いずれも安山岩である。なお、図番127は小片が4・8-45区から出土している。

表IV-17 石斧一覽(1)

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	0・5-98	104.0	39.8	17.0	109.4	緑色泥岩	95	55	磨製、両刃
2	0・6-86	81.7	40.8	19.2	70.5	茶色泥岩	96	344	磨製、両刃、基部欠損
3	98	22.0	12.6	3.8	1.4	緑色泥岩		314	背割片
4	0・7-82	93.5	36.8	13.0	74.7	緑色泥岩	97	299	すり切り磨製、両刃
5	0・7-89	59.3	23.2	13.2	30.0	緑色泥岩	98	337	すり切り磨製、両刃
6	0・7-94	—	—	—	93.4	緑色泥岩		298	剥片、17点あり、17-04と接合
	95	—	—	—	54.5	緑色泥岩		346	剥片、3点あり
	1・7-03	13.3	22.3	3.3	0.9	緑色泥岩		345	剥片
	05	44.6	23.6	7.0	7.0	緑色泥岩		—	剥片
	2・4-33	130.8	59.6	40.0	477.9	緑色泥岩		137	原石、割剥痕あり、162(24-50)と接合
	4・4-66	80.8	39.2	20.4	95.3	緑色泥岩		150	基部片、背面に割剥痕あり
7	1・1-50	50.8	39.4	37.9	73.1	緑色泥岩		49	剥片、割剥痕あり
	62	58.0	39.8	16.2	39.9	緑色泥岩		50	剥片、割剥痕あり、13-23と接合
	1・2-39	90.2	48.0	10.7	58.0	緑色泥岩		35	背割片、13(13-07)、127(23-62)と接合
	1・3-02	52.8	37.6	16.0	24.1	緑色泥岩		21	剥片、割剥痕あり
	05	33.8	23.8	6.0	10.4	緑色泥岩		24	剥片、13-23と接合
	07	61.7	23.4	7.9	12.5	緑色泥岩		13	剥片
	12	—	—	—	4.1	緑色泥岩		22	剥片、2点あり
	14	—	—	—	5.2	緑色泥岩		22	剥片、2点あり
	15	—	—	—	18.0	緑色泥岩		—	剥片、2点あり
	20	13.6	14.0	4.2	1.0	緑色泥岩		—	剥片
	22	—	—	—	16.0	緑色泥岩		—	剥片、15点あり
	23	109.2	49.0	18.5	92.6	緑色泥岩	99	23	剥片、割剥痕あり、90(33-16)、13-23と接合
	23	—	—	—	357.4	緑色泥岩		—	剥片、140点あり
	24	—	—	—	3.5	緑色泥岩		—	剥片、5点あり
	25	22.0	17.8	4.6	1.9	緑色泥岩		—	剥片
	91	47.6	24.0	14.4	42.4	緑色泥岩		43	剥片、13-23と接合
	2・4-99	43.6	25.0	7.8	12.1	緑色泥岩		—	剥片
	2・6-32	17.1	19.0	2.6	0.6	緑色泥岩		—	剥片
	3・5-39	36.8	28.4	12.0	13.4	緑色泥岩		188	剥片
	3・7-34	—	—	—	4.5	緑色泥岩		—	剥片、3点あり
3・9-95	17.4	31.8	15.8	6.3	緑色泥岩		507	すり切り残片	
3・10-71	87.6	60.6	36.8	306.4	緑色泥岩		568	すり切り残片、546(49-87)と接合	
8	1・3-62	7.6	19.2	2.7	0.7	緑色泥岩		40	刃部片
9	1・3-64	10.6	11.4	2.4	0.3	緑色泥岩		36	背割片
10	1・5-16	79.8	52.2	19.6	126.3	灰色片岩		47	背割片
11	1・5-59	30.8	24.8	3.4	3.2	緑色泥岩		164	背割片
12	1・5-84	33.2	46.5	8.6	12.4	緑色凝灰岩		102	剥片
	3・4-14	24.2	12.0	2.8	0.9	緑色凝灰岩		122	背割片
13	1・6-30	13.1	5.6	2.2	0.1	灰色片岩		—	剥片
	31	53.0	23.5	8.8	13.6	灰色片岩		309	背割片
	42	144.0	51.5	31.2	326.0	灰色片岩	100	308	基部片、318(37-54)と接合
14	1・6-59	44.4	32.4	8.0	19.7	緑色泥岩		166	磨製、基部片
15	1・6-72	33.0	24.6	3.2	1.9	緑色泥岩		169	背割片
16	1・7-46	38.0	19.6	16.8	5.5	灰色片岩		353	背割片
17	1・7-56	97.0	46.4	15.2	72.1	灰色片岩	101	277	刃部片
18	2・2-05	—	—	—	5.1	灰色片岩		92	中央部片、22-16と接合
19	2・2-17	108.2	51.6	14.3	57.8	黒灰色泥岩		93	剥片、22-07・18・27と接合
20	2・2-38	21.2	18.0	4.2	1.9	緑色泥岩		82	刃部片
21	2・2-52	91.2	50.6	31.0	216.8	灰色片岩		86	基部片、割剥痕あり
22	2・4-23	43.8	28.9	10.5	12.0	青茶色泥岩		136	背割片、120(24-24)と接合
23	2・4-34	99.9	42.4	9.1	60.9	黒茶色泥岩	102	161	138・144・145(24-34)と接合
24	2・4-50	48.4	22.3	5.6	6.2	緑色泥岩		140	剥片
25	2・5-63	31.2	15.8	2.2	1.4	灰色片岩		163	剥片
26	2・6-48	50.2	30.1	5.0	5.3	灰色片岩		195	背割片、26-39・49と接合
27	2・8-00	105.0	38.4	14.8	75.6	黒緑色泥岩		363	磨製、基部片

表IV-18 石斧一覽(2)

No.	グリッド	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
27	3・3-26	16.4	8.8	3.2	0.8	緑色泥岩		85	刃部片
28	3・3-66	48.4	48.0	23.8	51.0	緑色泥岩		91	両刃、刃部片
29	3・3-96	38.2	34.8	9.0	21.3	緑色泥岩		132	片刃、刃部片
30	3・7-08	42.4	92.7	14.6	61.3	緑色泥岩		330	剥片、剥片、剥片、剥片あり
31	3・7-16	101.0	40.6	14.2	76.5	緑色泥岩	103	292	片刃、剥片、磨き
32	3・8-85	91.1	26.9	12.6	54.7	青黒色片岩	104	383	磨製、両刃
33	4・1-40	16.5	21.1	4.0	2.2	灰色片岩		1	刃部片
34	4・3-51	38.6	38.4	13.2	31.0	緑色泥岩		70	片刃、刃部片
35	4・6-03	75.0	42.0	10.4	40.5	灰色片岩		254	剥片
36	4・6-43	52.4	39.6	10.0	36.5	褐色珪質岩	105	244	磨製、片刃、刃部片
37	4・7-75	76.6	35.0	11.4	50.7	灰色片岩	106	323	剥片調整、磨き、基部片
38	4・8-63	24.8	31.8	7.4	7.8	灰色泥岩		494	刃部片
39	4・8-73	22.4	27.2	2.9	2.8	灰色泥岩		408	基部片、タール付着
40	4・9-13	43.6	37.2	15.0	33.1	緑色泥岩		483	基部片
41	5・1-17	22.2	19.6	3.8	1.5	緑色泥岩		63	基部片
42	5・5-10	38.0	28.6	5.0	5.4	緑色泥岩		182	剥片
43	表採	18.3	11.8	2.0	0.5	緑色泥岩		597	剥片



図IV-14 包含層出土の石器(4)

表IV-19 すり石一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	0・7-84	131.6	63.2	49.2	515.0	安山岩	107	300	断面三角形
2	88	51.0	52.6	37.8	97.4	安山岩	108	301	断面三角形、側縁部片
3	1・4-83	106.4	59.2	31.6	287.3	安山岩	109	45	断面三角形、側縁部片
4	1・6-83	60.4	42.6	42.0	93.7	砂岩		168	端部片
5	1・7-16	60.8	65.0	41.8	179.6	安山岩		357	断面三角形、側縁部片
6	1・8-70	66.2	65.0	46.4	258.2	安山岩		533	端部片、焼けている
7	2・6-73	120.0	58.4	31.2	291.8	安山岩	110	194	断面三角形、澱付跡あり
8	3・9-09	130.4	82.6	60.9	694.0	安山岩		571	断面三角形、上下端使用、一端欠損
9	3・10-30	125.4	27.8	58.5	268.5	珪岩		474	楕円形、使用痕不明瞭
10	50	82.6	60.2	42.4	287.5	砂岩	111	570	断面三角形、側縁部片
11	91	111.5	60.9	29.5	303.5	安山岩	112	567	断面三角形
12	4・4-53	143.0	56.8	66.0	698.0	安山岩	113	133	断面三角形
13	4・4-57	148.9	60.4	81.6	820.0	砂岩	114	149	断面三角形
14	4・7-66	144.1	62.9	64.9	985.0	安山岩	115	361	断面三角形、一端欠損
15	66	123.6	66.8	48.7	650.0	安山岩	116	373	断面三角形、たたき石としても使用

表IV-20 砥石一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	1・2-89	39.8	35.8	8.4	13.6	砂岩		25	破片、使用痕不明瞭
2	1・8-40	45.5	13.9	9.0	5.6	砂岩		531	破片、溝状の使用痕あり
3	2・0-59	92.6	63.0	25.2	125.6	砂岩		77	破片、一面に使用痕、76(20-66)と接合
4	3・9-67	87.6	68.8	34.8	241.6	砂岩		511	破片、一面に使用痕
5	89	83.7	79.2	46.5	448.5	砂岩		565	破片、一面に使用痕

表IV-21 たたき石一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	1・1-35	97.0	49.2	35.0	256.0	安山岩		20	両面に澱痕
2	1・2-41	105.9	70.6	39.1	220.5	安山岩	117	34	一面に澱痕、一面欠損、17-05と接合
3	1・3-12	84.5	107.6	54.2	432.8	凝灰岩	118	15	両面に澱痕、両端欠損
4	93	118.4	61.2	48.6	447.7	安山岩		44	一端に澱痕、一面欠損
5	1・4-39	109.8	525.0	51.6	319.6	安山岩		39	一端に澱痕、焼けている
6	1・8-80	123.6	59.2	50.4	475.4	安山岩	119	532	一端、一面に澱痕、焼けている
7	3・0-32	122.8	97.6	43.0	480.1	凝灰岩	120	31	一面に澱痕
8	3・1-16	116.0	59.2	33.4	235.2	凝灰岩	121	67	両面に澱痕
9	3・7-97	123.4	72.2	27.4	251.0	凝灰岩	122	349	一面に澱痕、一面・両端欠損
10	4・8-72	148.5	49.8	38.3	404.5	凝灰岩	123	427	一端、側縁に澱痕
11	4・10-34	68.6	36.8	33.8	97.3	安山岩	124	556	一面に澱痕
12	5・1-33	111.6	58.4	36.0	280.3	安山岩		64	一面に澱痕、一端欠損

表IV-22 石皿一覧

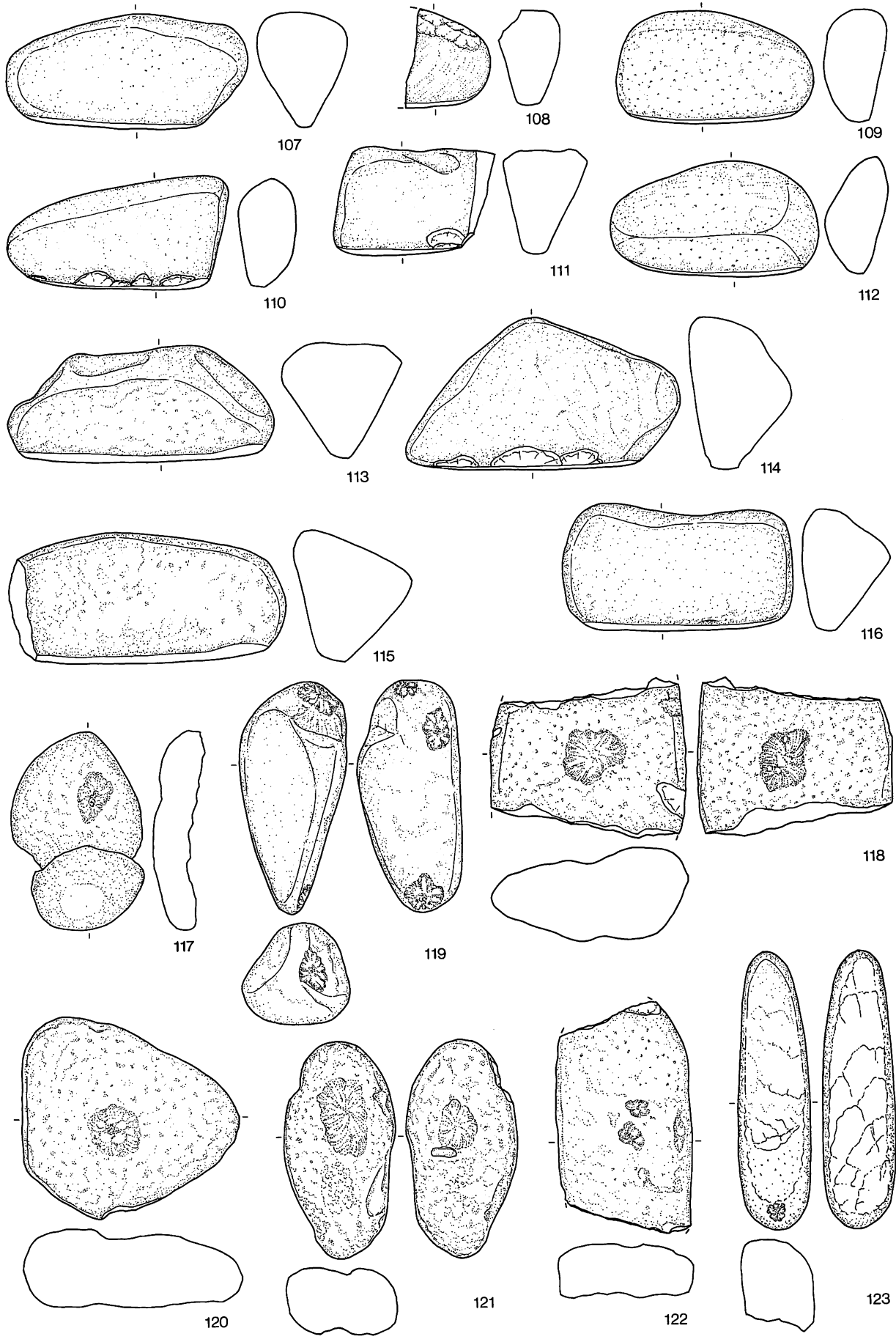
No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	4・6-17	114.6	81.4	19.4	213.4	砂岩	125	285	破片、一面・側縁みがき、284(46-17)と接合
2	1・6-33	160.0	92.8	46.8	1,075	安山岩	126	307	両面・両端・側縁に澱痕

表IV-23 板状礫一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	1・7-29	77.7	55.2	21.6	129.8	安山岩		348	破片
2	2・7-47	303.0	270.8	34.4	3,769	安山岩	127	319	破片、423(48-45)と接合
3	2・8-10	43.6	31.8	16.8	19.0	安山岩		388	破片
4	64	76.2	51.8	16.8	73.4	安山岩		369	破片
5	3・8-08	160.0	52.7	17.0	169.3	安山岩		378	破片

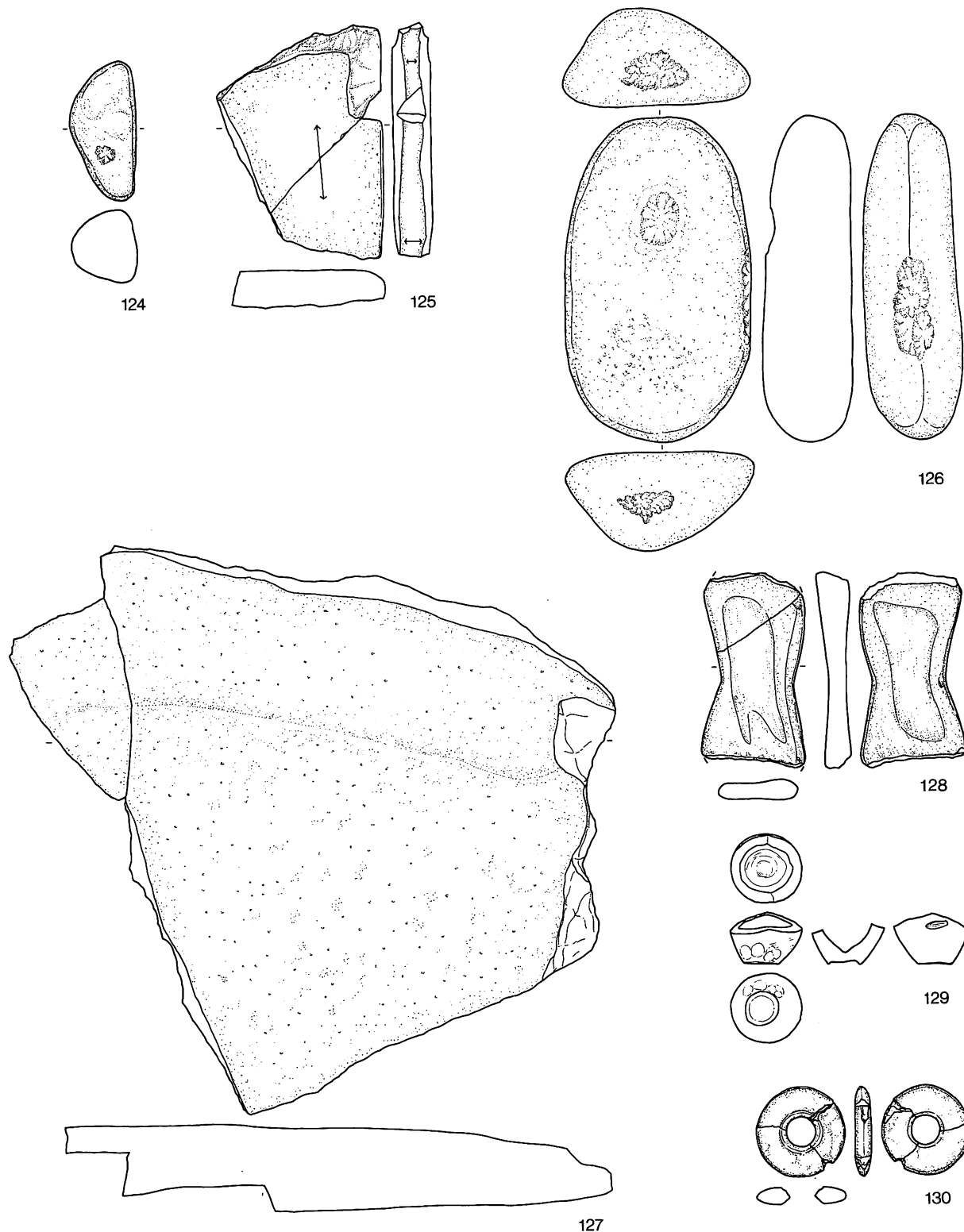
表IV-24 石製品一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	0・5-95	96.5	49.4	15.4	56.5	砂岩	128	53	両面すりくぼみ、52(15-15)と接合
2	1・5-05	35.5	33.6	24.9	28.3	凝灰岩	129	54	楕円形？
3	3・0-35	45.3	43.7	8.4	22.1	カンラ岩	130	29	泉、30(30-35)、56(30-46)と接合



図IV-15 包含層出土の石器 (5)

石製品 図番128は砂岩製で両端を欠く。全体に丁寧なすられ、中央が細くなっている。砥石あるいは石鋸の可能性もあるが、129と近い位置にあることから石製品とした。129は凝灰岩の礫をくり貫いて作られている猪口状のもので、底面は内側を削って高台状に作出している。口唇部は2カ所で尖り、一方が高く一方が低くなっている。高い方の外側には楕円形の抉りがみられる。130はカンラン岩製の環で、穿孔は両側から丁寧になされ、全体も磨きあげられている。



図IV-16 包含層出土の石器（6）

方割礫接合資料 ここでは概ね縄文時代早期にともなうと思われる方割礫接合資料について述べる。

これらは、その出土地点、レベル、伴出遺物などから本来早期に属する遺物と考えられるが、破片の一部が縄文時代中期以降のレベルから出土しているものもあり、後世の人々に再利用されている可能性もある。なお、礫石器もしくは方割礫の接合資料のうち、帰属時期の明確なものについては各項で触れている。

方割礫接合資料を素材別にみると、安山岩が23個体、凝灰岩が16個体、砂岩11個体、玄武岩5個体、泥岩と不明が1個体である。原石の形状の分かるものは24個体で、楕円礫が15個体、長楕円礫が9個体である。焼けているものは21例である。

出土位置でみると、第二地点の1・8区がらみのものが14個体ともっとも多い。焼けているものも12個体あり、ほかの地点から出土したものに比してその比率が高い。

接合関係をみると、第二地点と2・7、3・7区の間にもっとも顕著で、4・8～4・10の間にも比較的多くみられる。もっとも広範囲に破片が散っていたものはNo.5（図番2）の焼けた石皿で、主な破片は第二地点を取り囲むような位置から出土しているが、3・1区や4・4区から出土した破片とも接合している。

No.4（図番1）は長楕円礫が短軸方向に二つに割れている（B+B）もので、随所に剥落した部分がある。この破断面をみると、焼けてから剥落したものと、焼ける前に剥落したものとがある。

No.5（図番2）は、安山岩を素材とした石皿の破片で、図正面がすりくぼめられている。火熱のため図正面と左側面が赤化している。なお、正面図右下に接合している破片（遺物No.66）は3・1-22区から出土したものであるが、この破片には火熱の跡がみられない。

No.6（図番3）は安山岩のたたき石で、右側面図下に接合している2片（遺物No.354・501）は同心円状に焼けて黒化しており、火熱を受けてから割れたことを示している。

No.7から20は、破片の全部あるいは一部が第二地点から出土している資料である。

No.7（図番4）は凝灰岩を素材とした台石で、かなり酷く焼けており全体に赤化が著しい。殊に残された側面は、出土時にはベニガラを塗ったような赤さであった。なお側縁部は平らに調整されており、大型の台石の一部であったことを窺わせる。

No.8（図番5）は石皿片で、遺物No.581・592（側面図左上に接合の2片）はP3内からの出土である。外面は火熱を受けて赤化もしくは黒化しているが、破断面には火熱の影響はみられず、この状態で焼かれたものと思われる。

No.9（図番6）は、P3内出土の大破片（遺物No.582）と3・7区出土の小破片が接合した石皿片である。遺物No.582の各面には黒色の付着物がみられる。火熱の影響はみられない。

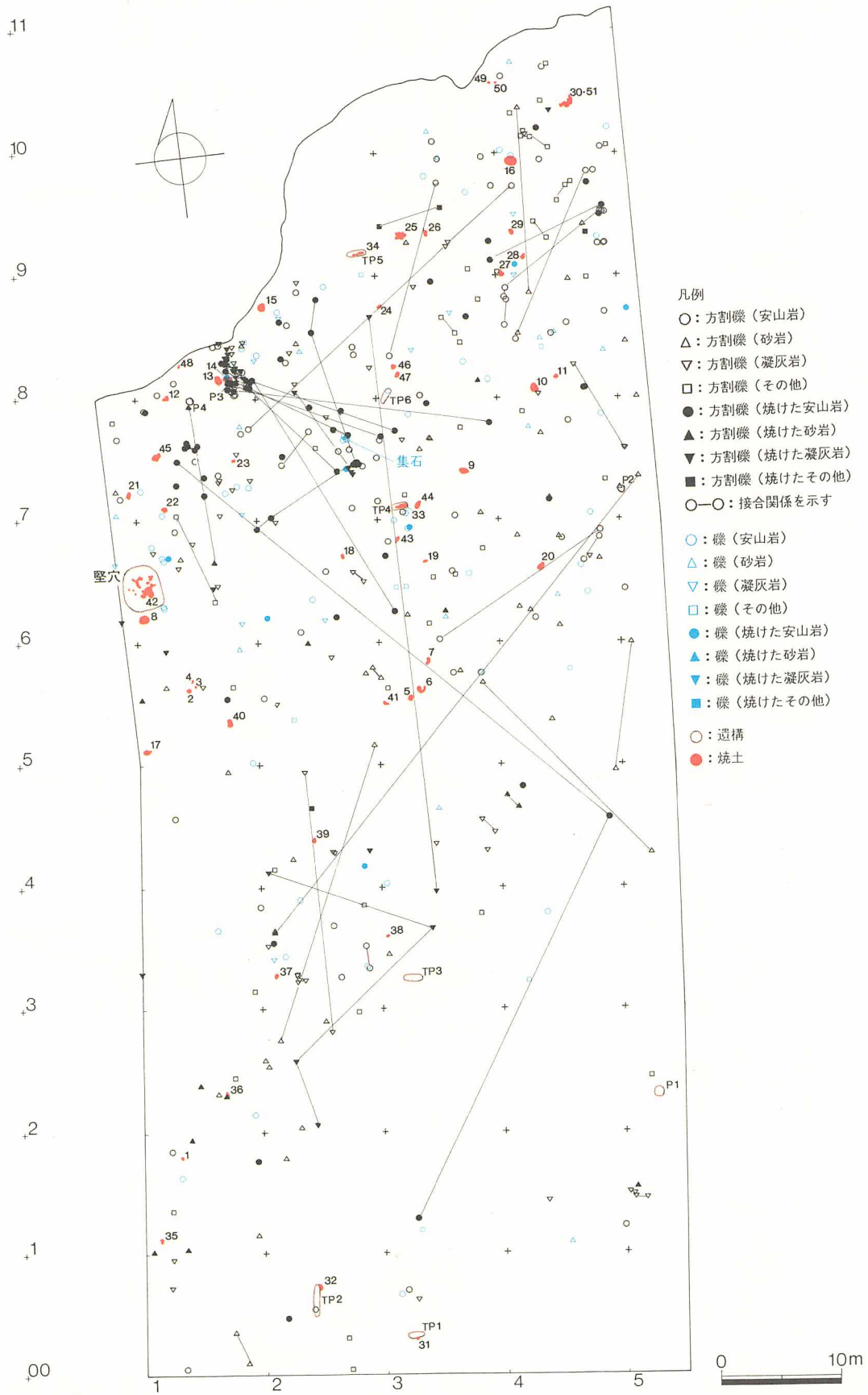
No.10（図番7）は、外面全体が赤化した楕円礫で、破断面は焼けていない。No.12（図番8）は安山岩を素材としたもので、No.7同様大型の台石の一部である。表面全体が赤化もしくは黒化しているが、破断面にはみられない。

No.14（図番9）は、正面図の上面・左側面及び正面が赤化している大礫の破片である。

No.15（図番10）は、図の左側面がすりくぼんでいる台石で、図中央部分と右側破断面が黒化しており、この状態で火を受けたことを示している。

No.19（図番11）は、安山岩を素材とし一端に敲打痕を有すたたき石で、短軸方向に二つに割れている。遺物No.445（図上側）は若干赤化しているが、444は不明瞭である。

No.22・23（図番12・13）は一面に敲打痕を有すたたき石で、No.19同様短軸方向に割れている。



図IV-17 方割礫・礫の分布

IV 縄文時代早期・前期の遺構と遺物

表IV-25 方割礫接合資料一覧(1)

No.	グリッド	x'	y'	z	長(m)	幅(m)	厚(m)	重(g)	石質	図番	遺No	種別	備考
1	1・0-27	18	28	100	84.3	68.8	30.9	104.0	凝灰岩		5		一拵、破片
2	1・0-80	54	98	125	125.6	43.4	35.8	234.0	硬質砂岩		18	長楕円礫	一端欠損
	73	-	-	-							-		
3	1・6-63	66	47	120	57.8	9.6	11.4	9.7	玄武岩		155	楕円礫	破片
	1・7-30	-	-	-							-		
4	1・6-66	66	65	118	176.0	50.6	21.4	256.8	砂岩	1	153	長楕円礫	焼けている
	1・7-49	94	39	125							331		
5	1・7-34	63	98	143	216.0	130.4	78.1	1,290	安山岩	2	355	石皿	破片、一面すりくぼみ、焼けている
	2・6-09	15	48	152							225		
	2・7-10	30	32	136							213		
	84	31	79	134							217		
	2・8-45	96	37	116							367		
	58	24	1	132							389		
	3・1-22	54	76	144							66		
	4・4-85	86	61	162							160		
6	1・7-46	39	10	134	155.4	62.8	42.4	500.5	安山岩	3	501	たたき石	一端・側縁割損、焼けている
	46	44	62	149							502		
	46	56	30	142							354		
	55	12	95	141							276		
	56	45	14	143							278		
7	1・8-71	94	46	137	217.0	131.5	61.4	1,065	凝灰岩	4	461	台石	破片、焼けている 遺物No.544は20点集中
	72	51	91	137							454		
	81	5	43	140							465		
	81	48	17	141							477		
	81	51	84	135							463		
	82	8	34	139							479		
	82	14	31	140							480		
	82	25	50	138							544		
	82	71	25	136							-468		
	91	10	71	130							470		
8	1・8-71	94	15	168	226.0	94.0	131.3	2,990	安山岩	5	581	石皿	破片、一面に割損、焼けている 遺物No.581・592はP3内出土
	72	76	33	146							453		
	72	77	35	146							537		
	81	3	15	174							592		
	90	48	94	138							439		
	2・7-63	84	93	130							196		
9	1・8-71	99	24	168	213.0	110.6	77.8	2,615	安山岩	6	582	石皿	破片、一面に割損、破損後黒色付着物あり 遺物No.582はP3内出土、焼けている
	3・7-06	34	74	138							296		
10	1・8-72	44	95	146	142.0	105.0	78.0	1,200	安山岩	7	539	楕円礫	一拵、焼けている
11	1・8-72	76	77	145	135.8	67.0	41.5	282.2	凝灰岩		538		一拵、破片、焼けている
12	1・8-72	76	77	145	170.0	153.8	96.2	2,390	安山岩	8	538	台石	破片、焼けている
	80	16	66	143							534		
	80	20	61	142							578		
	82	73	17	130							452		
	82	83	12	123							451		
	82	86	2	123							450		
13	1・8-72	77	35	146	145.4	104.3	66.6	875.0	安山岩		537		破片、焼けている
	90	62	83	141							482		
	91	64	20	138							440		
	2・7-76	80	83	139							231		
14	1・8-73	69	37	136	106.2	106.2	107.4	1,740	凝灰岩	9	455		破片、焼けている
	73	69	40	145							541		
	73	69	46	137							456		
	73	80	89	135							458		
15	1・8-73	84	13	146	148.0	150.0	130.0	3,630	安山岩	10	540	台石	一拵、破片、すりくぼみ、焼けている

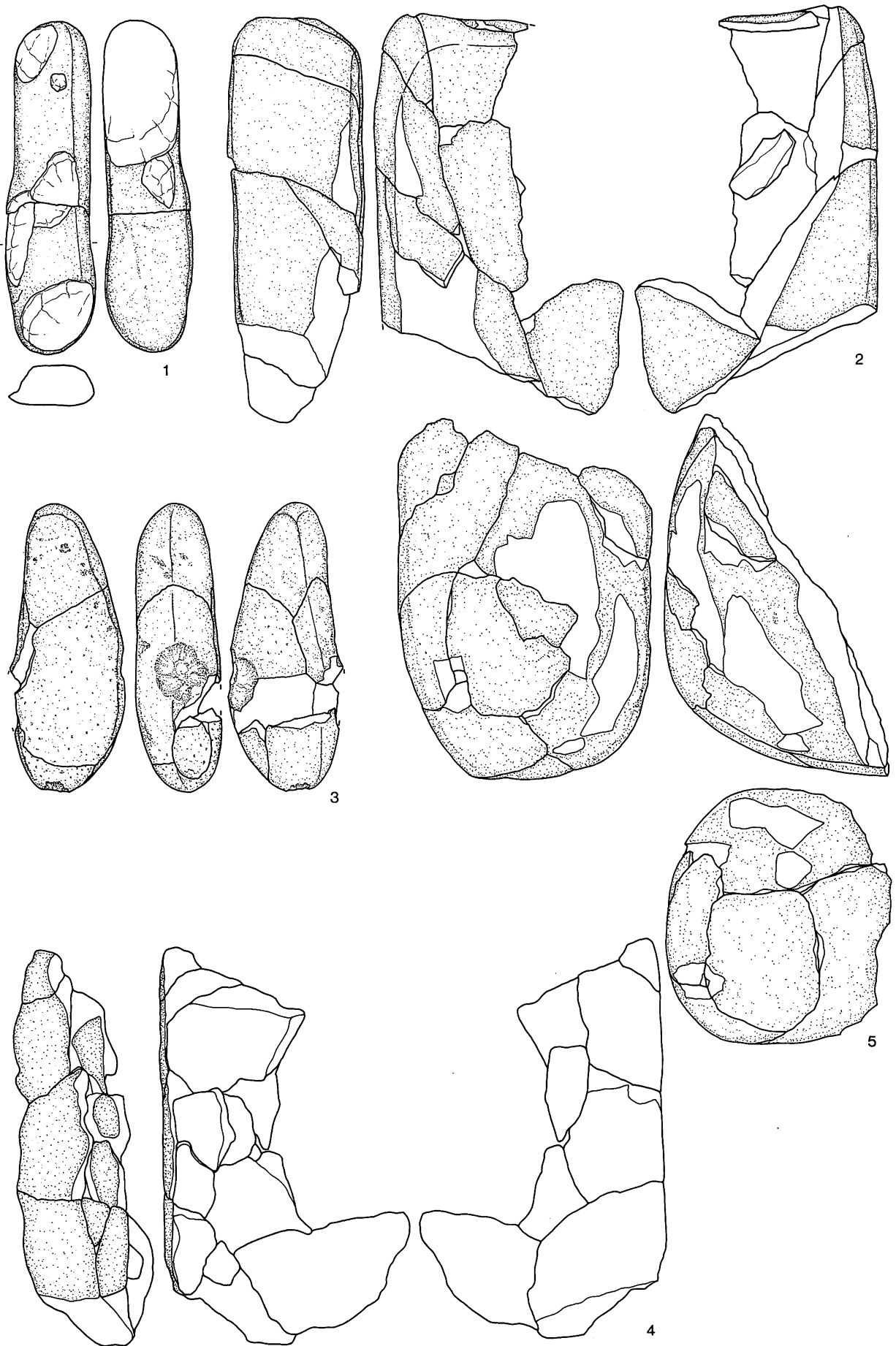
表IV-26 方割礫接合資料一覧(2)

No.	グリッド	x'	y'	z	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺No	種別	備考
16	1・8-80	34	65	143	149.2	68.7	156.1	1,480	安山岩		535		破片、焼けている
		81	27	145							580		
	4・7-96	31	55	144							325		
17	1・8-80	42	68	137	155.0	114.0	110.2	1,920	安山岩		448		破片
		80	51	63	135						460		
		81	44	16	142						476		
		81	45	18	141						478		
18	1・8-82	35	98	137	98.4	93.8	84.8	660.0	凝灰岩		481		破片
		82	40	93	143						543		
19	1・8-84	44	36	124	112.1	52.0	35.3	283.6	安山岩	11	444	たたき石	一端に鋭頂
		84	50	24	130						445		遺物No.445は焼けている
20	1・8-91	48	48	146	87.0	99.5	49.5	300.0	安山岩		577	石皿	破片、一面すりくぼみ、焼けている
		91	90	46	161						576		
	3・6-12	-	-	-							599		
	3・7-17	58	4	135							291		
21	2・2-25	77	74	111	78.6	54.8	16.8	211.8	凝灰岩		81	たたき石?	破片、焼けている、一面に鋭頂?
		40	-	-							-		
	2・4-01	74	25	125							598		
	3・3-46	11	62	148							159		
22	2・2-58	87	3	124	158.0	67.2	40.8	371.0	凝灰岩	12	95	たたき石	一面に鋭頂
	2・4-39	77	35	123							71		
23	2・3-16	12	30	116	75.2	43.6	29.4	169.2	砂岩	13	99	たたき石	一面に鋭頂
	5・7-13	61	37	137							327		
24	2・3-22	97	78	125	90.6	84.8	42.1	272.4	凝灰岩		125	楕円礫	破片
		22	99	24	126						124		
		32	16	43	125						113		
		32	71	38	125						111		
25	2・3-22	97	78	125	122.0	63.2	48.8	388.6	凝灰岩		125	楕円礫	破片
		22	99	24	126						124		
26	2・3-83	80	41	136	90.2	73.4	31.4	340.3	安山岩		128	楕円礫	破片
		85	66	18	123						105		
27	2・4-52	98	90	119	76.1	54.6	41.0	153.4	凝灰岩		142		破片
		62	8	83	122						143		
28	2・5-90	52	69	128	90.0	40.4	21.7	105.1	砂岩		147	長楕円礫	破片
	2・2-17	-	-	-							-		
29	2・5-97	58	91	150	63.8	54.1	14.7	54.2	砂岩		174	楕円礫	破片
	3・5-07	21	8	134							187		
30	2・6-75	89	78	133	97.2	44.2	36.7	145.3	凝灰岩		190	長楕円礫	破片
		84	83	99	142						189		
31	2・7-24	20	43	133	91.4	69.5	70.6	447.5	安山岩		205		破片
		47	43	20	142						228		
32	2・7-73	99	92	142	130.3	78.7	42.5	399.4	凝灰岩	14	208	偏平楕円礫	焼けている
		74	67	6	142						210		
		83	6	72	135						212		
	2・8-30	36	32	140							392		
33	2・7-76	80	83	139	55.5	53.8	40.8	206.9	砂岩		231		破片、未接合破片5点あり
		76	89	92	131						204		
34	2・8-96	61	61	125	198.0	110.0	57.5	680.0	凝灰岩		370	石皿	破片、焼けている
	3・3-49	67	60	137							84		
35	3・4-85	49	47	146	134.0	83.9	32.3	356.1	凝灰岩		131	楕円礫	破片
		94	52	50	140						117		
36	3・5-86	70	70	145	94.4	70.0	23.8	175.6	砂岩		185	長楕円礫	破片
	5・4-22	32	75	153							103		
37	3・6-50	7	16	141	113.3	99.9	25.9	307.5	安山岩		240		破片
	4・6-89	41	12	151							259		

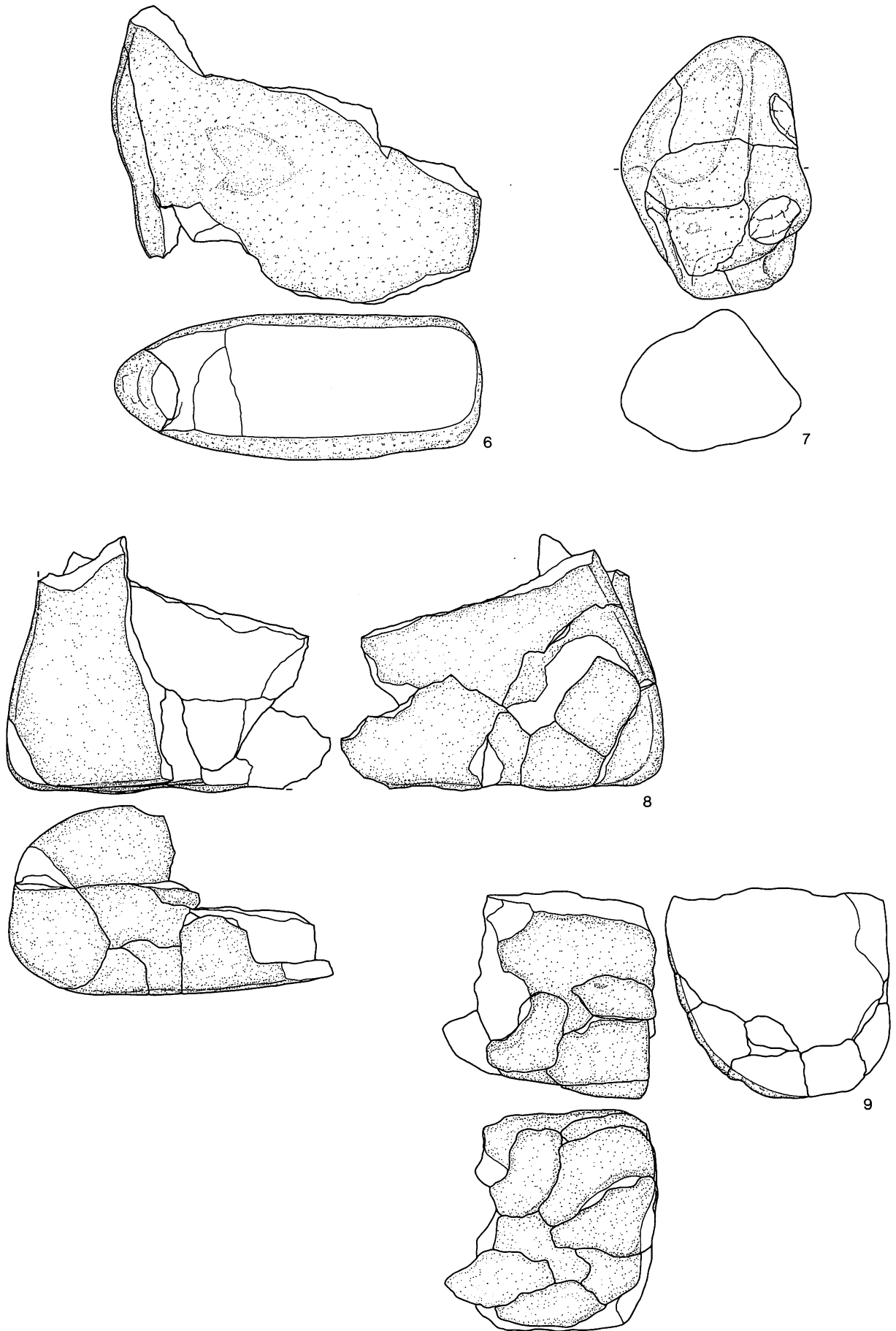
IV 縄文時代早期・前期の遺構と遺物

表IV-27 方割礫接合資料一覧(3)

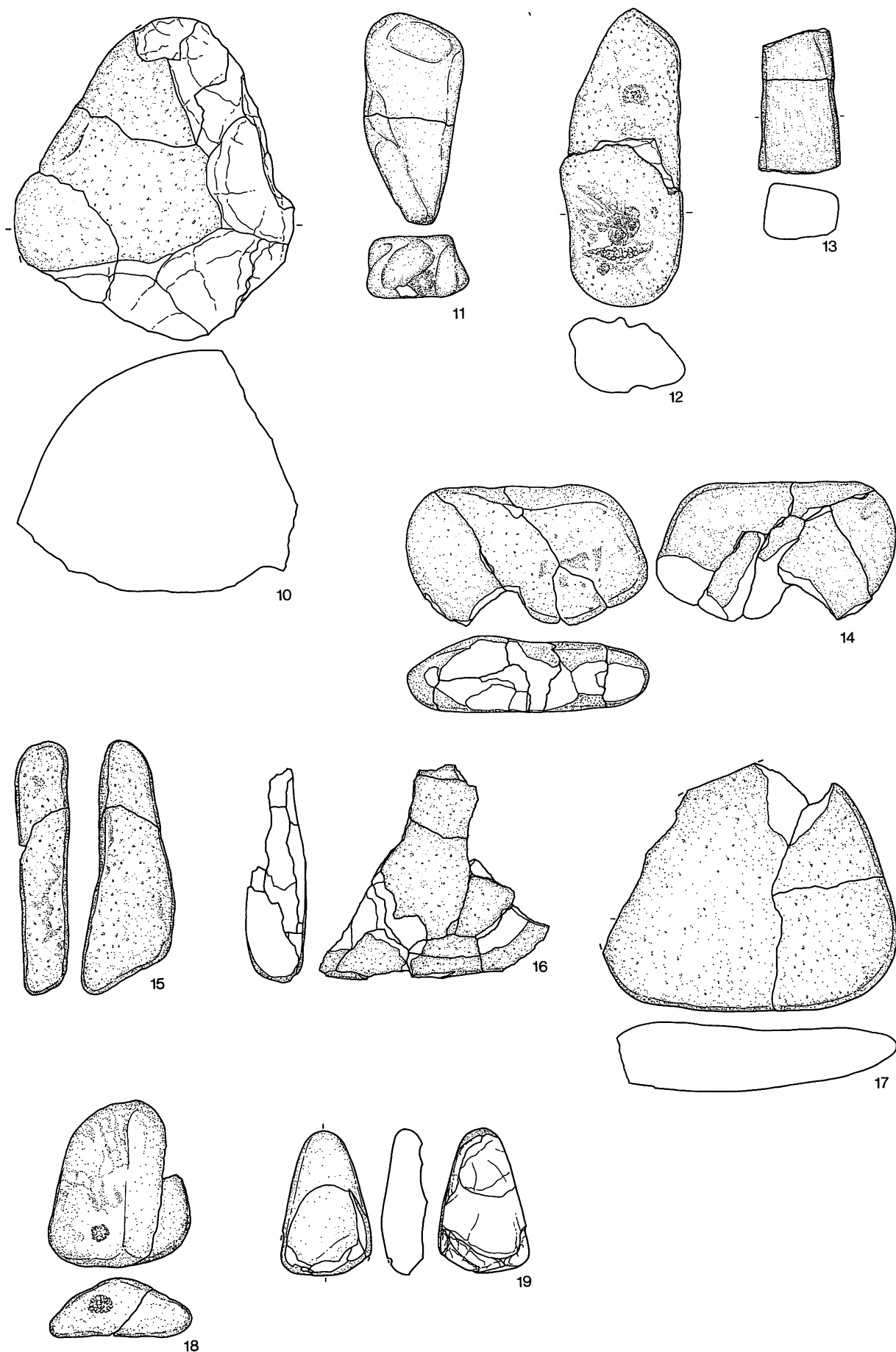
No.	グリッド	x'	y'	z	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	種別	備考
38	3・7-46	43	67	138	44.2	40.4	28.5	57.6	砂岩		289	楕円礫	
	46	45	57	136							288		
39	3・8-13	23	37	133	136.7	45.4	28.8	228.0	安山岩	15	362	長楕円礫	遺物No.362は削けている
	3・9-57	15	43	123							516		
40	3・8-65	63	22	146	83.1	28.4	9.1	13.4	玄武岩		434		破片
	56	-	-	-							-		
41	3・9-03	49	71	128	188.0	125.0	46.0	1,125	不明		518		破片、削けている
	55	50	41	134							515		
42	3・9-52	96	27	136	50.8	45.8	25.6	72.3	凝灰岩		513		破片
	62	18	58	136							514		
43	3・9-91	62	22	136	59.1	57.4	28.2	147.4	安山岩		506		破片、削けている
	4・9-85	76	57	130							417		
44	4・4-07	-	-	-					硬質砂岩		-		破片、削けている
	16	-	-	-							-		
45	4・6-76	12	70	152	174.0	100.0	74.4	1,040	安山岩		262		破片
	88	29	54	146							258		
46	4・8-05	64	89	127	125.8	112.4	31.1	315.6	安山岩	16	400	台石	破片、削けている
	07	76	91	121							399		
	08	68	10	121							397		
	08	74	95	121							398		
	4・9-85	57	5	138							548		
	85	90	4	134							547		
47	4・8-14	62	74	145	161.0	1,230	37.0	1,040	安山岩	17	425	台石	
	4・9-78	49	35	134							522		
48	4・8-28	67	51	140	90.0	75.7	31.9	228.7	砂岩	18	500	たが石	一端・一面に剥痕
	4・10-13	81	72	137							552		
49	4・8-62	32	62	165	123.1	64.0	35.4	280.0	凝灰岩		493	楕円礫	破片
	5・7-05	52	81	150							376		
	05	54	73	154							377		
50	4・8-70	20	71	143	75.0	44.0	24.5	104.1	安山岩		491	楕円礫	破片、削けている
	70	24	75	145							492		
51	4・9-17	45	18	122	81.6	44.7	7.4	29.3	安山岩		485		剥片
	1・7-97	-	-	-							-		
52	4・9-34	17	43	124	43.9	37.3	12.7	22.8	玄武岩		488	楕円礫	破片
	42	21	96	127							487		
53	4・9-56	8	3	145	107.7	53.7	29.1	150.7	玄武岩		562	長楕円礫	破片
	57	76	24	126							521		
	67	20	61	128							561		
54	4・9-73	43	35	133	100.8	31.8	13.6	32.2	泥岩		496		一括、剥片、削けている
55	4・9-82	35	56	134	52.1	68.2	34.3	149.8	安山岩		526		破片
	82	80	54	133							471		
	82	82	57	133							420		
56	4・10-21	17	26	144	78.0	48.9	22.3	91.4	玄武岩	19	553	扁平楕円礫	
	21	38	73	133							554		
	21	94	16	128							555		
	40	40	41	135							566		
57	5・1-04	32	94	151	126.6	87.5	35.5	243.9	凝灰岩		59		破片
	04	78	86	140							60		
	04	84	51	145							61		
	14	80	48	139							62		
58	5・5-09	82	95	150	93.2	49.6	31.2	133.3	砂岩		181	楕円礫	破片
	4・4-99	-	-	-							-		



図IV-18 方割礫接合資料(1)



図IV-19 方割礫接合資料(2)



図IV-20 方割礫接合資料(3)

No.32 (図番14) は外面全体がかなり火熱を受けた偏平楕円礫で、赤化ないし黒化が著しいが破断面には及んでいない。

No.38 (図番15) は、短軸方向に二つに割れた長楕円礫である。遺物No.362 (図上側) のみが焼けて赤化している。

No.45・46 (図番16・17) は、ともに4・8、4・9区から出土した方割礫が接合したもので安山岩を素材とした台石である。いずれも薄手で、46は外面のみが赤化している。

No.47 (図番18) は一端・一面に敲打痕を有すたき石で、火熱の影響はみられない。

No.55 (図番19) は玄武岩の河原石で、両面とも面方向に剥離がみられる。

方割礫 遺構出土のものを除き219点がある。出土位置は石器類同様調査区北半に多く、特に第二地点周辺に集中している。石材別には安山岩がもっとも多く94点占め、ついで凝灰岩44点、砂岩34点、硬質砂岩14点、珪質岩11点の順で、他に泥岩9点、玄武岩4点、千枚岩・片麻岩・片岩各2点、石灰岩・軽石・チャート各1点がある。

重量をみると、500gを超えるものは安山岩7点と凝灰岩1点のみで、安山岩には1,000gを超えるもの(第二地点出土のNo.64・65)もある。

割れ方をみると、接合してA型(破断面0)となったものは3点(B型+B型2例、B型+C型+C型1例)である。なお、本来のA型は礫として次項で扱う。B型(破断面)は74点(B型+C型2例、B型+D型1例、C型+C型1例を含む)ともっとも多く、次いでC型(破断面2)43点(C型+C型2例、D型+D型2例を含む)、D型(破断面3)26点(C型+D型1例を含む)、E型(破断面4)2点である。なお破片としたものは、破断面が明確でない中央部分の小破片や表面から剥落したと思われるもので69点がある。B型の平均重量は、安山岩が37点で256.4g、凝灰岩が14点で119.6g、砂岩が9点で189.7gである。焼けている例は、安山岩31点、凝灰岩8点、砂岩7点、硬質砂岩4点、珪質岩1点がある。このうち割れた後に焼けていることがはっきりしているものは安山岩・凝灰岩・砂岩・硬質砂岩に各1点あり、焼けてから割れたことがはっきり分かるものは安山岩15点、凝灰岩4点である。

礫 103点が出土している。石材別には安山岩がもっとも多く、約半分の62点を占めている。次いで凝灰岩が12点、硬質砂岩10点の順で、他に砂岩5点、珪質岩4点、片岩2点、硬質泥岩・泥岩・玄武岩・岩・流紋岩各1点がある。

形態別には、楕円礫44点、長楕円礫21点、偏平楕円礫14点、円礫・偏平円礫各10点、垂円礫2点、偏平長楕円礫1点である。

重量をみると、500gを超えるものは安山岩11点(うち1点は1,250g)、凝灰岩・片岩(?)各1点である。平均重量は、安山岩304.1g、凝灰岩168.3g、硬質砂岩157.8g、砂岩153.8g、その他181.9gである。この重量を方割礫B型と比較すると、本来方割礫B型が約半分の重量になるはずであるが、安山岩では約84%、凝灰岩では約71%、砂岩に至っては約123%と、方割礫B型の平均重量が礫のそれを上回ってしまう(硬質砂岩は方割礫B型はない)。従って、大型の礫ほど割られている比率が高いといえよう。

表IV-28 方割礫一覧(1)

No.	グリッド	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	石質	分類	遺物No	備考
1	0・3-93	49.6	30.8	14.2	14.6	凝灰岩	破片	—	割ってから焼けている
2	0・6-81	65.9	33.0	28.9	64.6	凝灰岩	D	342	焼けてから割れている、磨損著
3	0・7-81	29.6	44.0	64.7	77.0	安山岩	C	340	
4	82	31.8	25.6	10.0	10.2	砂岩	破片	—	
5	85	33.0	29.8	9.5	9.4	安山岩	破片	347	磨
6	88	88.3	82.9	58.3	314.9	火山弾	B	338	B+C
7	1・0-27	59.1	49.0	22.8	77.6	安山岩	D	6	石皿？
8	29	51.5	34.2	12.5	24.6	凝灰岩	破片	—	破片2点接合、未接合破片1点あり
9	30	77.0	37.9	18.9	56.1	安山岩	破片	—	
10	1・1-00	71.2	42.2	29.1	88.0	砂岩	D	7	焼けている
11	23	50.5	45.6	41.5	102.6	石灰岩	B	—	
12	28	62.9	59.5	82.0	304.2	安山岩	D	—	
13	30	66.5	71.6	49.1	289.0	砂岩	C	9	焼けている
14	49	65.2	71.8	57.0	173.6	砂岩	D	11	焼けている
15	91	33.4	23.4	20.5	18.0	硬質砂岩	破片	—	
16	97	79.4	66.6	36.3	287.3	安山岩	B	48	焼けている
17	1・2-43	26.2	15.2	5.9	2.0	硬質砂岩	破片	26	焼けている
18	68	81.8	42.6	20.3	75.2	砂岩	C	41	
19	73	43.2	10.2	14.8	7.2	硬質砂岩	破片	—	焼けている
20	84	71.0	36.9	20.4	61.7	珪質岩	C	42	
21	1・3-91	64.3	84.4	30.4	278.6	片麻岩	B	38	
22	98	62.4	39.0	19.2	72.2	安山岩	B	51	
23	1・4-35	68.4	40.9	35.9	134.9	安山岩	B	27	
24	79	58.9	45.1	9.2	25.3	砂岩	破片	—	
25	1・5-05	28.4	12.7	8.5	5.3	硬質砂岩	破片	—	焼けている
26	26	21.8	32.3	5.0	5.1	硬質砂岩	破片	—	
27	29	43.4	28.0	10.6	12.0	凝灰岩	破片	—	焼けている
28	56	79.4	65.0	21.0	117.4	凝灰岩	C	165	
29	75	52.0	29.0	9.2	13.6	安山岩	破片	—	割ってから焼けている
30	86	52.6	40.6	12.5	32.9	玄武岩	破片	134	
31	1・6-17	—	—	—	64.1	凝灰岩	破片	—	未接合破片3点、いずれも磨
32	36	72.2	49.0	36.0	106.9	凝灰岩	B	359	
33	36	44.8	41.4	18.0	25.4	砂岩	破片	303	
34	39	89.2	61.2	30.8	212.8	安山岩	B	302	C+C
35	48	44.2	51.9	13.5	31.3	凝灰岩	C	358	
36	64	22.4	47.0	33.4	39.2	凝灰岩	C	154	焼けている
37	64	36.6	24.6	30.6	19.7	凝灰岩	破片	158	
38	1・7-19	75.9	47.0	44.3	180.6	安山岩	D	335	焼けてから割れている
39	19	111.4	50.9	48.9	389.9	安山岩	B	336	磨
40	43	76.8	40.0	20.0	90.9	安山岩	D	503	焼けてから割れている
41	52	109.0	89.6	38.0	391.8	安山岩	B	268	焼けてから割れている
42	53	109.8	43.2	28.8	154.8	安山岩	D	269	焼けてから割れている
43	54	21.0	90.0	40.4	86.0	安山岩	B	352	
44	63	66.5	78.0	36.5	238.2	安山岩	B	275	
45	70	101.6	40.2	22.8	146.6	凝灰岩	B	260	
46	73	70.8	49.4	14.2	32.9	凝灰岩	破片	273	274と同一個体
47	73	61.6	45.6	14.0	25.4	凝灰岩	破片	274	
48	82	72.6	55.4	41.0	136.3	凝灰岩	D	279	磨
49	85	62.3	59.8	44.8	171.3	凝灰岩	B	—	
50	87	50.0	35.2	8.4	16.4	安山岩	破片	270	
51	93	58.6	40.8	20.8	34.3	凝灰岩	破片	281	
52	1・8-20	57.0	56.3	18.3	66.6	安山岩	破片	—	
53	31	42.0	78.2	37.2	155.8	安山岩	B	586	
54	64	62.7	20.6	43.2	65.8	安山岩	D	587	
55	70	107.3	54.7	40.6	193.0	安山岩	C	579	焼けている

表IV-29 方割礫一覧(2)

No.	グリッド	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	石質	分類	遺物No	備考
56	1・8-73	36.9	47.2	18.2	33.8	凝灰岩	破片	457	磨けている。面に磨耗
57	74	79.7	35.8	13.2	49.3	安山岩	破片	585	
58	74	42.0	31.9	20.4	23.1	凝灰岩	破片	588	磨耗
59	80	44.9	39.0	12.1	15.9	凝灰岩	破片	475	
60	81	40.2	32.2	11.6	9.6	凝灰岩	破片	466	磨けてから割れている
61	81	120.0	72.2	50.2	540.0	安山岩	D	536	C+D、磨けている
62	81	52.4	31.4	28.4	37.0	凝灰岩	破片	464	
63	83	40.0	32.6	24.8	30.6	凝灰岩	D	459	磨耗
64	84	32.8	22.6	19.0	16.4	凝灰岩	D	469	磨耗
65	90	230.0	105.0	50.8	1,380	安山岩	B	438	
66	90	140.2	121.3	49.6	1,308	安山岩	E	575	磨けてから割れている
67	94	83.8	59.1	75.3	513.0	凝灰岩	D	441	磨耗
68	94	41.2	37.6	22.4	31.4	砂岩	破片	443	磨耗
69	2・0-14	105.0	62.2	50.2	530.0	安山岩	B	94	磨けている
70	35	69.2	95.4	21.6	200.3	安山岩	B	78	
71	62	69.0	27.6	14.8	25.4	泥岩	B	75	
72	70	53.6	32.8	12.0	16.6	玄武岩	破片	215	
73	2・1-17	60.8	51.7	25.4	110.7	砂岩	C	79	
74	2・2-05	55.6	45.2	19.2	83.2	砂岩	C	16	
75	05	51.2	49.6	20.4	69.6	砂岩	C	17	D+D
76	30	97.0	64.0	41.4	274.6	砂岩	B	80	
77	59	64.2	58.8	12.0	61.2	砂岩	D	83	
78	89	57.4	15.4	20.8	17.9	珪質岩	B	87	
79	2・3-05	34.4	24.9	19.8	19.8	凝灰岩	B	110	
80	15	78.1	62.2	25.1	171.2	安山岩	C	109	磨けてから割れている
81	16	54.8	43.4	23.9	97.5	砂岩	C	100	磨けている
82	22	23.6	47.1	20.3	18.4	珪質岩	B	112	
83	62	58.6	39.4	38.6	109.1	安山岩	B	107	
84	66	44.3	18.8	24.8	20.6	安山岩	破片	108	
85	88	26.3	35.2	20.0	26.3	泥岩	C	129	C+C
86	2・4-01	42.2	40.1	9.7	23.8	珪質岩	D	146	
87	22	55.3	91.5	24.2	149.2	砂岩	B	119	
88	46	52.3	30.0	9.4	16.9	珪質岩	破片	121	磨けてから割れている
89	93	33.6	29.0	31.8	26.6	凝灰岩	C	152	磨けてから割れている
90	2・5-05	40.4	25.8	16.6	15.4	安山岩	破片	-	
91	15	123.0	49.2	20.2	115.1	凝灰岩	C	170	
92	49	72.0	71.0	19.6	102.7	砂岩	B	173	磨けている
93	68	82.8	43.4	26.8	147.9	凝灰岩	B	171	
94	87	56.4	40.0	10.0	19.3	硬質砂岩	破片	172	
95	2・6-19	45.0	31.0	22.4	30.4	凝灰岩	D	226	
96	30	87.4	41.0	15.0	63.0	安山岩	C	175	
97	55	60.0	41.2	31.0	85.8	安山岩	B	178	
98	62	67.4	46.4	34.0	100.8	安山岩	B	179	磨けてから割れている
99	2・7-25	52.6	37.0	26.6	87.0	安山岩	B	202	磨けている
100	45	34.8	23.6	13.6	11.5	泥岩	B	211	
101	49	43.8	43.8	49.6	138.4	安山岩	D	209	磨けている
102	58	108.0	57.2	26.4	204.0	凝灰岩	柵礫	235	B+C+C
103	65	89.8	59.8	24.0	151.3	安山岩	破片	197	
104	67	87.0	47.6	32.4	170.6	安山岩	B	201	磨けている
105	70	38.6	23.2	8.4	8.6	安山岩	破片	198	
106	75	40.0	23.0	16.2	15.3	安山岩	破片	229	磨耗
107	78	45.4	54.0	32.2	87.7	安山岩	B	232	磨けてから割れている
108	84	72.0	67.0	45.0	359.7	安山岩	B	214	磨耗
109	84	43.2	32.2	6.5	8.8	安山岩	破片	216	磨けている
110	84	49.5	32.6	7.9	11.0	安山岩	破片	217	磨けている

表IV-30 方割礫一覧(3)

No.	グリッド	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	分類	遺物No	備考
111	2・7-84	57.4	33.0	41.0	74.2	安山岩	D	218	磨けている
112	84	83.6	37.4	20.8	60.5	安山岩	破片	219	磨けている
113	95	87.2	104.2	29.6	291.6	安山岩	B	224	黒灰色を呈し、ほかの安山岩に比して重い
114	2・8-22	52.0	64.7	40.9	144.7	安山岩	B	411	
115	23	55.6	44.0	35.0	87.8	安山岩	D	412	磨けてから割れている、磨耗
116	24	59.2	34.2	17.2	28.2	凝灰岩	B	365	
117	26	77.6	50.6	28.6	139.5	安山岩	C	366	
118	26	58.5	60.6	36.8	211.4	安山岩	C	431	磨けている
119	31	49.4	50.8	21.8	43.4	凝灰岩	B	391	
120	34	45.2	23.9	7.5	8.0	硬質砂岩	破片	—	
121	38	52.8	52.9	28.3	92.1	安山岩	C	387	
122	39	69.2	55.8	14.8	54.8	凝灰岩	B	416	
123	83	57.6	81.4	31.4	133.4	安山岩	B	419	
124	84	47.0	20.8	13.8	12.6	安山岩	C	499	
125	92	32.4	30.3	10.4	9.4	凝灰岩	破片	—	
126	3・0-16	72.4	123.6	53.9	900.0	安山岩	C	33	
127	26	88.9	54.0	29.4	110.3	凝灰岩	B	32	
128	3・3-04	58.6	41.0	34.4	75.0	砂岩	C	—	
129	87	84.2	46.2	21.0	139.7	泥岩	C	97	
130	3・4-43	69.4	43.6	18.0	34.2	凝灰岩	破片	—	
131	82	67.5	87.5	13.0	189.3	凝灰岩	B	130	
132	3・5-04	46.9	33.2	12.6	18.1	珪質岩	破片	297	
133	67	46.4	35.8	14.4	33.8	安山岩	C	233	
134	67	47.0	27.8	8.6	9.1	硬質砂岩	破片	183	
135	87	135.0	64.0	48.4	580.0	安山岩	B	227	
136	3・6-17	51.6	30.0	22.8	44.2	安山岩	D	249	磨けている
137	18	48.8	46.2	42.8	110.5	安山岩	C	238	
138	22	99.6	56.8	33.0	140.1	硬質砂岩	破片	246	
139	41	30.8	15.8	12.6	5.4	玄武岩	B	271	B+C
140	45	40.4	20.8	12.8	10.9	泥岩	C	248	C+C
141	52	27.8	22.6	6.3	5.0	砂岩	破片	—	磨けてから磨けている
142	65	71.6	51.0	49.8	245.0	片麻岩	C	241	
143	65	97.0	77.4	34.2	336.6	安山岩	C	242	
144	87	35.4	15.8	7.2	4.9	泥岩	B	315	
145	3・7-01	77.4	23.2	51.4	114.9	安山岩	破片	322	
146	06	36.0	61.3	13.7	33.5	安山岩	破片	295	
147	20	86.3	63.0	40.5	281.2	安山岩	B	328	
148	22	52.6	40.6	15.6	33.6	珪質岩	破片	293	
149	26	98.4	61.0	47.4	231.8	凝灰岩	B	329	
150	35	41.2	28.0	12.8	23.5	砂岩	C	287	
151	49	72.2	53.6	55.6	232.2	安山岩	C	316	磨けてから割れている
152	60	102.6	47.0	22.0	124.1	安山岩	破片	286	
153	66	36.8	25.2	7.8	7.5	片岩	破片	317	
154	80	70.5	52.3	17.3	69.2	砂岩	破片	—	
155	3・8-29	75.6	42.6	15.0	42.0	凝灰岩	破片	381	
156	30	126.1	60.6	21.4	223.6	安山岩	B	421	
157	49	57.8	42.4	35.6	81.7	安山岩	D	379	磨けてから割れている
158	64	62.4	34.6	7.6	16.9	珪質岩	破片	—	未接合破片1点あり
159	75	32.2	26.1	20.6	24.9	安山岩	B	429	磨けている
160	81	39.0	32.9	17.4	28.6	砂岩	B	430	磨けている
161	88	142.5	39.1	36.0	288.7	珪質岩	長楕円礫	395	B+B
162	3・9-22	38.9	49.2	26.8	53.2	砂岩	C	433	D+D
163	59	45.0	29.4	12.6	13.4	安山岩	破片	520	
164	70	56.2	38.5	29.6	66.4	珪質岩	B	436	
165	78	52.2	58.8	39.4	201.3	安山岩	E	512	石皿片?

表IV-31 方割礫一覽(4)

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	分類	遊No	備考
166	3・9-89	100.0	55.3	11.3	228.5	安山岩	B	564	
167	92	51.7	56.3	46.6	185.6	安山岩	B	437	磨けてから割れている
168	97	78.1	100.0	54.8	520.0	安山岩	B	508	
169	3・10-40	19.6	18.8	2.9	1.2	安山岩	破片	569	
170	4・1-34	87.5	95.6	40.2	261.7	凝灰岩	B	4	
171	92	44.4	25.8	26.4	34.5	安山岩	B	3	
172	4・4-18	46.8	61.8	20.7	76.3	安山岩	B	118	磨けている
173	4・5-43	34.0	31.0	7.0	7.1	硬質砂岩	破片	252	
174	4・6-12	62.6	54.8	21.6	81.1	硬質砂岩	破片	253	
175	18	63.8	63.4	44.0	180.9	砂岩	B	250	
176	21	77.0	59.6	34.0	209.7	安山岩	D	251	
177	22	89.2	64.2	18.4	90.7	硬質砂岩	破片	-	
178	41	68.0	28.8	36.0	112.1	砂岩	D	243	両面みがきか？
179	48	96.6	73.8	52.0	431.6	砂岩	D	282	
180	58	68.0	53.8	18.2	66.3	安山岩	C	283	
181	74	79.4	68.0	24.6	150.7	凝灰岩	B	257	
182	84	90.6	64.4	38.0	283.7	砂岩	C	255	
183	4・7-18	87.8	41.0	16.0	58.2	片岩	破片	222	
184	36	54.0	37.8	13.6	29.2	砂岩	C	372	
185	41	81.8	57.6	48.5	266.0	砂岩	B	341	
186	41	66.7	46.3	72.0	321.0	安山岩	D	371	磨けてから割れている
187	58	60.7	16.6	43.0	52.5	安山岩	C	324	
188	81	145.4	40.4	31.6	262.3	千枚岩	B	374	
189	92	45.6	39.4	15.3	43.8	砂岩	C	375	
190	4・8-15	34.8	17.4	11.5	7.0	硬質砂岩	C	401	
191	30	41.5	16.7	11.2	11.4	凝灰岩	B	424	
192	45	104.6	87.2	58.0	650.0	安山岩	B	404	
193	56	98.8	52.9	49.3	277.0	安山岩	B	407	
194	59	47.0	33.8	23.0	46.7	砂岩	D	495	
195	79	98.5	61.7	71.5	476.2	珪質岩	B	406	
196	86	68.0	64.0	27.4	159.8	安山岩	B	409	
197	4・9-06	86.7	50.5	15.6	84.5	泥岩	扁平	505	B+B
198	39	80.0	43.2	37.4	177.4	安山岩	E	489	磨
199	74	84.4	34.4	20.5	79.2	砂岩	B	524	磨
200	77	49.2	37.0	17.0	29.3	安山岩	破片	-	磨けてから割れている
201	84	50.6	39.4	24.6	55.6	安山岩	B	528	磨けてから割れている
202	85	107.4	46.2	12.6	60.9	安山岩	破片	529	
203	88	46.4	90.0	28.6	112.5	安山岩	B	530	
204	4・10-06	21.3	51.2	31.1	51.1	安山岩	C	574	
205	13	36.3	43.0	9.0	11.4	玄武岩	破片	551	
206	21	50.6	43.0	16.6	27.3	凝灰岩	破片	-	磨
207	31	36.4	17.6	20.4	12.0	安山岩	D	563	磨けている
208	34	124.8	47.2	49.4	343.6	泥岩	B	557	B+D
209	43	30.3	22.4	9.0	5.9	凝灰岩	破片	-	磨けてから割れている
210	47	66.2	27.8	61.7	176.9	安山岩	B	590	
211	47	65.2	35.3	25.4	72.4	泥岩	B	591	
212	80	58.8	27.0	27.2	33.6	安山岩	破片	559	
213	90	62.4	51.0	18.2	72.9	チャート	C	558	
214	5・1-05	40.2	34.8	8.2	11.6	硬質砂岩	破片	58	割ってから磨けている
215	5・2-16	78.0	47.6	23.0	88.5	千枚岩	C	72	
216	5・6-04	90.0	60.2	31.8	147.3	安山岩	C	321	
217	5・7-19	81.9	60.8	32.7	341.8	砂岩	B	382	
218	5・8-04	29.4	18.6	18.0	19.2	砂岩	破片	-	磨
219	表採	77.0	115.4	26.0	312.8	砂岩	B	594	

表IV-32 礫一覧(1)

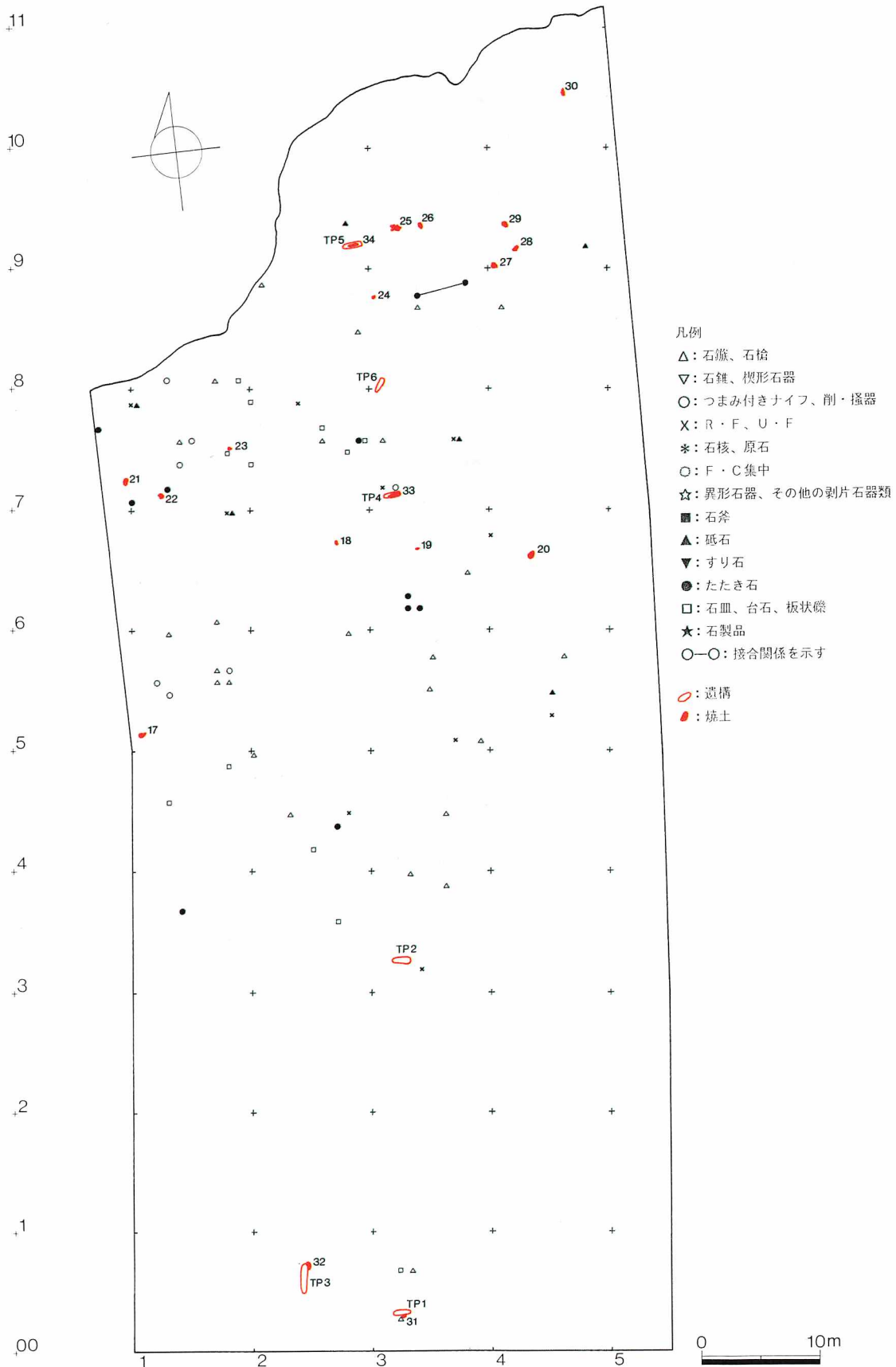
No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	分類	遺物No	備考
1	0・6-86	114.0	52.6	23.8	117.4	凝灰岩	扁平楕円礫	313	
2	0・7-80	52.2	38.0	12.4	31.6	砂岩	扁平楕円礫	—	
3	1・1-36	122.5	85.1	58.1	640.0	安山岩	楕円礫	10	断面三角形
4	1・2-91	122.0	71.7	50.2	610.0	安山岩	楕円礫	57	
5	1・3-66	69.3	40.9	30.8	118.0	安山岩	楕円礫	—	
6	1・5-89	66.7	43.8	20.8	74.3	硬質砂岩	扁平楕円礫	—	
7	90	122.8	42.7	35.7	351.8	安山岩	長楕円礫	135	断面四角形
8	1・6-17	74.2	55.2	34.8	224.5	安山岩	楕円礫	312	
9	22	99.2	71.6	48.0	505.0	安山岩	楕円礫	310	
10	23	83.0	74.8	50.6	389.8	安山岩	円礫	311	
11	26	91.4	66.8	48.2	271.1	安山岩	垂円礫	306	断面三角形
12	27	83.8	42.0	34.0	154.7	安山岩	楕円礫	304	焼けている
13	27	86.4	41.6	38.4	202.8	安山岩	長楕円礫	305	断面四角形
14	81	47.0	44.0	37.1	79.5	凝灰岩	垂円礫	343	
15	1・7-02	55.8	44.0	18.0	60.2	安山岩	扁平円礫	—	
16	20	109.5	70.5	49.2	442.1	安山岩	楕円礫	333	断面三角形
17	72	43.8	36.6	25.8	49.4	安山岩	円礫	266	
18	80	48.2	45.6	17.0	36.1	凝灰岩	扁平円礫	263	軽い
19	82	158.0	85.0	42.6	910.0	安山岩	扁平楕円礫	264	断面三角形
20	87	39.0	35.6	11.6	22.9	砂岩	扁平円礫	267	
21	92	150.0	81.8	68.6	1,000	安山岩	楕円礫	265	断面三角形
22	1・8-71	44.6	41.0	32.2	81.2	安山岩	円礫	449	P3内出土
23	71	93.2	89.2	27.4	284.7	安山岩	扁平円礫	473	FP14上出土、焼けている
24	81	57.6	31.2	22.9	50.3	泥岩	楕円礫	472	FP14上出土
25	82	79.0	57.2	41.2	241.6	安山岩	楕円礫	542	
26	94	62.2	39.0	21.6	74.6	珪質岩	楕円礫	442	
27	96	95.0	43.1	32.1	177.6	安山岩	長楕円礫	589	断面四角形
28	2・3-14	116.6	93.6	31.5	292.9	凝灰岩	扁平楕円礫	123	
29	24	86.7	47.3	29.2	185.8	安山岩	楕円礫	101	
30	39	35.5	29.5	19.5	28.6	安山岩	楕円礫	126	
31	83	80.0	62.4	50.8	384.4	安山岩	円礫	104	
32	2・4-81	42.0	36.8	30.0	59.0	安山岩	円礫	151	焼けている
33	2・5-23	69.0	53.1	36.0	201.6	玢岩	楕円礫	139	
34	2・6-01	134.4	56.6	57.0	550.0	安山岩	長楕円礫	176	断面三角形、焼けている
35	43	110.0	50.4	38.6	319.1	安山岩	長楕円礫	177	
36	51	89.2	73.8	47.0	323.0	凝灰岩	楕円礫	180	断面四角形
37	2・7-73	76.8	62.0	44.6	295.1	安山岩	円礫	207	焼けている
38	76	60.8	30.8	27.8	79.8	安山岩	長楕円礫	203	
39	76	60.0	35.0	23.8	60.2	安山岩	楕円礫	230	集石 1、多孔質で軽い
40	76	49.8	39.0	36.6	94.2	安山岩	円礫	230	集石 2
41	76	57.2	39.6	27.6	91.5	安山岩	楕円礫	230	集石 3
42	76	54.6	33.4	24.0	71.4	安山岩	楕円礫	230	集石 4
43	76	50.6	32.0	25.4	62.3	硬質泥岩	楕円礫	230	集石 5
44	76	50.0	37.8	33.0	17.6	安山岩	楕円礫	230	集石 6
45	76	43.4	33.8	32.8	62.3	安山岩	楕円礫	230	集石 7
46	76	48.4	35.6	32.4	66.9	凝灰岩	楕円礫	230	集石 8
47	76	50.8	47.0	42.8	110.7	安山岩	円礫	230	集石 9
48	76	51.0	40.6	31.2	90.7	安山岩	円礫	230	集石 10
49	2・8-02	133.3	90.8	71.5	627.0	凝灰岩	楕円礫	386	断面三角形に近い
50	03	71.4	51.2	32.4	151.5	安山岩	楕円礫	385	
51	16	73.8	49.8	23.4	110.5	安山岩	扁平楕円礫	384	多孔質で軽い
52	26	80.8	51.2	24.3	114.2	凝灰岩	扁平楕円礫	413	
53	33	71.0	37.0	15.6	64.7	硬質砂岩	扁平楕円礫	364	表面滑らか
54	59	131.7	47.9	29.0	336.2	安山岩	長楕円礫	390	断面四角形
55	89	53.8	31.1	24.3	44.1	流紋岩	楕円礫	368	多孔質

IV 縄文時代早期・前期の遺構と遺物

表IV-33 礫一覧(2)

No.	グリッド	長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重量(g)	石質	分類	遺物No	備考
56	3・0-16	91.4	52.4	51.0	343.0	安山岩	楕円礫	73	
57	3・1-31	135.0	102.6	29.2	540.0	片岩?	扁平楕円礫	65	
58	3・4-00	82.5	53.4	41.0	237.2	安山岩	楕円礫	114	
59	46	89.2	69.9	22.0	158.2	砂岩	扁平礫	116	
60	3・5-86	95.0	53.2	34.8	247.8	安山岩	楕円礫	184	
61	3・6-14	104.8	72.8	35.5	346.4	珪質岩	扁平楕円礫	—	
62	19	128.4	74.0	25.6	369.6	安山岩	扁平楕円礫	239	
63	24	97.4	81.8	31.0	376.6	片岩?	扁平礫	236	
64	29	190.0	69.0	68.4	1,250	安山岩	長楕円礫	414	断面四角形
65	29	131.5	56.7	29.2	392.6	安山岩	長楕円礫	415	焼けている、赤色顔料付着か
66	51	83.0	52.5	29.8	147.0	砂岩	楕円礫	428	
67	75	122.8	72.0	41.0	411.4	安山岩	楕円礫	—	
68	3・7-20	125.0	41.8	46.8	285.0	安山岩	長楕円礫	294	断面三角形
69	28	125.2	55.4	42.0	427.2	安山岩	長楕円礫	290	断面三角形
70	3・8-10	63.2	35.0	24.6	75.2	安山岩	楕円礫	418	
71	33	69.3	27.2	21.8	38.7	凝灰岩	長楕円礫	422	断面四角形
72	69	115.3	67.4	20.4	204.7	凝灰岩	扁平楕円礫	435	
73	72	54.0	43.8	39.5	114.9	安山岩	円礫	393	
74	91	89.8	67.8	47.3	370.3	安山岩	楕円礫	394	
75	3・9-48	102.0	93.0	35.6	540.0	安山岩	扁平礫	517	
76	59	141.0	49.0	38.6	417.6	硬質砂岩	長楕円礫	519	断面三角形に近い
77	76	54.3	28.4	18.4	38.5	安山岩	楕円礫	510	
78	3・10-41	90.6	45.0	30.4	163.9	硬質砂岩	長楕円礫	573	
79	4・1-50	61.2	18.2	11.4	16.8	硬質砂岩	長楕円礫	2	
80	4・3-22	52.6	50.6	15.4	59.0	珪質岩	扁平礫	68	
81	37	123.0	42.8	33.0	242.3	安山岩	長楕円礫	69	
82	4・5-57	72.0	35.0	34.0	102.8	珪質岩	楕円礫	193	
83	4・6-43	41.2	28.4	22.6	27.9	硬質砂岩	楕円礫	245	
84	66	116.0	54.4	36.4	326.6	安山岩	長楕円礫	261	断面四角形
85	74	108.6	40.4	35.4	238.6	安山岩	長楕円礫	256	
86	4・7-27	122.1	76.9	38.0	409.4	砂岩	扁平楕円礫	—	
87	70	75.0	47.1	42.9	229.2	安山岩	楕円礫	360	
88	88	127.9	95.3	51.8	890.0	安山岩	楕円礫	326	
89	4・8-19	38.6	37.4	12.0	12.0	凝灰岩	扁平礫	545	
90	34	114.0	46.2	23.9	143.4	玄武岩	長楕円礫	402	
91	34	91.4	62.8	34.0	258.3	硬質砂岩	楕円礫	403	断面四角形
92	45	48.8	37.4	11.2	26.3	硬質砂岩	扁平楕円礫	405	
93	83	73.0	34.6	26.1	86.1	硬質砂岩	楕円礫	426	
94	4・9-10	85.8	48.0	39.4	182.8	安山岩	楕円礫	504	断面四角形、焼けている
95	14	119.6	55.4	25.0	173.6	凝灰岩	扁平長楕円礫	484	
96	19	107.0	62.7	49.5	528.0	安山岩	楕円礫	486	断面四角形
97	83	146.0	62.2	32.5	477.7	安山岩	長楕円礫	527	多孔質で重い
98	4・10-00	127.4	61.6	38.2	407.2	安山岩	長楕円礫	549	多孔質で重い
99	01	93.8	70.6	51.6	455.2	安山岩	楕円礫	550	焼けている
100	17	114.7	63.2	51.8	442.2	硬質砂岩	楕円礫	572	
101	91	87.6	54.6	55.4	401.7	安山岩	楕円礫	560	
102	5・8-07	122.5	115.0	37.8	560.2	安山岩	扁平礫	410	焼けている
103	表採	104.0	55.3	46.0	335.8	安山岩	楕円礫	595	

V 縄文時代中期～晩期の遺構と遺物



図V-1 遺構の位置と石器の分布



復元土器(余市式)と礫石器

1 遺構

この時期の遺構としたものには、Tピット6基とⅡ層半ばのレベルで確認された焼土18ヵ所(図V-1)がある。後期後半及び晩期の遺物が極端に少ないことから、これらの遺構は縄文時代中期あるいは後期前半のものと思われる。

1) Tピット(図V-2～5、写真図版6・7)

6基のTピットのうち、1～5は覆土上部に焼土がみられる点で共通性をもっている。更に1・2・3・4・5の4基はほぼ一直線に並んでいる。それぞれの間隔は1と2が約30m、2と4が約40m、4と5が約20mである。これらはその規模・形態、壙底に杭穴が2本ずつみられる点など極めて共通する特徴を有しており、ほぼ同一時期のものといえよう。これに対しTP3は、長軸方向が90度ずれており、形態は細長く、杭穴もみられない。また、TP6は地割れの亀裂を利用したと思われるもので、地割れに沿って掘られている。以下に個々の知見を記す。

TP1 長さ(確認面での最大値、以下同じ)137cm、幅50cm、深さ96cm。

3・0-23区で確認された。壙底は西隅が角張る。杭穴は2本で、中央やや西側と東側に寄った位置に穿たれている。いずれも先細りで根固めの跡はみられず、杭の打ち込みによるものと思われる。覆土中に杭の痕跡はみられない。壁面は壙底から25～35cmまでの部分は残っているが、それより上方は崩落している。崩落の度合は北側が大きい。壙底には漆黒色土が1～2cmみられ、その上にV層の崩落土が5～6cm堆積した後、IV・V層の崩落土が12～13cm堆積している。

FP31は本ピットのすぐ南側、確認面より3cmほどの上の黒色土層中で確認された。本ピットが完全に埋まってから焼かれたもので、ピット内には流れ込んではいない。調査の不幸により土層断面図は掲載し得なかった。遺物は出土していない。

TP2 長さ158cm、幅60cm、深さ100cm。

3・3-22区で確認された。長軸方向はコンターに直交する。壙底は角をもたない。杭穴は2本で、中央やや西側と東側に寄った位置に穿たれている。いずれも先細りで根固めの跡はみられず、杭の打ち込みによるものと思われる。覆土中に杭の痕跡はみられない。壁面はV層半ばまで直立して残っているが、それより上方は崩落している。壙底には比較的厚く漆黒色土が堆積している。土層断面では、焼土が北側から流れ込んだ状態で確認したが、調査の不幸により平面では確認し得なかった。遺物は出土していない。

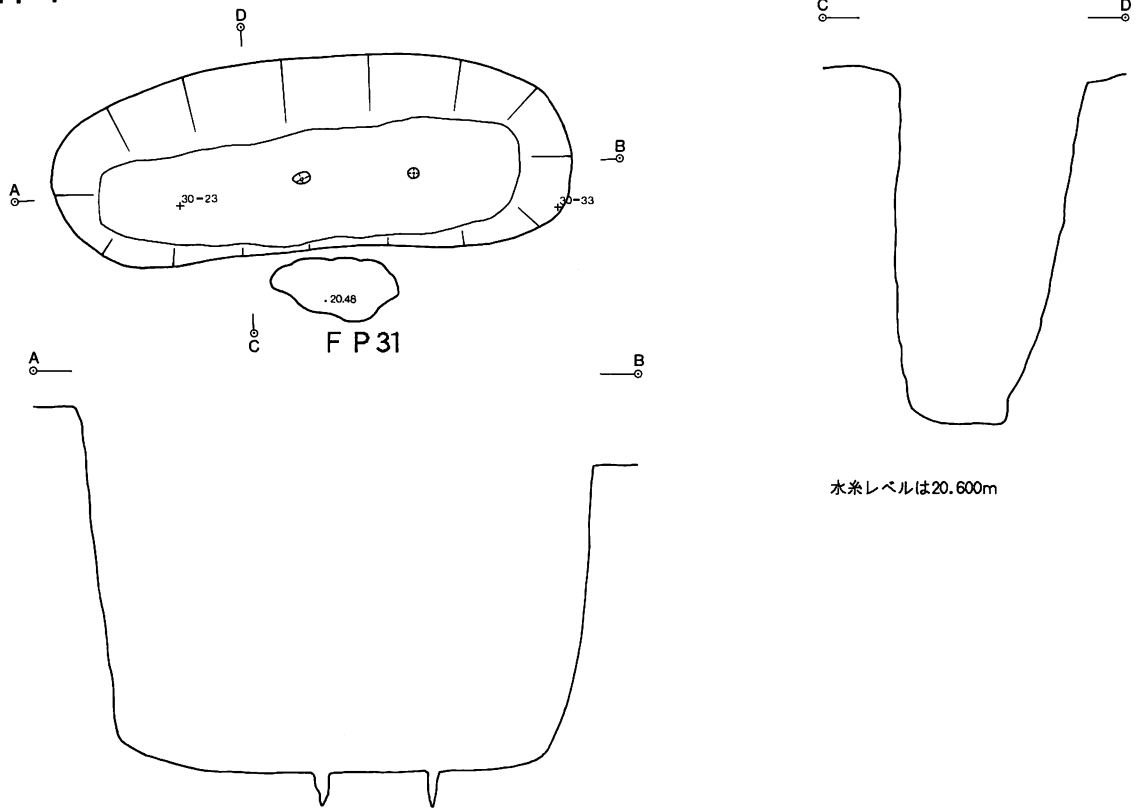
TP3 長さ246cm、幅50cm、深さ120cm。

2・0-45区で確認された。壙底は両隅に角張る長方形を呈する。杭穴はない。長軸方向はコンターと平行で、先に記したように杭穴のあるTピット列とは90度異なる。北側にFP32がかかっているが、Tピットが完全に埋まってから焼かれたもので、ピット内には流れ込んではいない。壁面は壙底から30～40cmまでの部分はのこっているがそれより上方は崩落している。壙底には薄く漆黒色土が堆積し、その上にV層の崩落土が7～8cm堆積した後、再び漆黒色土がみられる。遺物は出土していない。

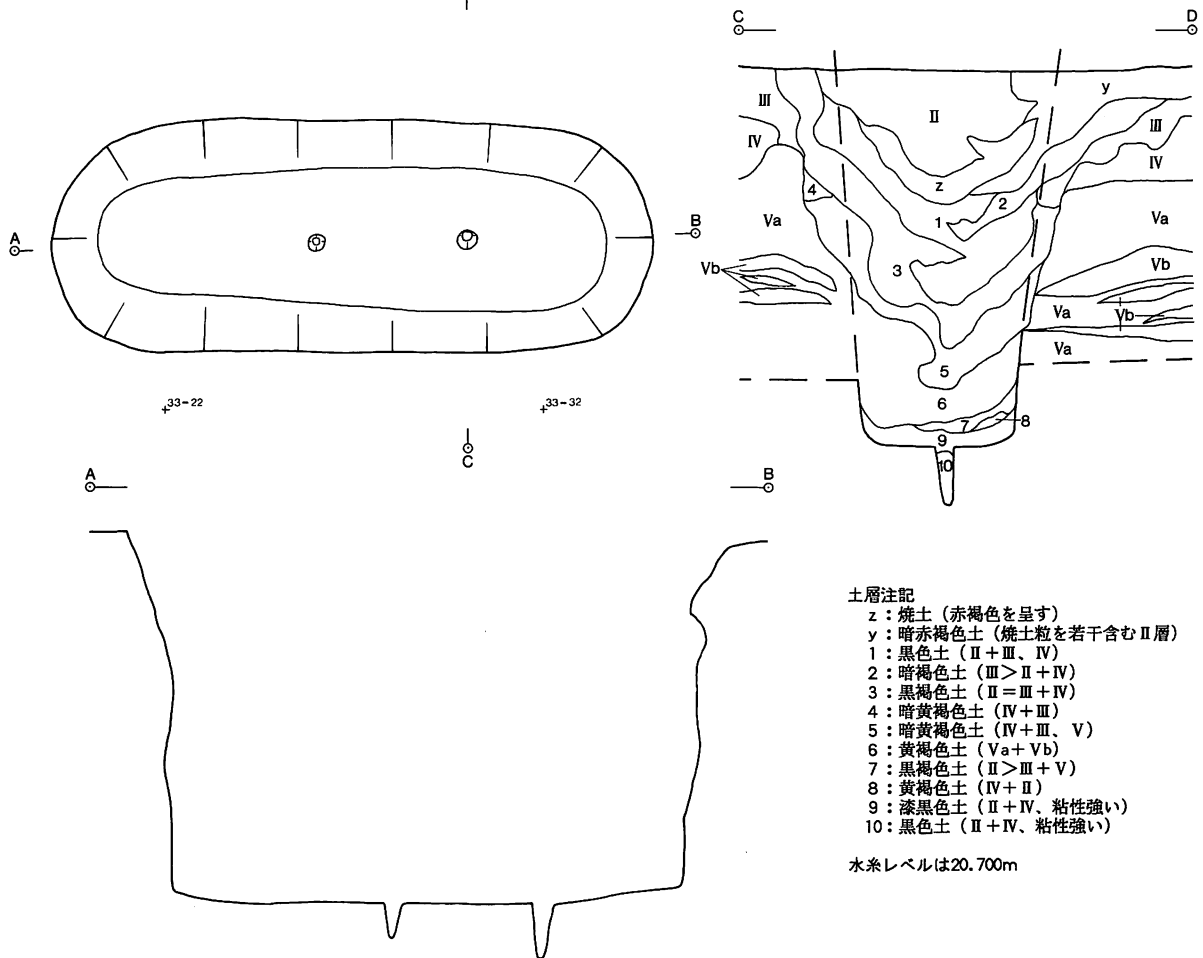
TP4 長さ137cm、幅54cm、深さ96cm。

3・7-11区で確認された。壙底は東側で角をもち、西側は丸くなっているが、ほぼ長方形を呈する。杭穴は2本で、中央やや東側と西側に寄った位置に穿たれている。いずれも先細りで根固めの跡はみられず、杭の打ち込みによるものと思われる。覆土中に杭の痕跡はみられない。壁面は壙底から約15cmまでの部分は残っているがそれより上方は崩落している。遺物は覆土1層中より黒曜石の剥片1点が検出される。

TP1



TP2



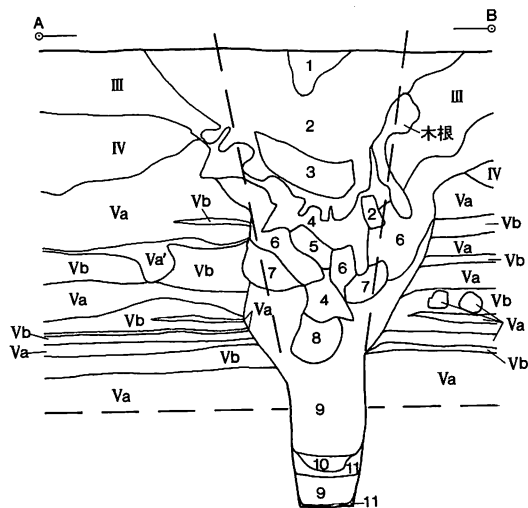
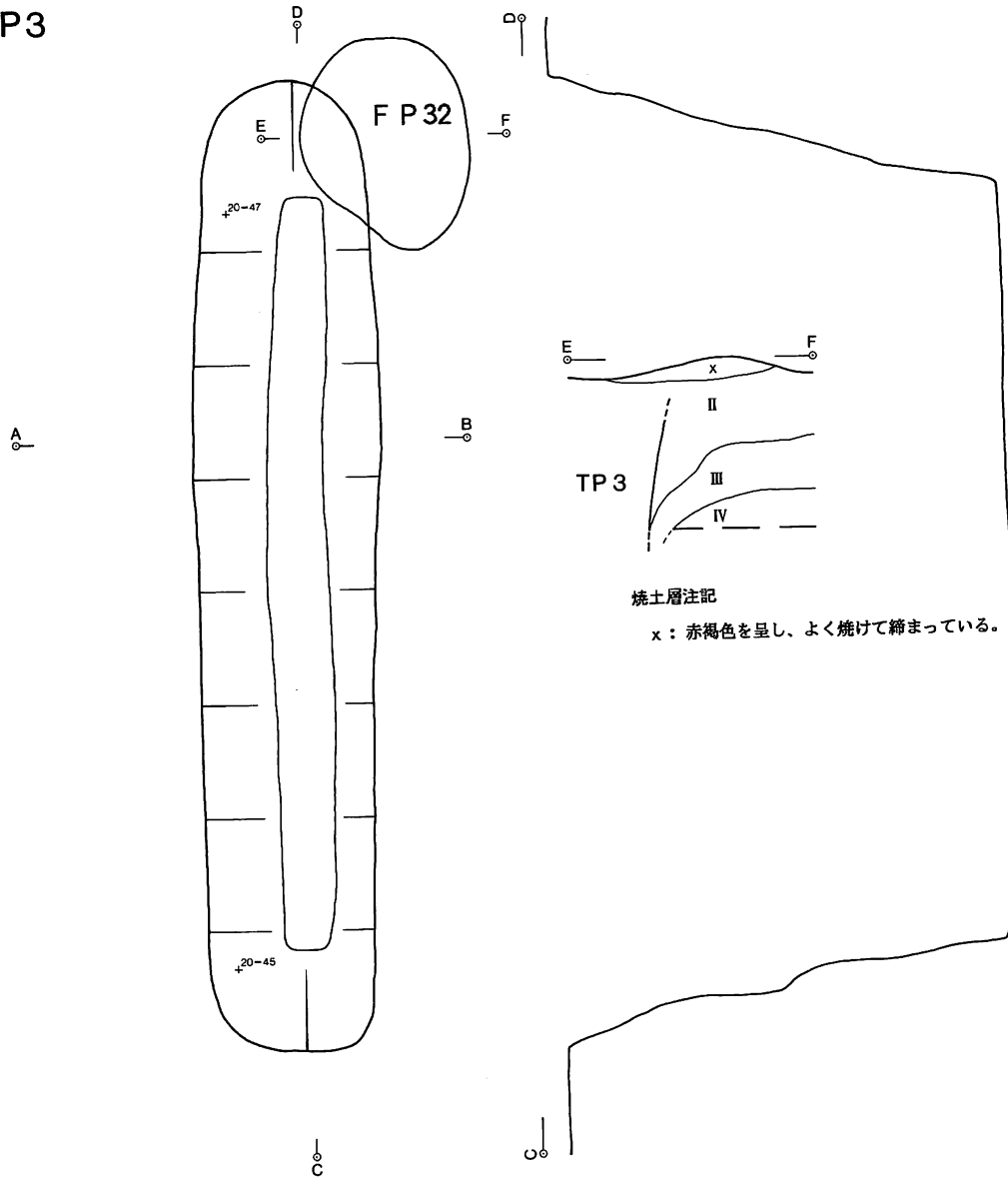
土層注記

- z : 焼土 (赤褐色を呈す)
- y : 暗赤褐色土 (焼土粒を若干含むII層)
- 1 : 黒色土 (II+III、IV)
- 2 : 暗褐色土 (III>II+IV)
- 3 : 黒褐色土 (II=III+IV)
- 4 : 暗黄褐色土 (IV+III)
- 5 : 暗黄褐色土 (IV+III、V)
- 6 : 黄褐色土 (Va+Vb)
- 7 : 黒褐色土 (II>III+V)
- 8 : 黄褐色土 (IV+II)
- 9 : 漆黒色土 (II+IV、粘性強い)
- 10 : 黒色土 (II+IV、粘性強い)

水糸レベルは20.700m

図V-2 Tピット平面及び断面(1)

TP3



土層注記

Va': 礫混じりのVa

1 : 暗褐色土 (II=III)

2 : 黒褐色土 (II+III)

3 : 黒色土 (II、若干のIV層小粒を含む)

4 : 暗褐色土 (III+II)

5 : 暗褐色土 (III+II、IV、Va)

6 : 暗黄褐色土 (IV>III+II)

7 : 黄褐色土 (IV+Va)

8 : 暗褐色土 (III+II、IV)

9 : 灰黄褐色土 (Va=Vb)

10 : 暗褐色土 (II=III+Va)

11 : 漆黒色土 (II、粘性強い)

水糸レベルは、A-B : 20.700m

C-D : 20.700m

E-F : 20.800m

図V-3 Tピット平面及び断面(2)

V 縄文時代中期～晩期の遺構と遺物

F P 33は覆土2層上部にみられる。覆土1層及び2層中に周囲から流れ込む時に生じる焼土粒の混じりがみられないことから、その場所で焼かれたものと考えられる。遺物は、縞頁岩の剥片2点（うち1点は焼けている）がある。

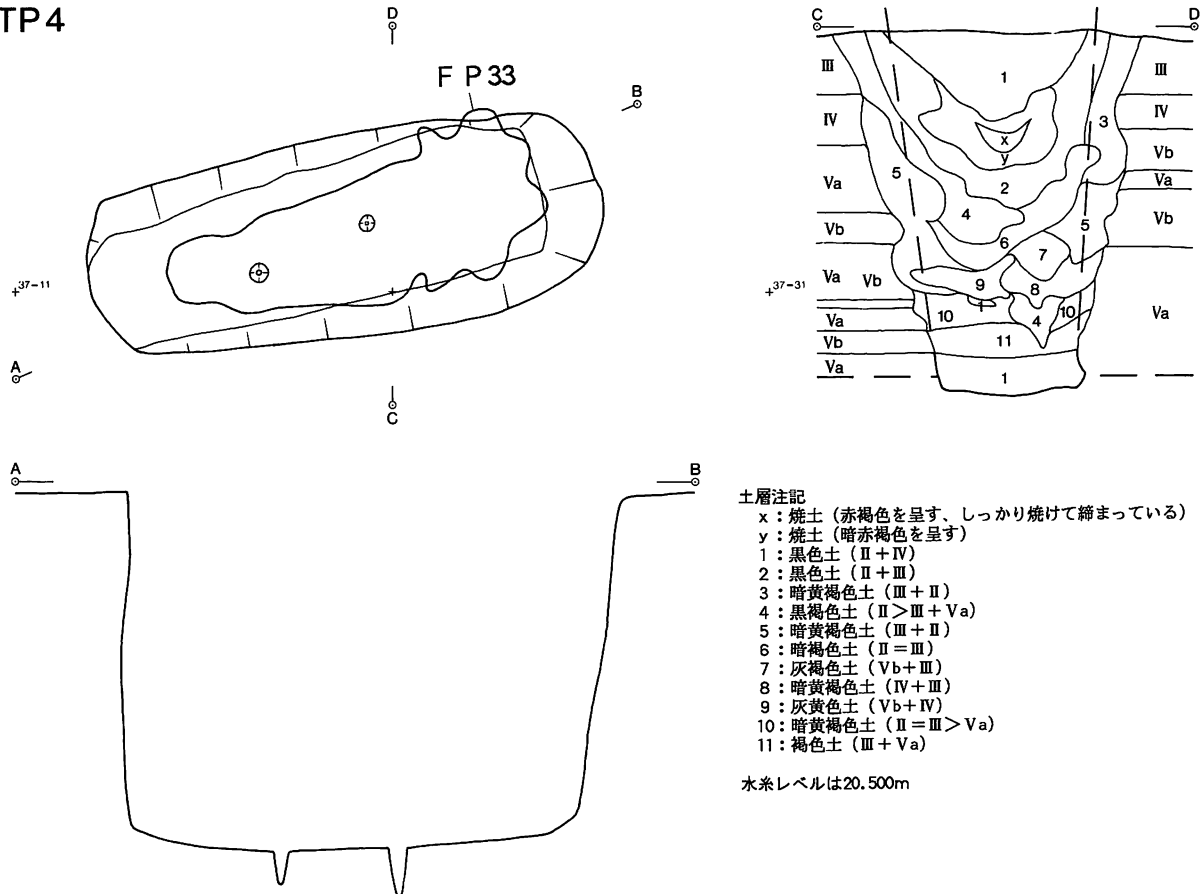
TP 5 長さ162cm、幅57cm、深さ93cm。

2・8-81区で確認された。墳底は長方形で東隅が角張る。墳底を3分割する位置に杭穴が2本穿たれている。西側の杭穴は長軸よりわずかに北にずれている。いずれも先細りで根固めの跡はみられず、杭の打ち込みによるものと思われる。覆土中に杭の痕跡はみられない。壁面は墳底から25cm位までの部分はこのこっているが、それより上方は崩落している。墳底には比較的厚く漆黒色土が堆積し、この土からフローテーションにより不明種子が3点出土している。墳底及び北側の壁面に沿って平面図見られるような地割れが入っている。また、東側の墳底から南壁を抜け、断面図に示したようにほぼ垂直に確認面まで及んでいるものもみられた。北側の壁面に沿った地割れは墳底から55cm上の部分に迄及んでおり、水による侵食の跡がみられた。本ピットが半ば埋没して北側の壁と覆土の間の地盤の弱い部分に地割れが入り、さらに上部の崩落が進んでから崩落により地盤の弱くなった本ピットの南側に地割れが入ったものと思われる。

TP 6 長さ136cm、幅59cm、深さ105cm。

3・8-00区で確認された。地割れによって開いた部分を掘り広げて構築されており、長軸方向はコンターに平行している。墳底は両隅が角張る長方形を呈し、南側はオーバーハングしている。墳底面には段差があり、中央部分は地割れで開いた中に崩落土が柔らかく堆積していた。杭穴はみられない。

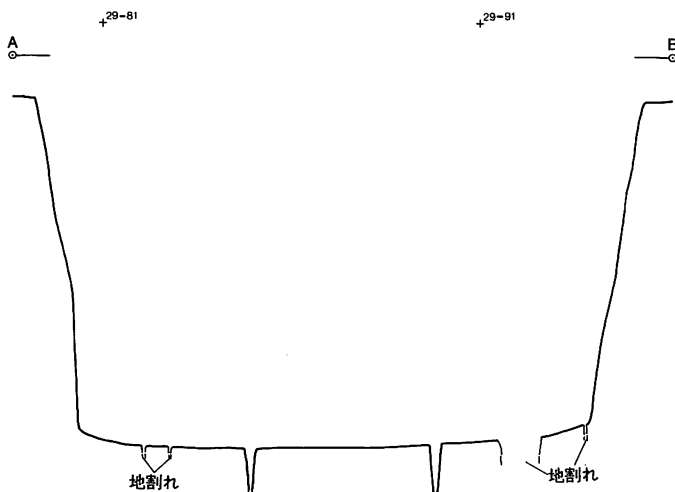
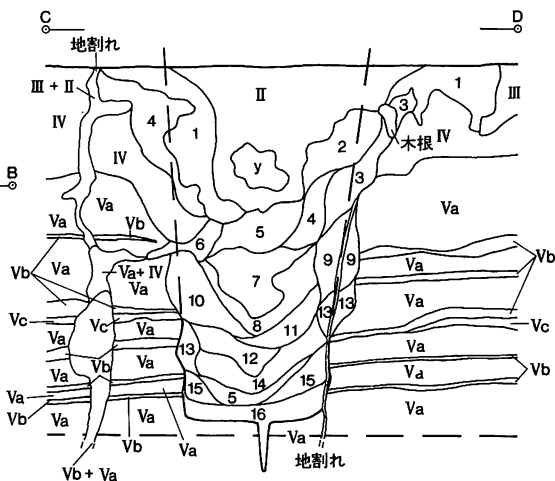
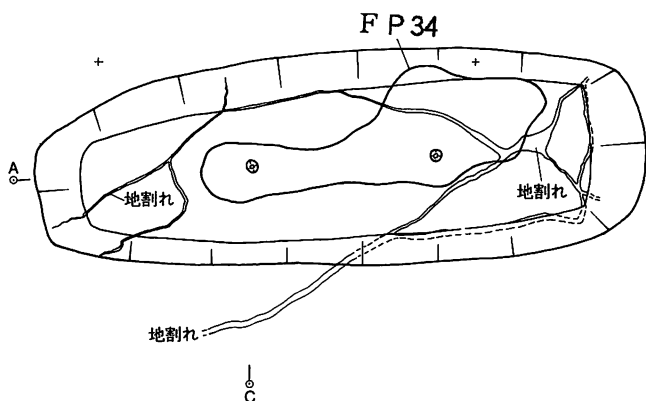
TP4



図V-4 TPピット平面及び断面(3)

TP5

D

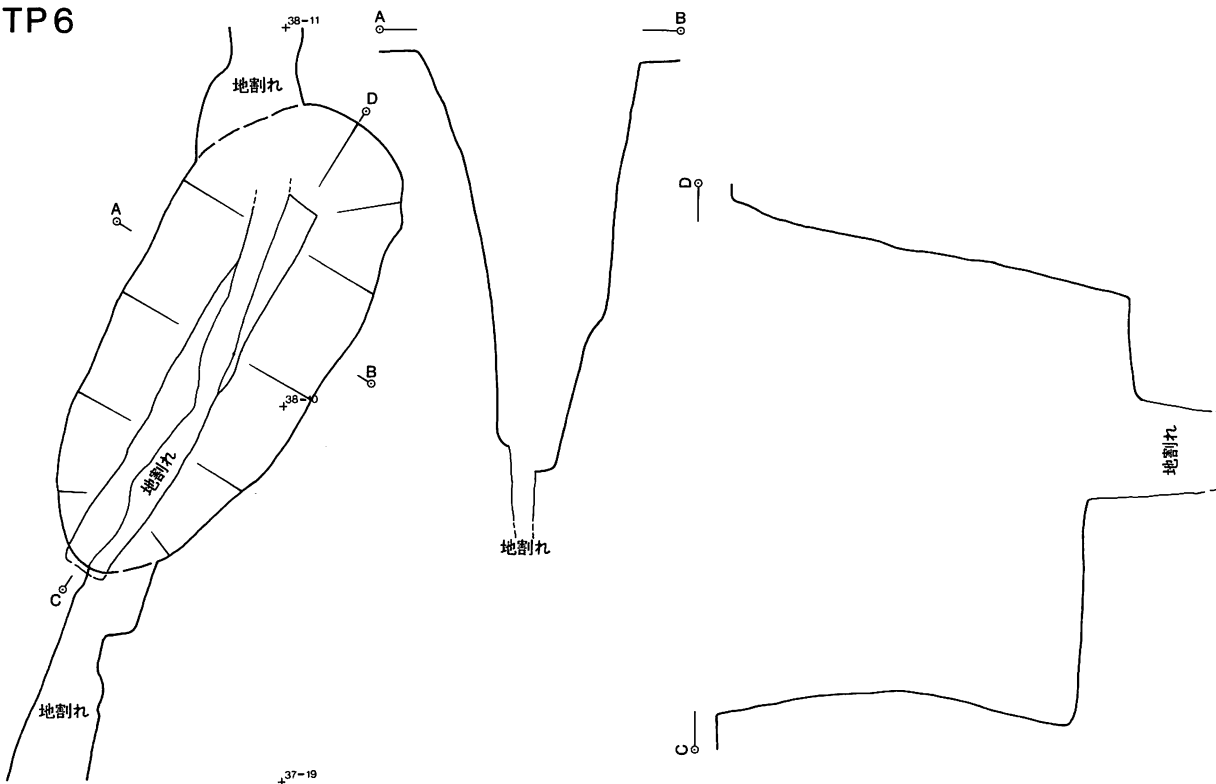


土層注記

- y : 焼土 (暗赤褐色を呈す)
- 1 : 黒褐色土 (II > III)
- 2 : 黒色土 (II + III)
- 3 : 褐色土 (IV + II, III)
- 4 : 暗褐色土 (II = IV)
- 5 : 褐色土 (IV + II)
- 6 : 黒褐色土 (II + IV, Va)
- 7 : 黒褐色土 (II > IV)
- 8 : 黒褐色土 (II + Va)
- 9 : 黄褐色土 (IV + III, Va)
- 10 : 褐色土 (IV + Va)
- 11 : 褐色土 (IV + II, Va)
- 12 : 黄褐色土 (Va + IV)
- 13 : 灰褐色土 (Vb + IV, Va)
- 14 : 灰褐色土 (Vb > IV, Va)
- 15 : 灰褐色土 (Vb + Va)
- 16 : 漆黒色土 (II, 粘性強い)

水糸レベルは20.700m

TP6



図V-5 Tピット平面及び断面(4)

2) 焼土 (図V-2~8、写真図版8・40)

18ヵ所が確認されている。TピットにかかるF P31・32を除く全てが調査区北半に位置する。以下個々にその知見を記す。

F P17 非常に良く焼けて締まっており、範囲も大きい。出土遺物はない。

F P18 良く焼けて締まっている。遺物は出土していない。

F P19 焼けは弱く締まっていない。遺物も出土していない。

F P20 焼けの良い部分もあるが全体に締りはない。中央部から黒曜石の碎片45点が集中して出土しており、そのうち23点は焼けている。また、フローテーションによってクルミの内果皮片が得られている。

F P21 良く焼けて締まっている。焼土中にR・F (図V-8) と焼けた黒曜石の剥片各1点が含まれていた。なお、焼土下のII層中から縄文前期の静内中野式土器片が出土している。

F P22 焼けは弱く締まっていない。遺物は黒曜石の剥片2点がある。

F P23 良く焼けて締まっているが、地割れによって破壊され、一部が地割れ内に流れ込んでいる。この地割れは擦文期の堅穴をも開いており比較的新しい時期に起ったものである。遺物は黒曜石の碎片63点が、焼土中及び焼土の流れ込んでいる地割れ内から出土しており、このうち44点が焼けている。なお、図V-8に示した台石は本焼土の直ぐ南側の地割れ中から出土したものであるが、火熱を受けており本来は焼土に伴っていたものと考えられる。

F P24 小さく薄い焼土であるが、良く焼けて締まっている。遺物には石鏃片 (図V-8) 1点と黒曜石の剥片3点 (うち1点は焼けている) がある。

F P25 焼けは弱く締まっていない。F P23と同じ地割れによって破壊され、地割れ中に流れ込んでいる。遺物には焼けた偏平楕円礫1点と炭化材がある。

F P26 焼けは弱く締まっていない。開拓期の建物の柱穴に寄って一部が破壊されている。遺物は出土していない。

F P27 焼けは弱く締まっていない。遺物は黒曜石の剥片1点がある。

F P28 焼けは弱く締まっていない。遺物も出土していない。

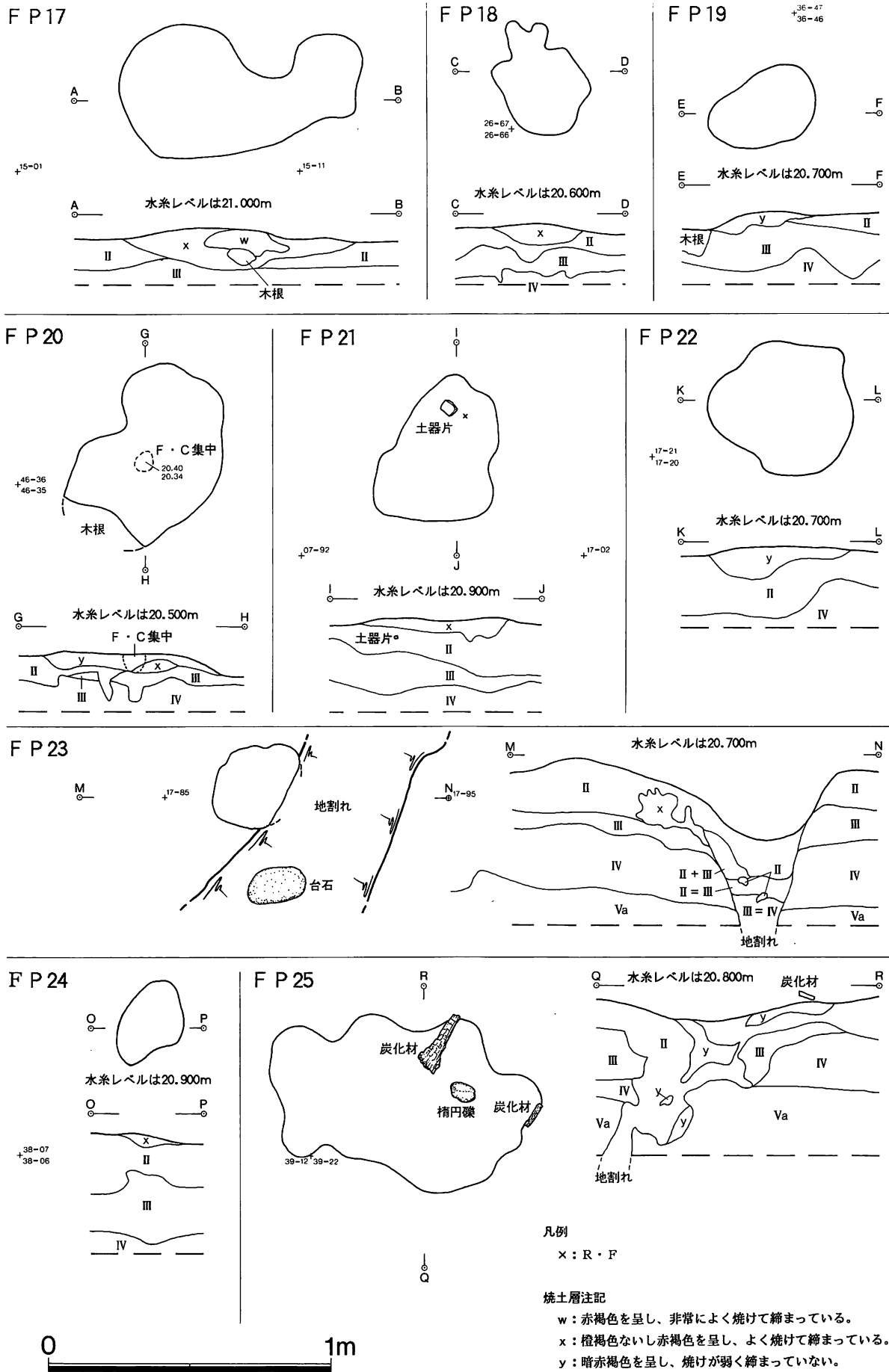
F P29 焼けは弱く締まっていない。遺物は、焼土の上面に天神山式土器片1点があり、焼土中には黒曜石の剥片2点が含まれていた。

F P30 ユカンボシ川沿いのもっとも大きな地割れの肩口に位置する。本焼土の上、II層上面には擦文期の焼土が所在する。良く焼けて締まっているが、地割れの影響で北側部分は動いているようである。遺物には、焼土上面から出土した黒曜石製の削器1点がある。

焼土のうち、時期が特定できるのは天神山式土器片が出土したF P29のみであるが、確認レベルや位置からみてF P27~29は同一時期のものと考えられる。また、Tピットの覆土にみられる焼土は、余市式期の所産と考えられる。その他の焼土については積極的に時期を想定し得る材料はないが、土器片などの分布状況からみて柏木川式期に属する可能性がもっとも高い。

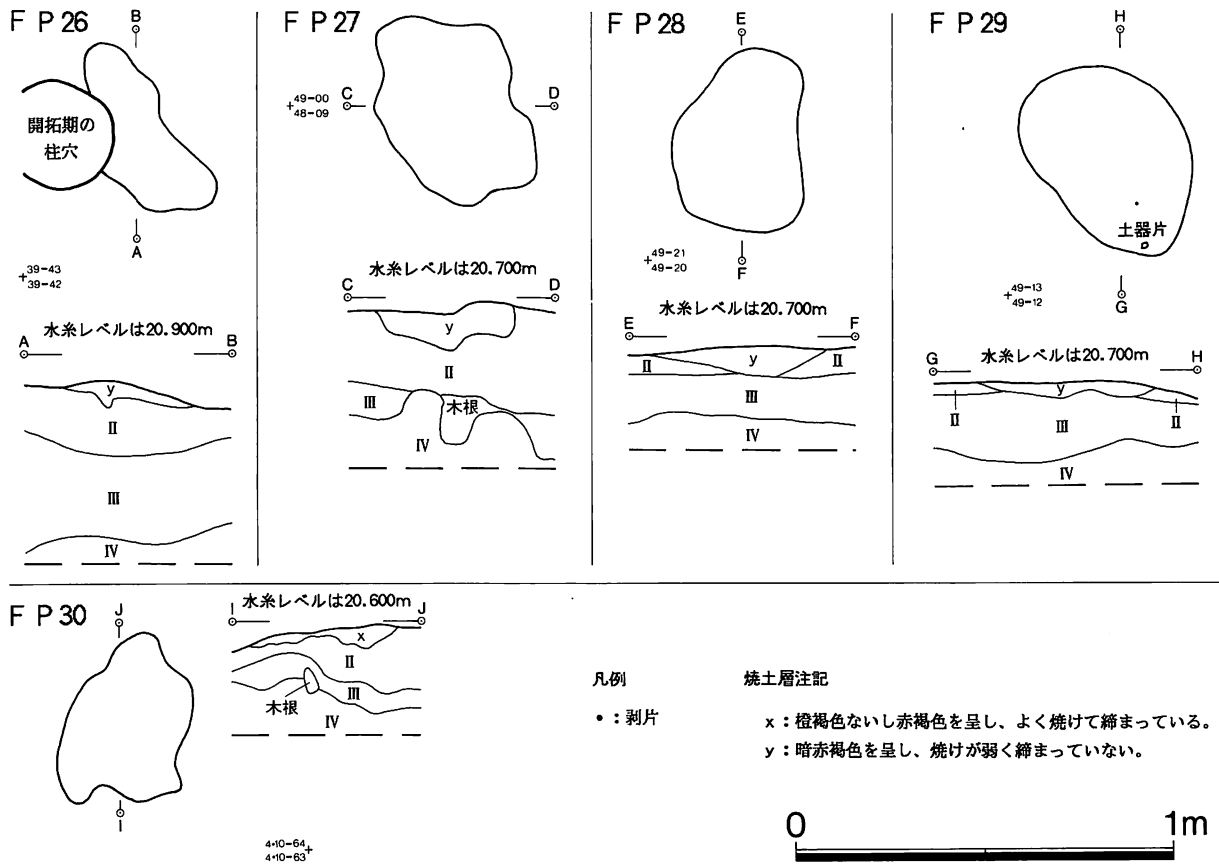
F P20と23で黒曜石の剥片がまとまって出土しているが、その周辺に関連遺物があまりみられず、その用途は不明である。

全ての焼土についてフローテーションを実施したが、早期・前期の焼土同様に動物遺体は全く検出されず、植物性遺物は、F P20でクルミの内果皮片が確認された他は、F P32で不明種子1点が検出されているのみである。なお、T P4・5の墳底面の土についてもフローテーションを実施したが、これからも不明種子が検出されている。



図V-6 焼土平面及び断面(1)

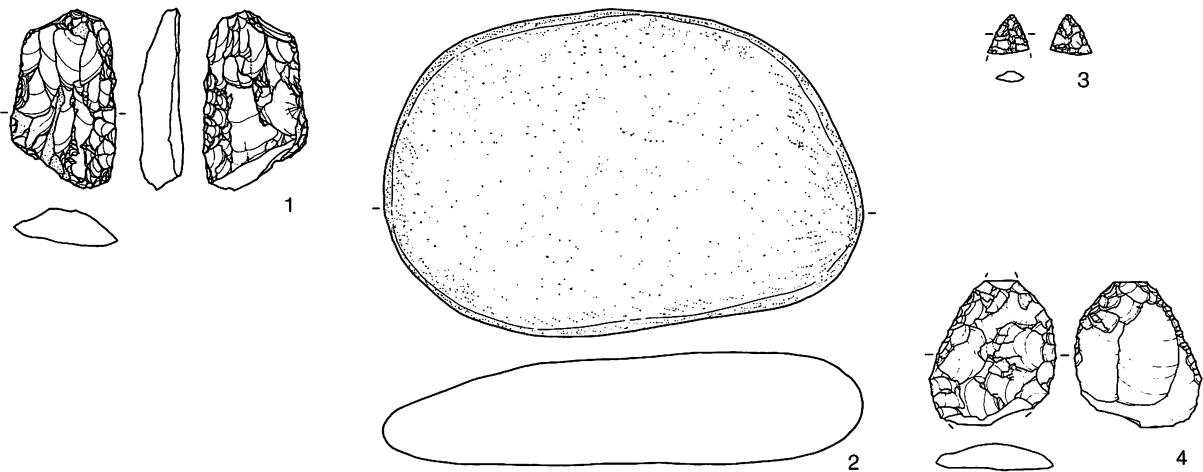
V 縄文時代中期～晩期の遺構と遺物



図V-7 焼土平面及び断面(2)

表V-1 焼土出土石器等一覧

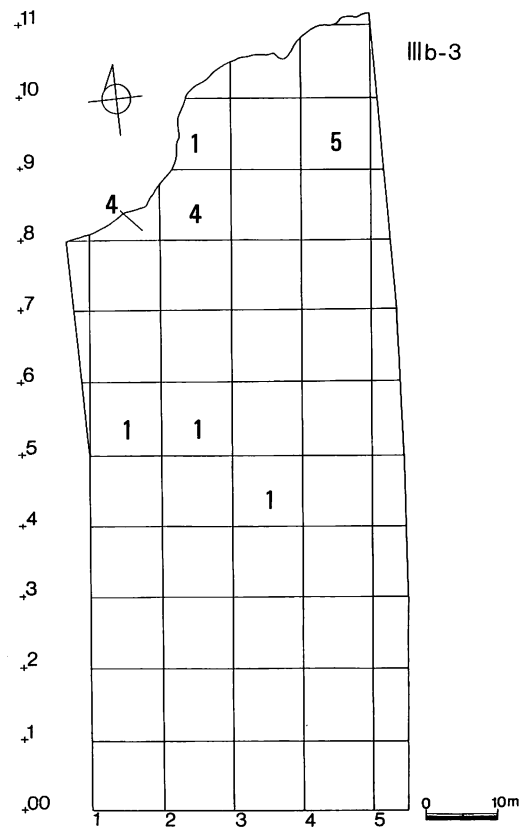
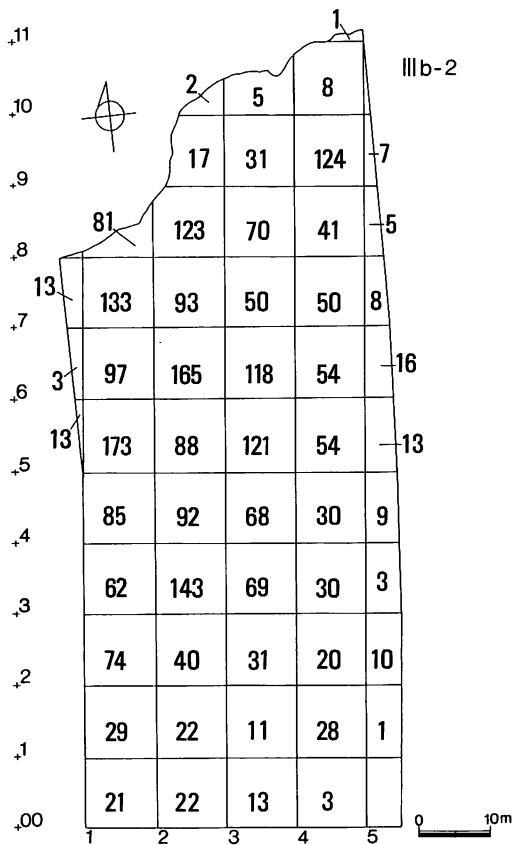
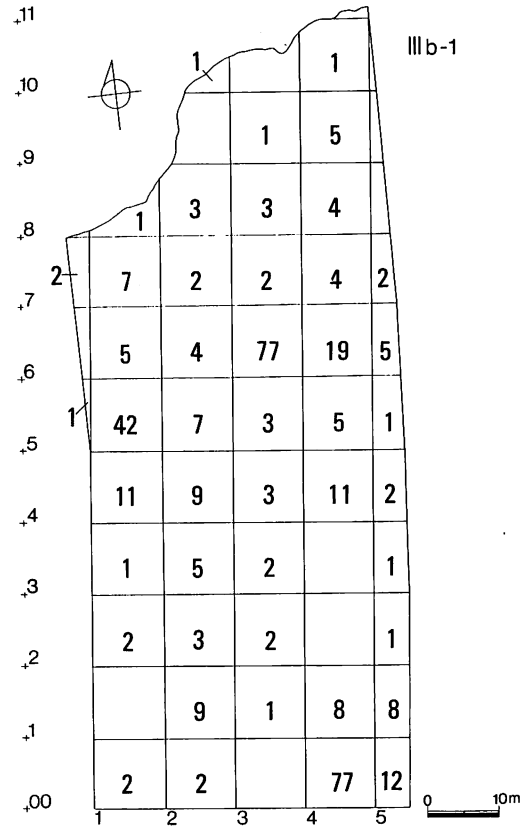
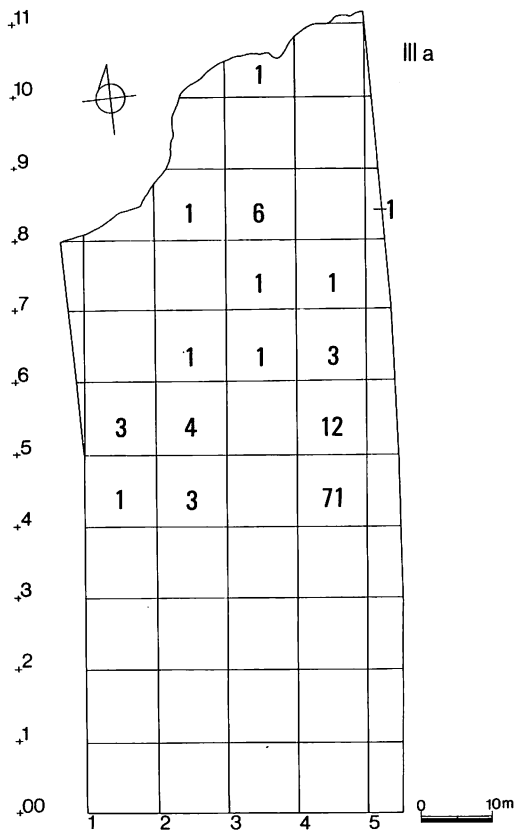
焼土No.	種別	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	図番	遺物No.	備考
F P 21	R・F	黒曜石	47.0	28.6	11.0	14.2	1	434	
F P 23	台石	安山岩	190.0	127.9	39.5	1,700	2	351	焼けている
F P 24	石鏃	黒曜石	9.7	9.5	2.3	0.2	3	371	先端部片
F P 25	楕円礫	安山岩	90.7	67.7	18.8	165.4		523	焼けている
F P 30	削器	黒曜石	39.4	31.0	6.8	9.1	4	467	先端・基部欠損。つまみ付きナイフか



図V-8 焼土出土の石器

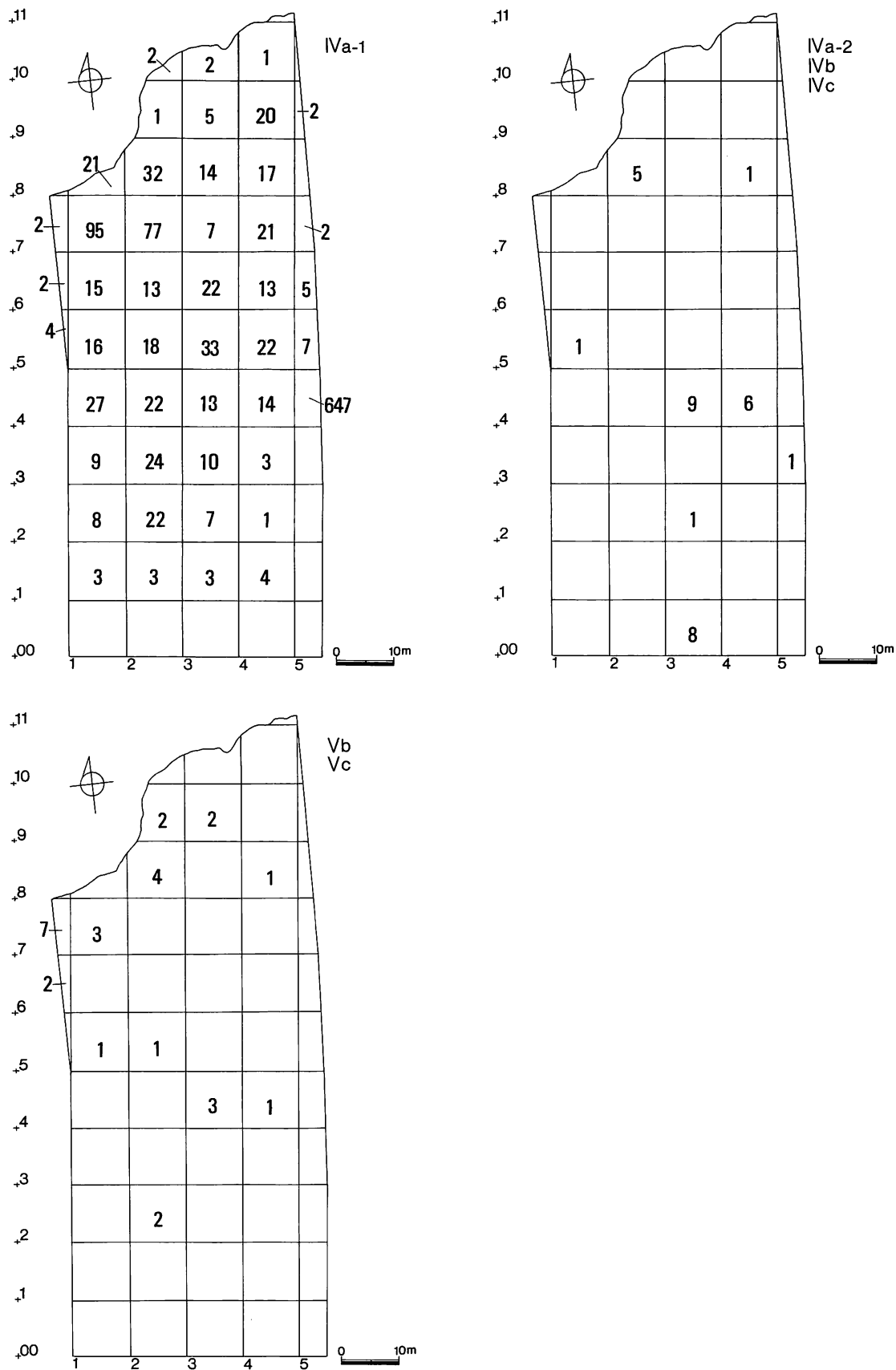
2 包含層の遺物

1) 土器



図V-9 中期の土器分布図 (Ⅲa, Ⅲb-1, Ⅲb-2, Ⅲb-3)

V 縄文時代中期～晩期の遺物と遺構



図V-10 後・晩期の土器分布図 (IVa-1, IVa-2・IVb・IVc, Vb・Vc)

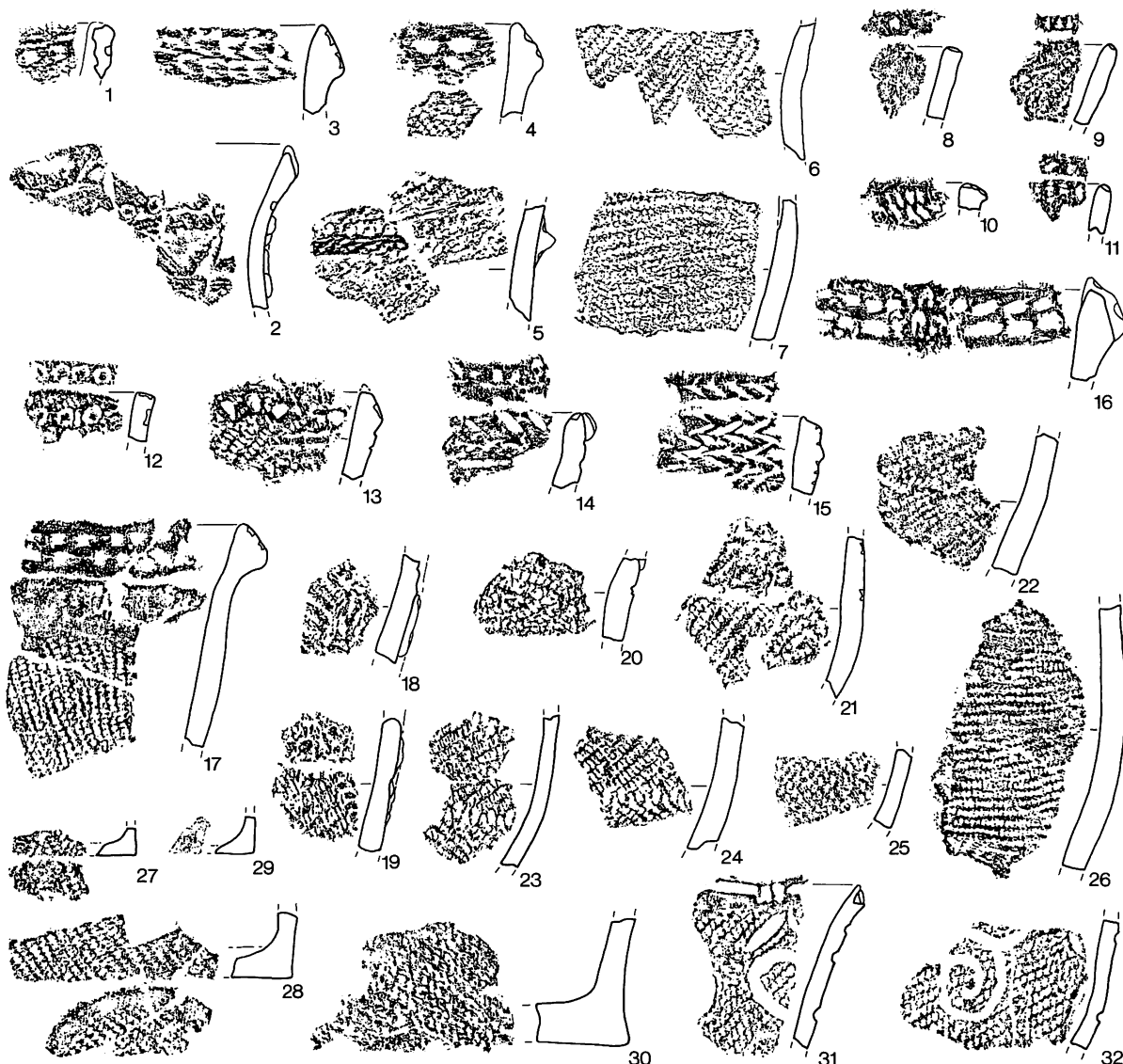
Ⅲ群 a 類土器 (図V-11-1~7)

円筒土器上層式は115点出土している。調査区の中央部に散発的に分布する。4・4、4・5区に集中がみられる。1は貼付帯に竹管状工具による押し引き風の刺突文が右から施されている。器面は茶褐色でLRの縄文が認められる。内面は剥落している。2は断面が三角形の口縁肥厚帯に粘土紐が鋸歯状に貼付られ、頸部に竹管状工具による刺突が施されている。頸部から胴部には粘土紐を横環させ、その間に粘土紐を鋸歯状に貼付けている。粘土紐にはRLの縄文が押捺されている。3・4は断面三角形の口縁肥厚帯に押し引き風の刺突が2列施されている。3は半截竹管、4は竹管状工具による。3は萩ヶ岡2式、4は萩ヶ岡1式に相当する。5~7は胴部破片である。いずれも地文にLRの斜行縄文が施されている。5は粘土紐をはさんで地文を擦り消し竹管状工具による刺突が2列横環する。下の列の刺突は右方向からのものである。粘土紐には地文と同じ縄文が押捺されている。

Ⅲ群 b 1 類土器 (図V-11-8~32)

天神山式は394点出土している。1・5区、3・6区、4・0区に集中がみられる。大木8式系の土器が2点出土している。便宜上ここに含む。

8は篋状工具による施文のみられる口縁部である。断面四角形の口唇に台形の小突起を設け、その



図V-11 包含層出土の土器 5 (Ⅲa, Ⅲb-1)

頂部に右からの刺突が施されている。口唇には同様の工具による調整が認められる。地文にはLR斜行縄文が施されている。

9・13は半截竹管による施文のみられる口縁部である。9は薄手で、口唇に右からの刺突が施されている。13は断面三角形の口縁肥厚帯に突起が付けられていたとみられる。突起は欠損している。肥厚帯にはLRの斜行縄文を施した後、半截竹管による下からの刺突が施されている。肥厚帯の下には平行沈線が認められる。口唇には炭化物が付着している。胎土には砂粒が少なく焼成が良い。

10～12・16・17は竹管状工具による施文のみられる口縁部である。10は貼付帯の上面と下面に刺突による刻みが施されている。11は丸みを帯びた口唇に刻みが施されている。刻み部分には地文と同じLRの縄文が認められる。12は平らな口唇と、地文にRLの斜行縄文の施された口縁に刺突が加えられている。16は断面三角形の口縁肥厚帯に縦に粘土を貼り付けた小突起がみられる。突起には半截竹管による下からの刺突が施されている。口縁には前列は右から、後列は突起をはさんで左側は右から右側は左から、押し引き風の連続刺突が2列施されている。17は突起がみられないが16と同様のものである。連続刺突は右から施されている。

14・15は棒状工具による施文のみられる口縁部である。14は貼付帯が右下がりの沈線で刻まれている。貼付帯の下には横走沈線、口唇内側には刺突が施されている。15は萩ヶ岡3式に相当する。口縁が矢羽根状に刻まれている。

18～26は胴部破片である。18は地文にRLの斜行縄文を施し、粘土紐を垂下している。垂下帯には半截竹管による沈線が認められる。19は縦と斜めに貼付られた粘土紐に半截竹管による下からの連続刺突が施されている。地文はRLの斜行縄文である。20には大部分欠落しているが貼付帯が認められる。地文のLRの縄文が貼付帯にも施されている。貼付帯の下には竹管状施文具による右からの刺突が施されている。また、刺突と貼付帯の間には地文と同じ原体による縄文が横に押捺されている。21はLRの地文の半截竹管による右からの刺突が加えられている。22には綾絡文が施されている。23・24はLR+RLの結束羽状縄文が施されている。23の内面は磨かれている。25はRL複節斜行縄文が施されている。26は胎土に砂粒を含む。器壁が厚くLRの斜行縄文が施されている。

27～30は底部破片である。27～29は直立する。27・28は底にも地文と同じRLの斜行縄文が認められる。29は萩ヶ岡3式に相当する。胎土には砂粒が少なく焼成が良い。30は上げ底気味で張り出す。

31・32は大木8式系の土器である。いずれも地文はLR斜行縄文である。器面は暗茶褐色で内面は磨かれており黒褐色である。胎土に砂粒が少なく焼成が良い。31は口唇に、縦に刻みを入れて横位の沈線を施している。31は2・5-07区、32は1・5-73区から出土した。

Ⅲ群 b 2類土器 (図V-12・13、図V-14-1～46)

柏木川式は最も多く出土している。調査区全域から2857点出土しており、特に南側と北端を除く中央部分西側で多く分布する。

図V-12-1～3は口縁部に沈線文が施されたものである。篋状工具による比較的太い沈線が浅く施されている。1・2の口唇には同様の工具による刻みが施されている。2はLR斜行縄文の地文に沈線を施した後、右からの刺突が加えられている。3の工具は1・2のものより細い。地文はRL斜行縄文である。

4～11は口縁部に刺突が施されたものである。断面三角形の工具によるもの(4)、竹管状工具によるもの(5～8)、半截竹管によるもの(9～11)がある。5～11はいずれも右からの連続刺突である。4～7は口唇にも同様の工具による右からの刺突が施されている。9は内面に、10は口唇に地文と同じ縄文が施されている。地文は4・9・10がLR斜行縄文、5～8はRL斜行縄文である。9・

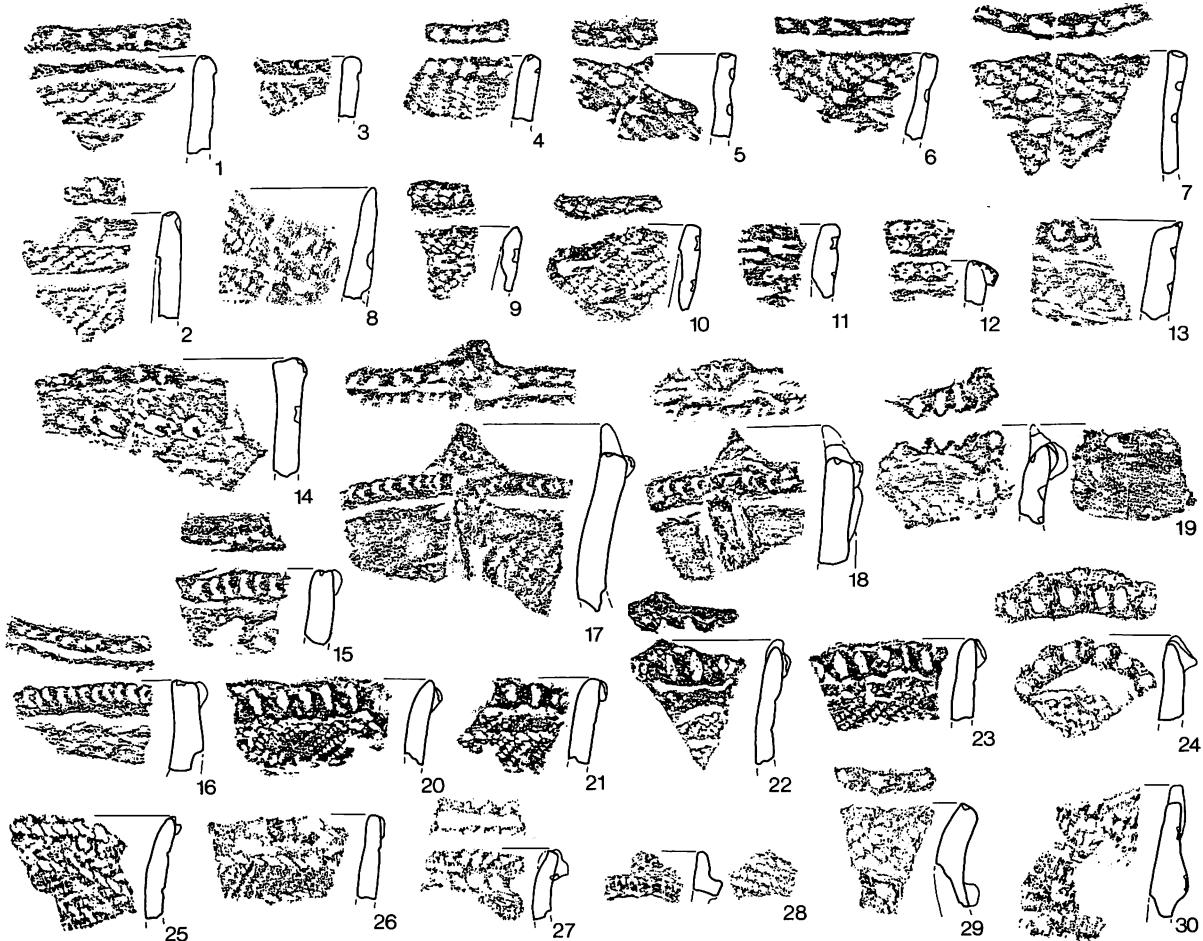
10の胎土には砂粒が少ない。

12～29は口縁に貼付帯のみられるものである。12・27は貼付帯に竹管状工具による刺突が施されている。12は口唇にも2列施されている。27は断面が三角形の貼付帯に縄が押捺されている。貼付帯の上面に沈線、下面に刺突が施されている。内面は剥落している。13～18は貼付帯に半截竹管による刺突が施されている。13は右からの刺突、14～18は左からの連続刺突である。貼付帯の下には横走沈線を引き、下からの刺突を加えている。器面にはRLの縄文の圧痕が認められる。14は横位のLR縄文が施され、貼付帯の下に刺突が施されている。15～18は口唇に棒状工具による刺突が加えられている。17・18の口唇には小さな山形突起が付けられ、その下に貼付帯から垂下する粘土紐が貼られている。19・24は貼付帯に棒状工具による刻みが施されている。19は口唇の内側にも刺突がみられる。口唇には小さな山形突起があり、突起下の貼付帯には刺突が施されている。その下に、下からの刺突が縦に加えられている。24は口縁が弧をなす。貼付帯と口唇の断面は三角形で、口唇が刻まれている。20～23・25・26は貼付帯が縄の押捺により刻まれている。貼付帯の下には縄線文が施されている。22の口唇には小さな山形突起がある。25の貼付帯には縄線文が施されている。

28・29は口縁部に貼付帯のみられるものである。28は貼付帯が篋状工具により調整されている。貼付帯の上面は同様の工具により刻まれ、口唇と内面には縄が押捺されている。29は口唇に竹管状工具による右からの連続刺突が施されている。貼付帯にも左からの刺突が施されている。

30は口縁部に隆起帯のみられるものである。緩い山形の突起をもつ土器で、口縁と隆起帯とその上には半截竹管による右からの連続刺突が施されている。

図V-13-1～6は口縁部に縄線文のみられるものである。1は口縁に縄線文が2条施され、貼付



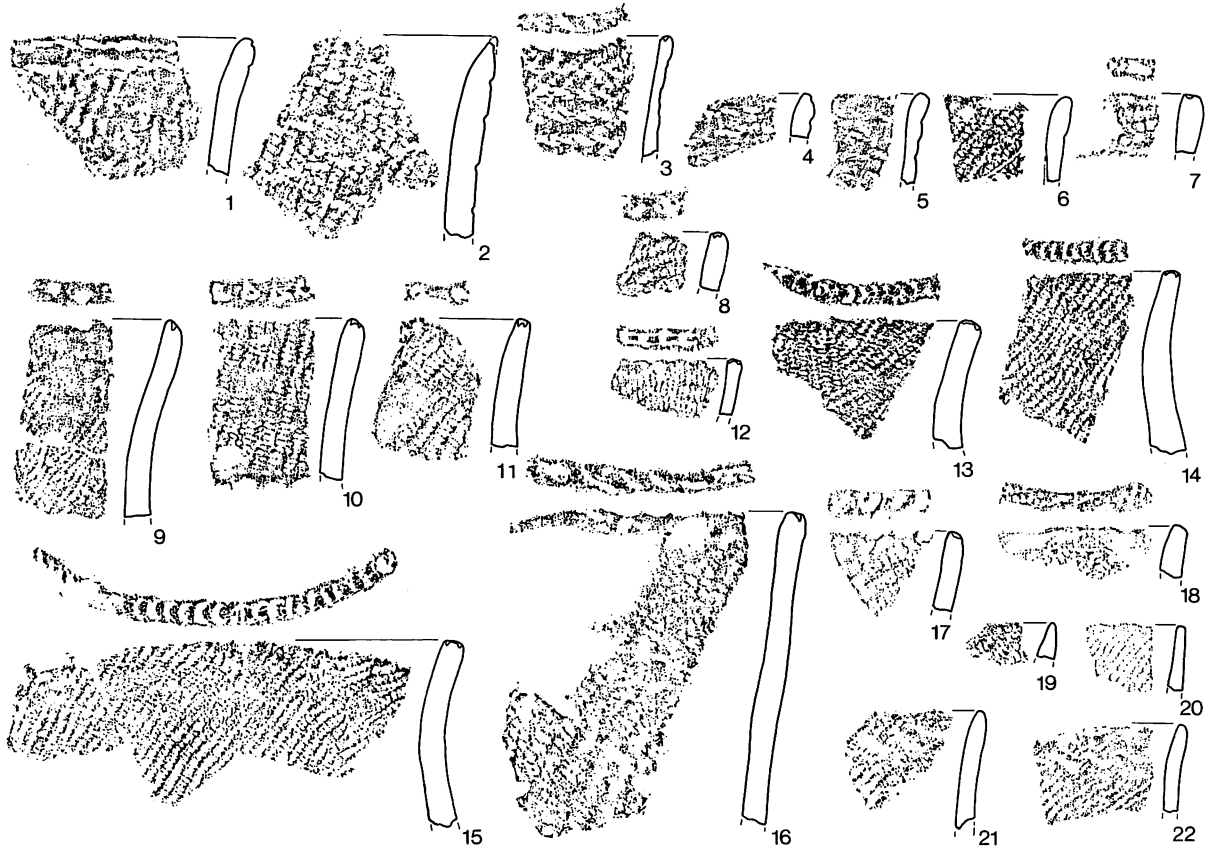
図V-12 包含層出土の土器 6 (Ⅲb-2)

帯風になっている。2は口縁がやや広く、口唇は欠落している。3は薄手で口唇に小突起がある。口唇上には断面が三角形の棒状工具により、右からの刺突が施されている。いずれも地文はLRの縄文である。5・6は薄手で口縁短部が厚くやや開く。6の地文はLRの斜行縄文である。

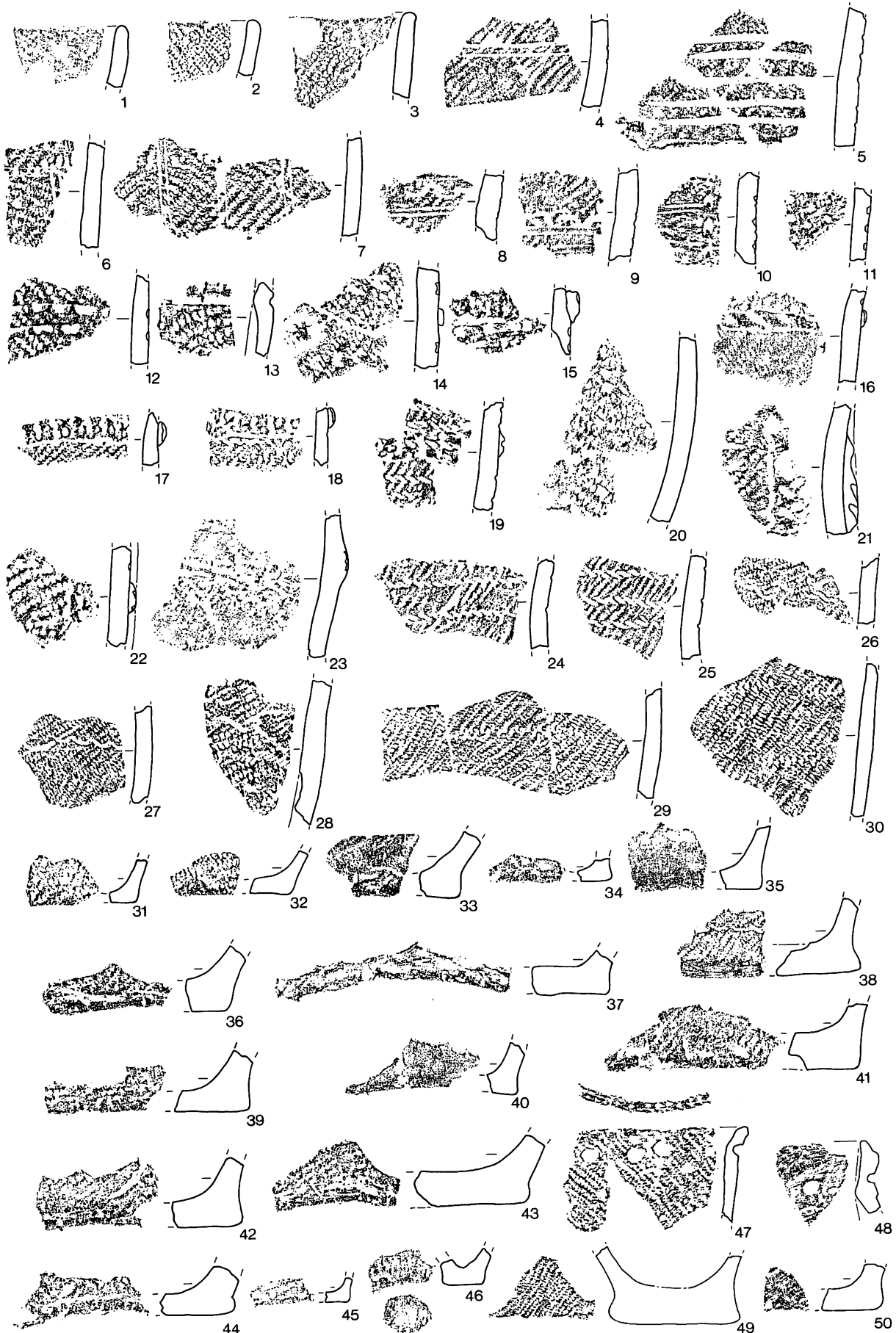
21・22は口縁部に綾絡文のみられるものである。地文はLRの斜行縄文である。22は2次焼成を受けている。1・5-04区より出土した。

7～20・図V-14-1～3は口縁部に地文の縄文だけが認められるものである。口唇上に施文のみられるものと無文のものがある。7は口唇上に半截竹管の凸部による刺突が右から施されている。8～11は口唇上に竹管状工具による刺突が施されている。8・11は左から、9・10は右からの刺突である。12～15は口唇上に半截竹管による連続刺突が施されている。12は右からの押し引き風の刺突である。13は左から、14・15は右からの連続刺突である。13～15は口縁が外反する。16は口唇上に爪形の刺突が施されている。17・18は口唇上に縄文が施されている。19・20、1～3は口唇上が無文のものである。19は口唇が薄く尖り気味である。2・3は口唇がなで調整されている。地文は1・2がRL、ほかはいずれもLRの縄文である。

4～30は胴部である。4～10は沈線文のみられるものである。6・7には縦の沈線がみられる。8・9には綾絡文も施されている。10は半截竹管による下からの刺突が縦に施されている。11は棒状工具による刺突が施されている。12・13は竹管状工具による押し引き風の刺突が右から施されている。14～19は貼付帯のみられるものである。14は貼付帯の上下に半截竹管による右からの刺突がめぐらされている。15は貼付帯に爪形の刺突が認められる。貼付帯の下には竹管状工具による右からの刺突がめぐらされている。16は貼付帯が竹管状工具による右下がりの沈線で刻まれ、貼付帯の上には左からの刺突が施されている。17～19は貼付帯が縄により刻まれている。19はさらに縄線文が施される。20～22は垂下帯のみられるもの。20は垂下帯の痕跡が残る。21・22には竹管状工具による施文がみられる。



図V-13 包含層出土の土器 7 (Ⅲb-2)



図V-14 包含層出土の土器 8 (Ⅲb-2, Ⅲb-3)

V 縄文時代中期～晩期の遺構と遺物

21は垂下帯を右下がりの沈線で刻んでいる。22は刺突が施されている。垂下帯には下から、器面には右からの刺突である。23は肥厚帯に半截竹管による右からの押し引き風の刺突が施されている。24・25は縄線文が施されている。26～28は綾絡文が施されている。29・30は結束のみられるものである。

31～46は底部である。31・32はやや角ばる。33～42は張り出す。43・44はつぶれている。45・46はミニチュア土器の底部である。

Ⅲ群 b 3類土器 (図V-14-47～50)

北筒式は調査区中央部と川寄りの部分に18点出土している。47は器面にRL斜行縄文が施され、口縁に円形刺突文が加えられている。口唇には半截竹管の凹面による右からの連続刺突が施されている。48は断面が三角形の肥厚帯の下に円形刺突文が施されている。摩耗が激しく、内面は剥落している。49・50は底部で張り出している。49にはLR斜行縄文が施されている。いずれも器面は黄褐色で焼成がよくない。

Ⅳ群 a 1類土器 (図V-15-1～32)

余市式は調査区の南側を除くほぼ全域から1326点出土している。特に調査区の中央部分に多く分布する。1・7、1・8区、5・4区に集中がみられる。出土した後期の土器はほとんど余市式であるため、便宜上本項に限り余市式をⅣ群 a 1類、それ以外の後期前葉の土器をⅣ群 a 2類と仮称したい。

復元個体は5・4-36区から出土した。1は口径32.5cmをはかる。貼付帯がタガ状にめぐらされ、口縁には貼付帯が重ねられている。器面と口唇にLRの斜行縄文と繊維の粗い無節の縄文が施されている。器面は燈褐色、内面は褐色である。胎土に砂粒を多く含む。

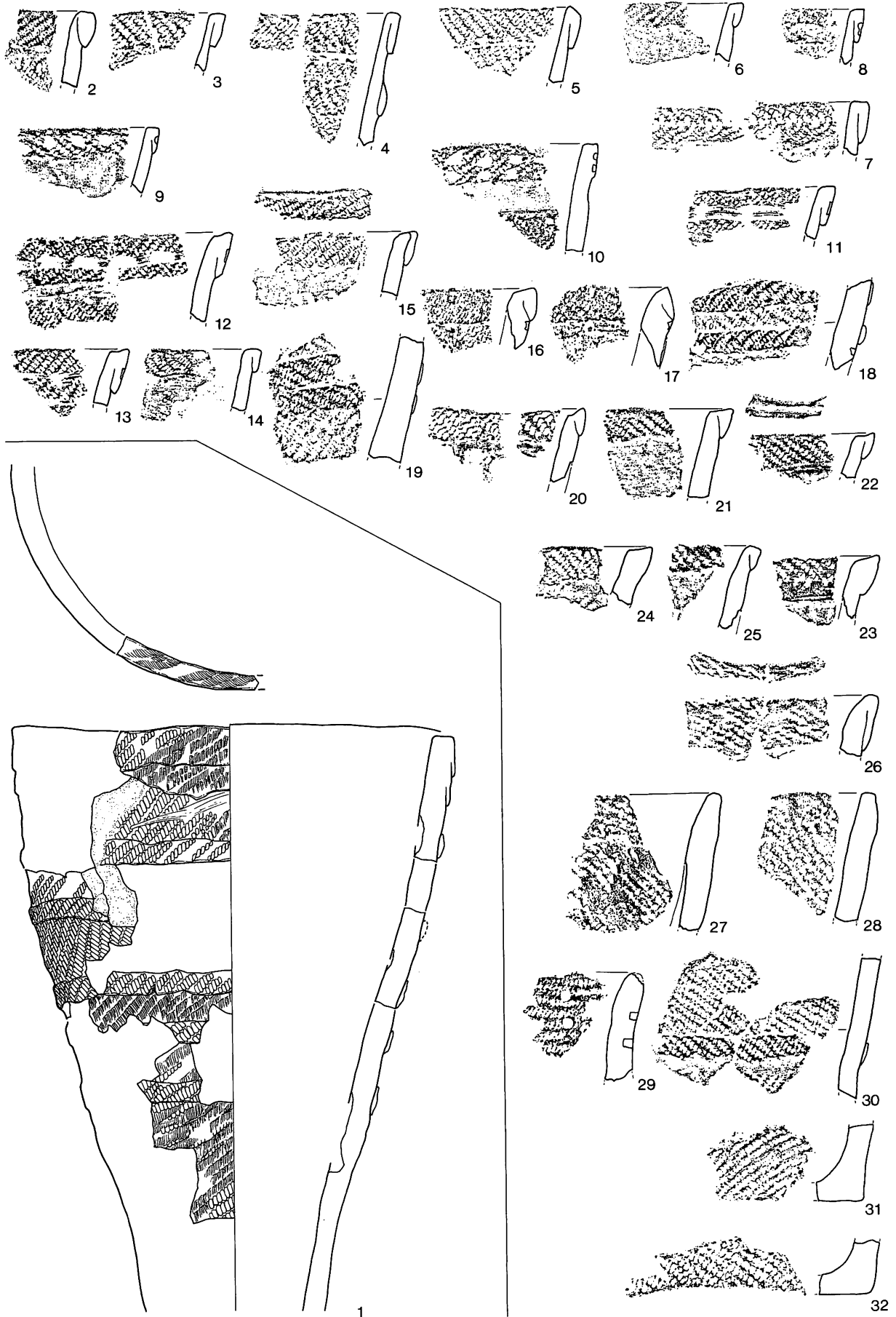
2～11は口唇が平らなものである。器壁は薄く、いずれも口唇と内面が、なで調整されている。

2は器面に縦位、口縁貼付帯に横位のLRの縄文を施している。胎土に小礫を含む。3～5は器面に横位にRLの縄文を施した後、口縁貼付帯上に同様の縄文が施されている。6は貼付帯の下に縦位の調整痕がみられ、この部分からやや膨らむ器形である。貼付帯には横位にRLの縄文が施されている。7は貼付帯にRL+LRの結束羽状縄文が施されている。胎土に小礫を含む。8は器面と貼付帯に横位にRLの縄文が施され、貼付帯には同じ原体による横位の圧痕が深く加えられている。口縁には炭化物が付着する。9は薄い貼付帯上に横位のRLの縄文が施され、棒状工具による刺突が加えられている。刺突には下、上、右からの3方向がみられる。右からのものは押し引き風である。10・11の器面には押し引き風の刺突が左から施されている。

12～17・20～24は口唇の内側が外側より低くなるものである。12は貼付帯に横位にLRの縄文を施し、篋状工具による右からの押し引き風の刺突が加えられている。器面には横位にRLの縄文を施し、貼付帯の下を篋状工具によりなで調整している。13も12と同様で押し引き風の刺突は棒状工具による。14・15は貼付帯に施される縄文が口唇にまで及んでいる。14は横位のRL、15は横位のLRである。15の口唇内側は調整されており段差が認められる。16・17は竹管状工具による刺突が施されている。地文はRLの斜行縄文で胎土に砂粒が多く脆い。20～24は貼付帯に縄文のみが施されるものである。20～22・24はRL斜行縄文、23はRL+LRの結束羽状縄文である。

25～29は口唇が丸みを帯びたものである。器壁は厚い。25は口縁が外反し、貼付帯に横位のRLの縄文が施されている。胴部は無文帯の下から膨らむ。26には薄く幅広い貼付帯がみられる。27・28は口縁貼付帯は無く、わずかに隆起がみられる。いずれも横位にRLの斜行縄文が施されている。29は円形刺突文が施されている。胎土とに小礫が多く脆い。

18・19・30は胴部破片である。18・19は16・17と同様の土器の胴部である。30はLR+RLの結束羽状縄文が施され貼付帯の下が擦り消されている。1・5区、1・8区、2・8区、2・9区、4・10区など広範囲



図V-15 包含層出土の土器 9 (IVa-1)

にわたって同様の破片が出土している。

31・32は底部破片である。31は直立気味でLR斜行縄文が施されている。32はわずかに丸みを帯びRL斜行縄文が施されている。

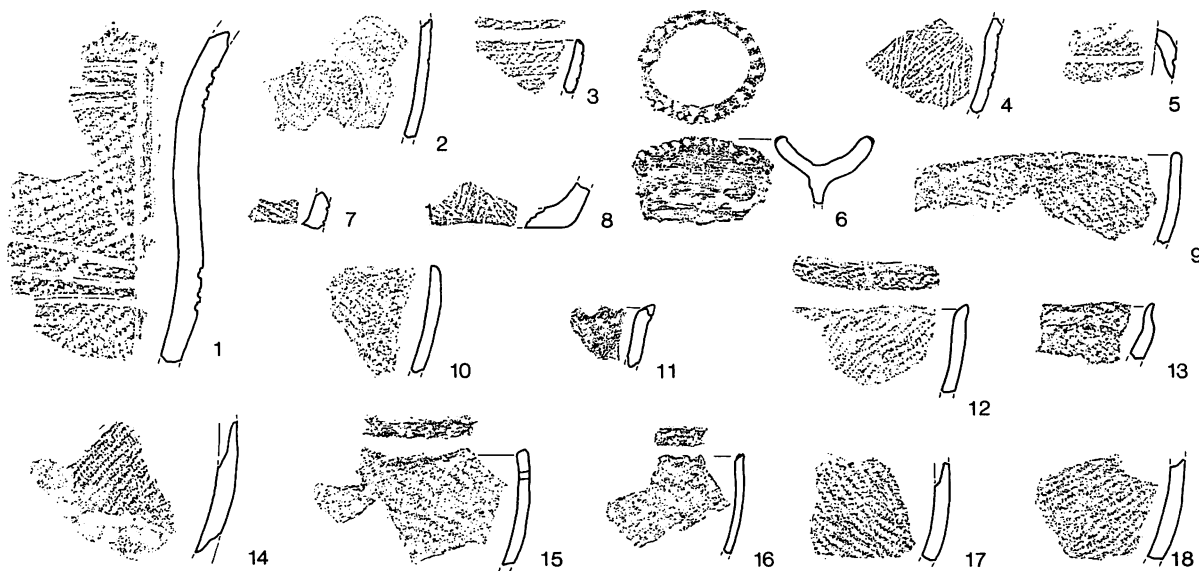
IV群 a 2・b・c類土器 (図V-16-1~10)

余市式を除く後期の土器は32点出土している。調査区の北側と中央部、南端に散発的に分布する。1の胎土は灰褐色で器壁が厚く堅い。RLの斜行縄文の地文に3本単位の横走沈線と2本以上の単位の縦走沈線が施文されている。手稲砂山式に相当する。4・4区より1点だけ出土した。2は角ばった渦巻状の沈線文で区画した中を擦り消している。入江式に相当する。3は薄手で口唇には地文と同じ縄文が施されている。4はRL斜行縄文の地文に三角形を重ねるように沈線文が施されている。5はLR斜行縄文の地文に横走沈線が引かれている。いずれも入江式より新しく手稲式より古い時期のものと思われる。6は口唇に付けられる飾りである。口唇に刻みが施されている。鯨潤式に相当する。2・8区より1点だけ出土した。7・8は沈線文が施されている。胎土は灰黄褐色で小礫を含む。焼成がよく堅い。同一個体と思われる。堂林式に相当する。9・10は地文にRL斜行縄文が施されている。胎土は茶褐色で小礫を含む。三ツ谷式・御殿山式に相当する。

V群 b・c類土器 (図V-16-11~18)

晩期の土器は調査区の中央部分と川寄りの部分で42点散発的に出土している。11は口唇に縄による大きな刻みが施されている。口縁はやや外反する。タンネトウL式系と思われる。12は口縁がやや外反し口唇は尖り気味である。口唇の内面にも地文と同じLR斜行縄文が施されている。13は薄手の浅鉢形土器である。口縁は直立し、ややくびれて外反する。地文はLR斜行縄文。14は12と同一個体と思われる胴部破片でLR斜行縄文が施されている。いずれもタンネトウL式に相当する。

15は薄手の壺形土器である。器面にRL斜行縄文が施されている。口唇は内傾し地文と同じ施文具によるとみられる縄文が押捺されている。幣舞式系と思われる。16は浅鉢形土器である。地文にRL斜行縄文が施され、内傾する口唇にも同様の縄文が押捺されている。幣舞式に相当する。17・18は胴部破片である。地文は17がRL、18がLRである。幣舞式・緑ヶ岡式に相当する。



図V-16 包含層出土の土器 10 (IVa-2, IVb, IVc, Vb, Vc)

2) 石器類 (表V-2~11、図V-17・18、写真図版40~42)

中期・後期に属する石器類としては、剥刃石器類が石鏃20点、石槍8点、削・搔器8点、R・F 9点、U・F 2点の計47点で、礫石器類が砥石6点、たたき石10点、石皿4点、台石6点、板状礫2点の計28点ある。剥片類はすべて黒曜石で、Tピットの覆土中に1点と焼土から出土したもの117点、他に礫1点の総計194点である。

石器類の分布をみると、全体にまばらで際立って集中する地点は見受けられない。中でもTP 3より南側は、わずか5点が出土しているのみで極めて少ない。

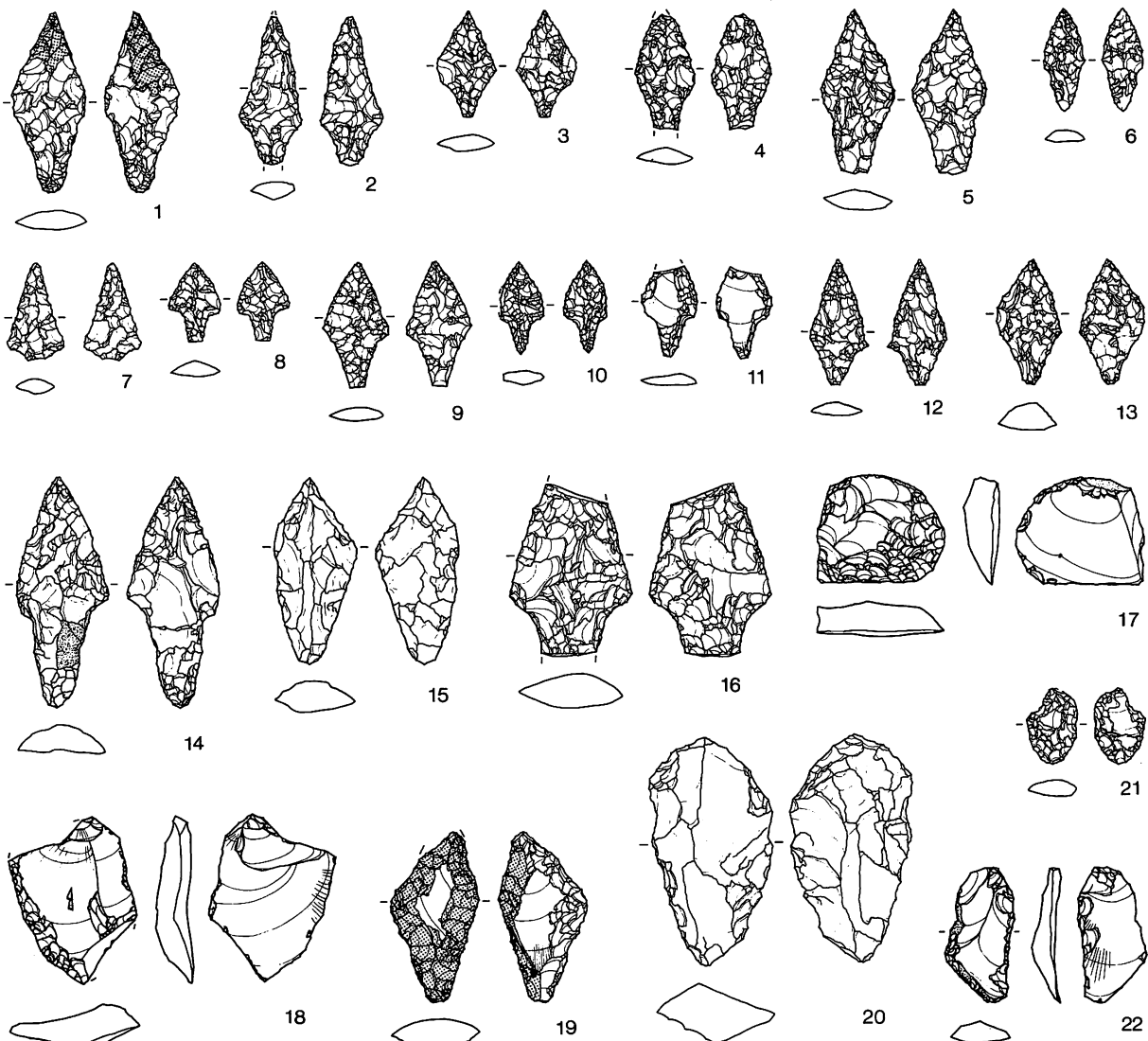
以下、器種毎に主な点を記す。

石鏃 形態別の内訳は、有柄凸基11点、有柄平基4点、菱形の可能性のあるもの3点、不明2点である。図番1は焼けた石鏃の先端部を再調整(スクリーン・トーン部分)しているもので、その部分だけ光沢がある。

石槍 図番15を除き全て有柄凸基である。15は流紋岩部分の多い黒曜石製で、菱形の石槍としたが、図の右側縁は表裏から交互剥離がなされており、削器に転用されている可能性がある。

削・搔器 図19は摩耗した石槍もしくは削器を再加工(スクリーン・トーン部分)したものである。

図20は流紋岩部分の多い黒曜石製で、両側縁に極めて粗い刃部加工が施されている。



図V-17 包含層出土の石器(1)

表V-2 石鏃一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	形態	備考
1	1・5-39	29.8	12.6	3.4	1.1	黒曜石		37	有柄凸基	一側縁基部欠損
2	75	49.8	20.0	5.9	4.4	黒曜石	1	228	有柄凸基	焼けた石器を再加工して製作されている
3	76	22.7	12.1	2.7	0.5	黒曜石		190	有柄凸基	両面に主刺縁面を残す、無調整部あり、習作か
4	85	40.9	17.3	5.1	2.6	黒曜石	2	188	有柄凸基	先端わずかに欠損、摩耗
5	1・7-45	33.0	15.8	5.0	1.9	黒曜石		441		菱形？
6	1・8-70	29.0	16.0	4.4	1.4	黒曜石	3	392		菱形？未製品
7	2・7-65	31.1	16.0	4.5	1.8	黒曜石	4	258	有柄凸基	先端欠損
8	2・8-94	45.0	20.1	6.7	4.2	黒曜石	5	356	有柄凸基	反っている
9	3・0-22	24.0	13.8	3.6	1.0	黒曜石		28	有柄凸基	先端欠損
10	36	27.8	11.0	3.4	0.8	黒曜石	6	26	有柄凸基	わずかに反っている
11	3・3-39	26.7	15.8	4.6	1.2	黒曜石	7	52	有柄凸基	先端・基部わずかに欠損、若干摩耗
12	68	31.7	14.4	4.3	0.8	黒曜石	8	58	有柄凸基	肉厚
13	3・4-64	34.8	18.3	3.7	1.6	黒曜石	9	179	有柄凸基	
14	3・5-57	25.5	11.9	3.5	0.7	黒曜石	10	265	有柄凸基	一側縁欠損
15	90	25.2	15.2	2.9	1.0	黒曜石	11	238	有柄凸基	先端つぶれ、両面に主刺縁面を残す、習作か
16	-	24.3	11.4	4.1	1.0	黒曜石		262	有柄凸基	先端つぶれ、両面に主刺縁面を残す
17	3・6-84	34.3	15.4	4.1	1.5	黒曜石	12	302	有柄凸基	
18	3・8-46	19.2	11.0	2.6	0.4	黒曜石		372		先端部片
19	4・5-67	34.5	17.6	7.3	2.8	黒曜石	13	249		菱形？一面に原石面・凸状部を残す、未製品

表V-3 石槍一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	形態	備考
1	1・6-70	63.4	25.2	7.6	7.8	黒曜石	14	196	有柄凸基	
2	2・4-09	51.7	23.3	10.8	8.4	黒曜石	15	192		菱形？
3	34	35.3	20.9	9.8	7.3	黒曜石		191	有柄凸基	先端・基部欠損
4	2・5-89	47.7	33.7	9.3	14.7	黒曜石	16	220	有柄凸基	先端・基部欠損
5	2・8-18	29.8	32.6	8.6	7.2	黒曜石		420	有柄凸基	基部片
6	3・7-15	13.8	13.4	4.8	0.7	黒曜石		328		基部片
7	4・8-16	38.2	22.4	7.0	4.3	黒曜石		421	有柄凸基	先端欠損
8	表採	38.0	28.0	7.0	6.5	黒曜石		479	有柄凸基	先端欠損、摩耗

表V-4 削・搔器一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	形態	備考
1	1・5-25	30.1	37.1	9.5	11.6	黒曜石	17	41	横長	先端・一側縁背面加工
2	34	40.2	38.9	9.2	6.8	黒曜石	18	38	木葉形	両端欠損、一側縁背面加工
3	86	47.8	24.1	6.5	6.8	黒曜石	19	189	木葉形	両面加工、基部側欠損
4	1・7-43	72.1	43.9	15.8	48.2	黒曜石		341	木葉形	両面粗い加工、先端欠損
5	55	63.5	32.0	15.6	28.9	黒曜石	20	327	木葉形	両面粗い加工
6	1・8-30	52.8	22.2	8.2	6.5	黒曜石		437	木葉形	先端欠損、焼けて摩耗した剥片使用
7	3・7-21	20.3	13.8	4.7	1.2	黒曜石	21	287	木葉形	両面加工、基部欠損

表V-5 R・F一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	形態	備考
1	2・4-84	37.6	17.8	5.8	3.2	黒曜石	22	211		燧皮片使用、両側縁背面加工
2	2・7-48	8.8	22.5	4.3	0.9	黒曜石		257		両面加工の基部片
3	3・3-41	56.0	38.2	8.8	13.7	珪質頁岩		57		燧皮片使用、一側縁背面加工
4	3・5-70	38.4	24.0	6.2	3.8	黒曜石		237		一側縁背面・一側縁背面加工
5	3・7-11	20.3	11.0	2.8	0.6	黒曜石		288		両面加工の破片、焼けている
6	75	23.7	11.2	3.8	1.1	黒曜石		305		両面加工の破片、焼けている
7	4・5-52	34.9	22.9	6.8	5.2	黒曜石		264		燧皮片使用、一側縁背面加工
8	4・6-07	43.4	21.3	6.0	6.4	黒曜石		273		燧皮片使用、一側縁背面加工

表V-6 U・F一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	形態	備考
1	0・7-92	28.2	14.6	3.2	1.6	黒曜石		322		燧皮片使用、両側縁に使用痕、先端欠損
2	3・3-12	24.5	14.6	3.3	1.2	黒曜石		53		両側縁に使用痕、基部つぶれ、先端欠損

表V-7 砥石一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	1・6-89	98.6	56.0	48.6	453.5	砂岩	23	167	四面使用
2	1・7-08	42.3	20.2	15.8	17.7	砂岩		509	磨耗した破片
3	2・9-83	56.0	23.4	8.0	13.8	砂岩		432	破片、両面に使用痕
4	3・7-75	36.0	25.8	8.0	6.5	砂岩		350	破片、一面にすりくぼみ痕
5	4・5-54	38.0	33.2	17.6	25.1	砂岩		186	破片、両面に使用痕
6	4・9-81	50.9	61.7	23.3	85.8	砂岩	24	525	破片、両面・一端に使用痕

表V-8 たたき石一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	0・7-76	76.8	55.3	50.3	298.5	安山岩	25	339	一端・四面に削痕
2	1・3-46	118.2	60.3	43.2	471.5	安山岩		37	使用痕不明瞭
3	1・7-00	95.3	56.7	44.4	299.4	安山岩	26	334	一端に削痕
4	31	106.5	73.7	30.0	358.6	安山岩	27	332	一端・側縁に削痕
5	2・4-73	98.0	50.5	42.8	289.0	安山岩		148	一端・側縁に削痕
6	2・7-95	144.0	67.6	27.6	428.1	安山岩	28	221	両端に削痕
7	3・6-31	82.4	38.6	17.0	87.8	砂岩		237	側縁に削痕
8	32	84.0	73.0	63.0	144.8	火山弾		247	側縁に削痕
9	41	91.8	78.8	60.4	169.2	火山弾		272	側縁に削痕
10	3・8-47	125.2	85.2	31.6	363.5	安山岩	29	380	破片、一面に削痕、396(38-88)と接合

表V-9 石皿一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	1・4-35	260.0	175.0	65.4	5,100	流紋岩	30	28	一面すりくぼみ、一面みがき
2	88	85.6	81.2	48.4	330.0	砂岩		46	破片、一面すりくぼみ
3	1・7-84	210.0	128.0	44.0	1,975	安山岩	31	280	両面すりくぼみ
4	2・4-51	51.5	68.0	31.5	119.0	砂岩		141	破片、一面みがき

表V-10 台石一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	2・7-03	68.8	40.0	16.0	45.2	砂岩		206	破片、一面みがき
2	66	49.0	27.8	24.6	20.4	砂岩		199	破片、一面みがき
3	08	112.6	107.6	29.8	343.0	安山岩		200	破片、一面すりくぼみ、一面みがき
4	84	40.0	38.6	11.8	20.6	安山岩		220	破片、一面みがき
5	95	49.8	22.0	14.4	18.5	砂岩		223	破片、両面みがき、砥石か

表V-11 板状礫一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	2・3-75	69.6	61.9	14.8	110.0	砂岩		106	破片
2	3・0-26	58.6	52.8	10.0	46.8	砂岩	32	74	破片、一面・側縁みがき

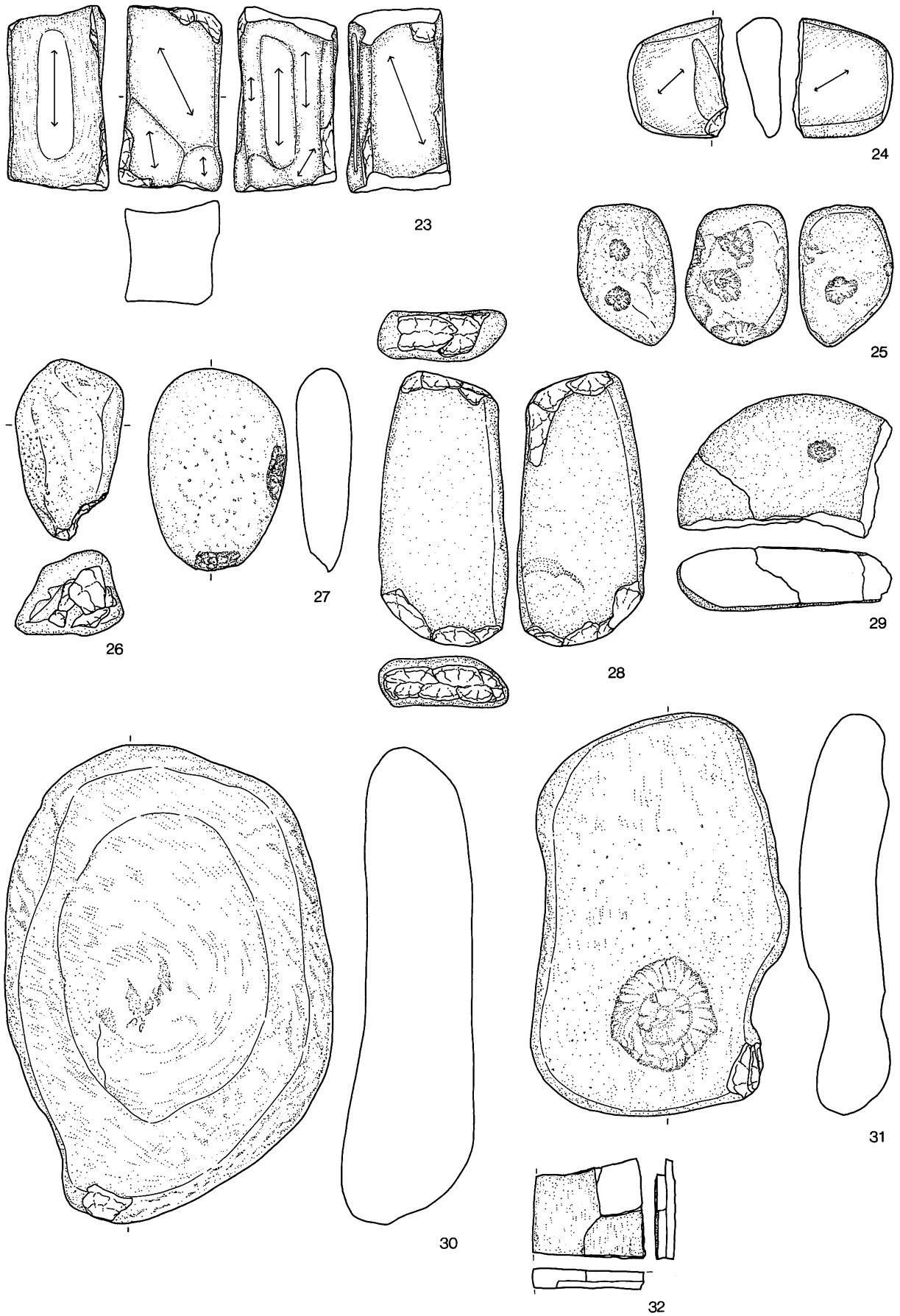
砥石 図番23は四面ともよく使用されくぼんでいる。同24は両面の他に側縁と端部も使用されている。
 たたき石 10点のうち7点が安山岩を素材としている。No. 8・9はVa層の軽石を使用しているものであるが、柔らかく軽いもので効果の程は疑問である。いわゆる「トチむき石」状の使用痕を残すものはない。

石皿 図番30は、流紋岩を素材とし一面をすりくぼめたもの。同31は一面に敲打痕のみられるもので、素材は安山岩である。

台石 5点の出土であるが、いずれも2・7区からの出土であり、この時期の遺物としては特徴的な出土傾向を示している。いずれも破片で、素材は砂岩と安山岩がある。

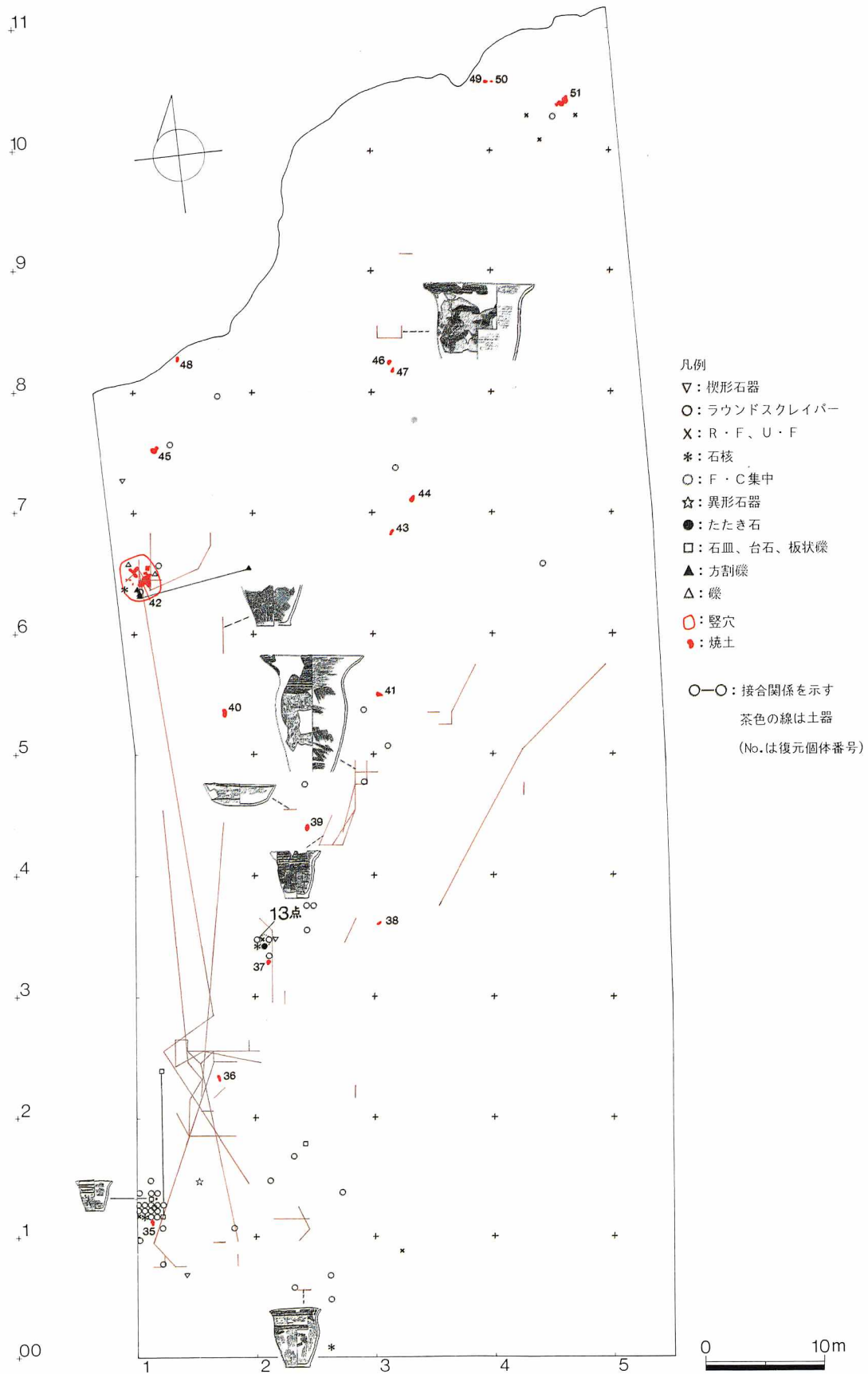
板状礫 図32は砂岩の破片で一面が欠損しているが、残る一面と側縁部はみがかれている。

V 縄文時代中期～晩期の遺構と遺物



図V-18 包含層出土の石器(2)

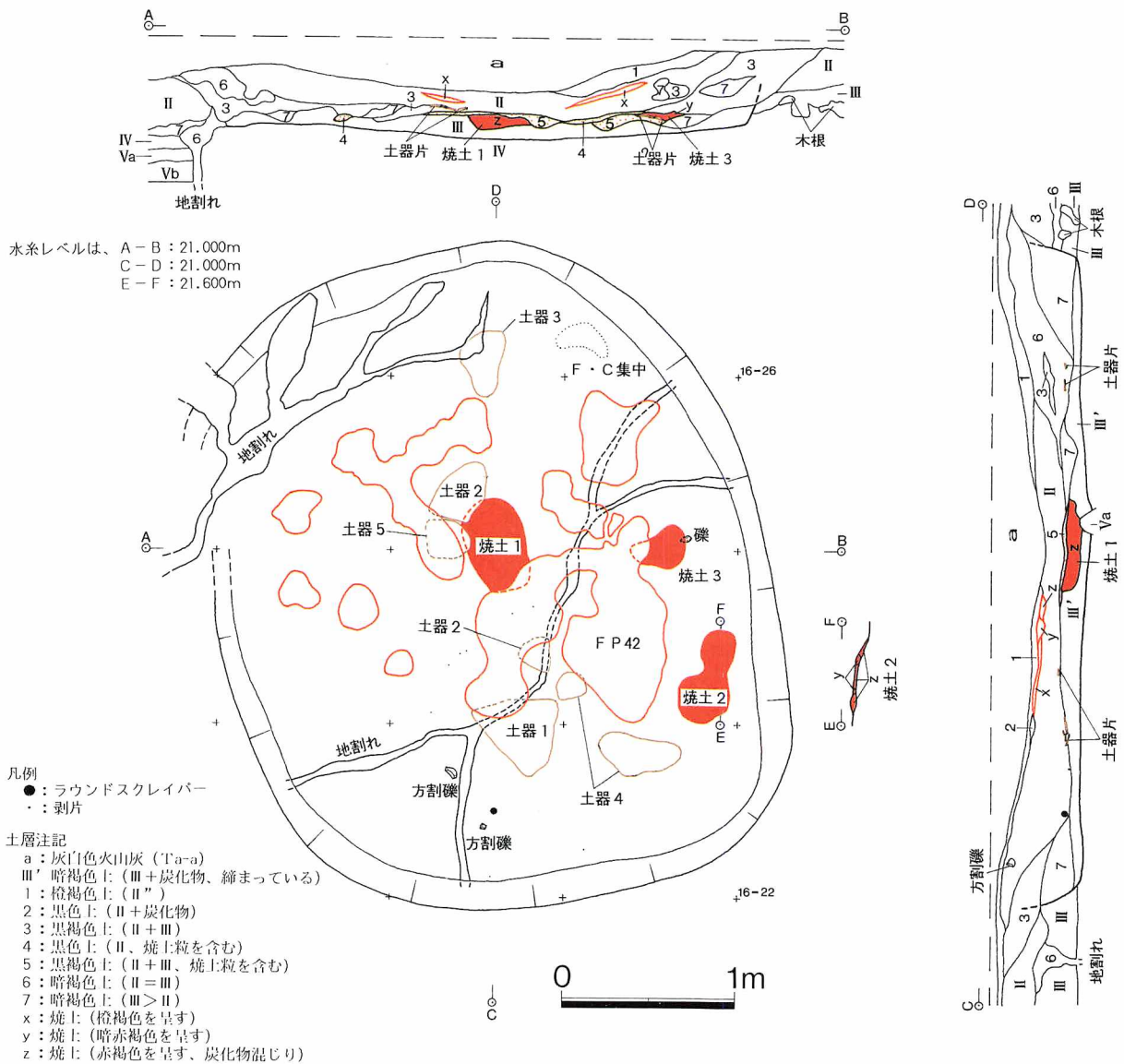
VI 続縄文・擦文時代の遺構と遺物



図VI-1 遺構の位置と遺物の分布



竪穴出土の復元土器



図VI-2 竪穴平面及び断面

1 遺構

続縄文時代遺構に属する遺構には、擦文時代の竪穴1基と焼土17ヶ所がある。

1) 竪穴(図VI-2~4)

1・6-04区を中心とした地点に掘り込まれている。規模は長軸約380cm、短軸320cm、深さが確認面から約50cmである。北西部分が地割れによって開いているが、平面形は隅丸の長方形を呈していたものと思われる。なお、竪穴の中央南側にみられる地割れは、竪穴構築以前(TP5構築後)のもので、床面で確認できたものである。掘り方の底面はIV層上面で、一部Va層の大粒軽石が顔を覗かせている。床は炭化物まじりのⅢ層土で、比較的固く締まっているが平坦ではない。カマド及び柱穴は確認されていない。床面中央には焼土1がある。この中からは、フローテーションによってマメ科の種子2粒と不明種子2粒が得られている。焼土2・3は、床面よりわずかに高いレベルに位置する。焼土2もフローテーションを実施したが、不明種子1粒が得られたに止まった。

この竪穴は、Ta-a層を剥いだ段階で丸いくぼみとして確認されている。覆土は大きく二つに分かれる。最下層は、中央の焼土1を覆うように広がる覆土5で、焼土2・3の下面にあたる。Ⅱ層とⅢ層の入り混じった土で焼土粒を含んでいる。この層の周囲には、覆土3・4・7層がみられるが、かなり入り組んでおり通常の流れ込み堆積とは様相が異なる。また、後述するようにこれらの層の上下で密接な遺物の接合関係がみられるので、一括して覆土下層とする。上層は流れ込み堆積で、壁際に覆土3・6・7層がみられ、その上にⅡ層が堆積している。なお、Ⅱ層上面にみられる燈褐色土(Ⅱ'層)は、Ta-a降灰の影響を受けて色調が変化したⅡ層と思われる。また、Ⅱ層の半ばより若干上位にFP42がみられる。

遺物は土器、ラウンドスクレイパー片、石核、F・C集中、方割礫、楕円礫、剥片がある。

土器1(図VI-4-1)は、床面直上に横倒しの状態で出土した土器である。完形に復元できたが、底部は穿孔されており、その周囲は花卉状に削られている。また口縁の一部を欠いているが、これは意図的に打ち欠かれた可能性が強い。土器2は焼土1の北側上部(覆土下層の上面)から、やはり横倒しの状態で出土したもので、破片は焼土1の南側や土器1の集中内などからも出土している。完形に復元できたが、これも底部が穿孔されている。土器3は、北側壁近くの覆土下層から集中して出土したものであるが、地割れの影響で破片の向きがばらばらであった。また破片の一部は、土器1・2に混ざって出土しており、東壁上の覆土上層から出土している破片もある。完形に復元できたが、器形・文様とも土器1・2とは異なっており、底部の穿孔もない。また、内外面に炭化物が付着しており、補修孔もみられるなど日常的に用いられていた様子が窺える。土器4は、口縁の一部が焼土3の下から、残りの口縁と胴部の一部が土器1の底部北側から出土しており、胴部の大半は土器1東側の覆土下層から出土している。ほぼ完形に復元できたが、底部を全く欠いている。口縁部の内外面には炭化物が付着しており、胴部は二次焼成を受けてひしゃげている。土器5は、口縁部から胴上半部にかけての破片約半分が出土している。出土位置は焼土1の西側上部で、一部土器2と混在し、胴部破片は焼土1南側などからも出土している。また、1・2-25、68区の包含層から出土した破片とも接合した。土器6は、口縁から胴部の破片約3分の1から図上復元したものである。破片の出土地点はまちまちで、土器3~5の集中内にそれぞれ1片、竪穴中央付近の覆土下層で2片、東壁付近の覆土上層から単独で1片、1・6-55区の包含層から1片が出土している。その他、図VI-9-7や、外面に段をもつ杯の破片1点が床面直上から、床面直上・覆土上層及び1・6-18区の包含層出土の破片が接合した大型の杯の底部が出土している。これらが本竪穴に伴う土器で、擦文時代早期の一括資料として捉えられる。

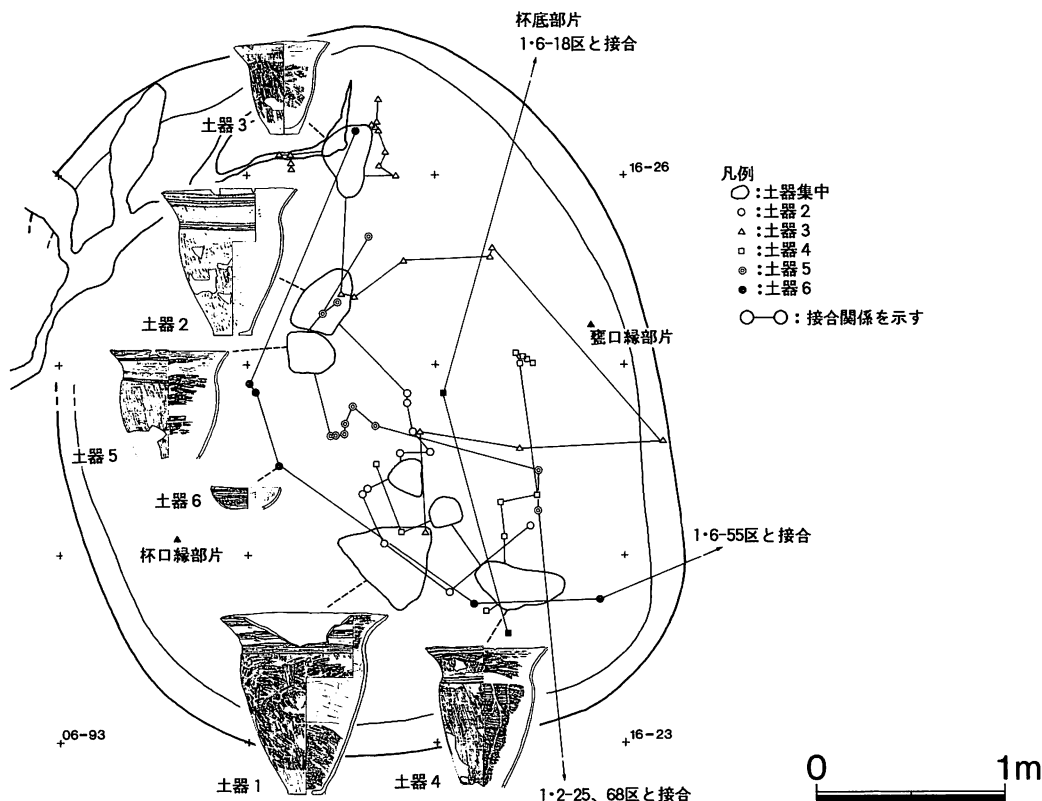
なお、他に柏木川式・余市式土器片が各1点と幣舞式土器片（2点接合）が出土している。竪穴を掘り込んだ際に掘り上げられたものである。

ラウンドスクレイパー片（図VI-4-7）は、南壁近くの床面直上から出土したもので、先端部の破片である。石核は西壁の覆土最上部から出土したもので、本竪穴に伴う遺物ではない。石材はメノウ質の珪質頁岩である。剥片・碎片は、床面から150点出土しているが、そのうち138点は北東隅のF・C集中から得られている。この剥片類には礫皮片が多く含まれており、ラウンドスクレイパーを製作した際の剥片類と考えられる。覆土下層からは16点、上層からは8点が出土しており、それぞれ1点が焼けている。また焼土2のフローテーションでも碎片4点が得られている。

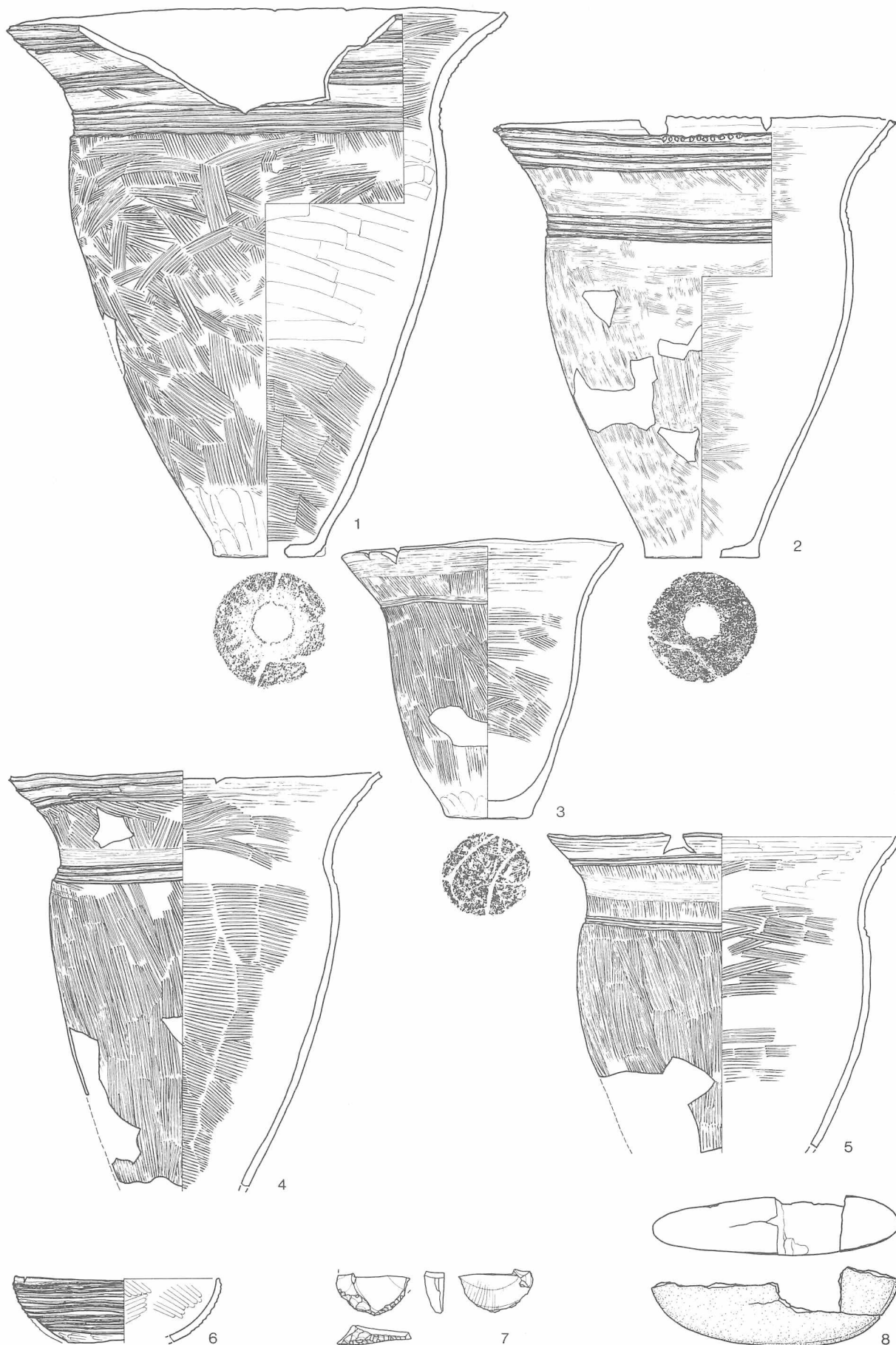
方割礫は、床面直上から焼けたもの2点が、覆土上層からは1点が出土している。このうち床面から出土した1点は1・6-95区の地割れ（竪穴中央の地割れに続くもの）内から出土した方割礫と接合した。礫は床面直上から珪岩の楕円礫1点が出土している。この石材は縄文早期のすり石No.9と同じものである。これらの遺物は、柏木川式や余市式土器片と同様、本来竪穴に伴うものではなく竪穴を掘り込んだ際に掘り上げられたものと思われる。

表VI-1 竪穴出土石器等一覧

No.	グリッド	層位	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	分類	出土No	備考
1	0・6-93	覆土上層	44.5	39.2	38.9	83.7	メノウ質頁岩	石核	55	
2	95	覆土上層	64.5	31.4	24.1	73.4	安山岩	楕円礫	192	
3	1・6-03	床面直上	13.9	26.2	6.2	1.9	黒曜石	搔器	1 198	
4	03	覆土上層	62.8	44.1	38.6	123.8	安山岩	方割 C	88	
5	03	床面直上	131.1	38.4	31.1	177.2	安山岩	方割 B	2 156	B+D、16-95の方割礫と接合、割れたから焼けている
6	03	床面直上	68.5	41.3	38.8	180.9	玢岩	方割 D	157	焼けている
7	15	床面直上	61.6	30.3	22.8	46.3	珪岩	楕円礫	191	

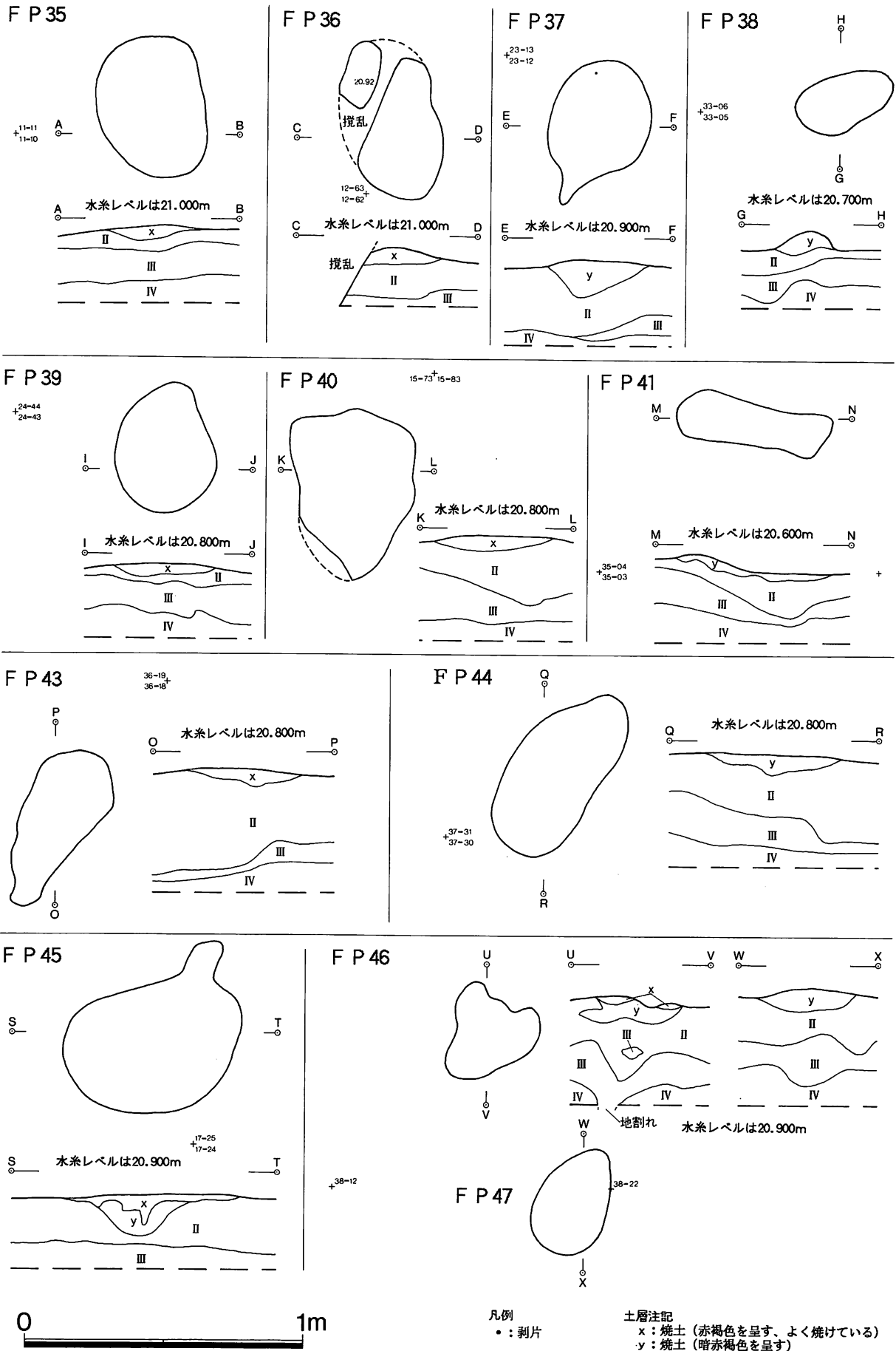


図VI-3 竪穴出土土器接合関係図

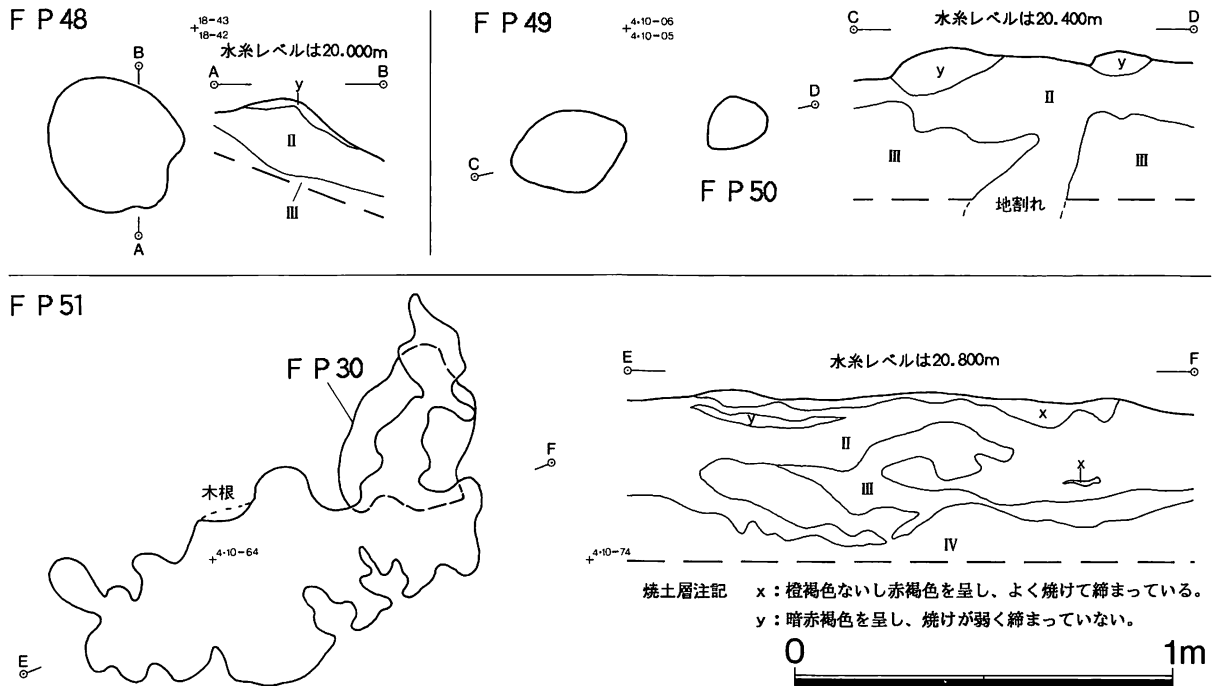


図VI-4 竪穴出土の遺物

VI 続縄文・擦文時代の遺構と遺物



図VI-5 焼土平面及び断面(1)



図VI-6 焼土平面及び断面(2)

2) 焼土(図VI-5・6)

16カ所が確認されている。以下個々にその知見を記す。

- F P 35 1・1区のラウンドスクレイパー(R・S)集中地点で確認されている。良く焼けて締まっております。黒曜石の剥片・碎片20点(うち8点が焼けている)が出土している。
- F P 36 1・2区の土器片集中地点に所在。焼けは良いが、木根の攪乱がみられる。二次焼成を受けた甕の口縁部片1点と、黒曜石の剥片・碎片17点(うち1点は焼けている)が出土している。
- F P 37 2・3区のR・S集中地点南側に所在。焼けは弱く締まっていない。黒曜石の剥片1点がある。
- F P 38 焼けは弱く締まっていない。遺物も出土していない。
- F P 39 2・4区の土器片集中地点西側に所在。良く焼けており、黒曜石の剥片3点が出土している。
- F P 40 良く焼けて締まっているが、遺物は出土していない。
- F P 41 焼けは弱く締まっていない。遺物も出土していない。
- F P 42 竪穴の覆土上層に所在する焼土を一括している。良く焼けているが、遺物は出土していない。
- F P 43 良く焼けて締まっているが、遺物は出土していない。
- F P 44 焼けは弱く締まっていない。遺物は黒曜石の剥片1点がある。
- F P 45 中央部分はかなり厚く焼けており、焼けも良い。遺物は黒曜石の剥片1点と、フローテーションで得られたブドウ属の種子1点がある。
- F P 46 埋没した地割れ上に所在する。上部の焼けは良いが締まっていない。遺物も出土していない。
- F P 47 F P 46の南側に所在。焼けは弱く締まっていない。遺物も出土していない。
- F P 48 ユカンボシ川への落ち際に位置する。焼けは弱く締まっていない。遺物も出土していない。
- F P 49・50 ユカンボシ川沿いのもっとも大きな地割れの内部上面に位置する。焼けは弱く締まっていない。遺物も出土していない。
- F P 51 ユカンボシ川沿いのもっとも大きな地割れの肩口に位置する。本焼土の下、II層中位には縄文中期の焼土が所在する。良く焼けて締まっているが、遺物は出土していない。

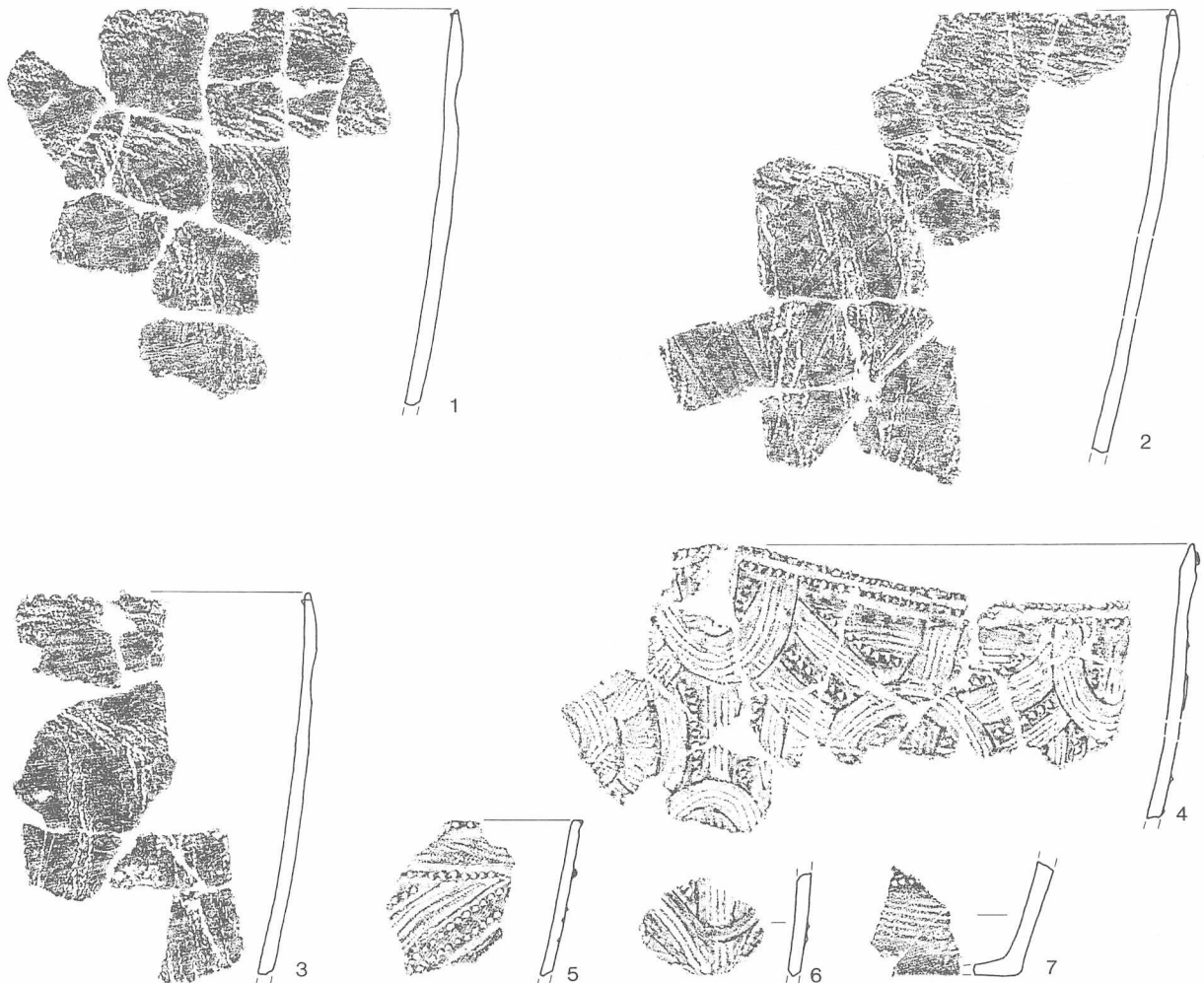
2 包含層出土の遺物

1) VI群b類土器(図VI-7、写真図版43、45-右下)

赤穴式土器89点と後北C₂・D式土器195点が出土している。赤穴式は、底部を除く破片一個体分が2・8区からほぼ一括で、後北式は、2・7、3・7、4・7区と3・10、4・10区でそれぞれにまとまった破片が出土している。

1～3は、同一個体と思われる赤穴式の深鉢口縁部片である。口唇は平縁で細い刻みが間隔をあけて施される。文様は付加条の撚糸文で、口唇直下は横あるいは斜め、その下位は縦に施されている。整形は内外面とも横方向のナデがみられるほか、外面にはささくれだった工具による擦痕や溝状の痕跡がみられる。なお、口縁下位に外側から押しつけられて器厚が薄くなっている部分が横環する。これは、ユカンボシE3遺跡の赤穴式にみられるように(平成3年度恵庭市教委発掘調査資料)、本来は全体を湾曲させてくびれを作出するべき部分と思われる。また、ほぼ一定の器厚が、くびれ部分から口唇に向けて細く尖るようになるものも特徴的である。

4は、3・10区から出土した深鉢の口縁部片である。赤穴式同様、口縁部に外からの押しつけによるくびれがみられる。口唇部に向けて細く尖る。口唇直下には疑縄貼付帯が一条付され、口唇にも細かな刻みが施される。5は2・6区から出土した深鉢の口縁部辺で、器厚は一定である。6は、4・10区から出土した胴部片である。微隆起線部分に赤色顔料が塗られており、土器自体の焼きもの赤褐色である。7は1・7区から出土した底部片で、三角列点文と横走る帯縄文がみられる。張り出しはない。

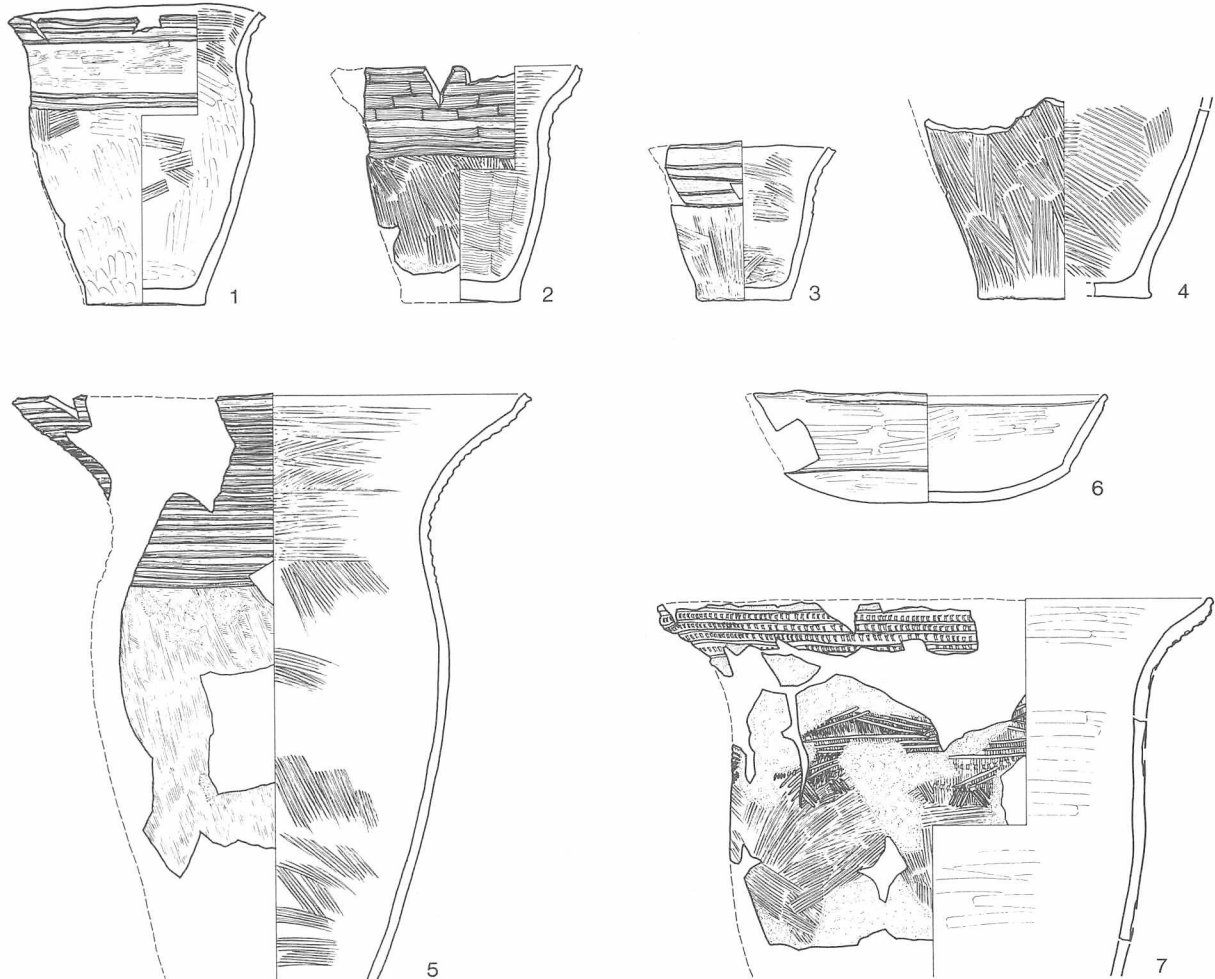


図VI-7 包含層出土の土器(1)

写真図版45-右下は、3・7、4・7区出土の破片から想定復元した深鉢で、口縁が山型をなす。推定器高は25cm、推定口径23cmである。口唇部に細かな刻みが施されるほかは無文である。底部は作りつけの平底で、内面は丸く、外面は明瞭に張り出すように接合されている。体部の調整をみると、外面は全体にケズリの痕跡が顕著に残っており、その上にささくれだった工具によるナデが上半部は横に、下半部は斜めに施されている。更に口唇直下の部分には、トクサ状工具による細かなナデが横方向に施されている。また、その部分には外からの押しつけによるくびれがみられ、赤穴式同様口唇に向かって細く尖っている。内面は原体が不明であるが丁寧なナデが横あるいは斜めに施されている。後北式としては異質な土器で、実見していないが、器形的には白坂遺跡第4地点（久保 1983）出土の小坂X1式類似とされている、第142図11の土器に通じるものがある。

2) VII群a類土器（図VI-8・9、写真図版44~46）

擦文時代の土器片は、全部で1,648点出土しているが、図8-7以外は本類に属するもので、1・0、1・1、2・0、2・3、2・4区に集中している。1は2・0区から一括出土した小型の甕で、約四分の一個体がある。板状工具による浅い沈線が口縁直下と頸部下位に施され、それぞれ弱い段をなしている。調整は外面頸部が横方向のナデ、胴部が主として縦方向のミガキで、内面は口縁部が横方向のハケメ、胴部が縦ミガキである。内外面とも若干の炭化物が付着している。底部は平底で張り出さず、木葉痕などはみられない。2は2・4区出土の小甕で、約二分の一個体がある。明瞭な段状沈線を口唇から頸部に隙間なく廻らせ、内外面ともハケメ調整されている。底部はわずかに張り出す。底面には圧痕はみられない。3は更に小さな甕で、1・1区から一括出土しているが、口縁から胴上半の一部を欠く。頸



図VI-8 包含層出土の土器（2）

部に4条の細い沈線を廻らせ、肩部はわずかに段状を呈す。調整は外面がハケメの後ミガキ、内面はハケメである。底部は張り出さず、圧痕もみられない。4は1・5、1・6区出土の底部片で、約二分の一がある。調整は内外面ともハケメで、炭化物が付着している。底部はわずかに張り出し、底面にはササの圧痕がみられる。5は2・4区出土の甕で、底部を除き約三分の一がある。浅い沈線を口唇から頸部に隙間なく廻らせるが、肩部に段はつかない。調整は内外面ともハケメの後ミガキが部分的に施されている。6は2・4区から出土した杯で、約二分の一の個体がある。外面に明瞭な段を有し、内面にもそれに対応するくびれがみられる。内面は黒色処理されている。内外面とも丁寧なミガキがなされているが、共に口唇直下に沈線状のミガキ残し部分がある。



図VI-9 包含層出土の土器(3)

図9-1は横走沈線と山形沈線がみられる北大Ⅲ式土器で、胎土は粗い。2は横走沈線と縦の短い沈線がみられる。口唇は丸く、浅い刻みが施されている。3~10は、口唇が凹状で上端がトの字状を呈するもので、口縁上部が内湾する。3は肩部の段が明瞭で、頸部には2種類以上の工具による粗雑な沈線が廻らされている。4はトクサ状工具による深い沈線が上下に分けて施文されている。5~10は口縁の内湾が緩い。5・6の沈線はわずかに段状を呈す。7は竪穴の床面直上から出土したもので、同一個体の破片はない。8は口唇の立上がり部分で急に内湾する。9の沈線は板状工具による段状のものと、棒状工具による丸いものがある。10の沈線は幅広の弧状工具によるものである。11~13は凹状口唇で上端が水平なもので、口唇直下の外面が膨らむ。沈線はいずれもトクサ状工具で、11・12は丸く、13はわずかに段状を呈す。14~16は、凹状口唇で上端がトの字状を呈すもので、口縁上部に幅広の沈線がみられる。14は口縁部に板状工具による幅広の沈線が2条、肩部にごく細い沈線が2条みられる。頸部は斜め、胴状半部と内面は横のハケメ調整である。炭化物が内外面に付着している。15は板状工具による低い段状沈線がみられる。外面調整は縦のハケメ後横ナデ、内面は横のハケメで、口唇直下のみ更に横ナデが施されている。16はトクサ状工具による低い段状沈線が施され、内面には炭化物が付着している。17・18は、口唇が平坦で上端が水平をなすもので、複数の工具による粗雑な沈線が廻らされている。18は口唇外側が垂直をなす。沈線は弧状工具の二度引きによるもので、上側は逆弧状をなす。外面に炭化物が付着している。19は凹状態口唇で上端は水平をなす。口唇直下にごく浅い沈線が2条みられ、肩部にはトクサ状工具による丸い沈線が2条廻らされている。調整は胴部外面が縦、内面は横のハケメである。胎土は砂質で剥落が目立つ。20は平坦口唇で上端は斜めになる。沈線はトクサ状工具によるもので浅い。胎土は砂質で剥落が目立つ。21は凹状口唇で上端はトの字状をなす。口縁は内湾しない。外面は斜めのハケメ調整後横ナデが加えられ、更に沈線より下位の部分は、トクサ状工具による沈線状の調整が横方向に施されている。内面は横のハケメ調整である。なお、補修孔は内側から穿たれている。22~24は、口唇がわずかに凹状で上端は斜めになるものである。22は口縁が内湾し、トクサ状工具による段状沈線が廻らされる。調整は外面が横のハケメで、内面はミガキあげられている。23の口縁は内湾しない。沈線はトクサ状工具によるもので丸い。調整は外面が横ナデ、内面は横あるいは斜めのハケメである。24の口縁は外反する。沈線はトクサ状工具によるもので浅い。調整は外面が横なで、内面は横のハケメである。25は口唇がわずかに凹状で上端が水平である。沈線は板状工具によるもので段状を呈す。26の口唇は丸い。沈線はトクサ状工具によるもので浅い。27は凹状口唇で上端がトの字状を呈し、口縁上部がわずかに内湾する。沈線には板状とトクサ状の工具が用いられている。28は口唇がわずかに凹状で上端は水平である。丸い工具の押しつけによる刻みが間隔をあけて施されている。トクサ状工具による粗雑な沈線が、口唇直下から隙間なく廻らされている。29は頸部片である。沈線はトクサ状工具によるもので丸く浅い。上下の沈線間は縦方向のハケメ、沈線より上位には横のハケメとナデがみられる。内面はハケメ後丁寧なミガキが施されている。30は口唇が丸く、口縁は全体に内傾し下端の部分で外反している。調整は内外面とも横ナデである。小型の壺あるいは胴張り甕と思われる。31は外側にツバが付く口縁部片である。同形の完形品として、サクシュコトニ川遺跡(横山ほか 1986)出土の個体番号10(PL2-207)がある。また、頸部の内側にツバが付く例は南島松4遺跡(平成3年度恵庭市教委発掘調査資料)から出土している。

3) VII群c類土器(図VI-8、写真図版45)

図8-7の1個体のみである。出土地点は3・8区で、a類土器とは分布を異にしている。表面の剥落が著しいが、縦・横・斜めの沈線と列点で文様を構成している。肩部の段はなく、胴部に短い山形沈線の集合が垂下している。調整は外面がハケメ、内側がミガキで、外面に炭化物が付着している。

3) 石器類 (図VI-6-10~12、写真図版47、48)

擦文時代に属する剥片石器類は楔形石器3点、ラウンドスクレイパー57点、R・F、U・F各3点、石核4点、異形石器1点の71点、全て黒曜石製である。礫石器類はたたき石1点、石皿2点、方割礫3点、礫2点の計8点。剥片は389点で、他に方割礫接合資料1個体がある。

分布をみると、1・1区と2・3区にラウンドスクレイパーの集中がみられ、1・1区からは、U・F、石核、石皿、方割礫が、2・3区からはU・F、石核、たたき石が出土しているほか、F・C集中もある。これらの集中地点については、第八章で詳述する。

以下、器種毎に知見を記す。

楔形石器 図番1は断面が湾曲しているが、基部に階段状剥離がみられ、先端が局所的につぶれている。2は側縁を欠いているが、やはり基部に階段状剥離がみられ、先端がつぶれている。

ラウンドスクレイパー 続縄文時代後半の特徴的な石器として従来から注目されていたラウンドスクレイパーは、文字通り円形を呈し、肉厚で礫皮を残すものが多かった。また刃部加工は角度が急で、全周あるいは基部を除く縁辺に施されているものが一般的である。今回出土したのも、そうしたタイプが主体を占めているが、中には図番13・45のようにエンドスクレイパー状のものや、39・42のように薄手の剥片を素材としているもの、12・17・21のように刃部加工が一部にしか施されていないものもみられる。ここではそうした例も含めて、一括してラウンドスクレイパーとして扱う。なお、刃部や側縁部に刃こぼれ状の小さな剥離がみられるものは23例、基部や刃部がつぶれている例は30例にのぼる。

図番3・4はいずれも先端部の破片であるが、刃こぼれ状剥離がみられる。5~21は1・1区の集中から出土したものである。7は基部から右側縁にかけて欠損した後、側縁部に刃を再生している。また左側縁はつぶれている。13は縦長剥片の先端部にのみ刃部を作出したもので、極めて異質な存在である。14・16は先端がほぼ直角の刃部を形成するもので、いずれも基部・先端ともつぶれている。27は今回出土しているラウンドスクレイパーでは最大のものである。腹面は擦痕が顕著で光沢が失われており、背面は腹面からのネガティブな剥離痕で構成されている。従って、縄文の石核が転用されている可能性がある。32~44は2・3区の集中から出土したものである。32・33はF・C集中内からの出土で、33はNo.518及び集中内とその周辺から出土した剥片と接合している。(接合図は第八章)。45は摩耗した縦長剥片を素材とし、先端に刃部加工を施したもので、刃部及び側縁部に刃こぼれ状の剥離がみられる。

R・F 3点いずれも4・10くからの出土で、ラウンドスクレイパーの可能性がある。

U・F 1・1区と2・3区の集中地点と3・0区から各1点が出土している。

異形石器 1・1区から出土したもので、両側縁に背面から抉り状の剥離を入れている。形態としては図VI-16-128に示した砂岩製の石製品に似ているが、出土レベル地点ともラウンドスクレイパーの集中と同一であることから本時期に含めた。

石核 1・1区と2・3区の集中地点と2・0区から各1点が出土している。54bは1・1区から出土したもので周辺から出土した剥片と接合した(54a)。それをみると打面調整し剥片を剥ぐ技法ではなく、両極打法で弾かせて剥片を得る方法である。

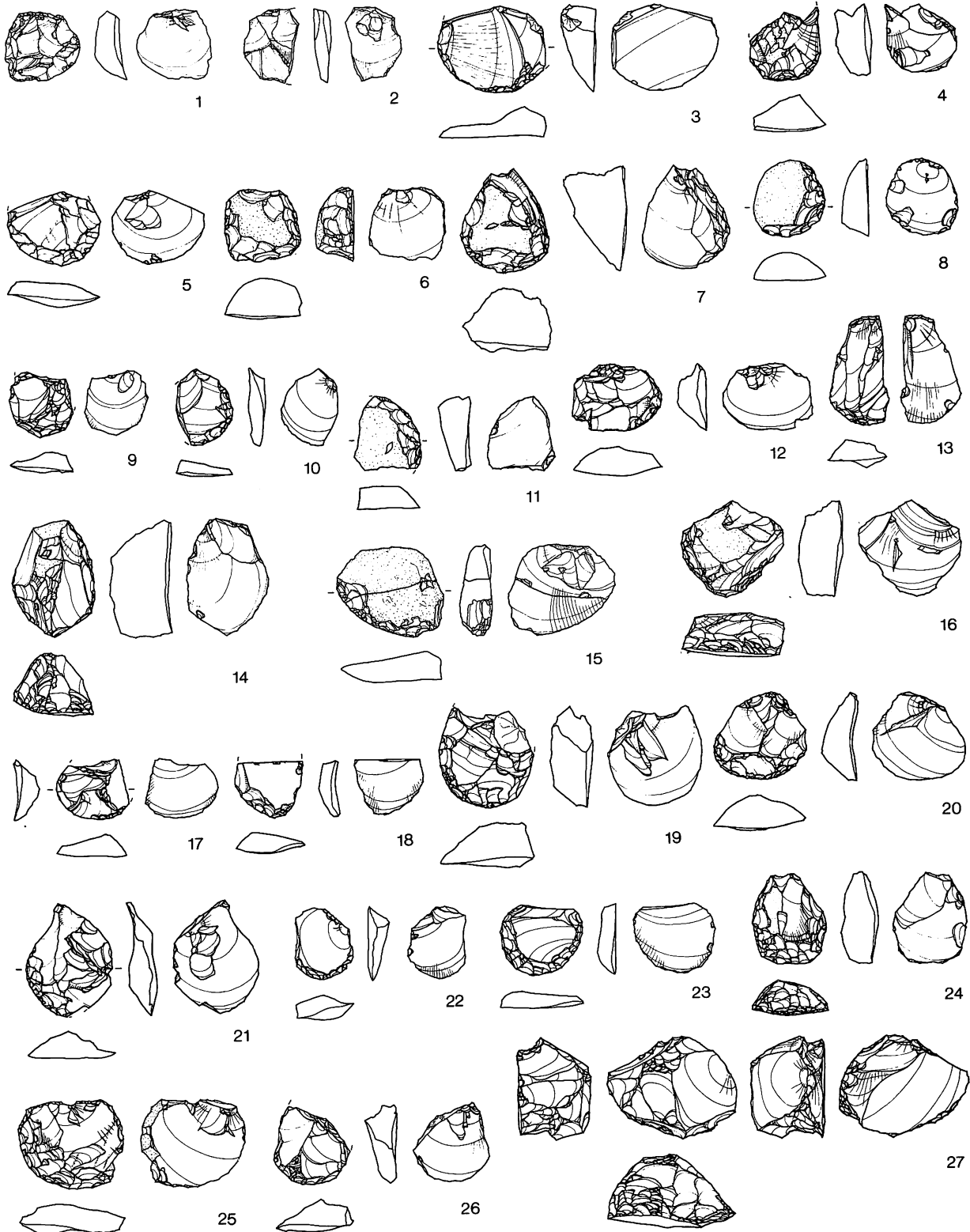
たたき石 2・3区の集中地点から安山岩を素材とする1点が出土している。

石皿 2点がある。57は1・1区の集中地点から出土したものと、1・2区出土の破片が接合している。

方割礫接合資料 1・1区の集中地点から出土したもの1点がある。残存する表面には、土器の内外にみられるような炭化物状付着がある。

表VI-2 楔形石器一覧

No.	グリッド	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重量(g)	石質	図番	勘No	形態	備考
1	0・7-92	22.4	29.0	7.5	4.3	黒曜石		290	楔形	両端つぶれ
2	1・0-46	21.8	24.3	8.0	4.2	黒曜石	1	2	楔形	両端つぶれ、反っている
3	2・3-14	24.1	16.3	5.1	2.2	黒曜石	2	133	楔形	両端つぶれ、一側欠損



図VI-10 包含層出土の石器(1)



図VI-11 包含層出土の石器(2)

表VI-4 R・F一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	形態	備考
1	4・10-32	35.8	27.8	9.2	8.3	黒曜石		457	石器?	背面加工の先端部片
2	40	17.8	9.0	7.4	1.3	黒曜石		459	石器?	背面加工の先端部片
3	72	24.6	17.8	5.8	3.5	黒曜石		463	石器?	背面加工の先端部片、摩耗した剥片を使用している

表VI-5 U・F一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	形態	備考
1	1・1-01	21.9	26.5	5.0	3.1	黒曜石		429		一側縁に使用痕
2	2・3-04	23.0	27.3	3.7	1.4	黒曜石	52	74		両側縁に使用痕、折れ
3	3・0-28	25.1	22.8	6.8	3.6	黒曜石		46		一側縁に使用痕

表VI-6 異形石器

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	形態	備考
1	1・1-54	39.6	25.0	4.6	4.4	黒曜石	53	30	蝶形	両側縁背面加工、折れ

表VI-7 石核一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	形態	備考
1	1・1-01	40.5	31.4	27.3	27.6	黒曜石	54	425		三面に原石面を残す、11-11、11-12の剥片と接合
2	2・0-60	23.9	27.2	14.8	8.7	黒曜石	55	63		
3	2・3-04	34.8	26.4	16.4	11.6	黒曜石	56	66		一面に原石面を残す

表VI-8 たたき石

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	2・3-04	87.6	49.0	25.2	180.6	安山岩		98	一面に敲れ痕、一側縁欠損

表VI-9 石皿一覧

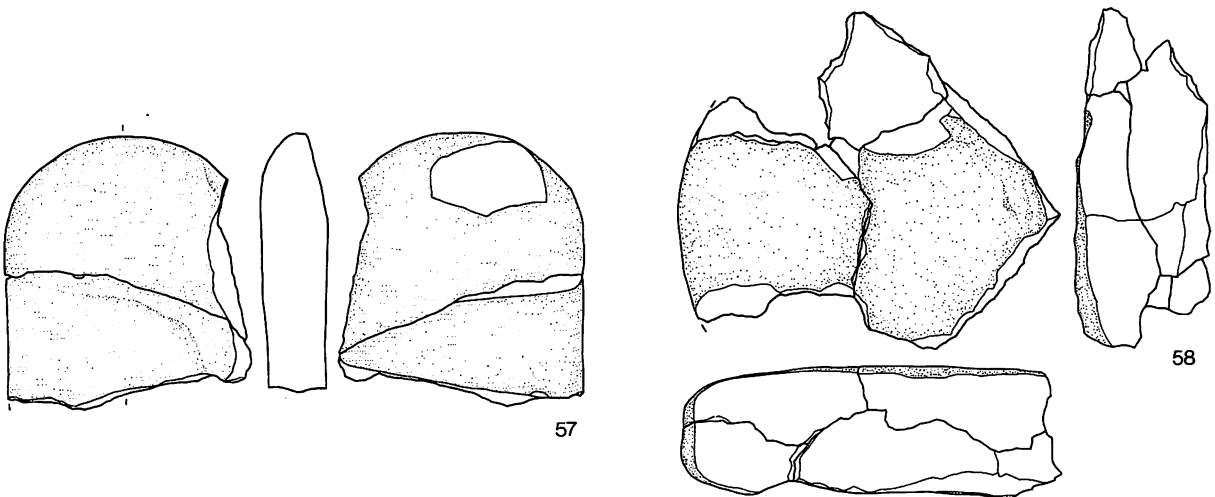
No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	2・1-47	78.4	51.6	34.6	163.5	安山岩		96	破片、一面みがき
2	1・1-21	100.8	96.7	27.5	400.6	砂岩	57	8	破片、一面すりくぼみ、一面みがき、356(12-23)と接合

表VI-10 方割礫接合資料

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	1・1-12	148.8	136.4	51.2	610.0	安山岩	58	19	一様、破片、黒色付着物あり

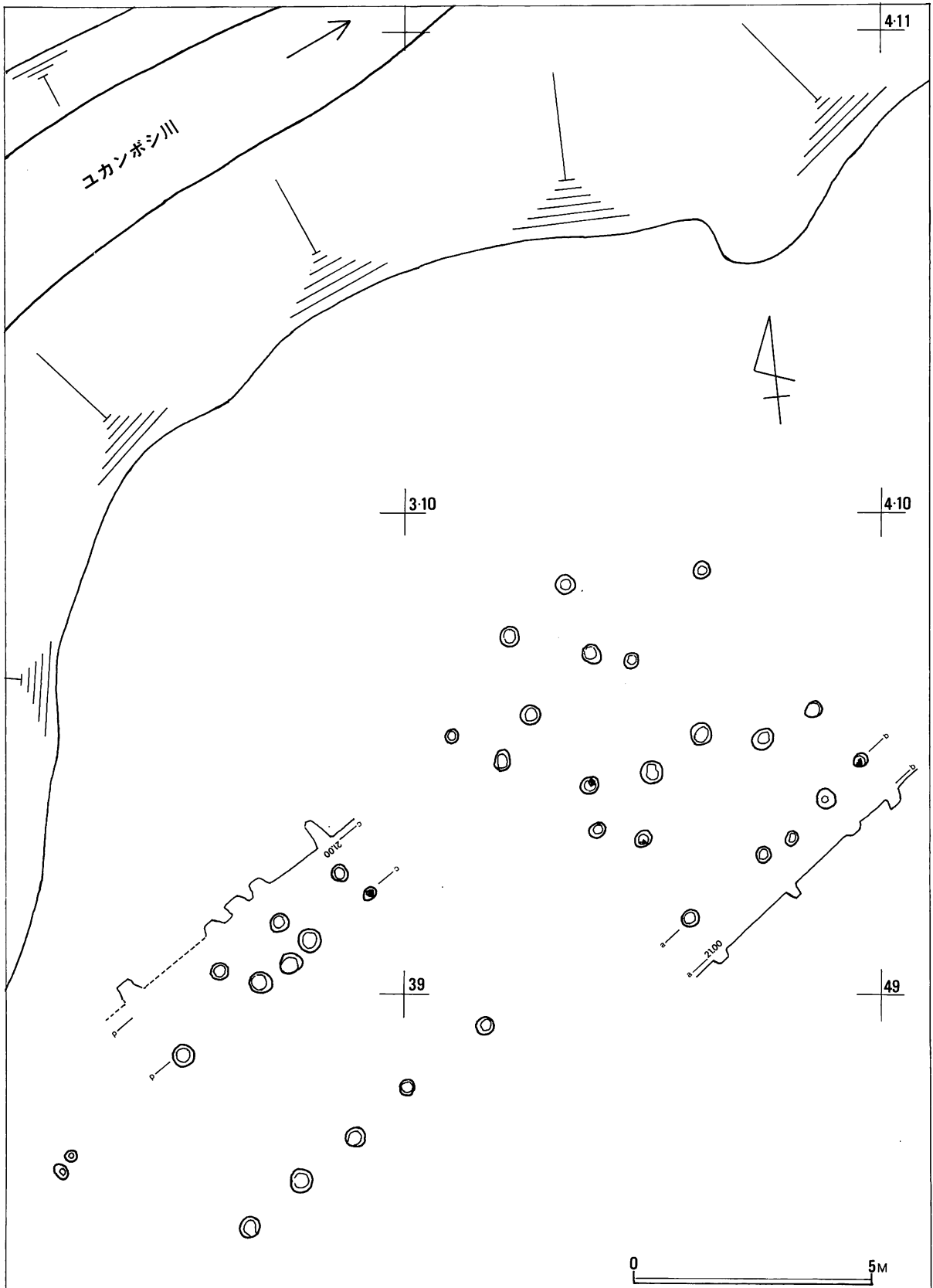
表VI-11 F・C集中一覧

No.	グリッド	総点数	総重量(g)	黒曜石		花十勝		その他
				点数	重量	点数	重量	
6	2・3-04	95	34.3	94	33.5	2	0.8	
7	2・3-14	72	22.3	72	22.3			



図VI-12 包含層出土の石器(3)

Ⅶ 近代



図Ⅶ-2 掘立柱建物跡

1 掘立柱建物跡

調査区北端、ユカンボシ川のすぐ南側で、計35個の柱穴が検出された。確認した層位は耕作土直下である。掘り方の径は約30～40cm、深さは約20～40cm、内部には黒色土が混じる樽前a火山灰が充填していた。柱根が残っているものが4カ所あった。材はミズナラ、太さは20～30cmほどである。柱穴は北東側の20個と南西側の15個の2群に分かれ、両者は約4mの間隔があることから、2棟の建物があったものと推定される。柱穴の配列には不明瞭な点が多いが、建物の平面形は両者とも長方形と考えられ、ユカンボシ川にほぼ平行して建っていたらしい。下流側の建物跡は南東の1列以外に明確な柱穴列がみられない。主柱と束柱があるものと思われる。上流側は南東側の1列と北西側の2列に分かれ、その間は3.5mほど開いている。

構築時期

柱穴掘り方に樽前a火山灰が多量に入っていることから、1,739年以降に建てられたものと考えられる。近世アイヌ文化期の掘立柱建物跡は、恵庭市のカリンバ2遺跡（恵庭市教委 1987）、柏木川11遺跡（同 1990）や千歳市教育委員会が調査したユカンボシC2、C5遺跡（千歳市教委概報 1990・1991）などで調査されているが、いずれも整然と柱穴が配列されており、本遺跡の例とは異なっている。また今回の調査では、近世のアイヌ文化に直接結びつく遺物が出土していないことから、2棟の建物は本州からの移住者によって作られた可能性が強いものと考えられる。『戸磯百年のあゆみ』（戸磯町内会 1989）によれば、戸磯町には明治19年に山口県から七戸が入ったが、「入植した人びとは仮小屋から、割当てられた土地に家族全員で、丸太を切り、家の囲にする茅、葦、笹などを刈って小さな掘立の草小屋を立て凌ぎ、形ばかりの雨露を防ぐ住まいであった」という。

明治43年の修正仮製5万分の1図をみると、ユカンボシ川の両岸沿いに住宅と思われる黒い長方形の印が点々とみえる。号線道路も点線で表わされているが、本州からの移住者は先史時代の人たち同様、川岸の微高地に家を建てたものと考えられる。本遺跡の近くに住む村本良男氏の話によれば、明治の頃にはユカンボシ川の右岸に沿って道が通っており、札幌本道まで続いていた、と伝え聞いているという。これらのことを総合すると、発掘された2棟の掘立柱建物跡は明治時代中頃、本州からこの地に入った人が建てた家屋の跡と推定される。

遺物

柱穴内からは、4本の柱根以外に遺物は出土していない。しかし、建物跡北側のユカンボシ川岸急斜面の肩（2・10区）から出土した陶磁器類やガラス瓶（写真図版49）などが、これに関連する遺物かも知れない。三平皿、飯茶碗、徳利、ビール瓶、薬瓶などがある。

VIII 成果と問題点

1 縄文時代早期の遺物集中点について

1) 第一地点 (1・3、2・2区、図IV-1)

東釧路IV式期に属する、石斧製作に関わる地点と考えられる。1・3区は全て緑色泥岩、2・2区はその他の石材もみられるが、いずれも原石面を残した剥片類が細片は少ない。出土状況は散乱したような状態で、一括投棄された様子はない。接合できたものも多く、図IV-14-99に示したように、大型の原石の礫皮を剥ぎ取る作業が行われていたようである。なお、同一母岩と思われるすり切り残片が3・9、3・10区から出土していることから、すり切りや研ぎ出しの作業は別地点で行われている可能性もある。

2) 第二地点 (1・8、2・8区、図VIII-2)

ユカンボシ川への落ち際 (1・8、2・8区) に所在するF P 12~15とP 3・4を中心とした地点で、主体となる遺物は焼けた方割礫接合資料である。なお、1・8区から出土している土器は全て東釧路IV式の比較的新しい段階のもので、2・8区には中茶路式土器と東釧路IV式土器の比較的新しい段階のものがある。また、フローテーションの結果F P 12~15には動物の骨や植物遺体は含まれていないことが判明している。

遺物の分布をみると、F P 12とP 4の周辺、F P 13・14とP 3の周辺、F P 15の周辺とでそれぞれ異なった特徴がある。

F P 12とP 4周辺では、土器片が56点 (うち2点はF P 12中の出土で接合) と、東釧路IV式ではもっともまとまった出土状況を示している。剥片石器はP 4を取りまくように5点、礫石器は礫砥石片と板状礫各1点、方割礫接合資料はF P 12直上で1個体とP 4南側で1点が出土している。剥片・碎片は101点 (うち黒曜石95点、花十勝6点) で、遺構中からの出土はない。

F P 13・14とP 3周辺から出土した土器片は、図IV-9-22に示した1点 (1・7-89、2・7-06区出土土器片と接合) のみで、剥片石器も3点到過ぎない。これに対し礫石器と方割礫は集中して出土しており、F P 14内及び直上から方割礫接合資料3点 (いずれも焼けており、うち1点は台石)、方割礫1点、礫2点 (うち1点は焼けている) が、P 3内からは方割礫接合資料3点 (いずれも石皿でやけている)、礫1点がある。また、周辺出土のものも含めると方割礫接合資料は14個体にのぼり、そのうち12個体が焼けている。その焼け方には、外面だけが焼けて破断面は焼けていないもの、外面と破断面が焼けているもの、幾つかの破片のみが焼けているものの三種類がある。接合関係をみると、本地点内の他に2・7、3・7区との間に密接な繋がりがある。しかも、2・7、3・7区においても、接合資料の出土している部分は土器片の分布が極めて薄いという共通性がある。なお、2・7-76区には重さ17.6~110.7g (平均72.8g) の円礫もしくは楕円礫が集中する地点がある (表IV-32) が、その集石内から出土した方割礫がF P 14北側出土の方割礫と接合していることから、この集石も本地点と同時期のものと思われる。剥片・碎片は、F P 13内から黒曜石4点、F P 14内から黒曜石17点 (うち5点が焼けている) と焼けた頁岩3点が出土しており、包含層は116点 (うち黒曜石106点、焼けた黒曜石1点、花十勝2点、縞頁岩5点、頁岩2点) が出土している。

F P 15の南側には2カ所の剥片・碎片集中地点 (F・C集中1・2、表IV-14・15) がある。しかし包含層から出土した剥片・碎片は黒曜石7点のみである。剥片石器は13点 (うち3点はF・C集中内出土) ともっとも多く、出土位置は南東側が中心である。また他の遺物も全て南東側からの出土で、土器片は東釧路IV式4点と中茶路式2点、方割礫と礫は各2点があり、礫石器の出土はない。

出土遺物をみると、破損している例がほとんどで、無傷のものはP 3 南側出土のたたき石とF P 15 南側から出土した石鏃の2点のみである。方割礫接合資料をみても完形に復元できたものは少ない。また、破断面が焼けている例や破片の一部のみが焼けている例で明らかのように、破損した状態で持ち込まれ火熱を加えられている遺物が少なくない。同時に、破断面に火熱の影響がみられないものは、加熱して破損させた後に破片が持ち去られている可能性がある。

土器は周辺及び0・5-96区と接合するが、完形に復元できたものはない。F P 12中から出土したものが二次焼成を受けている。

F・C 1 は比較的大きな剥片類も含まれているが、出土状況は極めて集中的である。F・C 2 は微細な破片が主体で比較的まとまって出土している。いずれも一括投棄されたものと思われる。

以上の点から、本拠点の遺構と遺物の在り方は、通常の作業空間とはいささか異なった様相を呈していることは明らかであろう。

木村哲朗(1991)は、焼土とその周辺から出土する遺物との関係に注目し、「もの送り場」と考えられる石狩低地帯周辺の遺跡を集成している。それには縄文時代前期前葉から後期後葉の遺跡があげられており、遺物の廃棄と送りについての幾つかのパターンが示されている。また、平成2・3年度に調査された石狩町上花畔1遺跡では、縄文時代前期中葉から後葉にかけての時期に伴う割れた礫(焼けているものが多い)が多量に出土している。本地点の場合、垂飾などの装飾品や盛土の存在は確認されていないが、焼土と小ピット、F・C集中、多量の焼けた遺物が出土している点から、木村のいう『各遺物に、非機能的なある属性を付加させる、特異な“廃棄”の存在を認めることができ、それに基づく“儀礼行為”が行われた』ことが考えられる。

2 縄文時代前期の遺物集中地点について

1) 第三地点(4・7区、図Ⅳ-1)

中野式に属すると考えられるもので、遺物は土器片74点、剥片石器類39点、礫石器3点と、剥片・破片の集中が3ヵ所(F・C 3~5、表Ⅳ-14・16)、剥片1,601点が出土している。

遺物の分布をみると、土器・石器共4・7-56区を中心とした半径3~4mの範囲内に集中しているが、中央の半径2m内から出土しているのは、土器片・石槍各1点とすり石2点のみで、他の遺物は中央の空間を取り巻くリング状に出土しており、殊に西側に集中している。また、その北西側外縁に3ヵ所のF・C集中がある。

土器は、集中内及び4・6-21区と接合したものはあるが、完形に復元し得たものはない。図Ⅳ-10-2に示した口縁部片は、4・7-26区から出土したもので内外面に炭化物が付着している。また同8に示した口縁部片は、4・7-71区から出土したもので補修孔がみられる。

剥片石器の器種と点数は、石鏃18点、石槍1点、石錐6点、楔形石器、つまみ付きナイフ、削・搔器各2点、R・F 7点(うち1点は焼けている)、U・F 1点(4・7-37区と4・7-68区出土の破片が接合)である。石鏃の形態の分かるものは無柄平基4点、無柄凹基と柳葉形各2点で、他に破片7点、習作と思われるもの2点、未製品1点がある。また、つまみ付きナイフと削・搔器各1点が破損している。石材は、石錐1点が頁岩の他は全て黒曜石で、うち2点が花十勝である。

礫石器は、刃部を欠く石斧1点とすり石2点で、いずれも中央より東側からの出土である。

剥片類は、3ヵ所のF・C集中と包含層合わせて6,705点が出土しているが、黒曜石以外の剥片は縞頁岩20点と頁岩3点のみである。また、焼けているものは黒曜石20点である。

これらの遺物の出土状況をみると、本地点は作業と廃棄の場であったことが窺われる。

3 擦文時代の竪穴について (図VI-1~4)

本竪穴は多くの点で通常の住居跡とは異なっている。それを列挙すると以下ようになる。

- ① 大きさが380×320cmと小型で、平面形が隅丸の長方形を呈する。
- ② カマド及び柱穴がみられない。
- ③ 床面が平坦でない。
- ④ 覆土下層の堆積がかなり入り組んでおり、焼土及び焼土粒を含む層がみられる。
- ⑤ 出土遺物が多く広範囲に及んでおり、F・C集中もみられる。
- ⑥ 床面直上の遺物と覆土下層上面の遺物とに密接な接合関係がみられる。
- ⑦ 出土土器に底部穿孔及び口縁打欠がみられる(土器1・2)。

このうち特に問題となるのは⑦であろう。底部穿孔及び口縁打欠は、続縄文時代の土壌墓に副葬される土器に多くみられる(今年度調査したユカンボシE5遺跡でも、北大式期の土壌墓から出土している)。擦文時代の早期の例には恵庭市柏木川遺跡(高橋正勝ほか 1971)、千歳市ウサクマイA遺跡(菊池徹夫ほか 1975)、同N遺跡(石附喜三男ほか 1977)、江別市萩ヶ岡遺跡(高橋正勝ほか 1982)、浦幌町十勝太若月遺跡(後藤秀彦ほか 1975)などがある。いずれも土壌墓からの出土である。この点からみると本竪穴は土壌墓とも考えられるが、覆土の厚さと堆積状況(中央部で約20cmを計るが、大半はⅡ層土の流れ込み堆積である)からしてその可能性は薄い。

次いで作業小屋の可能性について考えてみたい。折れたラウンドスクレイパーや竪穴北東隅にみられるF・C集中はその可能性を窺わせるものであるが、ここでも土器1・2の存在がネックとなる。また、床面直上と覆土下層上面出土の土器片とに、密接な接合関係がみられる点にも問題が残る。

以上のように、本竪穴は通常の住居や作業小屋・土壌墓とは異なった遺構と考えられる。他に類例のない現状では全く推測の域を出ないが、底部穿孔や口縁打欠のみられる土器に注目すると、想定されるのは殯小屋などの葬送に関連した施設である。

4 擦文時代の遺物集中地点について (図VI-1)

1) 1・1区

F P 35 (1・1-11区)とその北側の遺物集中地点である。フローテーションの結果、F P 35には動植物遺体は含まれていないことが判明している。

出土遺物のうち土器は、図VI-8-3に示した1個体で、石器類にはラウンドスクレイパー17点、U・F、石核、石皿片各1点と、方割礫接合資料1個体がある。また剥片・碎片は全て黒曜石で、F P 35から20点(うち8点が焼けている)、包含層から51点(うち6点が焼けている)が出土している。

遺物の分布をみると、F P 35の約2m北側に土器、ラウンドスクレイパー8点(残りは周辺から出土している)、方割礫が集中しており、東側に石皿片、西側に石核とU・Fがある。

土器は一括出土で、口縁から胴上半の一部を欠く。ラウンドスクレイパーは礫皮を残すものが8点(うち1点は板状原石)、残さないものが9点である。刃部はつぶれているもの、刃こぼれ状の使用痕を残すもの、両方みられるものがある。石核は剥片2点と接合している(VI-11-54a)が、既に述べたように剥片は両極打法によって剥がれている。ラウンドスクレイパーには、基部のつぶれのみられるものもあるが、両極打法によって剥片が剥がされる段階で生じたものか、楔形石器のように使用された結果なのかは判然としない。石皿は1・2-23区出土の破片と接合している。方割礫接合資料の表面には炭化物状の付着物がみられる。

以上の点から、本地点は主としてラウンドスクレイパーを用いる作業場と考えられる。

2) 2・3区

F P 37 (2・3-12区) とその北側の遺物集中地点である。フローテーションの結果、F P 37には動物遺体は含まれていないことが判明している。

出土遺物には、土器片、楔形石器、ラウンドスクレイパー、U・F、石核、たたき石、剥片・碎片集中地点 (F・C集中6・7、表VI-11) と、剥片・碎片がある。

遺物の分布をみると、F P 35の北側約1.5mに、ほぼ1mの間隔で東西2ヵ所の集中がみられる。

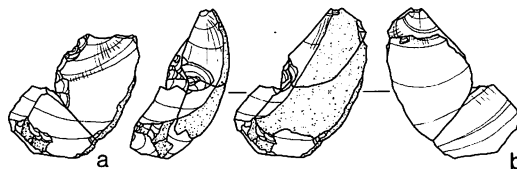
東側の集中は、ほぼ30×20cmの範囲から土器片29点 (全て接合し甕の胴下半が一部復元できた)、F・C集中7 (72点) と破損した楔形石器が1点出土し、やや南側から先端を欠いたラウンドスクレイパー1点が出土している。

西側の集中は、ほぼ50×40cmの範囲からラウンドスクレイパー13点、甕の胴部片、石核、U・F各1点とF・C集中6 (95点) が出土しており、やや片側から甕の胴部片とたたき石各1点が出土している。ラウンドスクレイパーは礫皮を残すものと残さないものが6点ずつで、板状原石の例は1点である。刃部はつぶれているもの、刃こぼれ状の使用痕を残すものがあるが、基部につぶれのみられるものはない。なお、時間的制約で本地点の石器及び剥片類の接合は十分に為し得なかったが、図VI-11-33と、No.518及びF・C集中内出土の剥片との接合関係は確認できた (図VIII-1)。これをみると、縦長の剥片に横方向から打撃を加えて二つに折り、それぞれに刃部加工を施していることが判明した。一見破損しているような図番33も実は完形品であり、第VI章の図や表で欠損したものについても、再度接合関係や加撃の方向などの再検討が必要である。これについては機会を改めたい。なお外側の剥片も、同様に二つに折られているがこれには刃部加工はなされていない。石核は板状原石で、接合関係は確認できない。

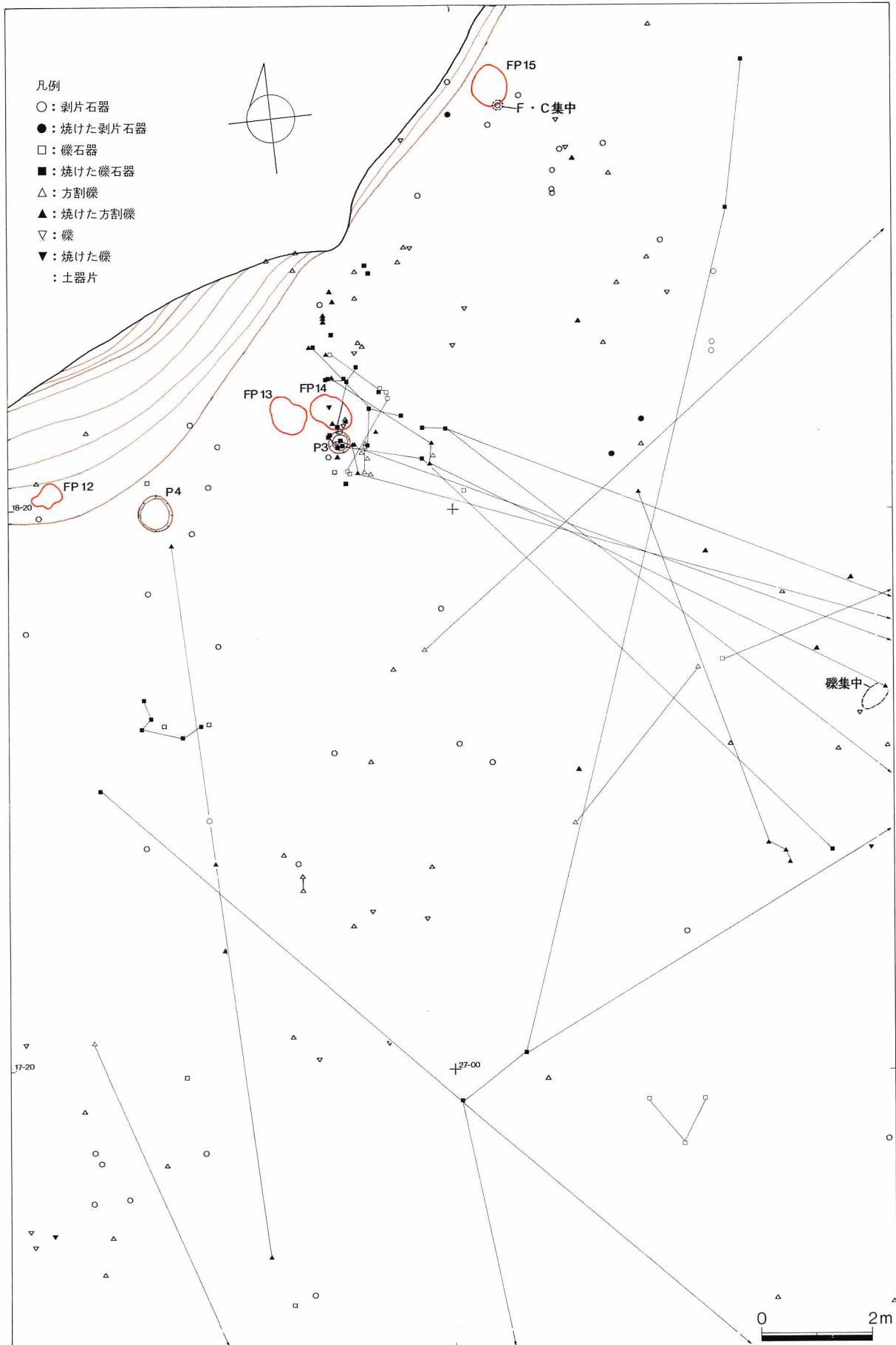
以上のことから、本地点のうち東側の集中については遺物の一括廃棄の場と考えることができ、西側の集中はラウンドスクレイパー製作の場といえよう。

擦文時代のラウンドスクレイパーは30余りの遺跡から出土しているが、石核・剥片類と共に集中的に出土したのは、恵庭市内の南島松4遺跡 (上屋真一 1991) に次いで二例目であり、南島松4遺跡も本遺跡とほぼ同時代の土器群が出土している。

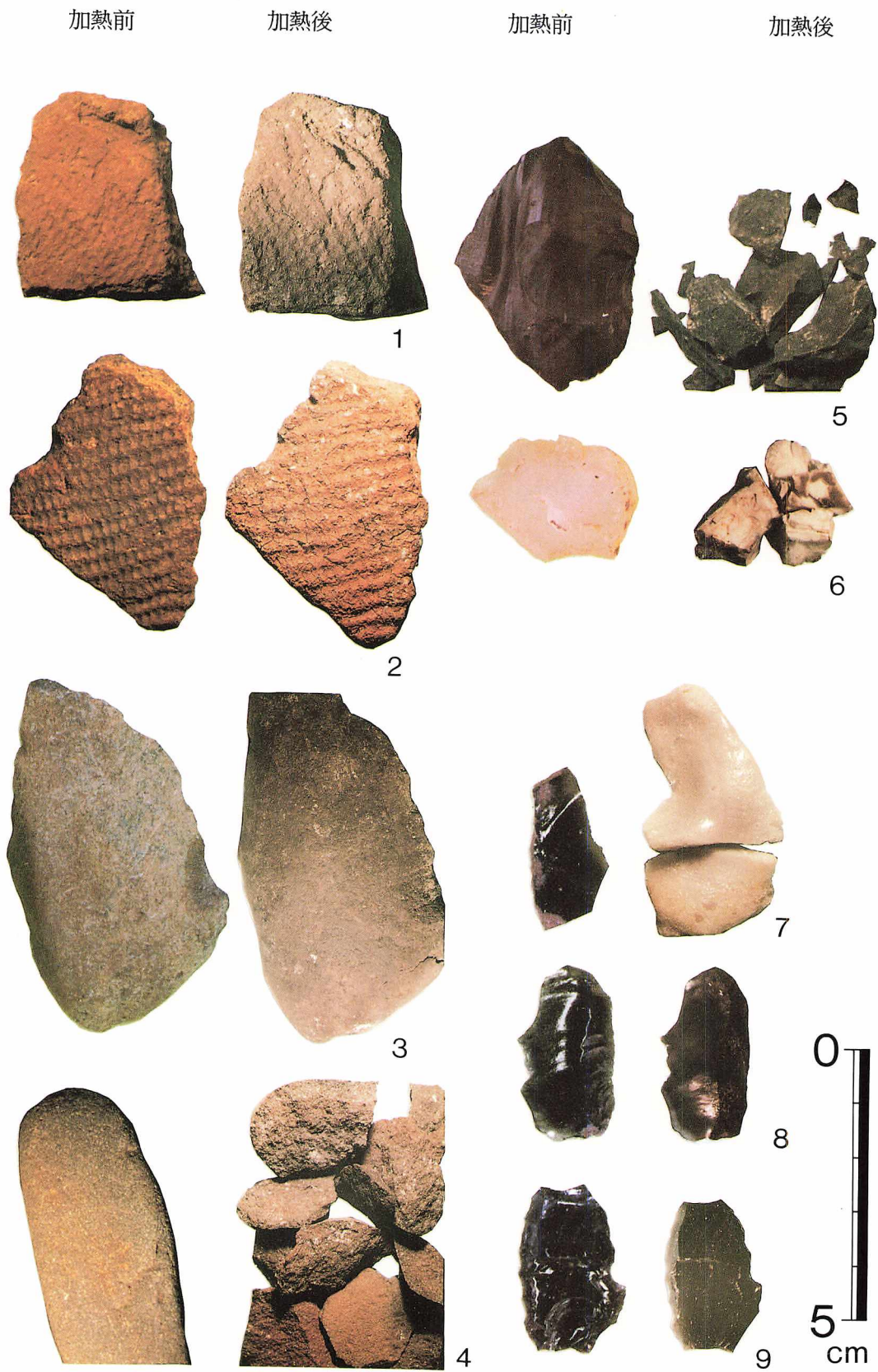
ラウンドスクレイパー (拇指状スクレイパー) の製作過程については、南島松4遺跡の報告で上屋が詳細に述べている。それによれば、剥片は小型角礫を素材とし、手持ちで直接打撃による剥離を行い、手持ちが難しくなった段階で台石等に置き、真上から石などで加撃する両極打法が用いられる。その後全体が円形になるように刃部を作出している。礫皮を残すものはスクレイパー、石核の85%に達し、残核に刃部を作出しているものもある。本遺跡の場合も基本的に南島松4遺跡例と変わるものではないが、原石の選択に違いがみられ、本遺跡ではほとんど円礫で、板状原石面を残すものはわずか3点に過ぎない。このことは、礫皮を残すものの比率が約47%と低い点や、両極打法による剥離が多い点に関係しているものと思われる。なお、南島松4遺跡にも縦長の剥片を二つに折って刃部を作出している例や、エンドスクレイパー状の刃部をもつ例がみられる。



図VIII-1 スクレイパー接合資料



図VIII-2 遺物集中区（第二地点）



- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| 1. 計3時間加熱 | 2. 計2時間加熱 | 3. 計6時間加熱 |
| 4. 計2時間加熱 | 5. 計3時間加熱 | 6. 計3時間加熱 |
| 7. 計2時間加熱 | 8. 計3時間加熱 | 9. 計2時間加熱 |

焼成実験に用いた資料

焼成実験について

木村 哲朗

はじめに

ユカンボシE 4 遺跡では、焼けた方割礫が多量に出土している。本論は、その形成過程を確認するために行った遺物の焼成及び焼土の形成実験の結果報告である。

1 実験の方法

焼土形成実験は、ユカンボシE 5 遺跡の発掘調査跡地を利用し2カ所で行った。始めに行った地点をa地点で、後で行った地点をb地点とする。

a地点 黒色土(Ⅱ層)と黄褐色土(Ⅲ層)における焼土形成の違いを観察するために、黒色土層の残る発掘区の杭跡と、その横の完掘部分を使用した。遺物は、黄褐色土の5cm下に土器片、黒曜石・頁岩の剥片各1点を埋め、黒色土と黄褐色土の3cm下には、それぞれ土器片、礫、黒曜石・頁岩の剥片各1点を埋めた。また、黒色土層の表面に土器片、礫、黒曜石・メノウの剥片各1点、頁岩の剥片3点を置き、その状態で一週間放置した。

実験は、市販の薪と現場で伐採されて放置されていた木を用い、一週間おきに1回目は1時間、2回目は2時間(計3時間)、3回目は3時間(計6時間)火を燃やした。なお、実験の間はシートを掛けて形成された焼土を保存した。それぞれの実験中は、灰や澳を取り除かず堆積するに任せ、実験終了後に取り除いた。土中に埋めた遺物は、2回目の実験直後に黒色土下3cmのものを開けてみた以外は終了まで放置した。

b地点 遺跡完掘後の黄褐色土(Ⅲ層)上で行った。遺物は土器片3点、黒曜石剥片5点、礫3点で、全て表面に置き、直ぐに火を焚いた。なお、礫については実験前に水洗いをし、十分に乾燥する以前に実験に使用している。実験時間は2時間の焼成1回で、実験中も灰や澳を小まめに取り除き、薪の組み方も通気性を考慮して行った。

2 実験結果

1) 焼土の形成

両地点とも、焼土のいわゆる赤褐色色土は周辺にドーナツ状に分布し、中心部は灰色化していた。これは赤褐色土化する土層が酸素を消費し、中央部は酸欠状態で加熱されるために形成されたものと思われる。a地点では、この灰色土層は実験の回を重ねる毎に広がっていった。また、赤褐色土層と灰色土層の下に真っ黒な層が形成され、回を重ねる毎に厚くなった。これは土が“いぶされる”状態になったために形成されるものであろうか。なお、この黒色土層を含め形成された焼土の厚さは、a地点の1回目で0.5cm、2回目で1cm、3回目で3cmであり、b地点では0.5~0.7cmである。

2) 土器の受熱

a地点の表面上のものは、1回目の実験でやや赤化したものの、2回目・3回目の実験では灰色に変化してしまった。これは表面の土層同様酸欠状態で加熱されたために変化したものである。なお、3回目の実験では新たに土器片1点加えているが同様に灰色化した(写真1)。黒色土下3cmの土器片は3回目で黒色に変化した。これは焼土層下部に形成された真っ黒な層の影響を受けたものと思

われる。黄褐色土下3 cm・5 cm土器片はともに外見上の変化はない。

b地点の土器片3点は、全て鮮やかな赤褐色に変化した(写真2)。

3) 礫の受熱

a地点の表面に置いたものは、土器片同様1回目で赤褐色に変化したものの、2・3回目では灰色に変化した(写真3)。黒色土下3 cmのものも、土器片同様3回目で黒色に変化した。黄褐色土下3 cmのものは外見上の変化はない。

b地点の1点は、わずかに赤褐色化し表面にヒビが入るに止まったが、残る2点は砕け、その破片の幾つかは赤褐色に、幾つかは灰色に変化した(写真4)。a地点との差は、水洗いにより湿気を含んでいたのが原因と思われる。

4) 黒曜石の受熱

a地点では2回目の実験後、上に置いたものの表面が少し溶け、灰や土粒が付着した(写真8)が、黒曜石特有の光沢は失われていない。埋めたものには何等の変化も認められなかった。

b地点では、5点のうち1点が白濁して膨張し“カキモチ状”になったが、残る4点には外見上の変化は起きなかった。

5) 頁岩の受熱

表面に置いた3点のうち、黒灰色と赤褐色を呈するものが1回目の実験で砕けた(写真5は黒灰色を呈する頁岩の2回目終了後)。これに対し、珪化木の可能性のある縞頁岩は2回の実験でも変化はなく(3回目の実験後にはみつからなかった)、この実験からも一般的な頁岩とは異なる様相を示している。黒色土下3 cmに埋めた黒灰色のものは、2回目の実験後3つに割れていた。色調は、赤褐色のものがやや黒ずんだほかは外見に変化はない。

6) メノウの受熱

1回目で直接熱を受けた部分が白濁し大きくヒビが入り、2回目で全体が白濁し砕けた(写真6)。頁岩と違い破片はかなり脆くなっている。

3 まとめ

まず焼土形成で注目すべきは、中央部に灰色土層、その周囲にリング状の赤褐色土層、それらの下に真っ黒な土層が形成される点である。

遺物の変化で注目されるのは、それぞれの素材による反応の差異である。土器片や礫は焼土層の色調に同調するような変化の傾向がみられるが、剥片類は焼土層の色調と無関係に、それぞれの化学的特性に基づく変化を示すといえよう。また、乾燥状態では6時間の焼成後も域町の変化しかみられなかった礫が、湿気を含ませることによって2時間で砕けた点は、焼けた方割礫の形成問題に一つの示唆を与えるものであろう。

今後は本実験の成果を基に、以前筆者が述べた「焼土とそこに検出される遺物との特異な関係」(「西野幌12遺跡の焼土について」『北海道考古学第27輯』1991)について更に考えてみたい。

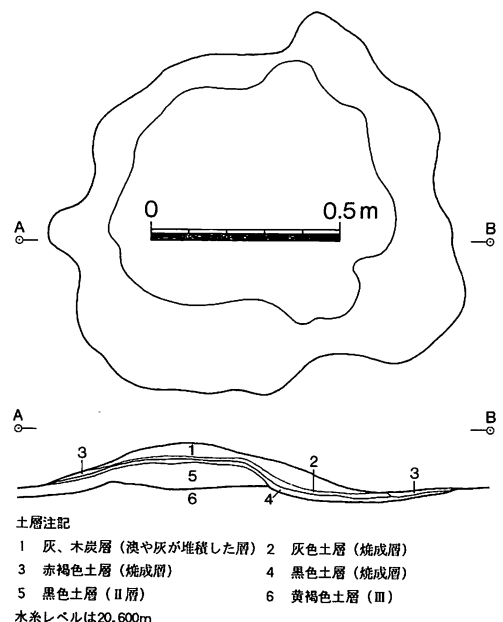


図 a地点の焼土の広がり

ユカンボシE4 遺跡出土の植物遺体

吉崎 昌一（北海道大学）

(1) 遺跡の性格ほか

ユカンボシE4 遺跡は、北海道恵庭市戸磯401-24ほかに広がるユカンボシ川沿右岸の段丘上の遺跡である。この地域では、一般国道36号線恵庭バイパス建設工事及びユカンボシ川の改修工事が実施されるが、それに先立って北海道埋蔵文化財センターの手で工事範囲にかかる遺跡の一部が発掘調査された。調査は平成3年5月7日から同年8月10日かけておこなわれ、発掘された総面積は4,370㎡。出土した遺物から見ると、縄文時代早期から擦文時代にかけての各時期のものが断続的に検出されている。発掘区で確認された遺構には土壌、落し穴、焼土、竪穴様遺構などがある。このうち竪穴様遺構は擦文時代のものが1基確認されているのみである。また、柱穴だけの平地住居らしき痕跡は、ごく近世の開拓期のものであるという。

(2) 出土した植物種子

遺跡の保存状態の関係であろうか、炭化植物種子の出土数はきわめて少ない。縄文時代早期から後期にかけての層準からは、クルミを除き分類の明確でない不明種子がわずかに5粒、擦文時代の層準からはマメ科の種子が2粒、ブドウ属種子破片が1点、不明種子が4粒出土しているにすぎない。そのほかにも種子状のものが出土しているが、後述するように植物種子ではなく菌核であった。以上の種子の出土層準、サンプル土壌の採取区、遺構名などは表に示し、さらに若干の説明を加えておきたい。

クルミ属 *Juglans* L. 図版 1 No. 5

クルミ内果皮片が縄文時代の各層準から断片的に出土している。炭化した細片ばかりで、あきらかに人間が破碎した状況が読み取れるが、とくに集中して出土してはいない。擦文時代の層準からは発見されていないが、この出土状態に意味があるかどうかははっきりしない。

マメ科 *Leguminosae* 図版 1 No.1a~1b

No.1aに示した資料は長さ1.4mm、幅1.4mm、ややつぶれた球形で中央にヘソがある。加熱によって変形している可能性がある。1bはヘソ部分の拡大。我々の調べたいいくつかの遺跡においてよく見られるタイプで、何らかの形で人間が意図的に関与していたとも思われるが、詳細は不明である。今後の出土例の増加と現生資料の確定を待ちたい。

不明種子 図版 1 No.2a~2b

図示した資料は長さ1.5mm、幅1.25mm、ほぼ球形で表面に入り組んだ細かなしわが見られる。このタイプの種子もよく見られるものであるが、どの植物であるのか判断しかねている。ユカンボシE4ではTピット4及び5から5個出土している。

菌核 図版 1 No.3a~3b

表面が滑たくでほとんど構造を持たない球形の資料である。最初これが何であるか分からなかったが、北海道大学農学部五十嵐恒夫教授の教示によって菌核であることが確定した。資料によってはどの種類であるか判明する可能性があるというが、その生成が遺跡を残した人間と同時間であるとは言えない。いまのところ、時間と余り関係しない環境指標のデータとして利用できるかもしれないと考えている。

ブドウ属 *Vitis* L. 図版 1 No.4

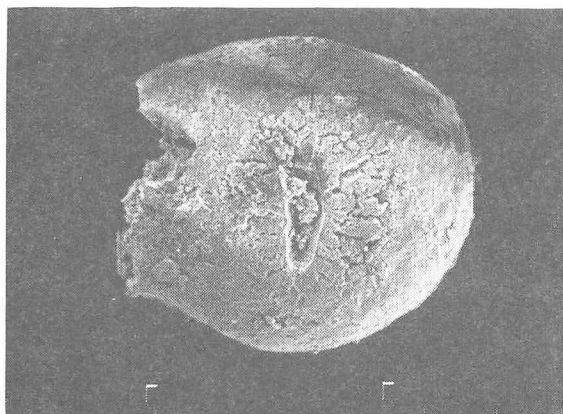
図示したようなブドウ属種子の破片が地床炉FP-28から1個発見されている。この仲間にはエビツルとヤマブドウがあるがそのどちらとも言えない。

(3) 考察

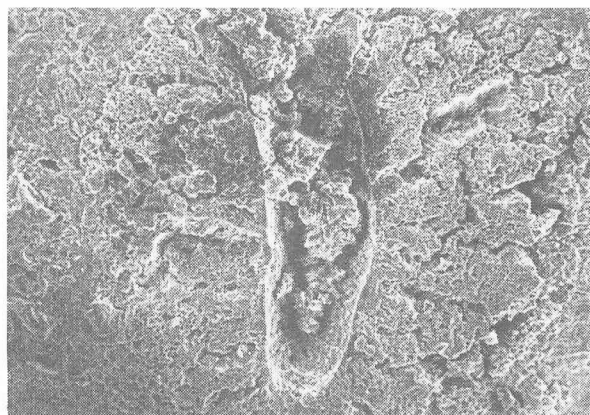
この遺跡の植物種子の出土量は、これまでに我々が関係調査した北海道内の遺跡としては例外的に検出数が少ない。調査者によれば、縄文時代早期の層準においては各種の礫を割ったものが大量に出土し、その分布が焼土と関係している可能性が見られたという。また、擦文時代の竪穴様遺構は居住の痕跡が認められなかったとのことである。縄文時代については若干の問題は残るにせよ、擦文時代の遺構、とくに竪穴居住を中心とする集落においては、これまでの他遺跡の発掘結果を見るかぎり雑穀種子の出現頻度がかかなり高いのが普通である。しかしながら、この地点からは雑穀種子が検出できなかった。このような植物遺体のあり方から考えて、ユカンボシE4遺跡が通常の集落の一部でなく、多分にセレモニアルな地点ではなかったか、ということ推定させるのではないかと思う。アイヌ民俗例でも、集落から若干離れた地点にある種の送り場（祭祀的な物送り場）のあることが知られている。そうした特異な場が石器時代以来のいろいろな伝統の中に存在していたとしても不思議ではないだろう。明確な竪穴住居などの遺構を持たず、さらに出土遺物の傾向に偏りが認められるようなケースについては、今後の事例を待って再検討する必要があると考える。

1991年度 恵庭市ユカンボシE4 遺跡出土炭化植物遺体一覧表

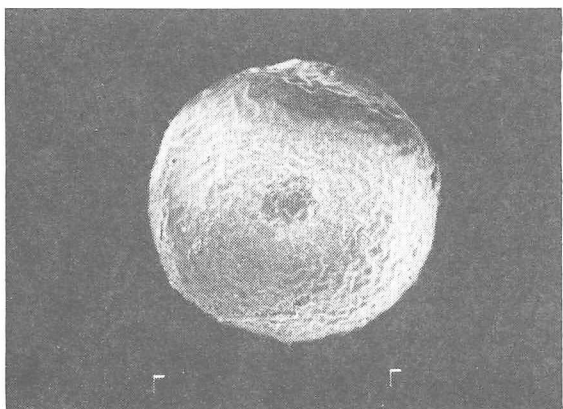
時 期	遺構名	サンプル採取区	クルミ属(g)	マメ科(粒)	ブドウ属片(粒)	不明種子(粒)
縄文早・前期	FP 2	1・ 5-46	>0.01			
縄文早・前期	FP 6	3・ 5-35、 36	>0.01			
縄文早・前期	FP 10	4・ 8-20、 30	>0.01			
縄文中・後期	FP 20	4・ 6-35、 36	>0.01			
縄文中・後期	FP 32	2・ 0-46、 47				1
縄文中・後期	TP 4	3・ 7-11、 21				2
縄文中・後期	TP 5	2・ 9-81、 91				3
擦文早期	竪穴焼土1	1・ 6-05、 15		2		2
擦文早期	竪穴焼土2	1・ 6-24				1
擦文以降	FP 45	1・ 7-15、 25			1	
計			>0.01	2	1	9



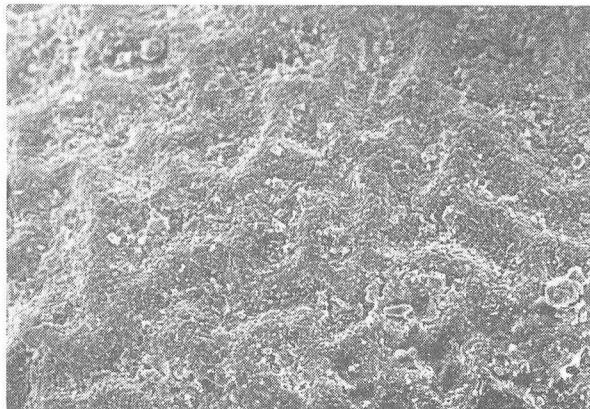
1a マメ科?



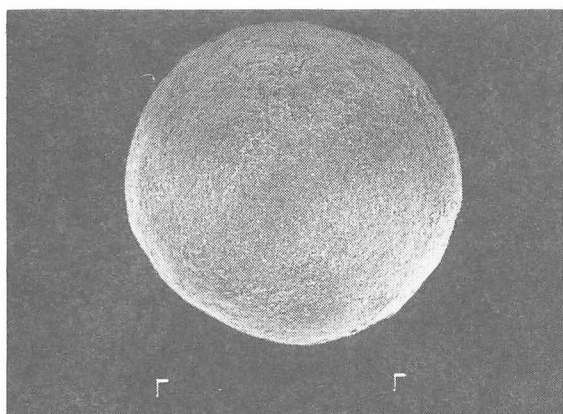
1b 1aの拡大 約100倍



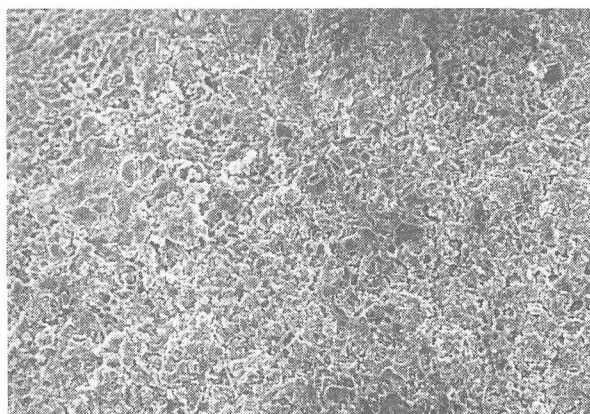
2a 不明種子



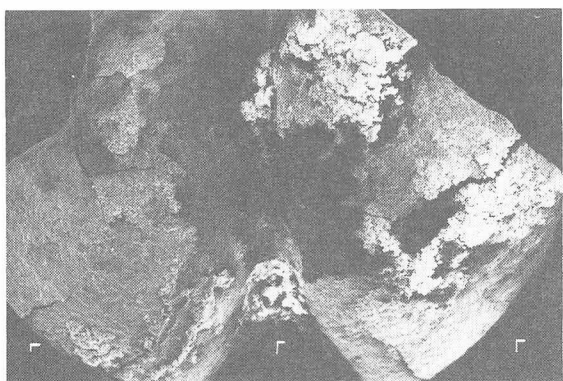
2b 2aの拡大 約150倍



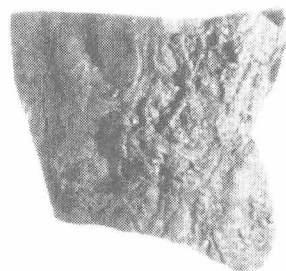
3a 菌核



3b 3aの拡大 約200倍



4 ブドウ属



クルミ属内果皮片

スケール「」の間隔 1.0mm

引用・参考文献

- 鮑津博史 1977「方割石」『WakkaoiⅢ 4. 4. 6』
 阿部朝衛 1983「バイポーラーテクニックの技術的有効性について」『考古学論叢Ⅰ』
 石附喜三男 1984「擦文式土器の編年的研究」『北海道の研究 2 考古篇Ⅱ』
 石附喜三男ほか 1977『ウサクマイ遺跡 N地点発掘報告書』
 上野秀一ほか 1987『K135遺跡』
 宇田川洋 校註 1981『河野常吉ノート 考古篇1』
 上屋真一 1991「擦文時代の石器」『南島松1遺跡 南島松4遺跡 第Ⅱ章 3. (2)』
 上屋真一ほか 1987『カリンバ2遺跡』
 上屋真一ほか 1989『ユカンボンE8遺跡』
 上屋真一ほか 1990『柏木川11遺跡』
 恵庭市教育委員会 1984『カリンバ2、カンリンバ3遺跡試掘調査報告書』
 大場利夫・石川徹 1967『千歳遺跡』
 大沼忠春 1989「初期擦文土器」『古代史復元9 古代の都と村』
 長見義三 1976『ちとせ地名散歩』
 角川書店 1987『角川日本地名大辞典 北海道』
 菊池徹夫ほか 1975『烏柵舞』
 木村哲朗 1991「西野幌12遺跡の焼土について」『北海道考古学第27輯』
 木村英明ほか 1981『柏木B遺跡』
 久保 泰 1983「第16群土器」『白坂 第4章Ⅲ 1』
 後藤秀彦ほか 1975『十勝太若月—第三次発掘調査—』
 古原敏弘 1985「中野台地A遺跡」『静内町清水丘における考古学的調査 第1章』
 高橋正勝 1971『柏木川』
 高橋正勝ほか 1982『萩ヶ岡』
 千歳市教育委員会 1984『末広遺跡における考古学的調査(続)』
 千歳市教育委員会 1988『ユカンボン2遺跡発掘調査概要報告』
 千歳市教育委員会 1989『イヨマイ6遺跡における考古学的調査(1)・(2)』
 千歳市教育委員会 1990『ユカンボン2遺跡発掘調査概要報告(2)』
 千歳市教育委員会 1991『ユカンボン3・5・6遺跡発掘調査概要報告』
 戸磯史編集発行委員会 1989『戸磯百年のあゆみ』
 北海道新聞社 1981『北海道大百科辞典』
 豊田宏良 1987「擦文土器にみる貼付圏続帯文様の分析」『溯航第5号』
 松浦武四郎 著、高倉新一郎 校訂、秋葉実 解説 1985『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌 中』
 松谷純一ほか 1989『中島松5遺跡A地点』
 松谷純一ほか 1990『中島松5遺跡B地点、中島松7遺跡C地点』
 松谷純一ほか 1988『中島松6・7遺跡』
 横山英介 1990『擦文文化』
 渡辺 茂 編著 1979『恵庭市史』



調査区の北側を流れるユカンボシ川 (W-E)



発掘風景 (S-N)



発掘風景 調査区南東部 (S-N)



発掘風景 調査区中央部 (S-N)



発掘風景 調査区北端部 (W—E)



発掘風景 調査区北西部 (NE—SW)



土壤 P 1 (W-E)



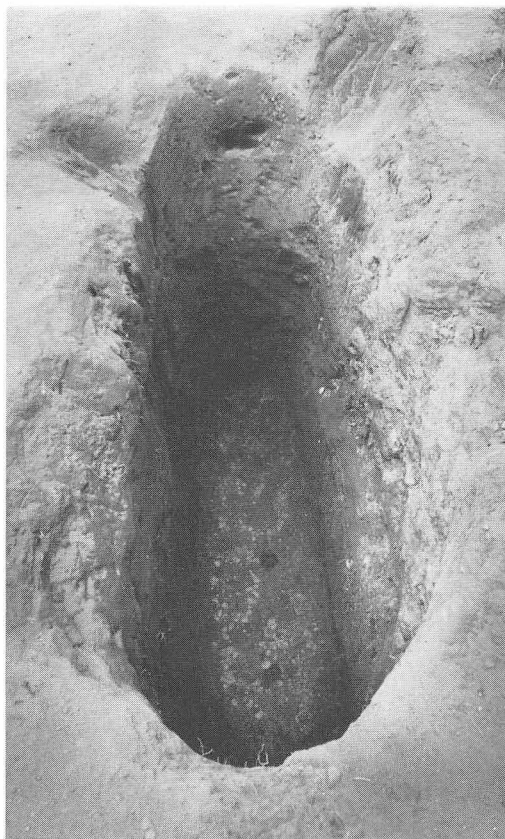
焼土 EP13・14と礫群



焼土 FP 8 の土層断面 (S-N)



縄文時代早期の土器出土状況 2 - 8 区 (E-W)



TP 1 (E-W)



TP 2 土层断面 (W-E)



TP 3 (N-S)



TP 4 (E-W)



TP 5 (E-W)



TP 5 土層断面 (E-W)



TP 6 (NE-SW)



TP 6の地割れ (NE-SW)



烧土 FP30 (S-N)



烧土 FP32 (S-N)



天神山式土器の出土状況 (W-E)



北筒式土器の出土状況 (W-E)



竪穴の確認状況 (SE-NW)



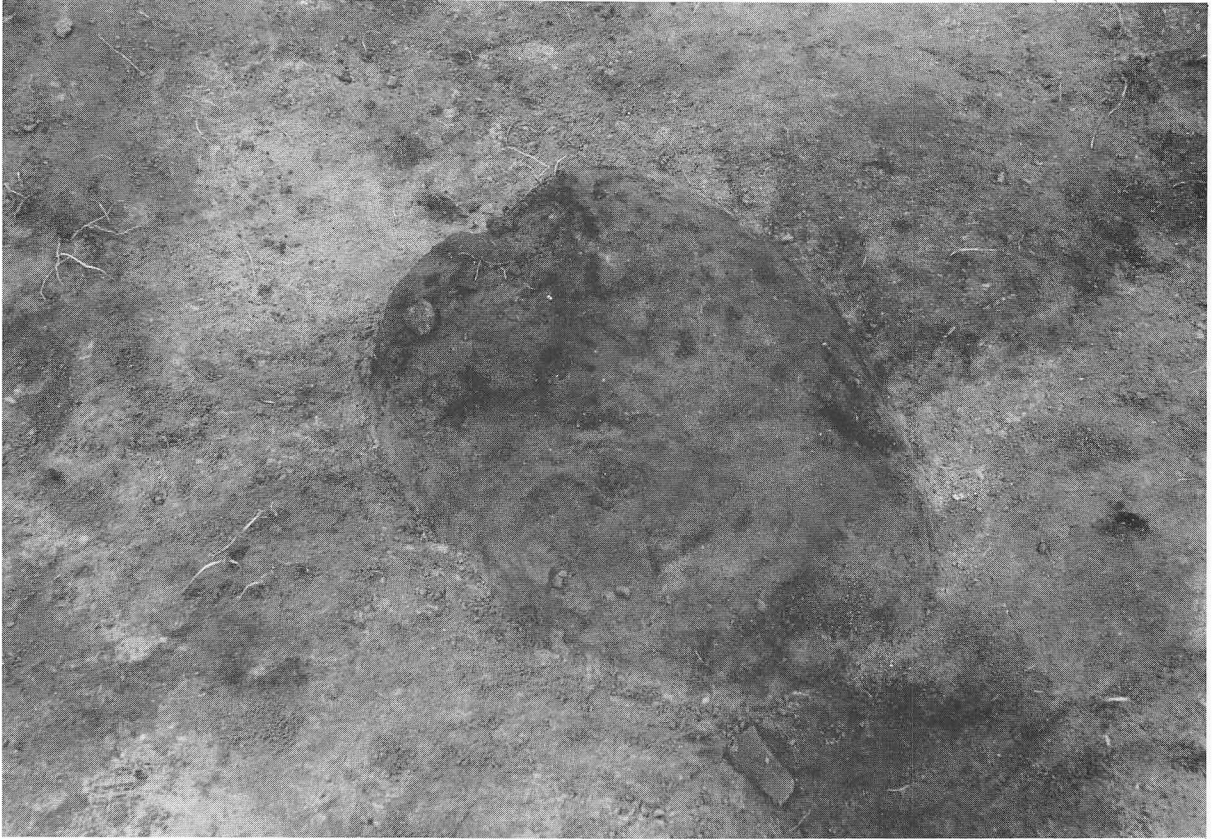
竪穴覆土上面の焼土調査状況 (SE-NW)



竪穴床面の土器出土状況 (W-E)



竪穴床面の焼土と土器出土状況 (N-S)



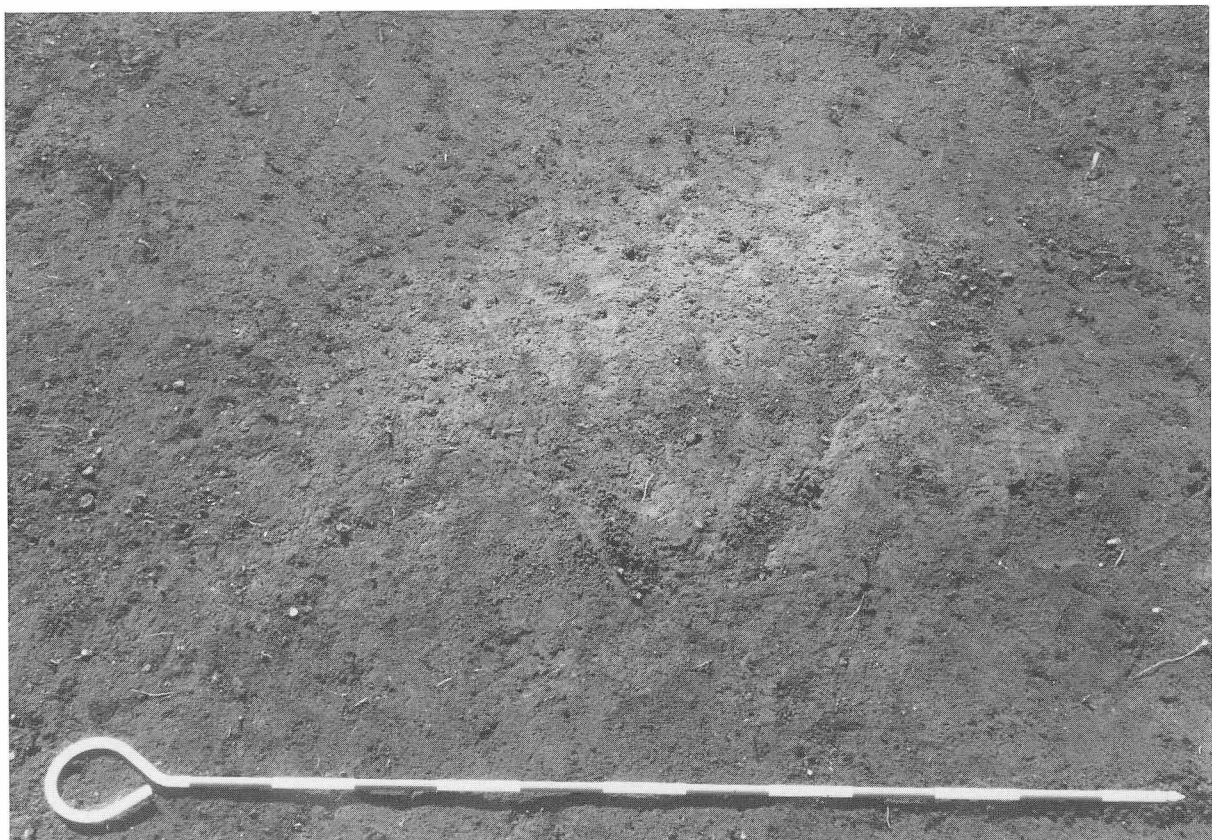
竪穴床面の焼土 (N-S)



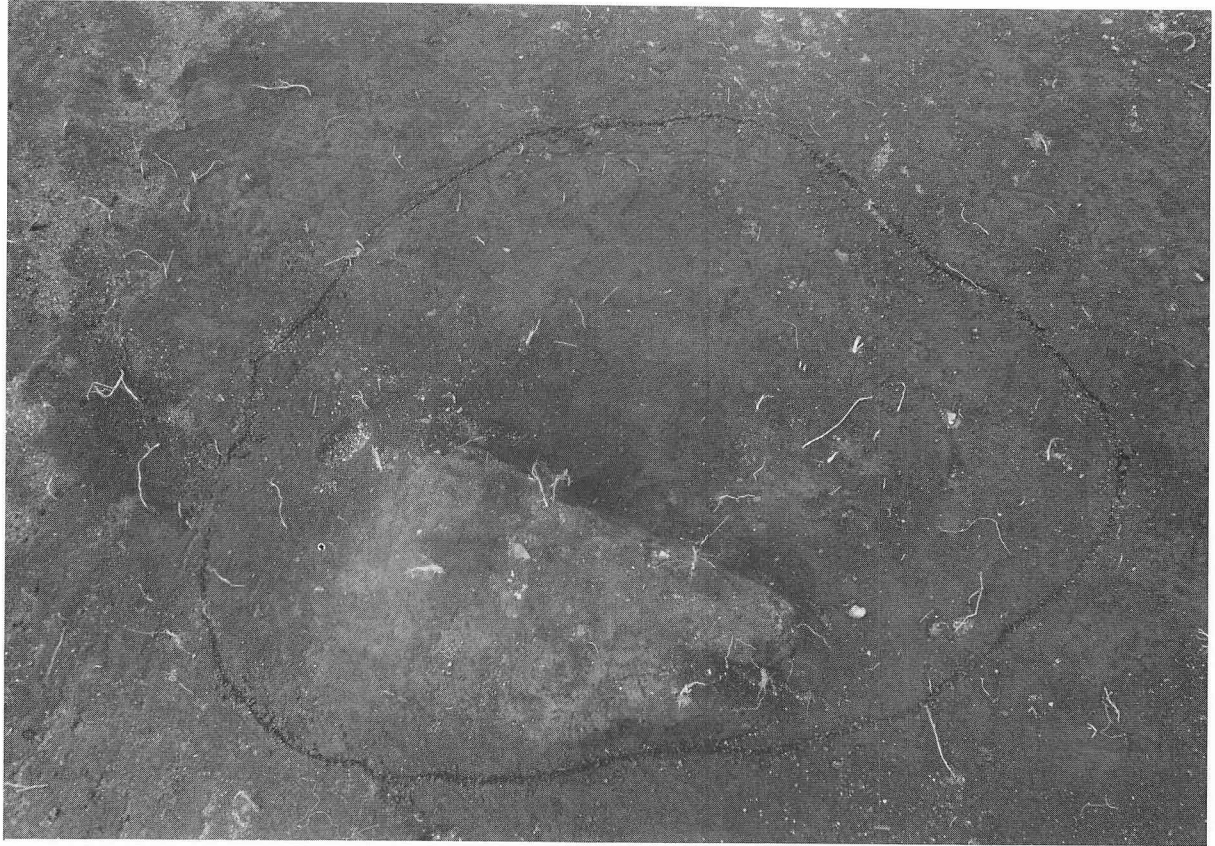
竪穴 (S-N)



竪穴床面の地割れ (E-W)



焼土 FP 35 (E-W)



焼土 FP36 (E-W)



擦文時代の土器と剥片類の出土状況 2・3区 (W-E)



擦文時代の土器と剥片類の出土状況 2・3区 (S-N)



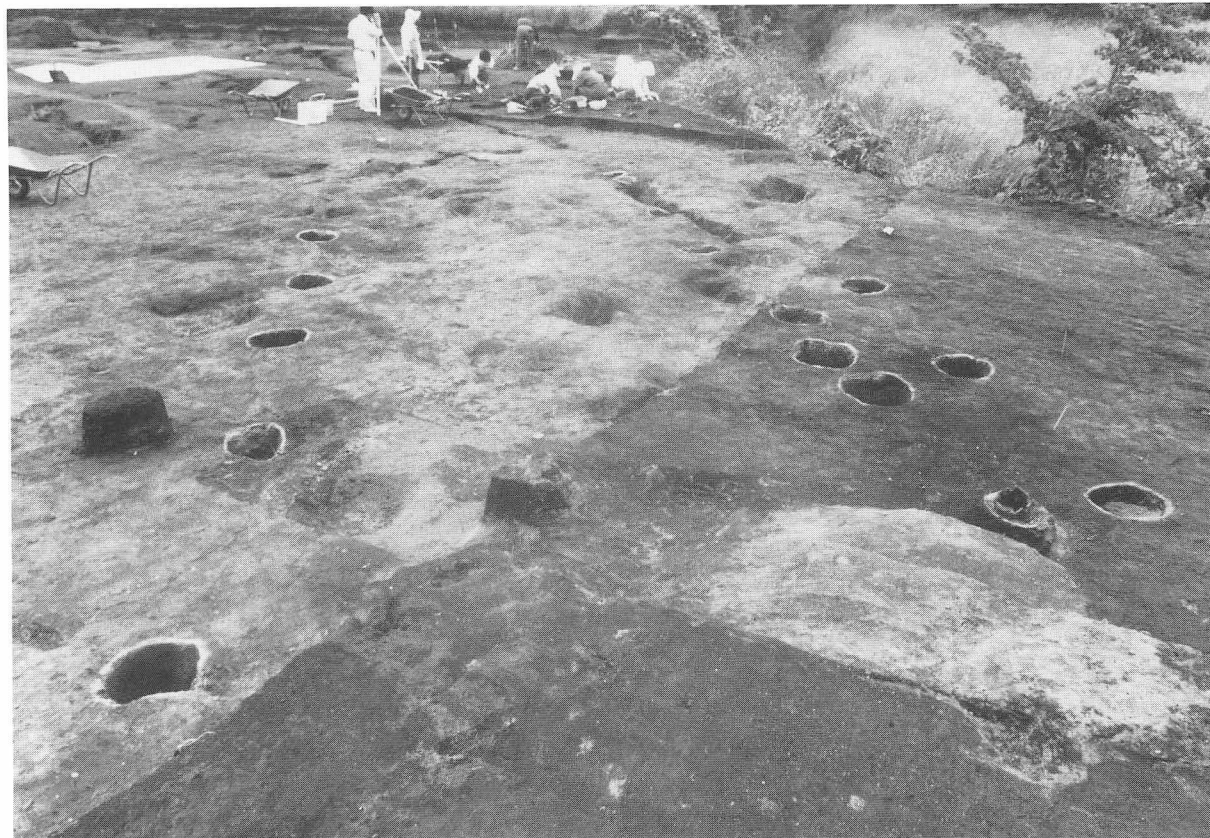
擦文時代の土器出土状況



擦文時代の土器出土状況



掘立柱建物跡 上流側 (S-N)



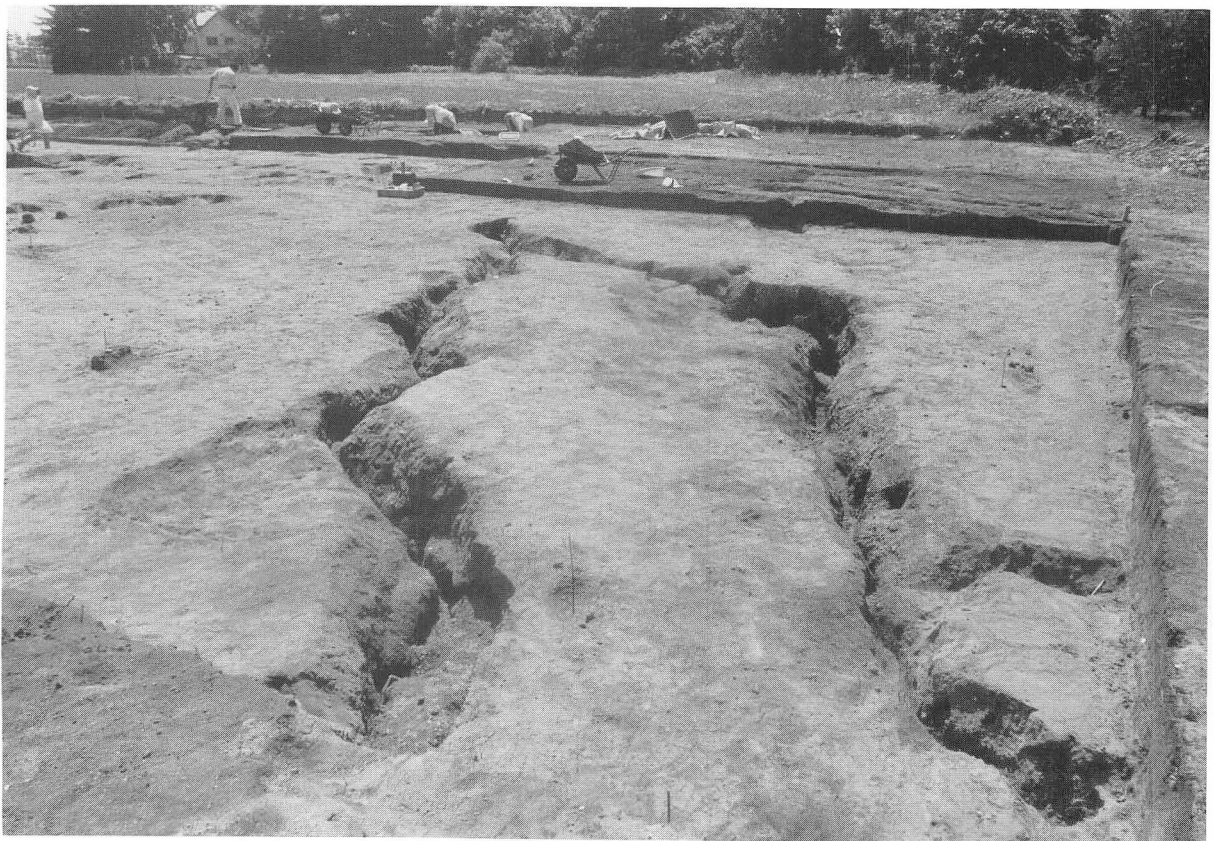
掘立柱建物跡 下流側 (NE-SW)



柱根 (N-S)



IV層以下の土層断面 2・9区 (S-N)



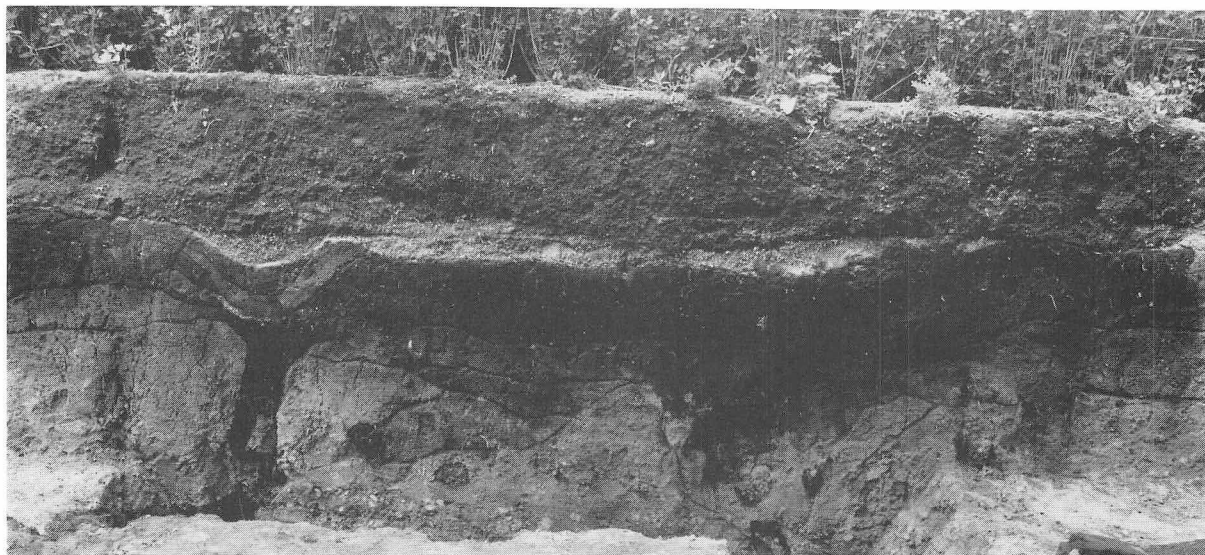
地割れ 2・7区 (E-W)



地割れ 調査区北端部 (SW-N E)



ユカンボシ川に沿って走る地割れ (S E-NW)



土層断面 0・6区 (E-W)

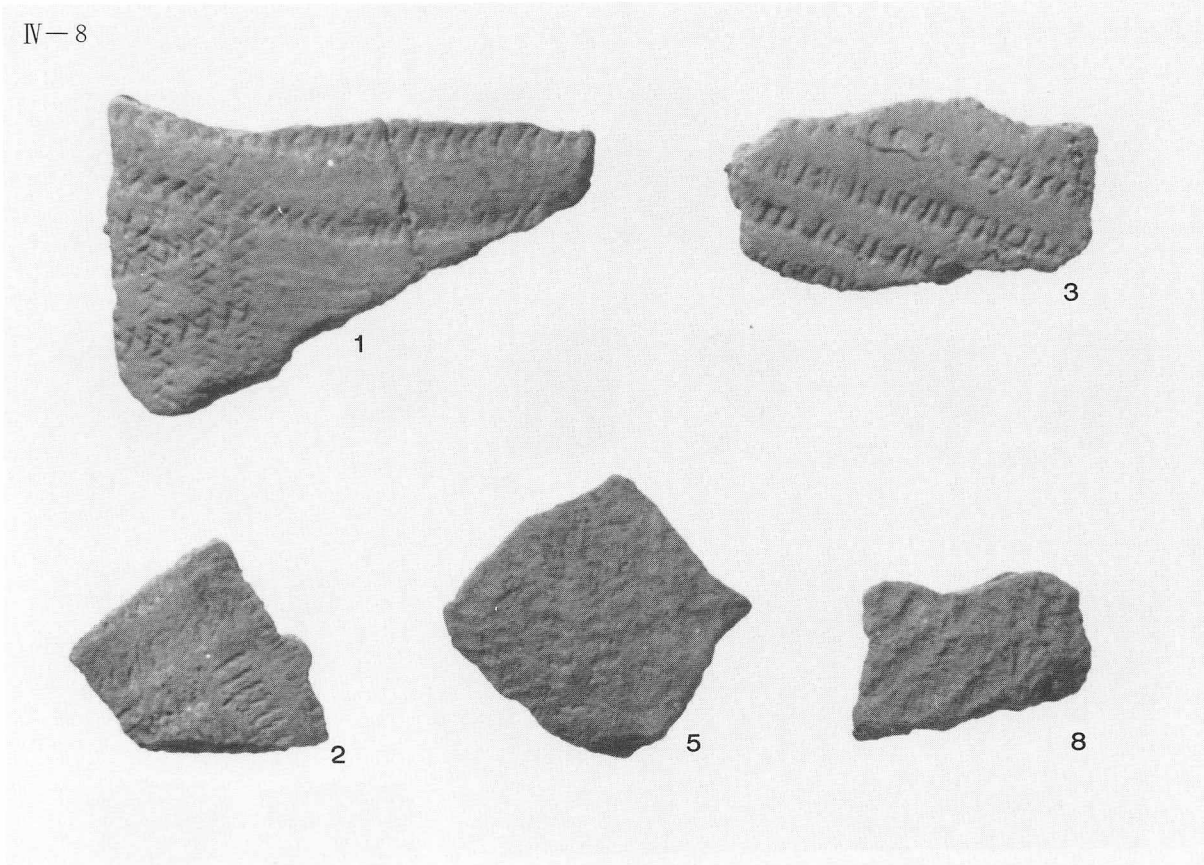


土層断面 0・7区 (E-W)



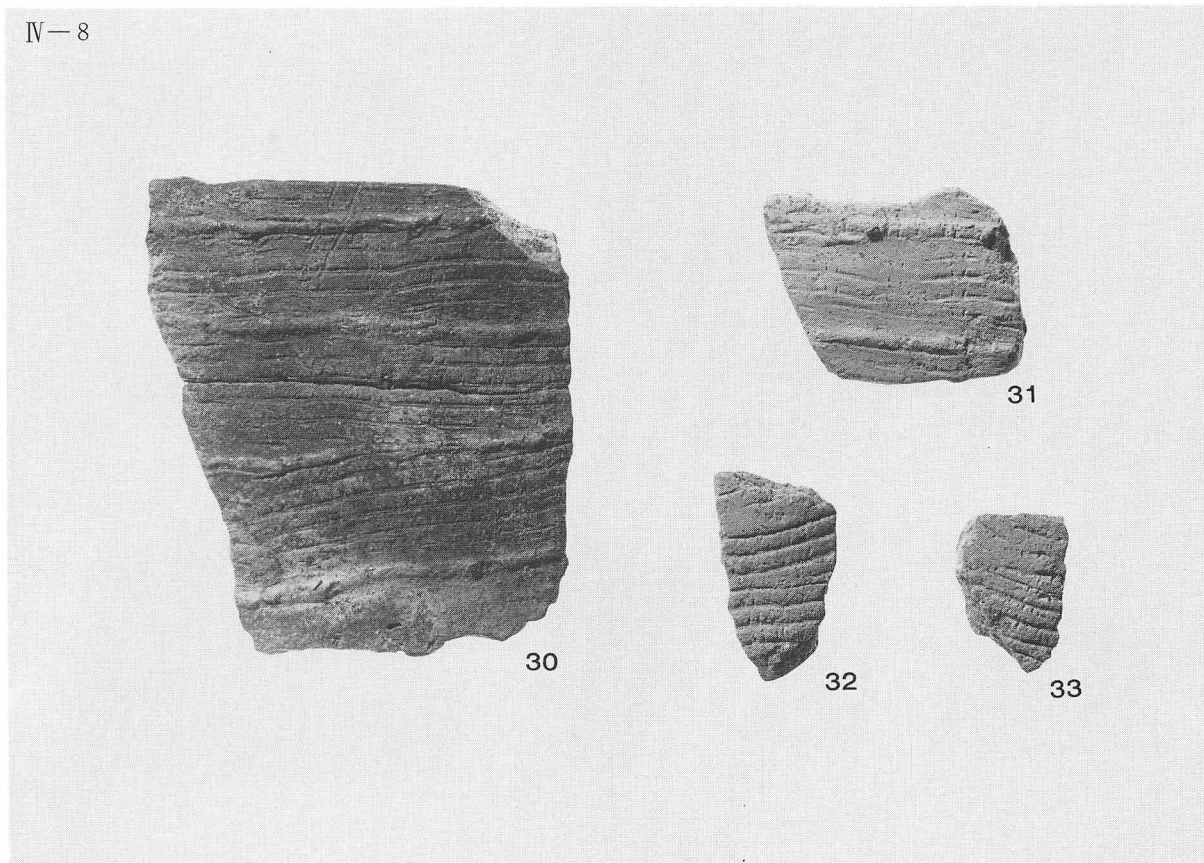
土層断面 5・10区 (W-E)

IV-8



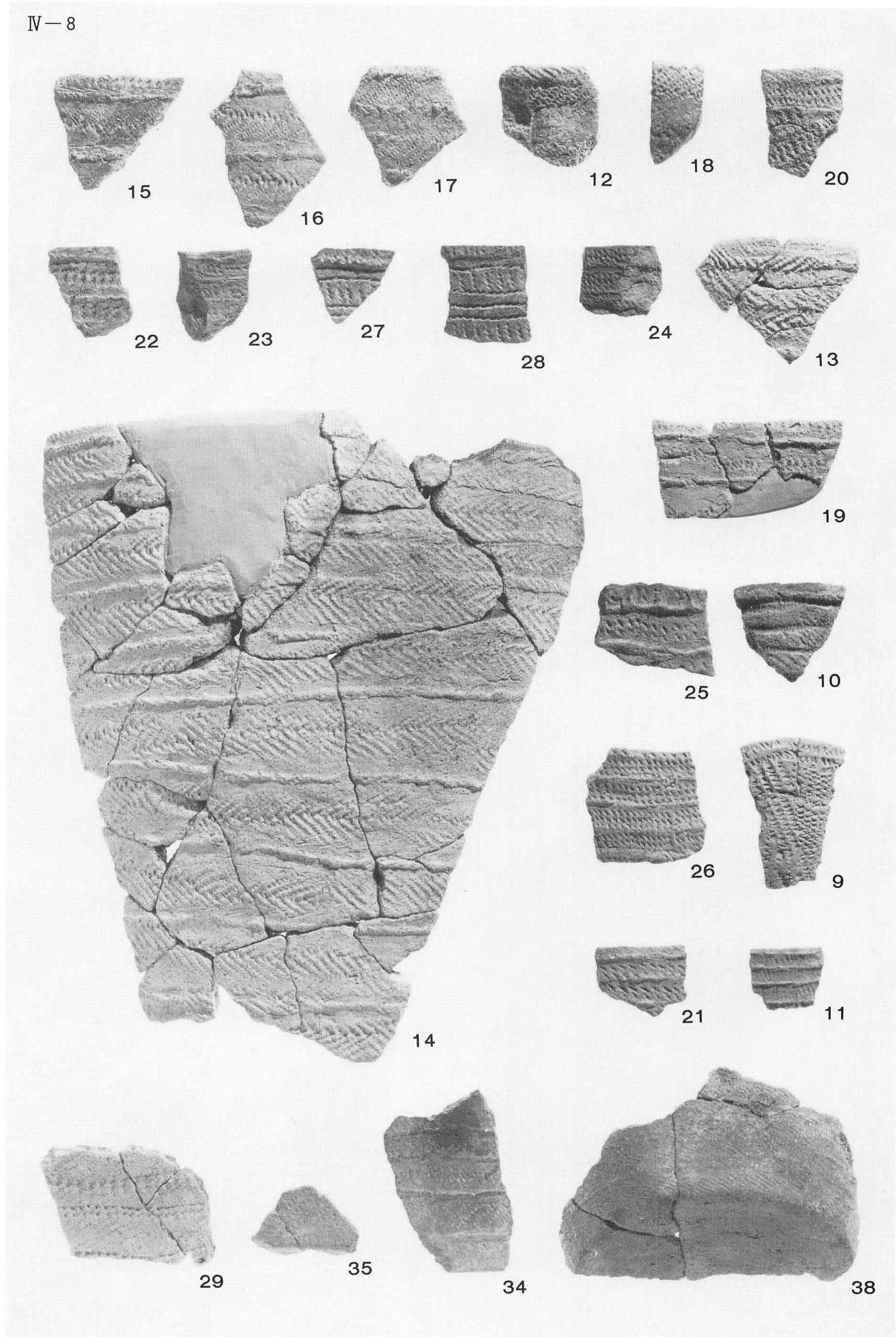
縄文時代早期 コツタロ式器

IV-8



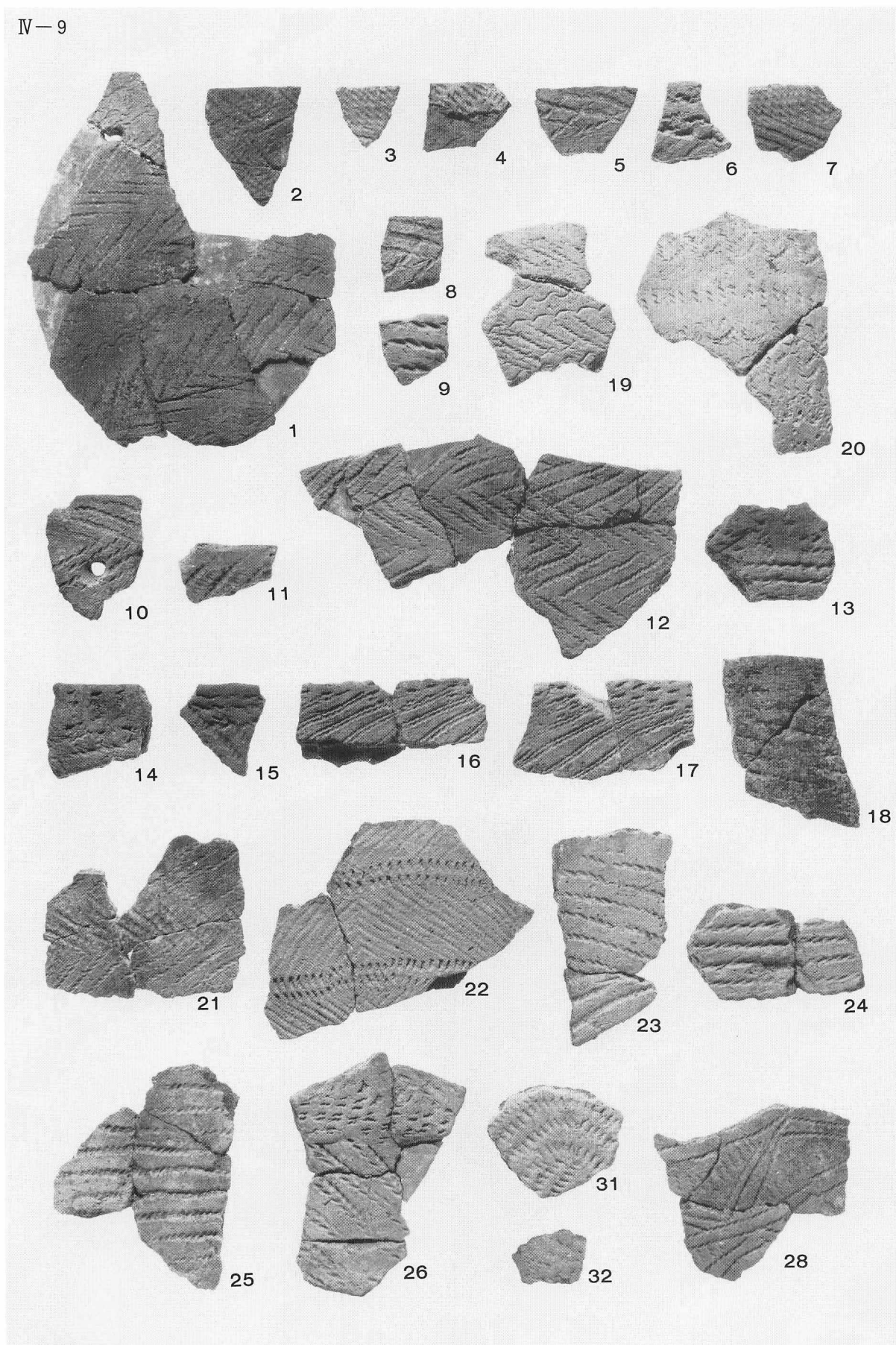
縄文時代早期 中茶路式の魚骨回転文土器

IV-8



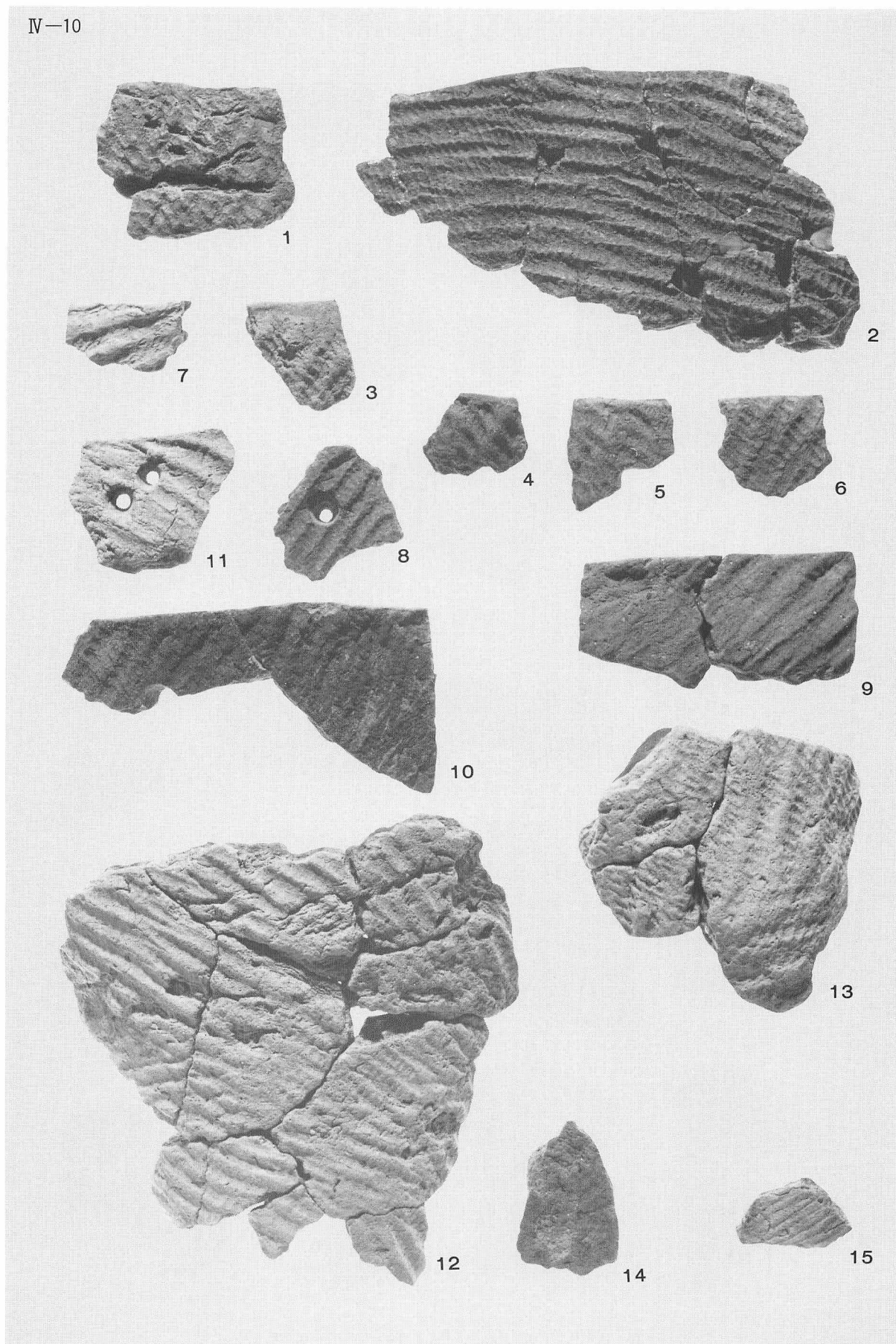
縄文時代早期 中茶路式土器

IV-9



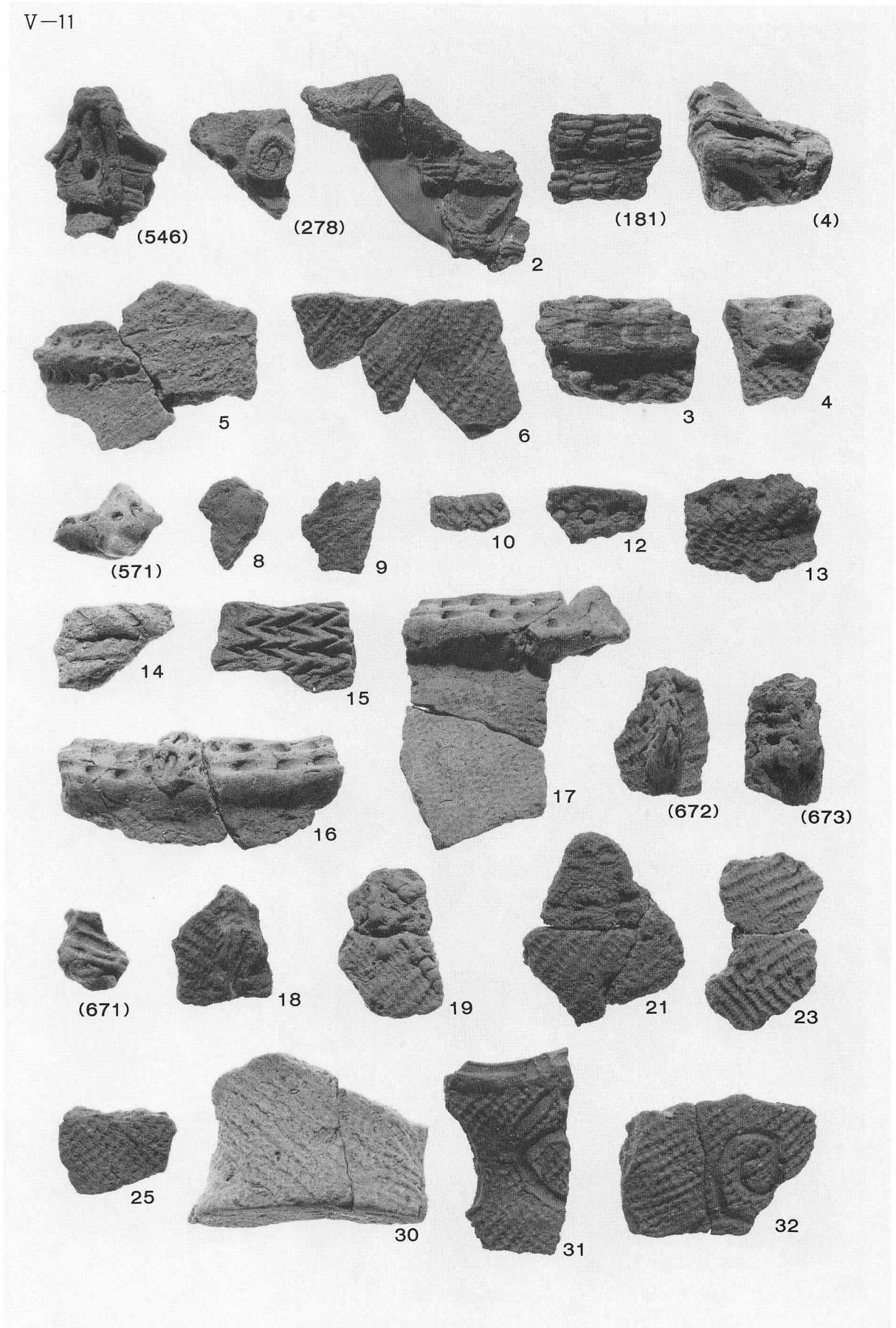
縄文時代早期 東釧路IV式器

IV—10



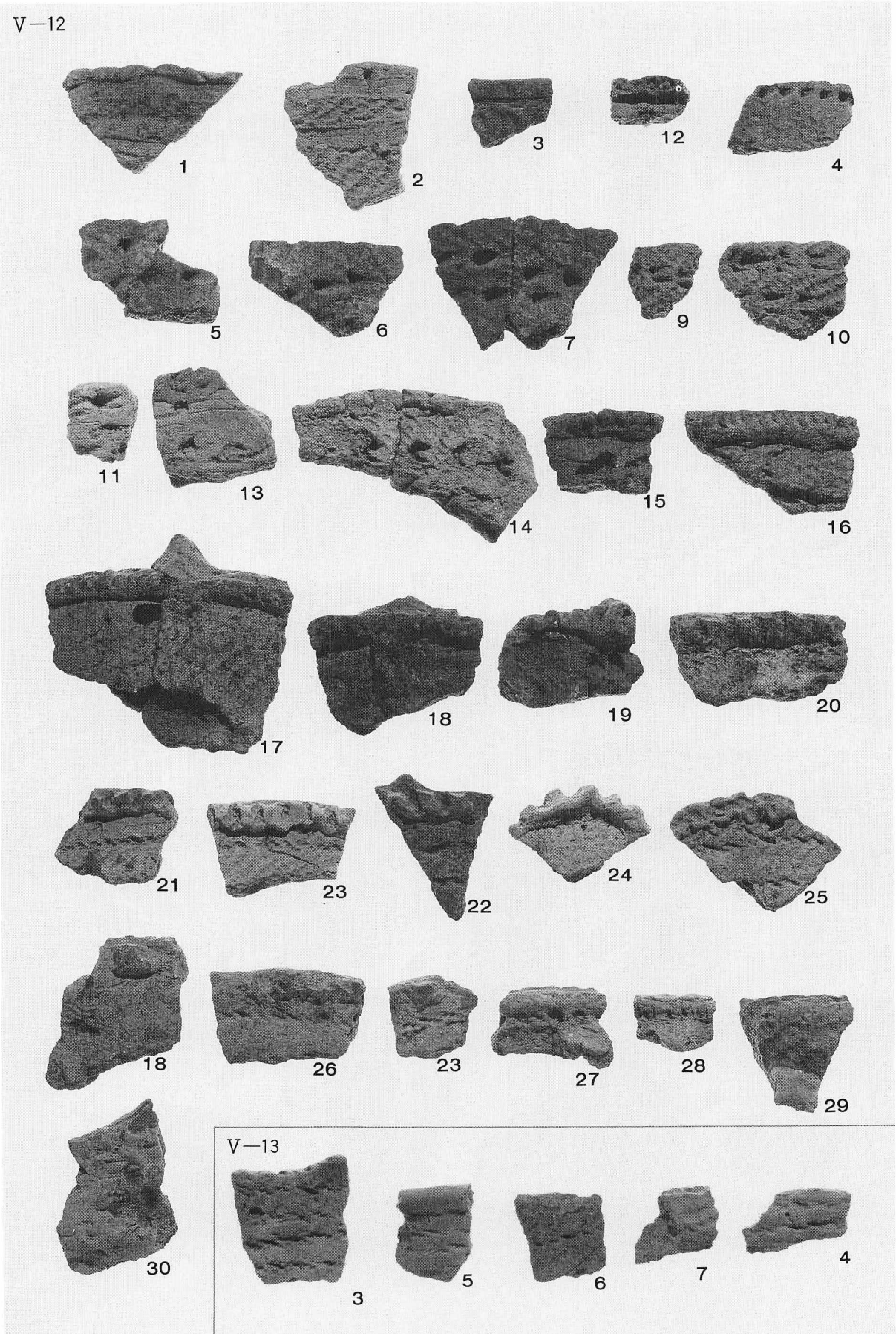
縄文時代前期 中野式土器

V-11



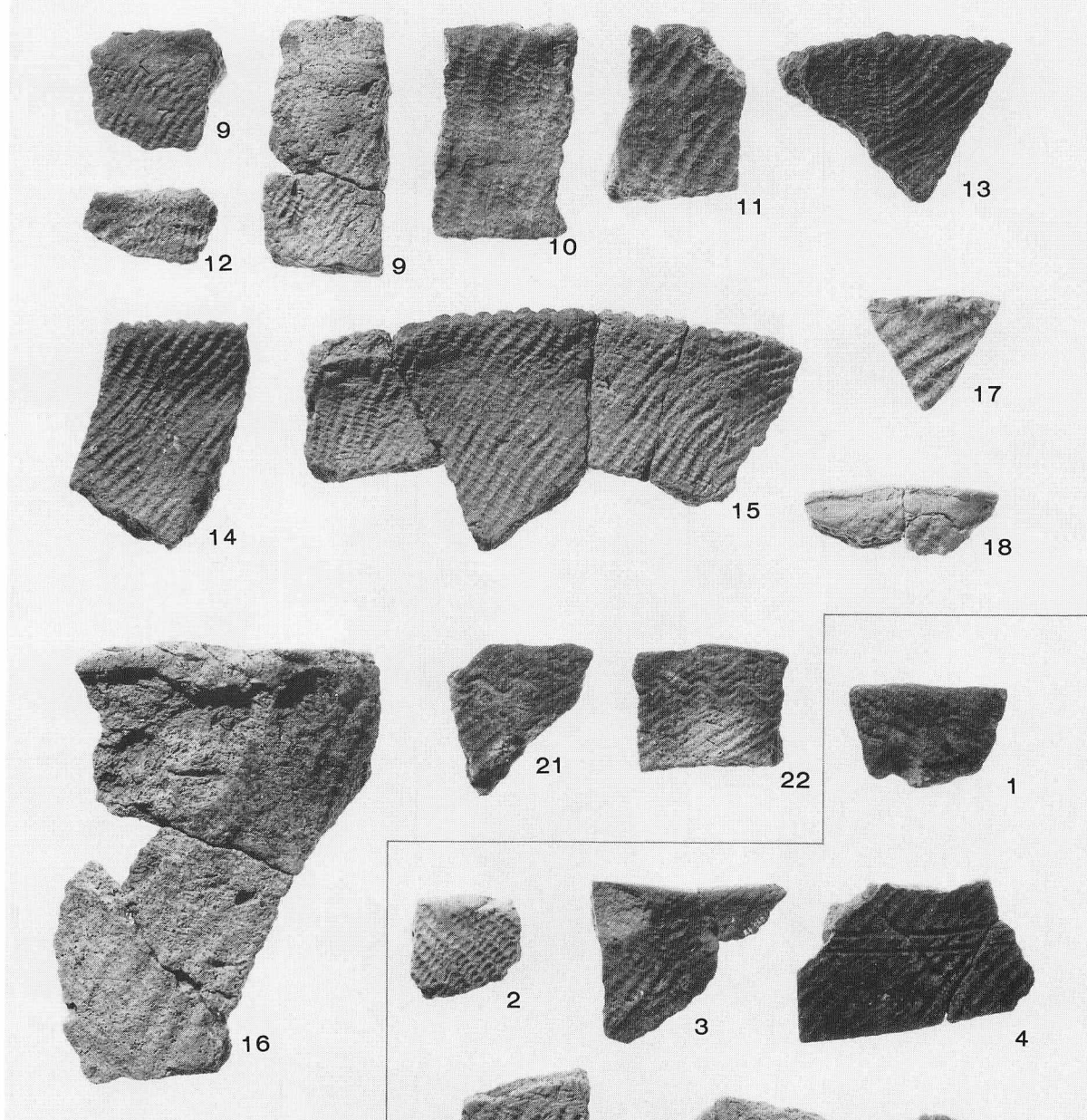
縄文時代中期 円筒土器上層式・天神山式・大木8式系土器

V-12

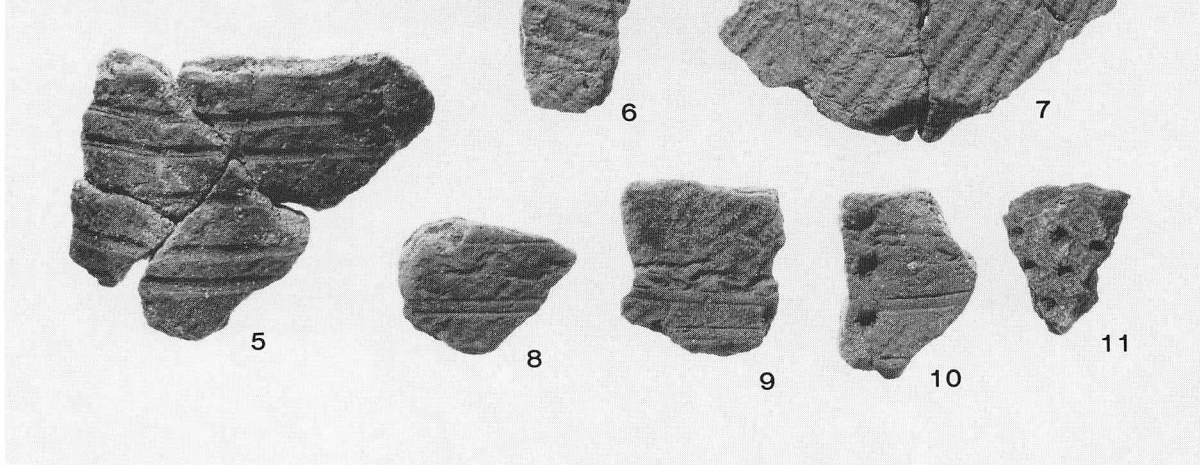


縄文時代中期 柏木川式土器

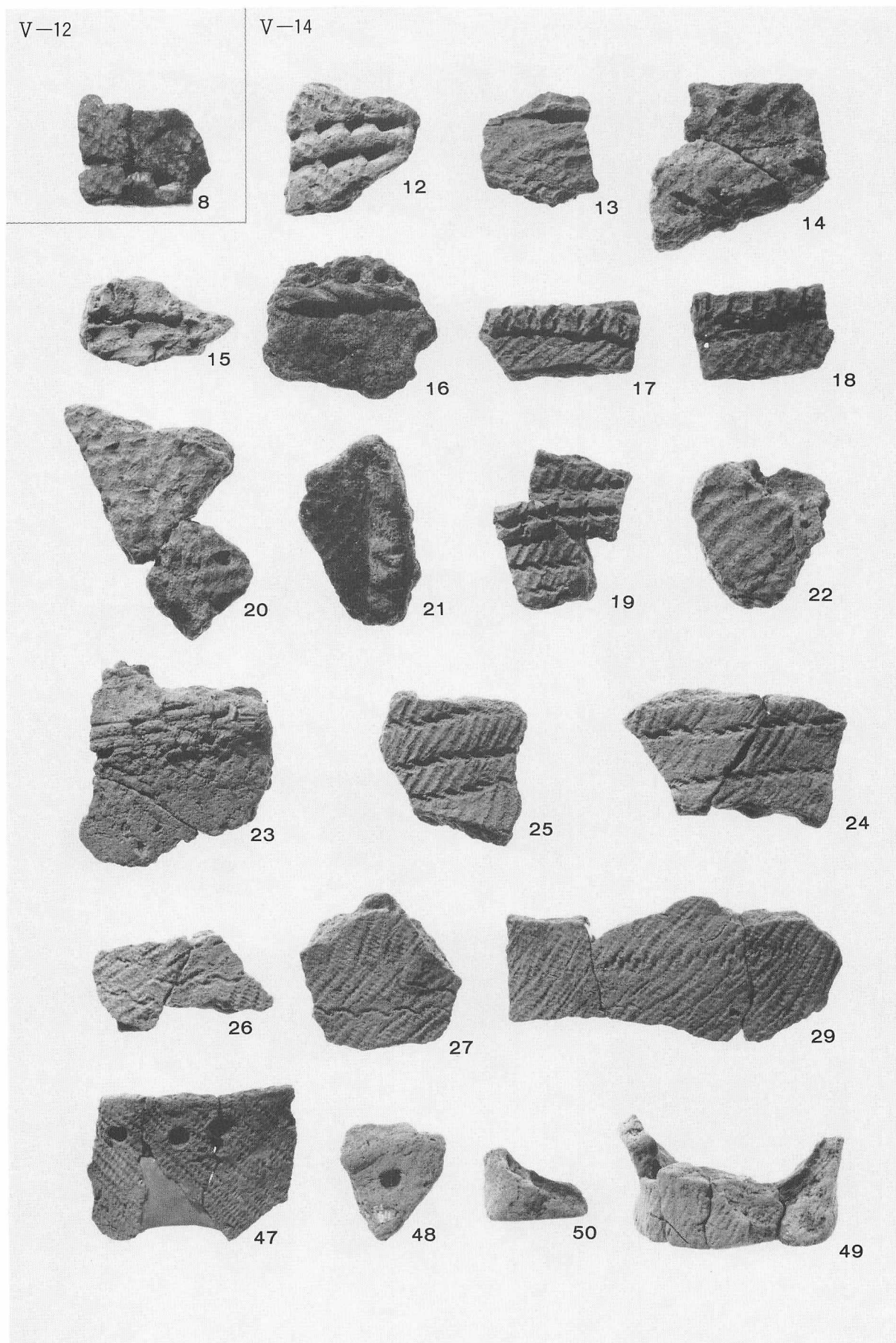
V-13



V-14

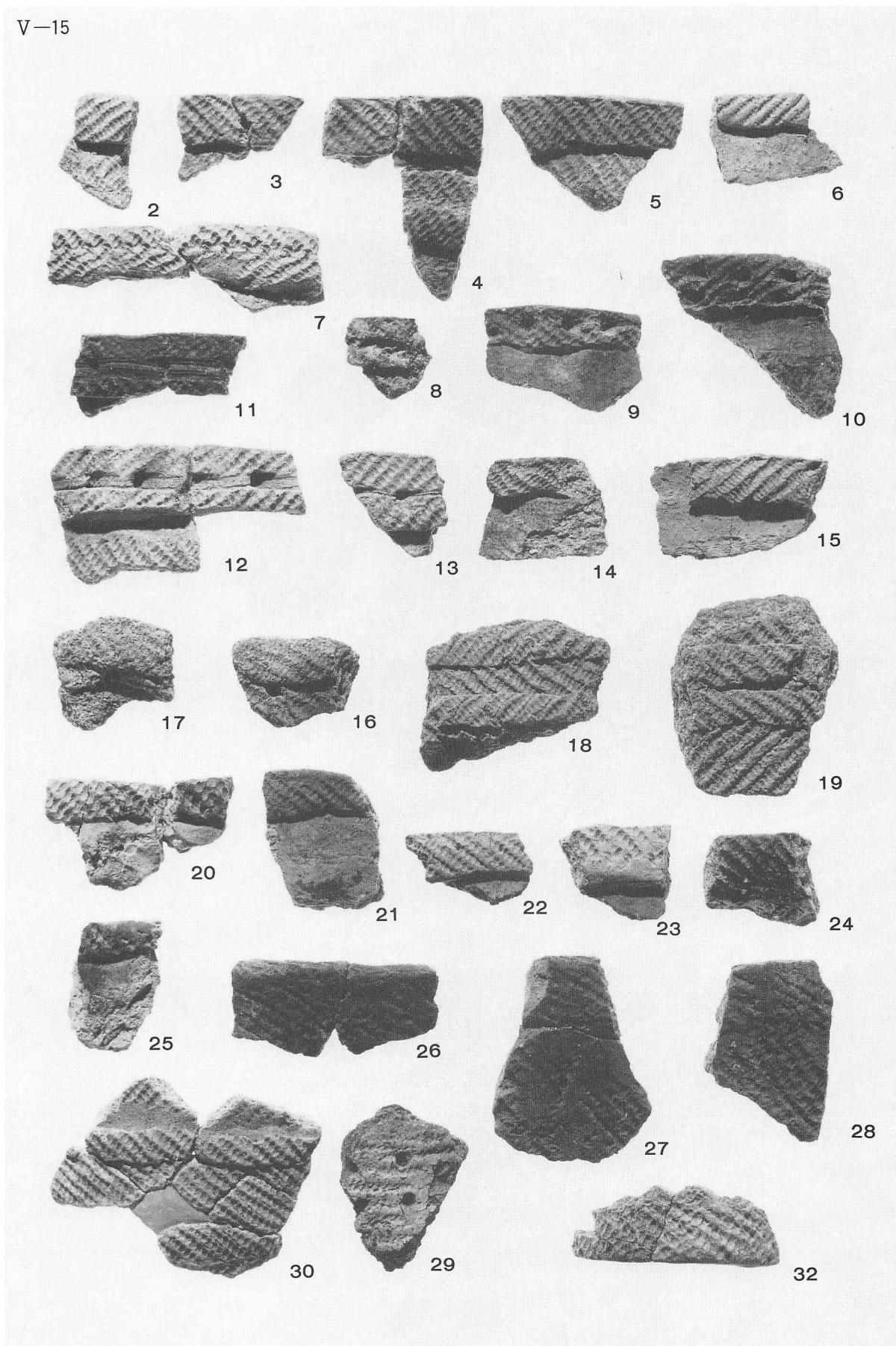


縄文時代中期 柏木川式土器



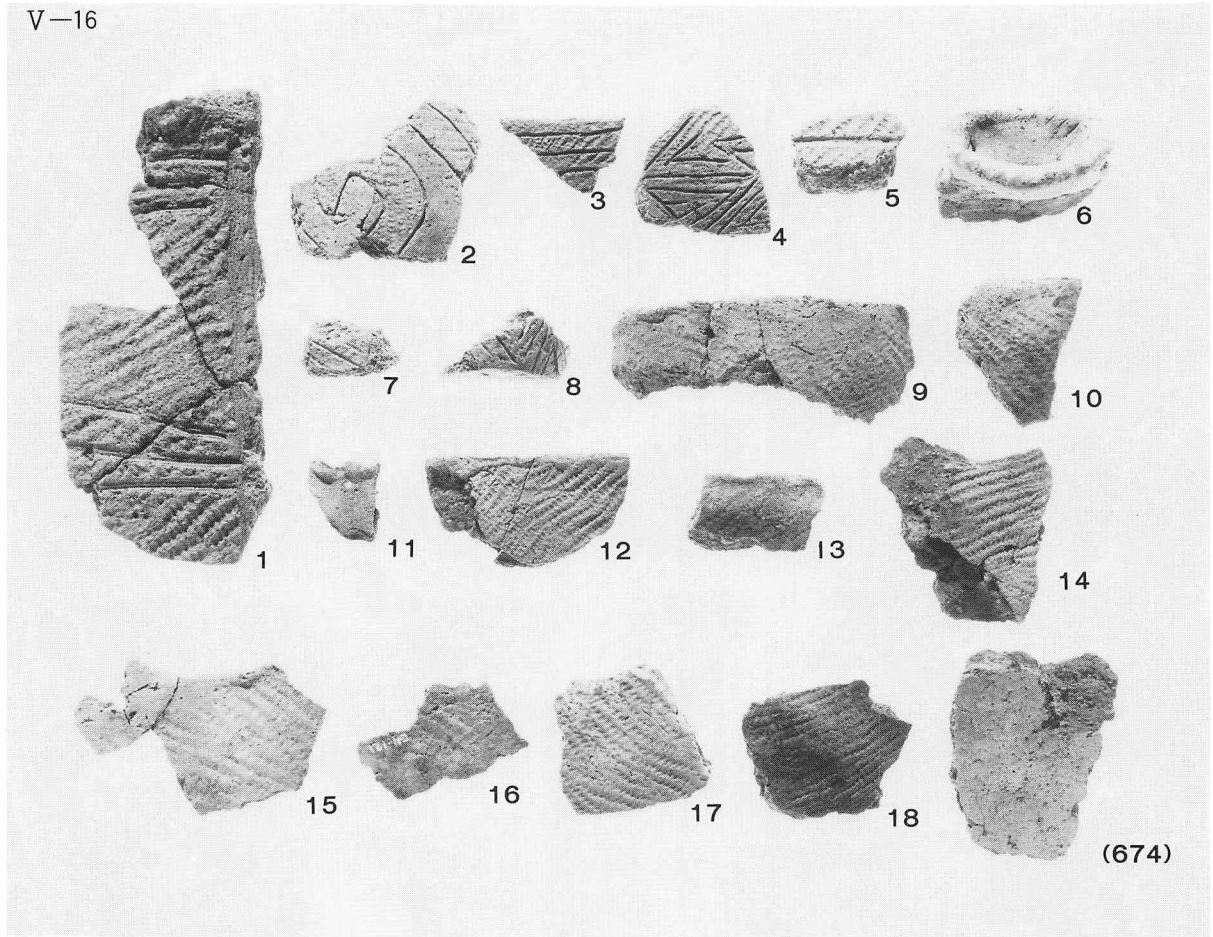
縄文時代中期 柏木川式土器

V-15

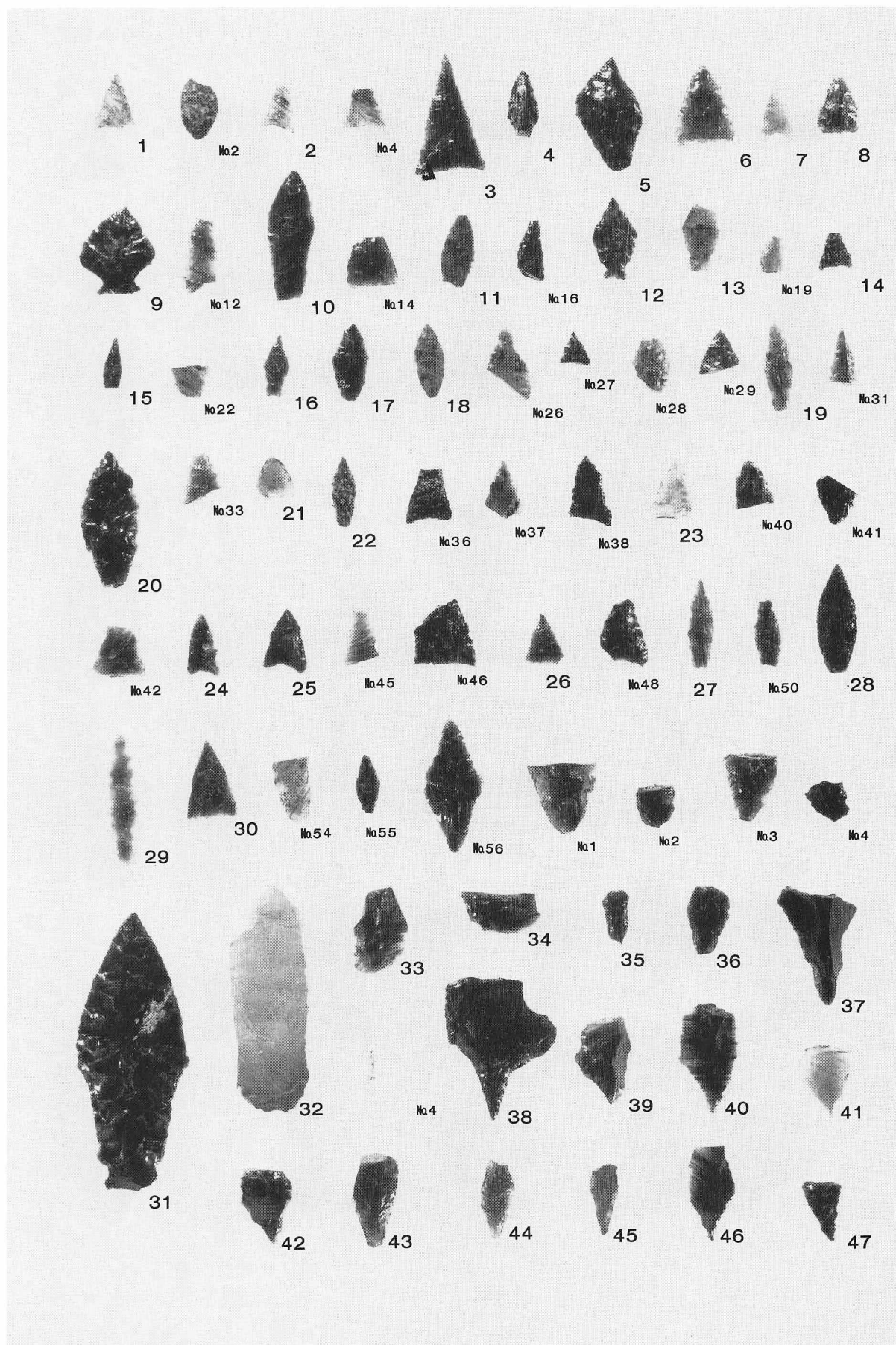


縄文時代後期 余市式土器

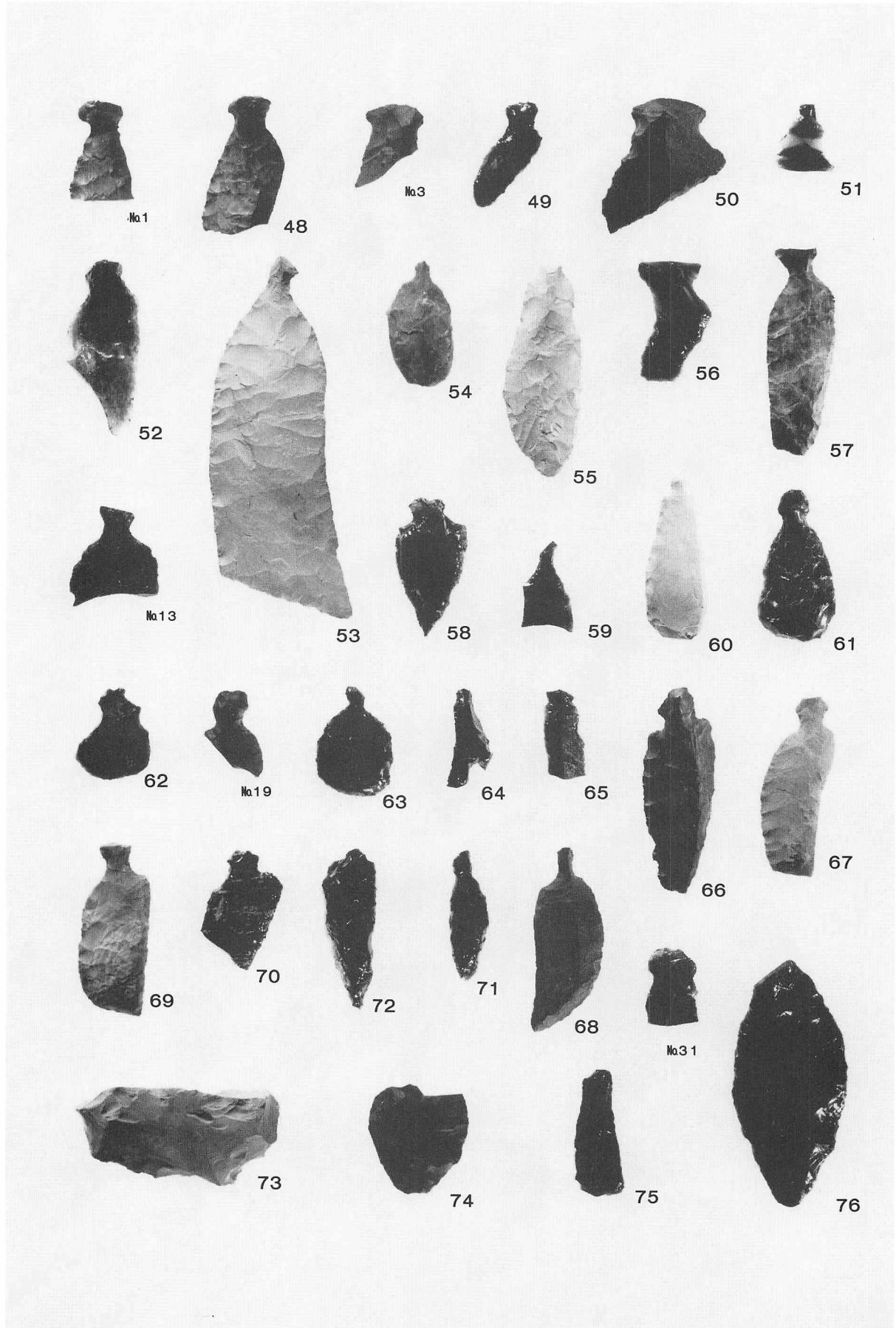
V-16



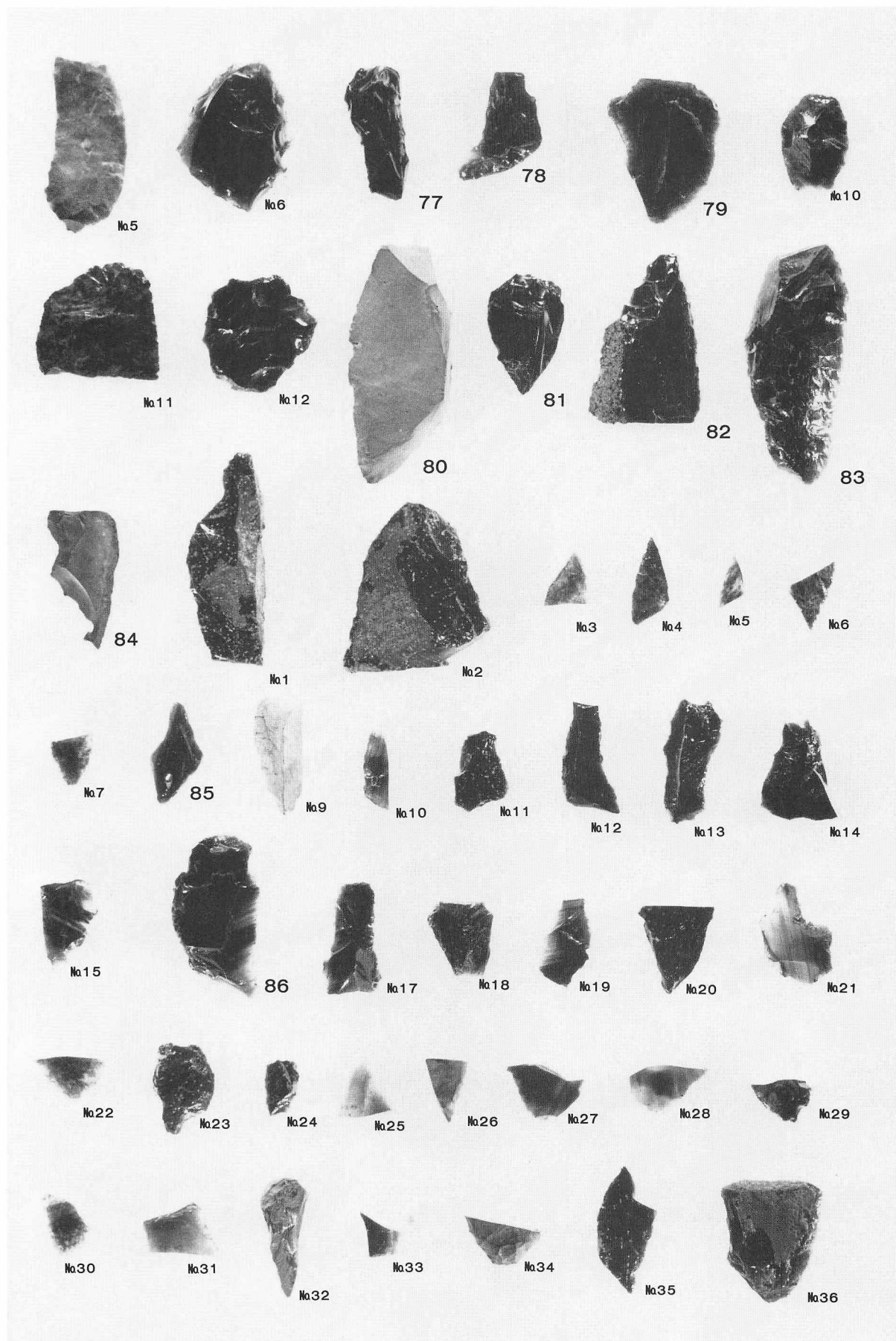
縄文時代後期の土器



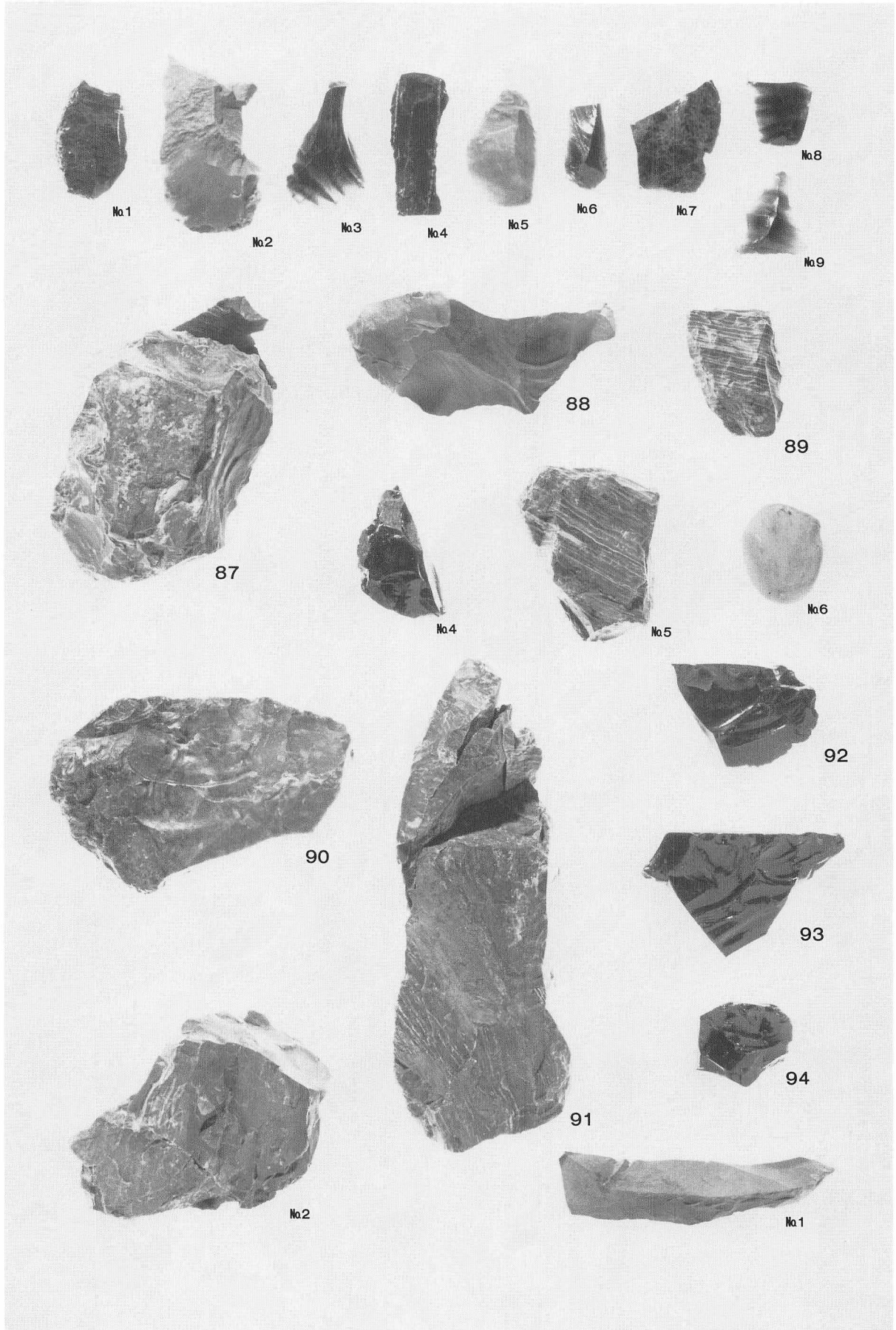
石鏃，石槍，石錐



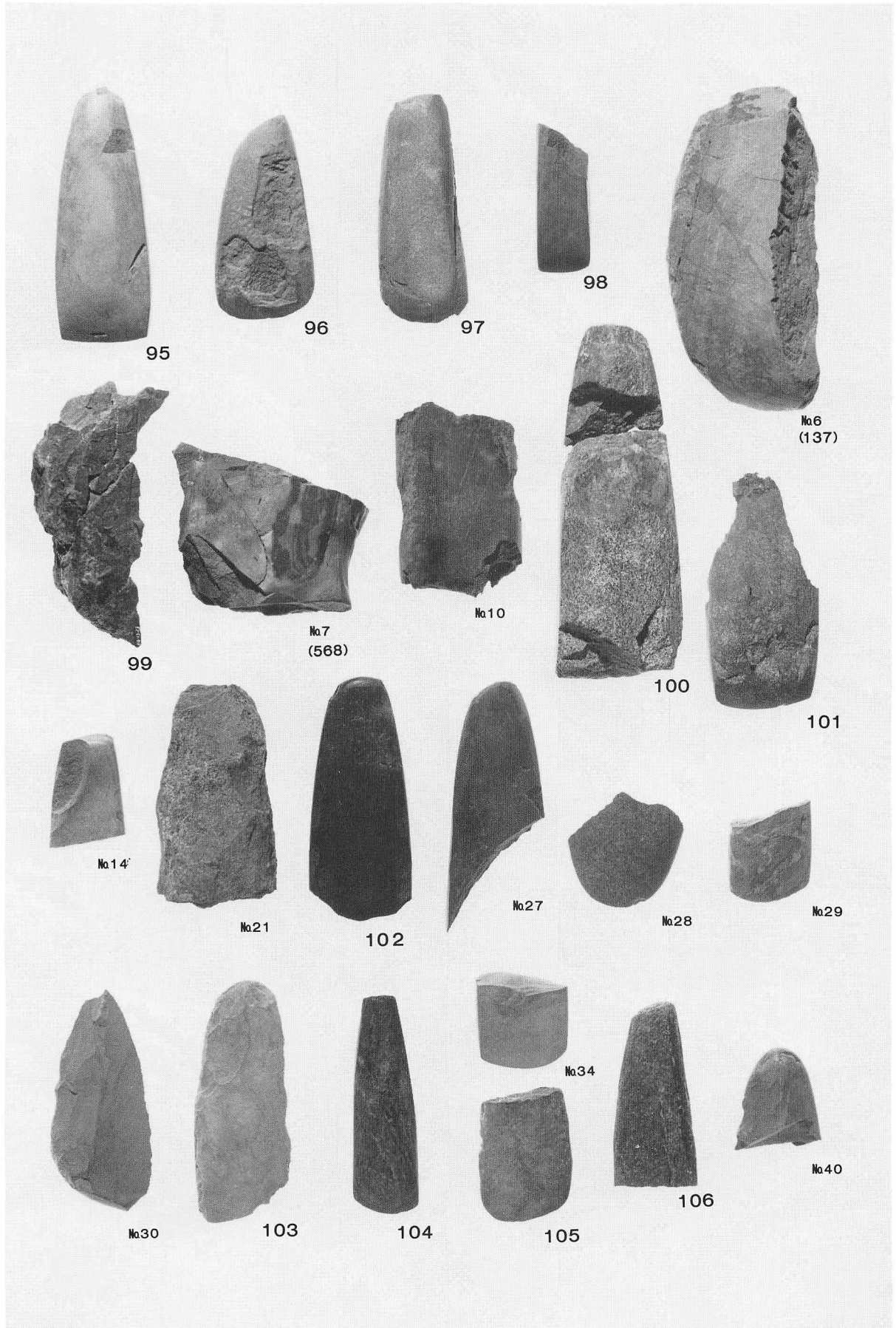
つまみ付ナイフ, 削・搔器(1)



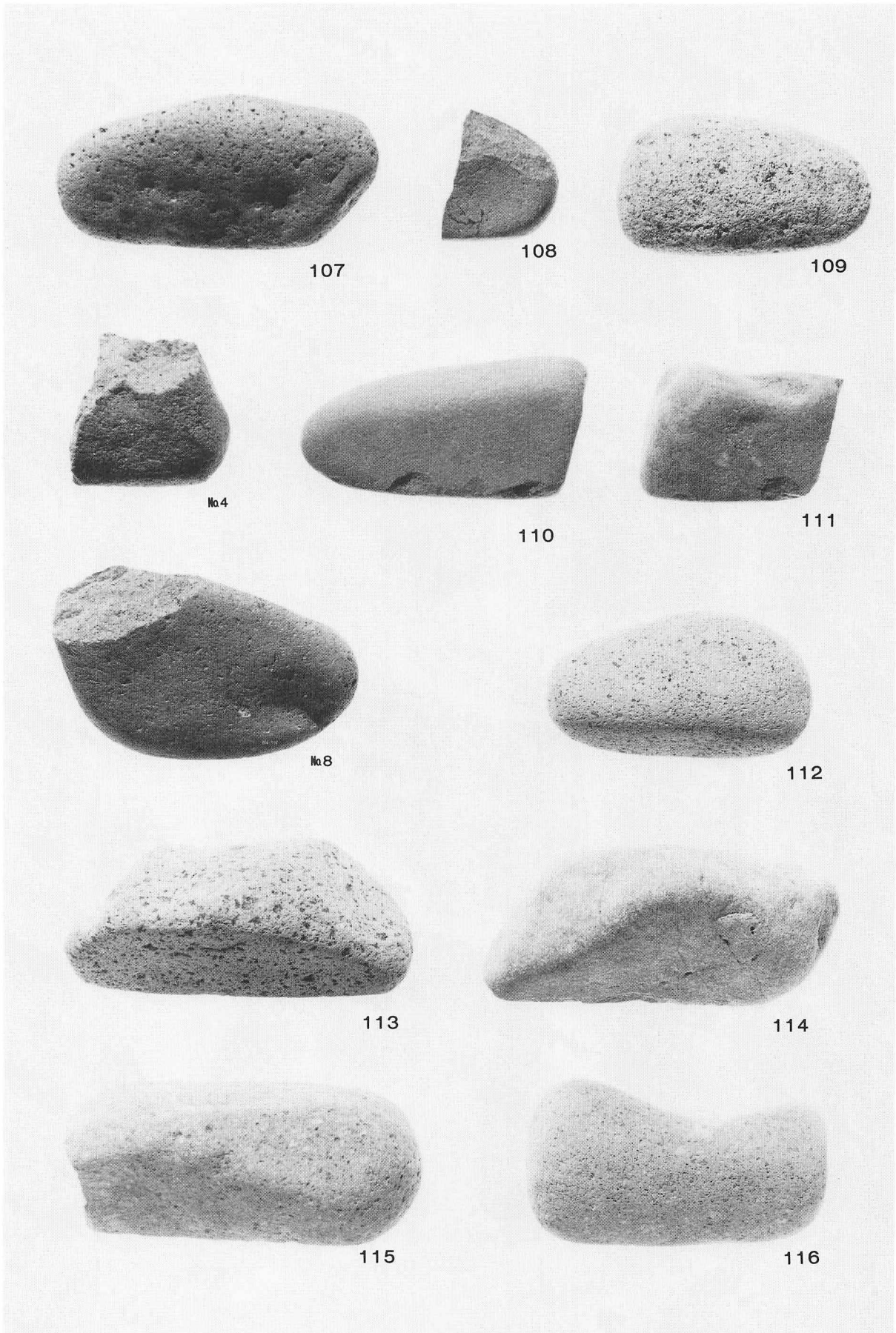
削・搔器(2), R・F



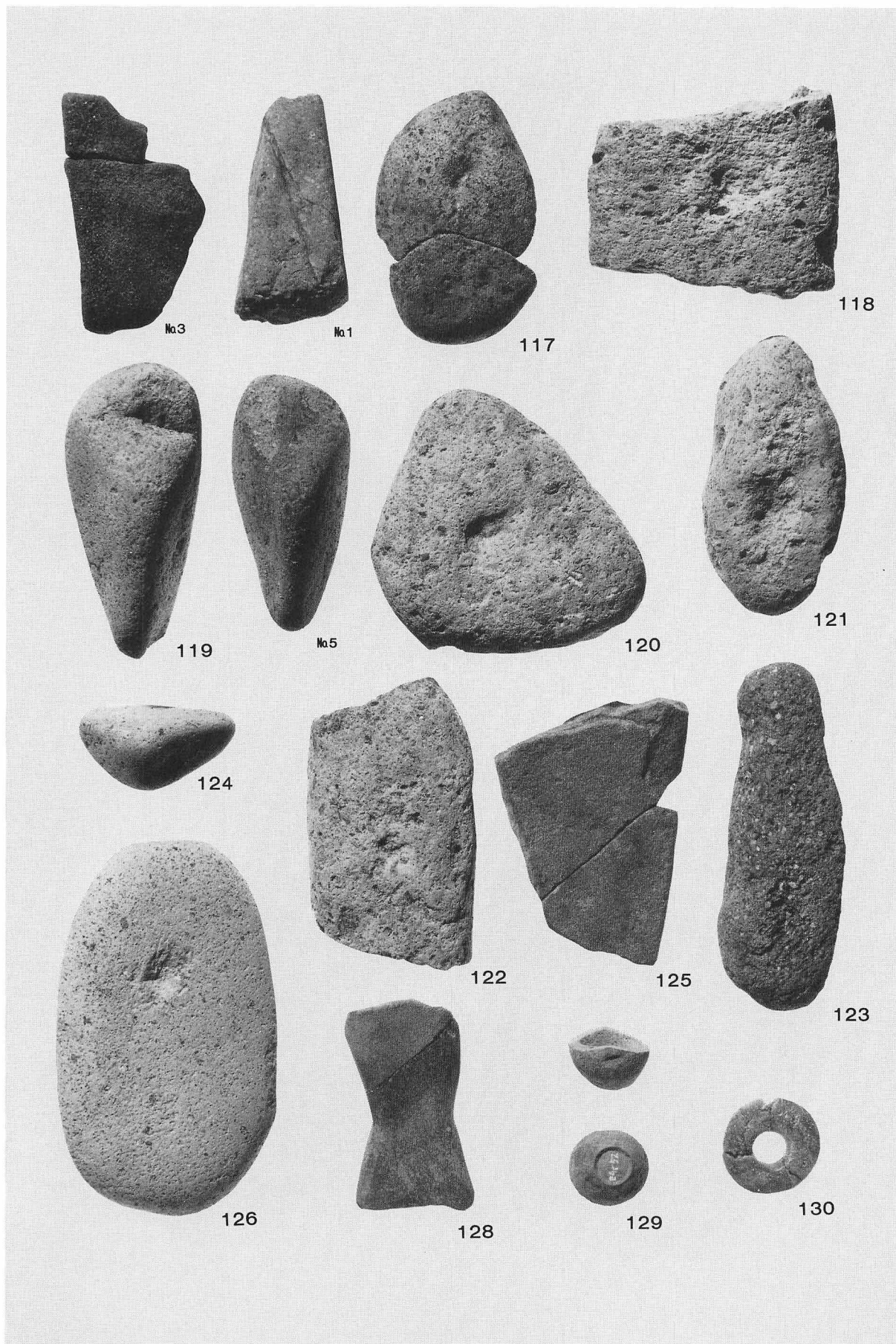
U・F, 石核, 原石(左下), スポール(右下)



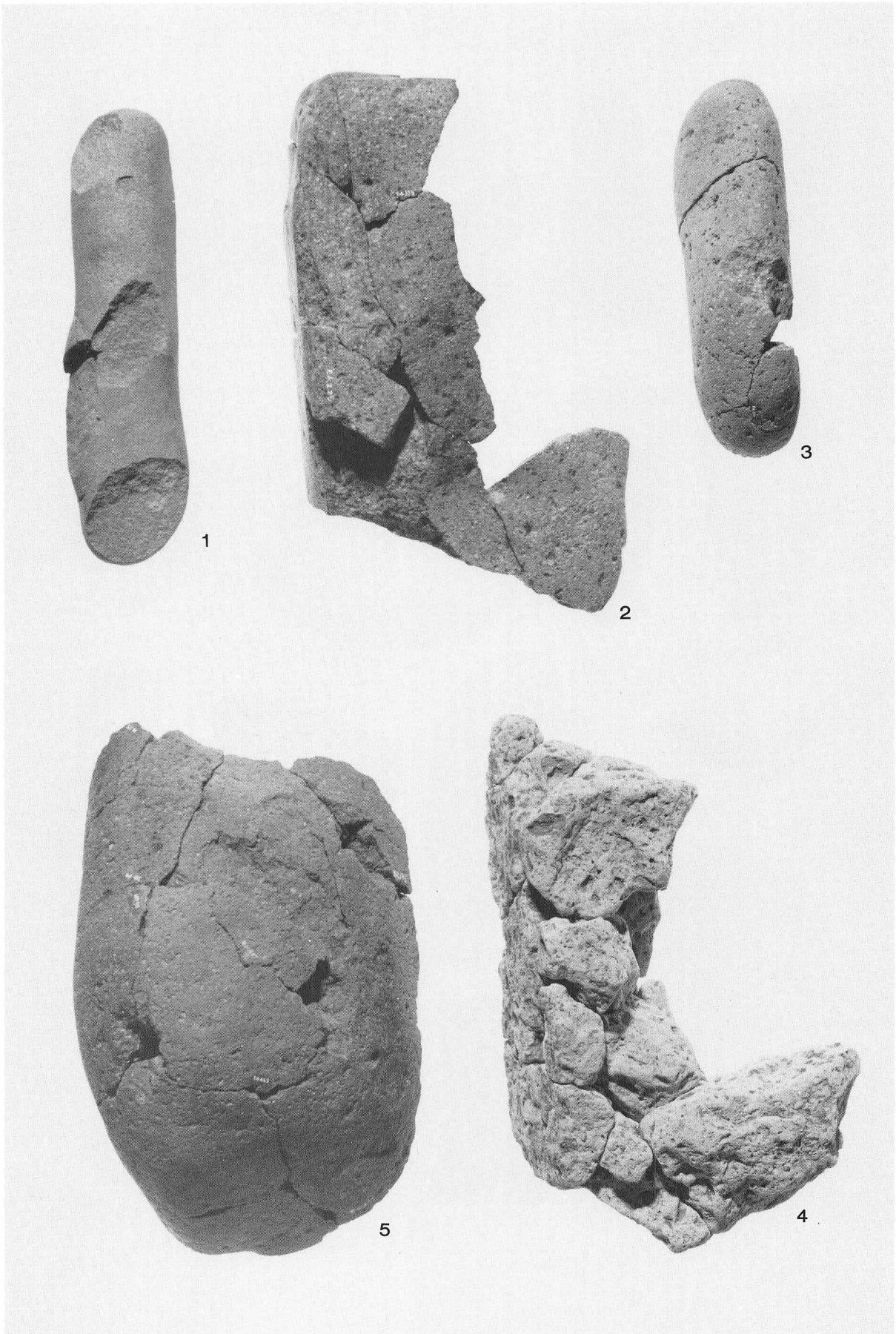
石斧



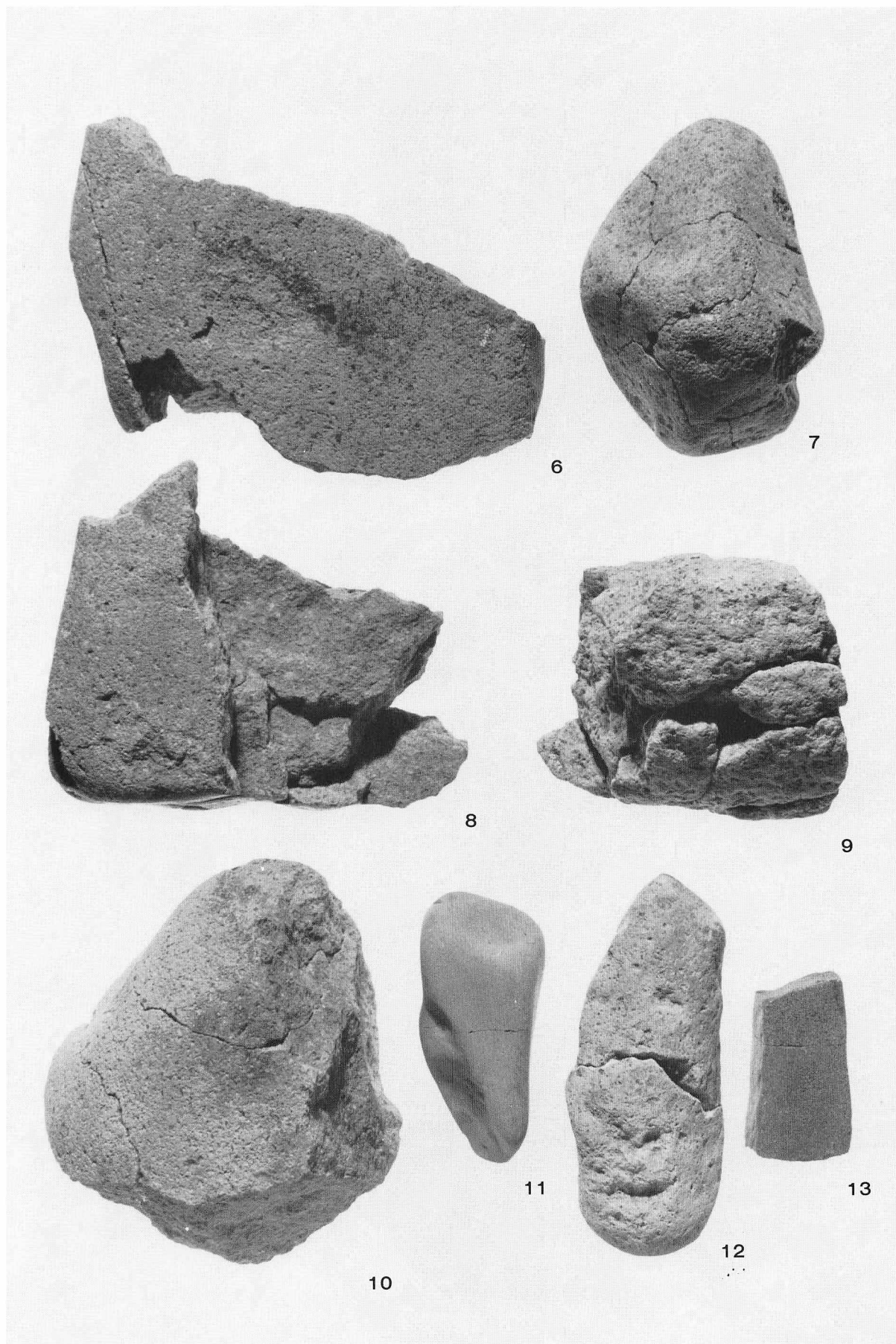
すり石



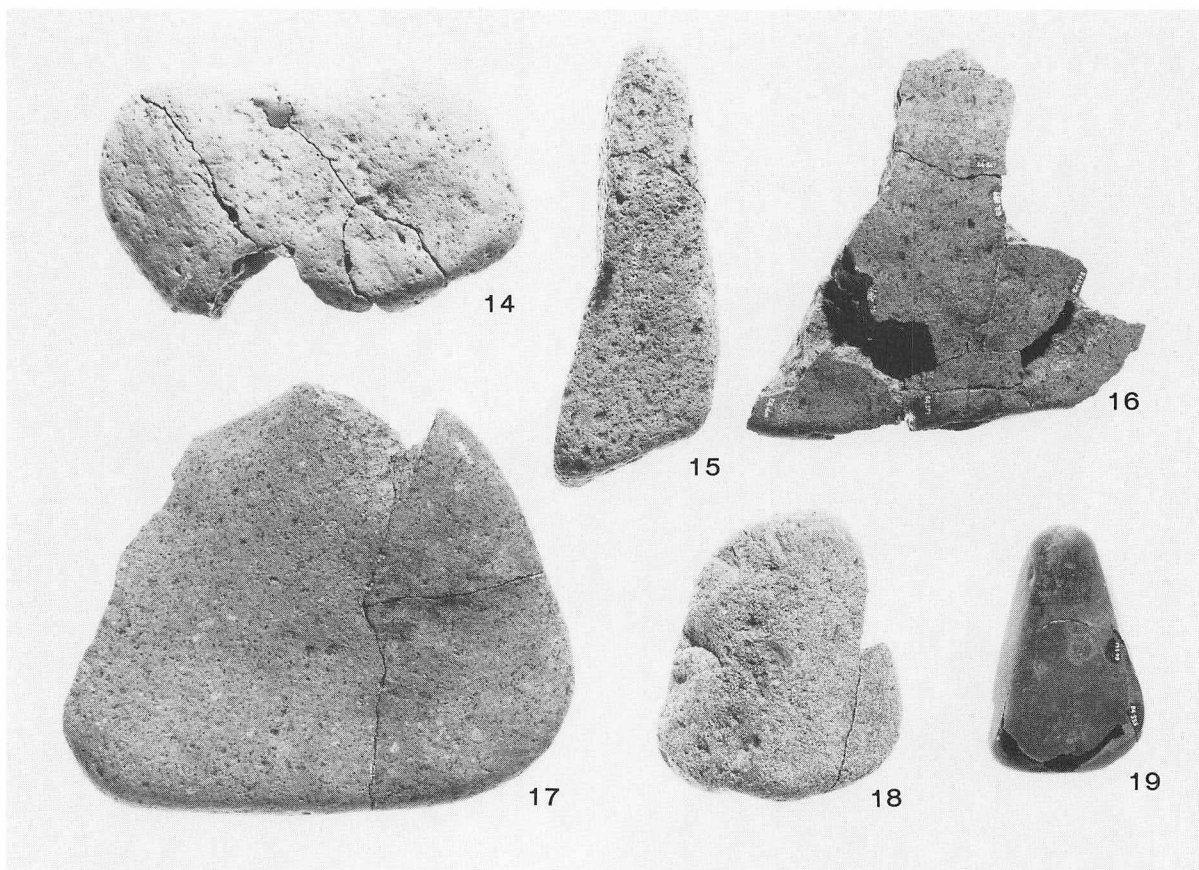
砥石, たたき石, 石皿, 石製品



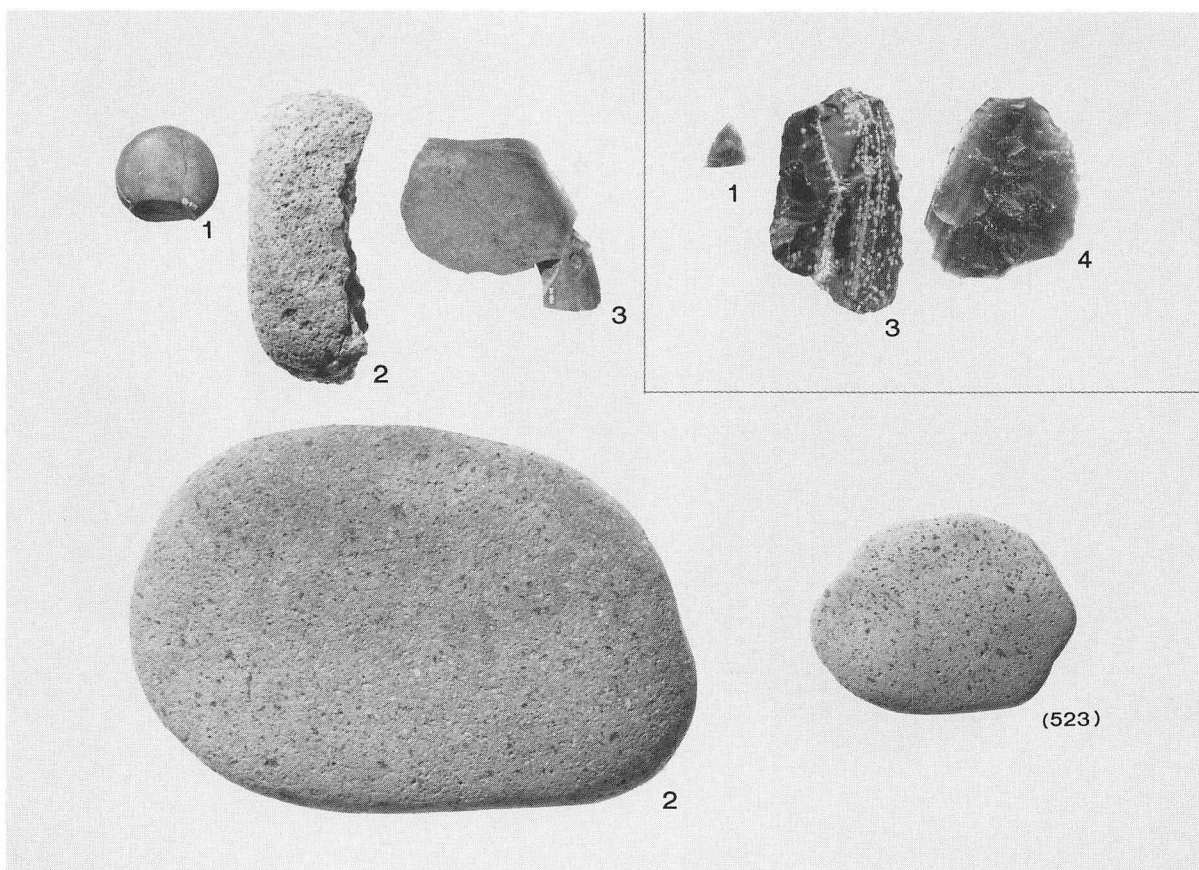
方割礫(1)



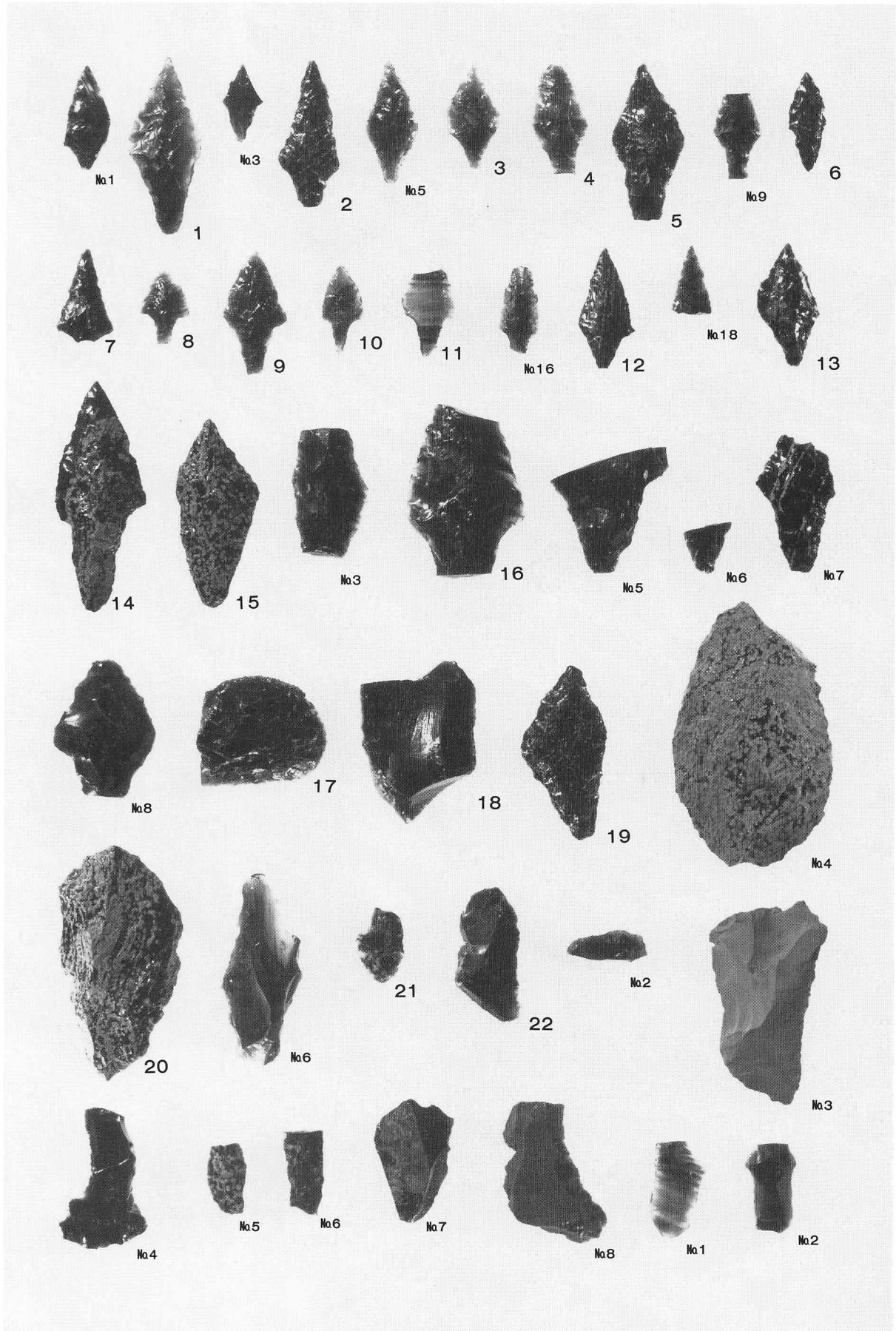
方割礫(2)



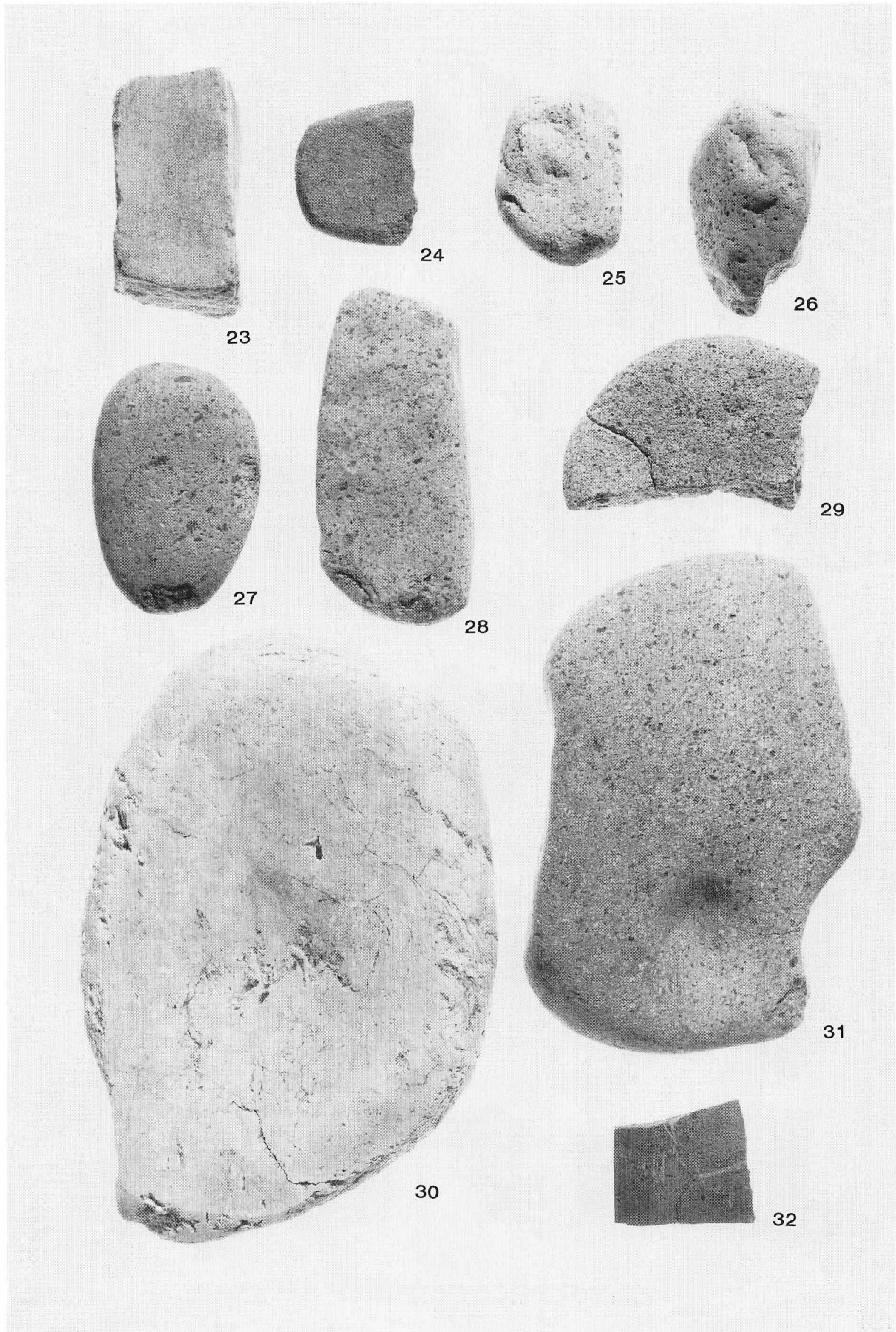
方割礫(3)



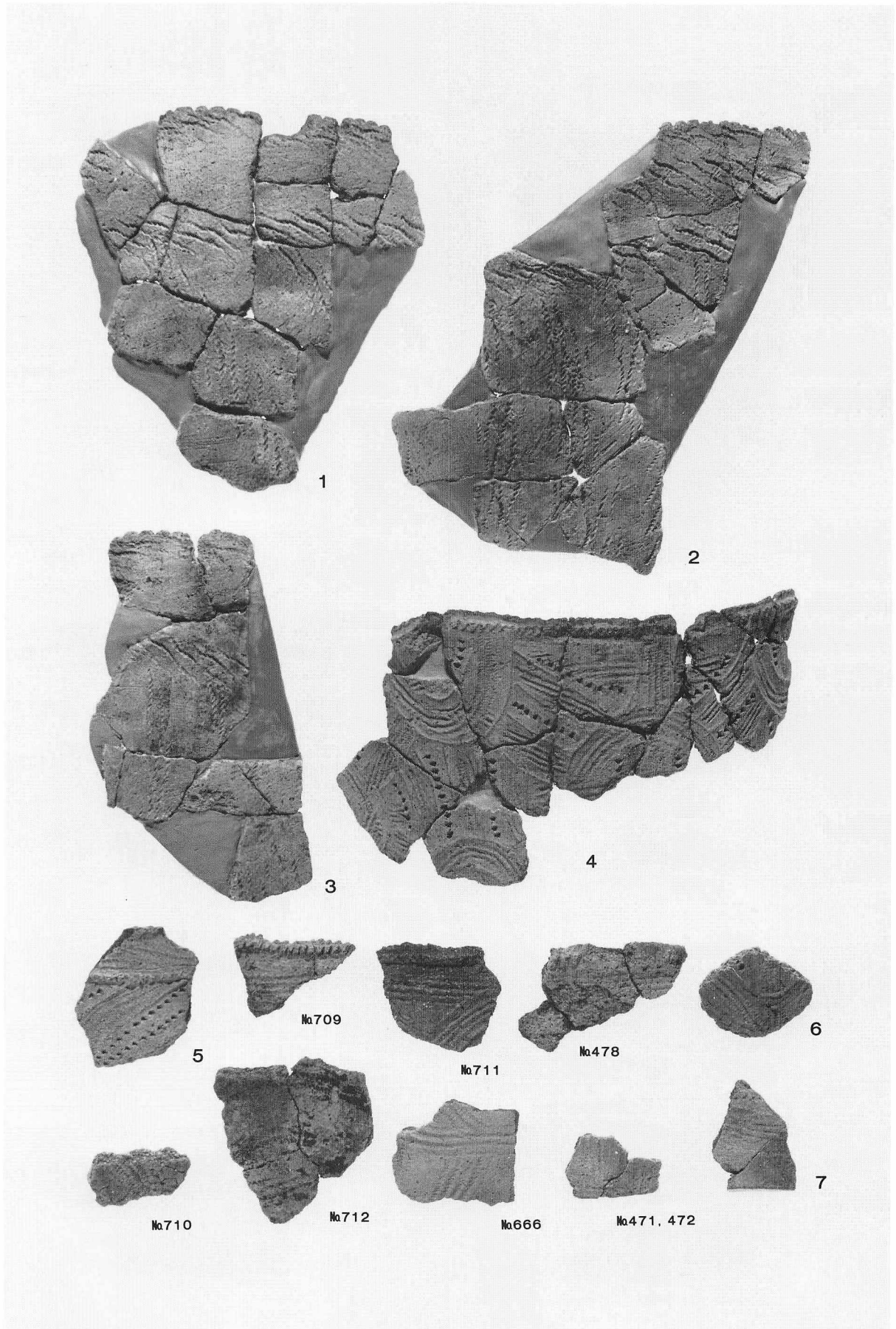
焼土出土の石器(左上3点が早・前期、他は中・後期)



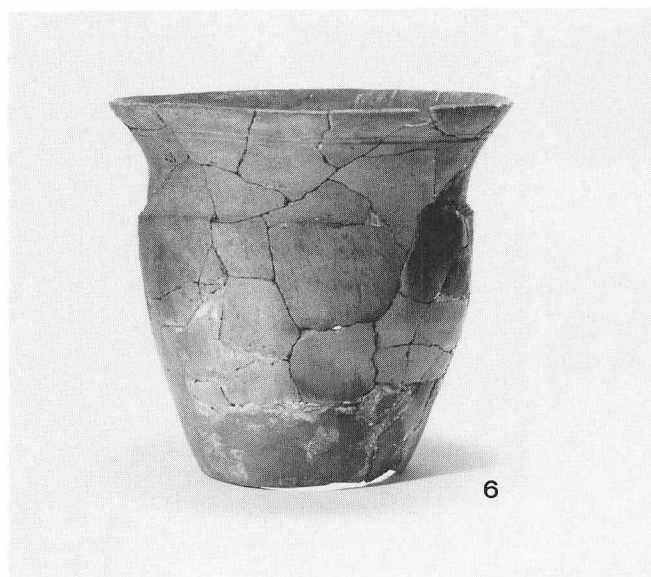
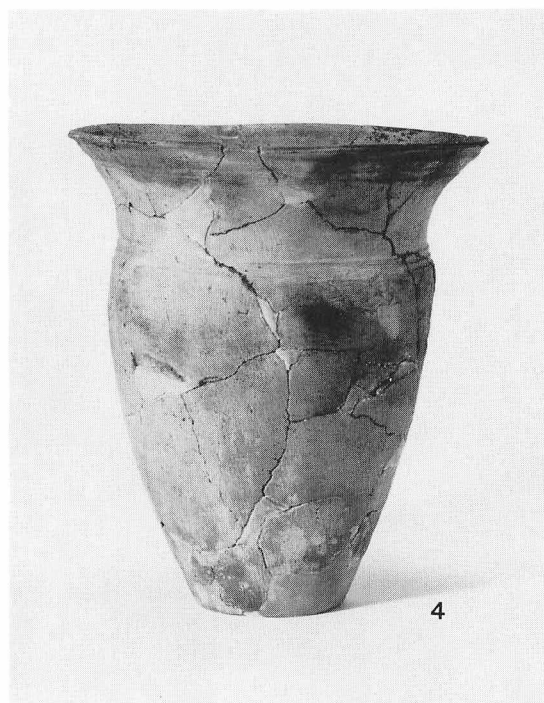
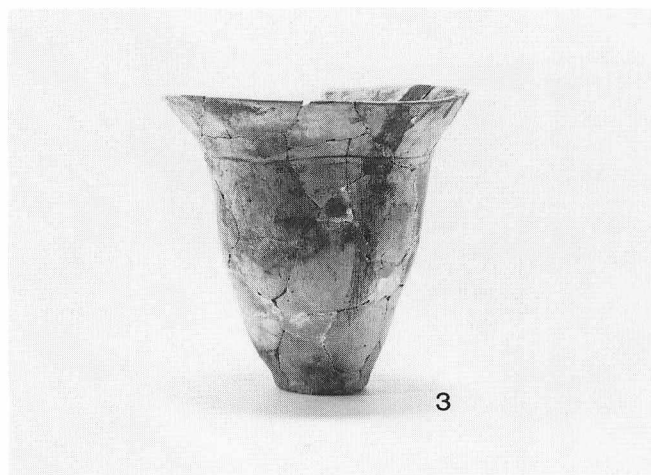
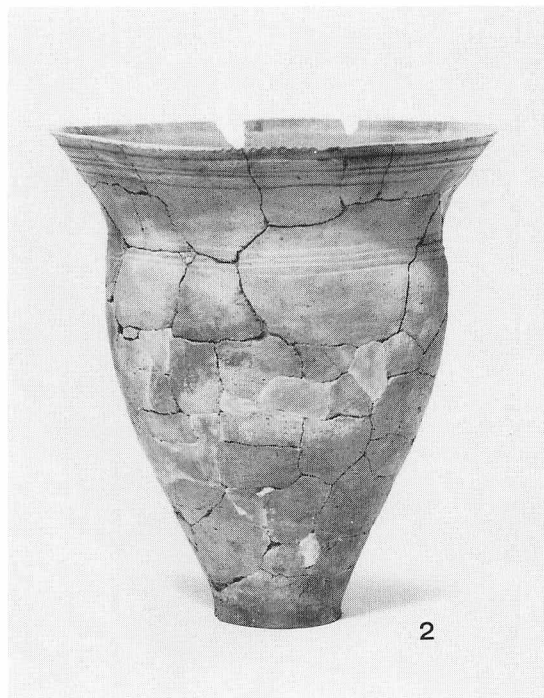
石鏃, 石槍, 削, 搔器, R・F, U・F



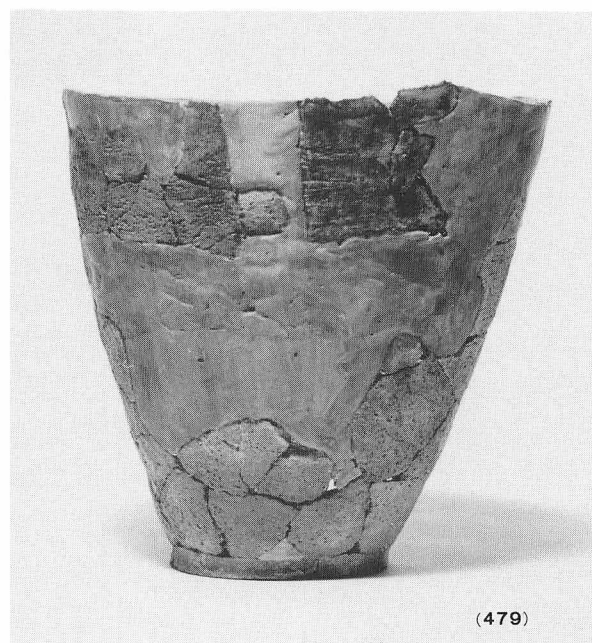
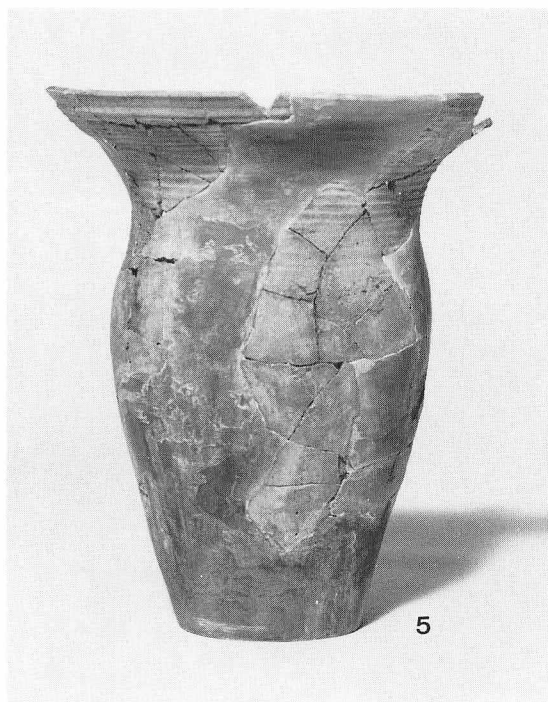
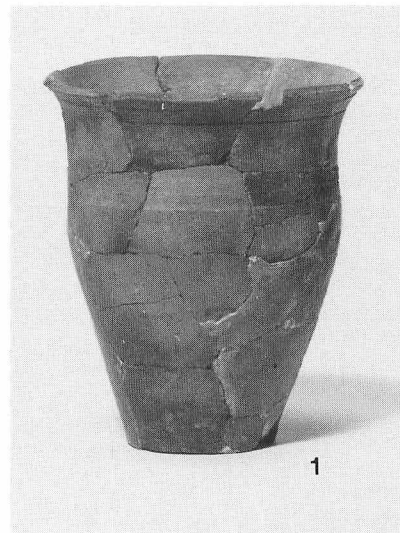
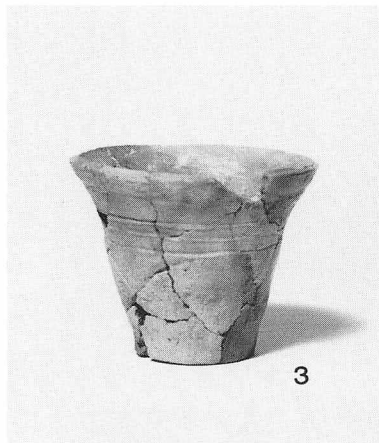
砥石、たたき石、石皿、板状礫



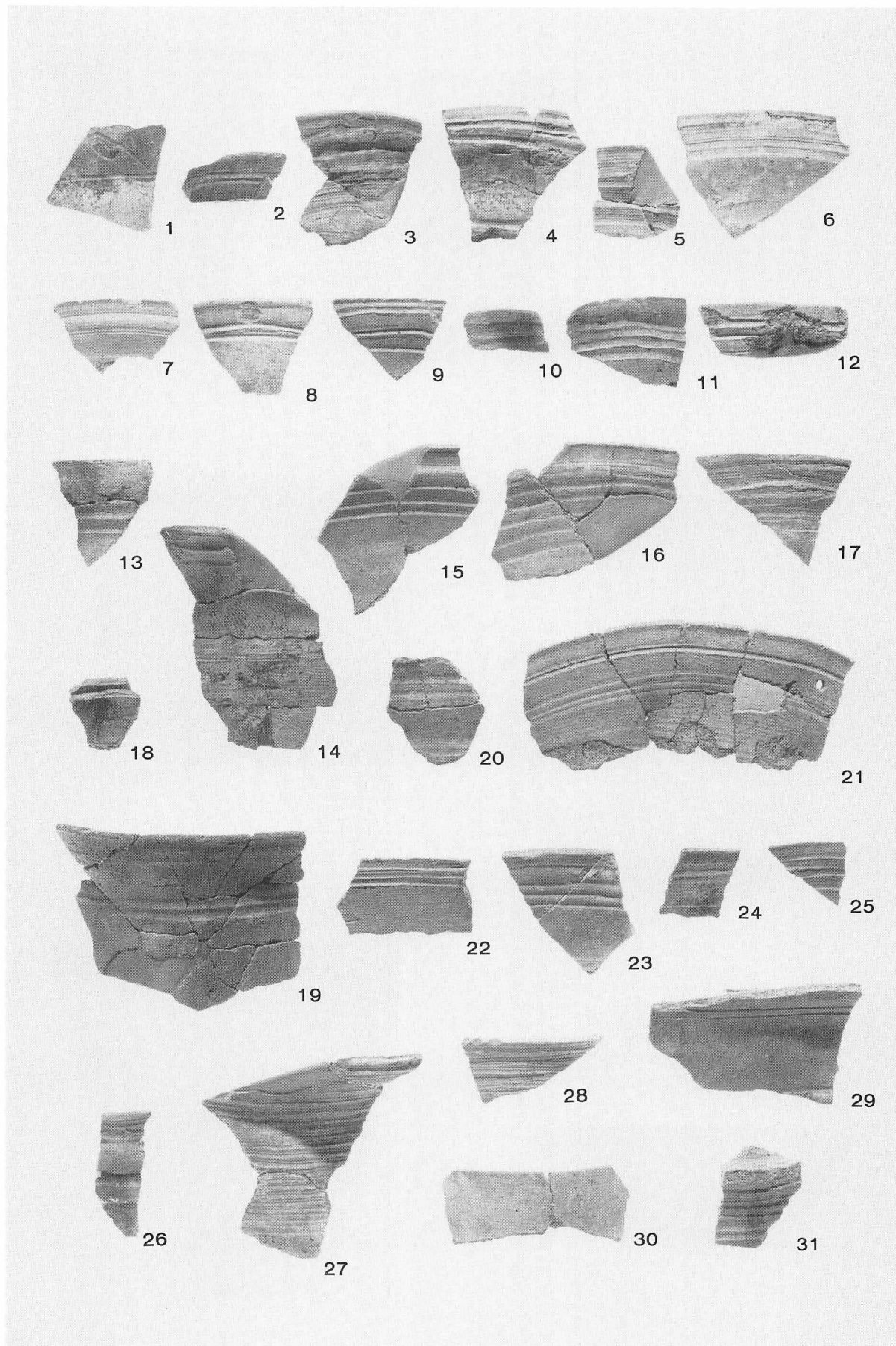
続縄文時代の土器



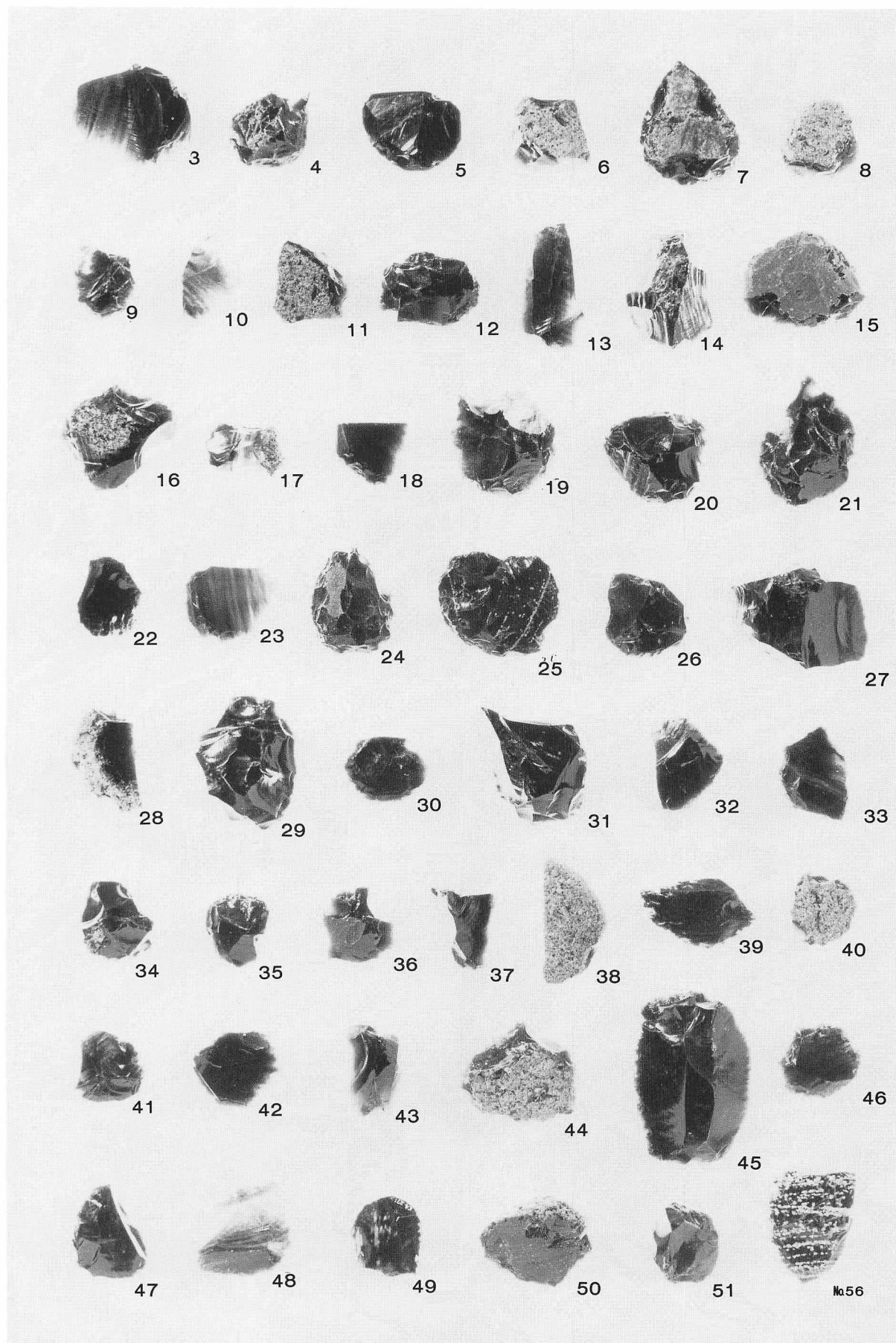
擦文時代の土器(1)



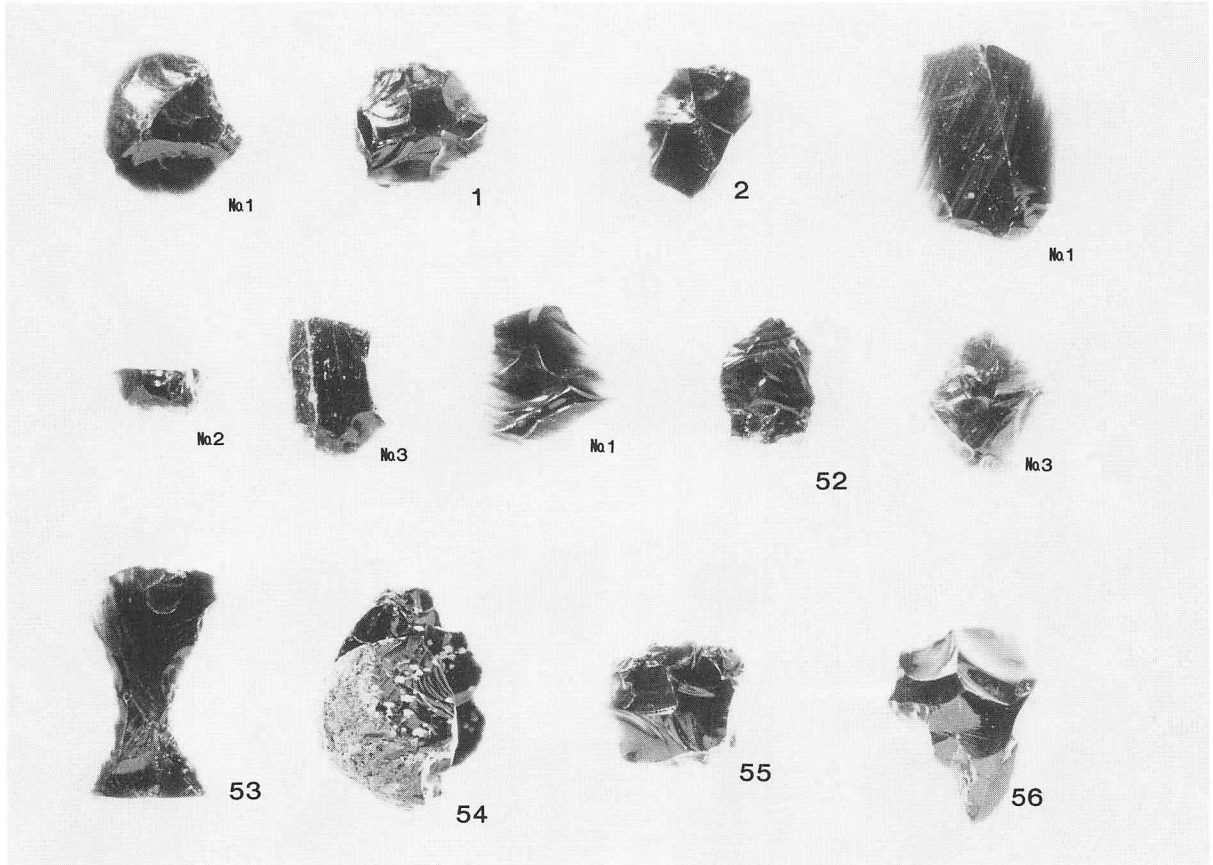
擦文時代の土器(2)



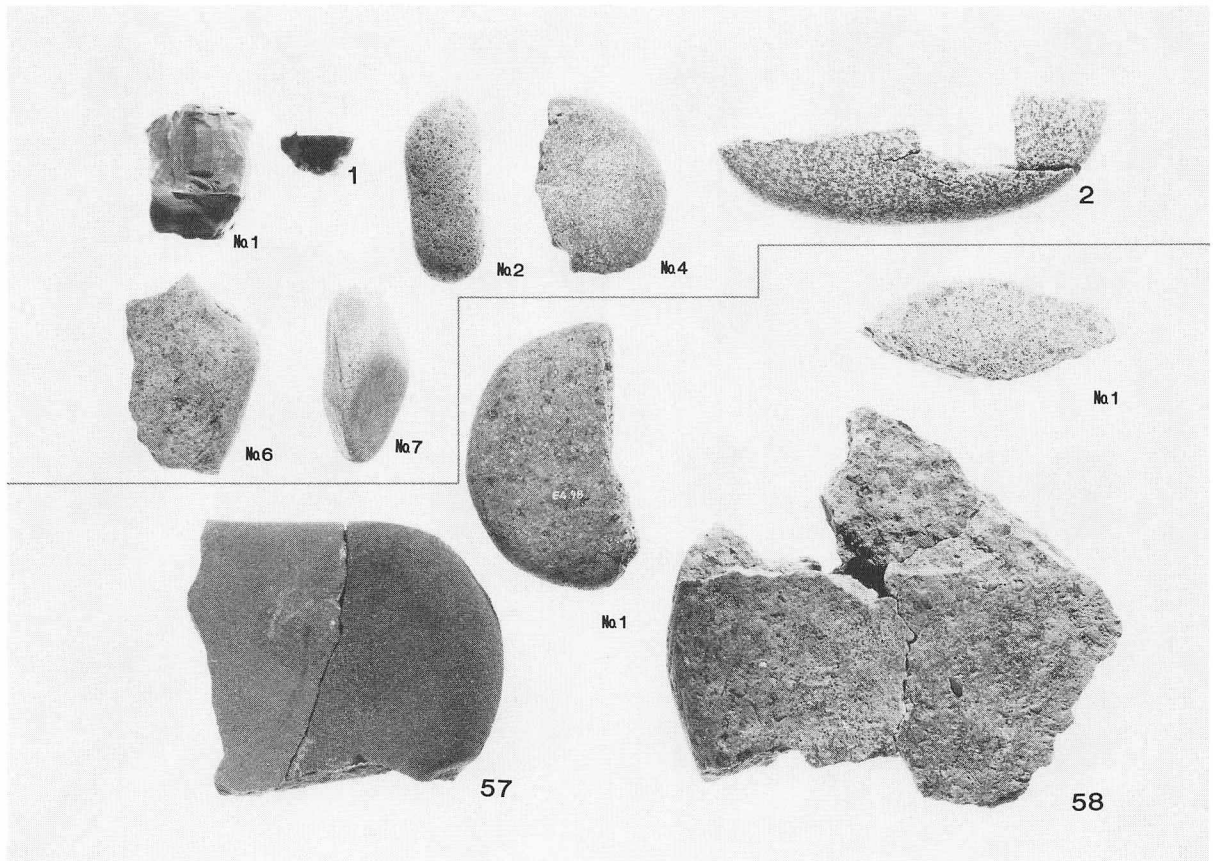
擦文時代の土器(3)



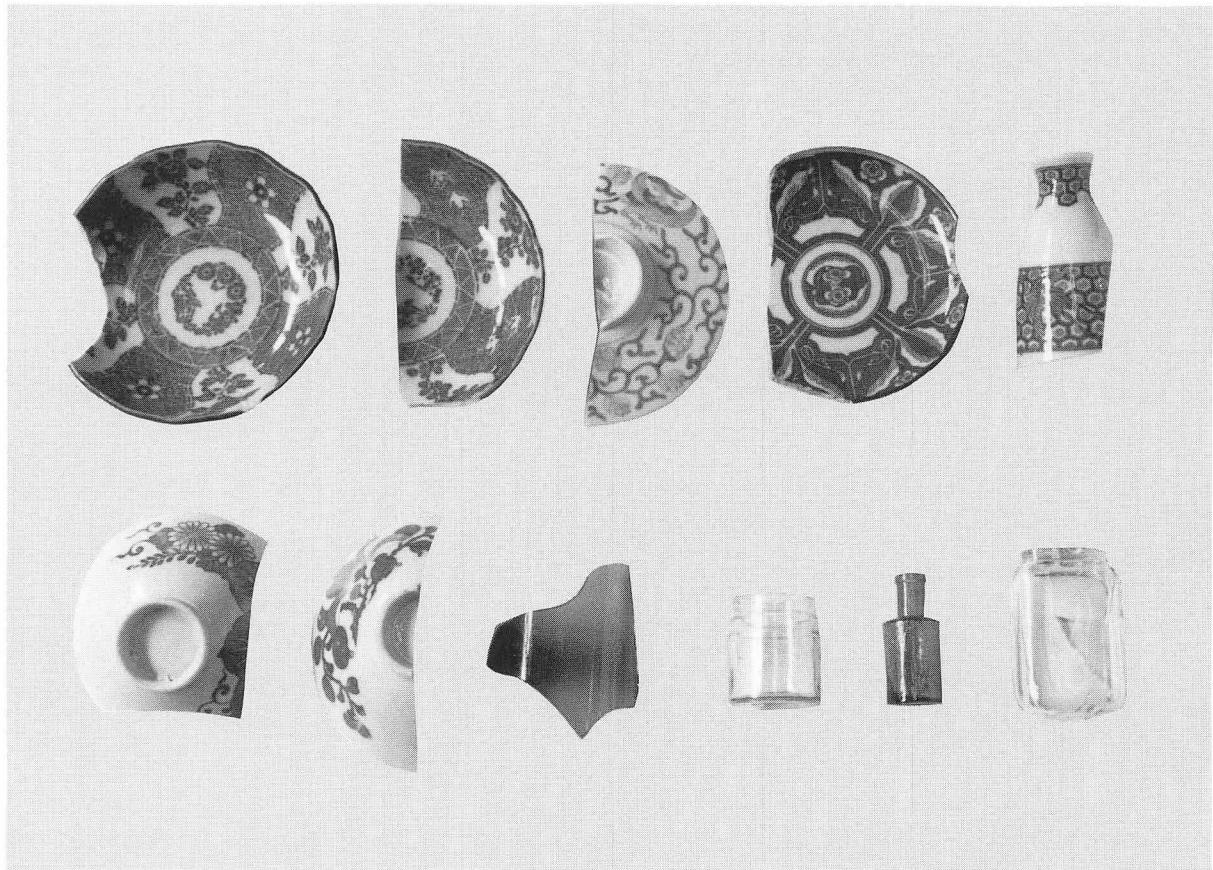
ラウンドスクレイパー



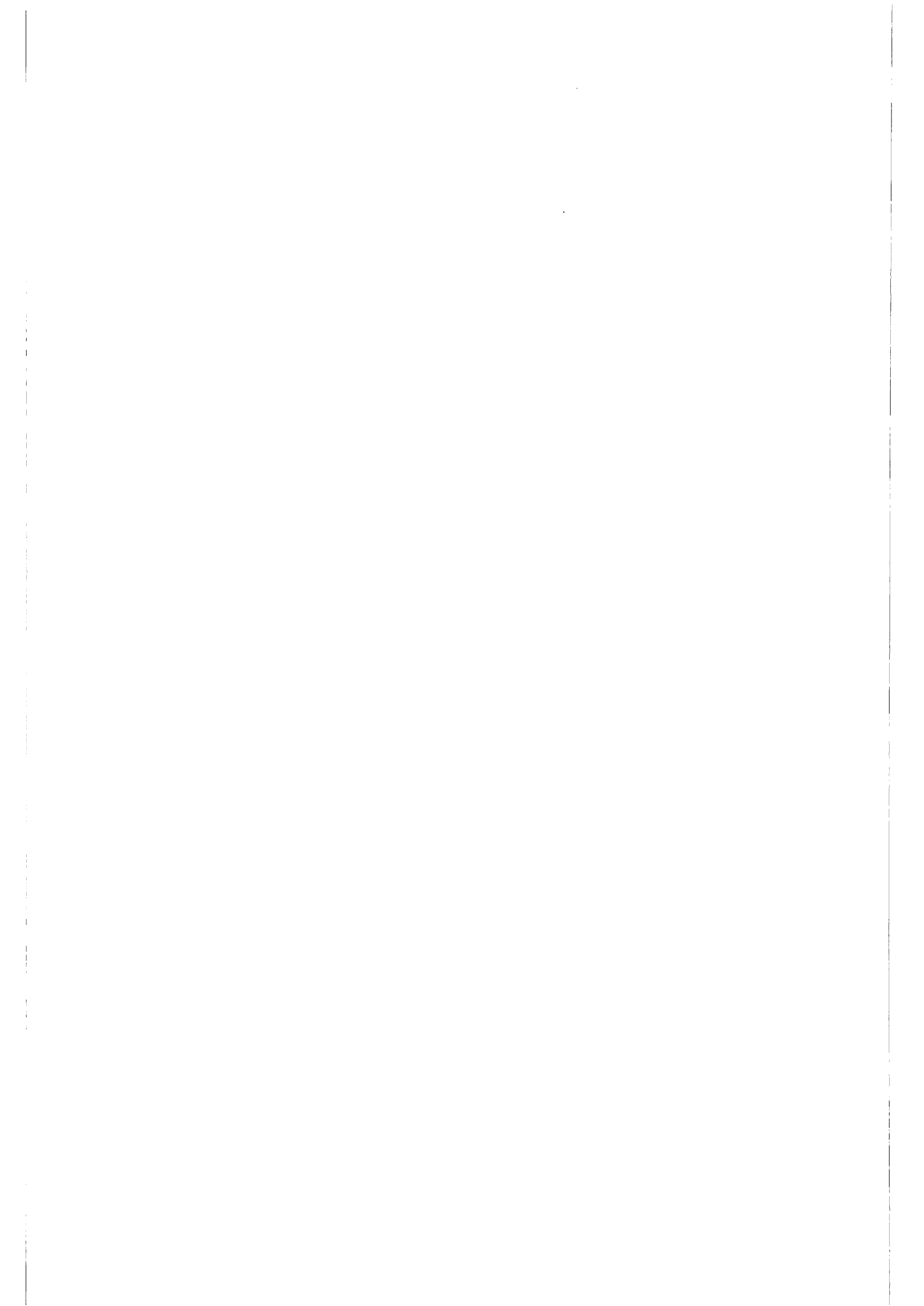
楔形石器, R・F, U・F, 異形石器、石核



竪穴出土の石器類(上)と包含層出土のたたき石, 石皿, 方割礫(下)



近代の遺物



財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第75集

恵庭市 ユカンボシE4遺跡

平成4年3月27日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

TEL 011-561-3131

印刷 中西印刷株式会社

〒065 札幌市東区雁来3条1丁目1番34号

TEL (011) 781-7501

※この報告書は、北海道開発局札幌開発建設部及び北海道札幌土木現業所のご了解を得て増刷したものです。

